

史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書

－第 33・34 次調査、墳丘墓群総括報告－

2020年3月

鳥取県立むきばんだ史跡公園



妻木晩田遺跡 松尾頭墳丘墓群全景 南東から



1 松尾頭墳丘墓群遠景 北西から



2 松尾頭墳丘墓群 俯瞰 上が北西



1 松尾頭3号墓 周溝検出状況 南西から



2 松尾頭3号墓 周溝完掘状況 南から



松尾頭3号墓 周溝完掘状況 南西から



松尾頭3号墓 調査終了状況 南西から



1 松尾頭3号墓 埋葬施設検出状況 南東から



2 松尾頭4号墓・5号墓 周溝検出状況（手前が5号墓）南から

序

中国地方の最高峰、霊峰大山の麓に広がる史跡^{むきばんだ}妻木晩田遺跡は、弥生時代の集落の全体像やその変遷を知ることのできる貴重な遺跡です。その重要性に鑑みて、平成11年12月に約150ヘクタールに及ぶ範囲が国史跡として指定されました。

鳥取県は国史跡指定以降、妻木晩田遺跡に暮らした人々の生活を具体的に考えるために、平成12年度から発掘調査を継続的に行ない、その成果について報告書やシンポジウム、展示などで皆様に御紹介してきたところです。

本報告書は、平成29年度及び平成30年度に行った松尾頭^{まつおがしら}地区の発掘調査報告です。松尾頭地区では、首長層の墓域である松尾頭墳丘墓群^{ふんきゅうぼぐん}の様相解明を目指し、発掘調査を行いました。調査の結果、妻木晩田遺跡の墳丘墓群の変遷の中で詳細がわかっていなかった弥生時代終末期前半の墳丘墓である松尾頭3号墓～5号墓の3基を新たに発見しました。特に松尾頭3号墓の調査では、埋葬施設の基数や墳丘墓築造方法などを確認することができ、松尾頭墳丘墓群の実態解明だけでなく、集落における首長墓の移り変わりを考えるための多くの手がかりを得ることができました。このような調査、研究の積み重ねが、妻木晩田遺跡そして地域の歴史を解き明かしていく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査に多大な御理解と御協力をいただいた地元関係者の方々をはじめ、御指導、御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

令和2年3月

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所長 黒田 真

例言

- 1 本書は、平成 29 年度から 30 年度に、国庫補助金を受けて鳥取県立むきばんだ史跡公園が行った発掘調査（史跡妻木晩田遺跡第 33・34 次発掘調査、松尾頭 10 区）の記録である。
- 2 本発掘調査地は、鳥取県米子市淀江町福岡字小真石清水に所在する。
- 3 本書における方位、座標値は、国土座標系第 V 系（日本測地系）により、標高は海拔高で表す。
- 4 第 33 次発掘調査は安西工業株式会社に現地調査の支援を委託した。墳丘墓調査前及び 10 区調査後の地形測量、遺構図面作成、航空写真の撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の指示のもと、安西工業株式会社が行った。
- 5 第 34 次発掘調査における調査前の地形測量（基準点打設、水準測量含む）については、株式会社アイテックに委託して行った。
- 6 第 34 次発掘調査は国際文化財株式会社に現地調査の支援を委託した。調査後の地形測量、遺構図面作成、航空写真の撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の指示のもと、国際文化財株式会社が行った。
- 7 遺構の写真撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の文化財主事が行った。
- 8 調査で作成した図面の再編集、遺物の実測及び浄書は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の文化財主事及び整理作業員が行った。
- 9 遺物の写真撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園職員が行った。
- 10 本発掘調査の記録類及び出土資料は、鳥取県立むきばんだ史跡公園において保管している。
- 11 本発掘調査の成果については、鳥取県立むきばんだ史跡公園編 2018『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2017』及び同 2019『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2018』において概要を報告しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 本書の執筆は第 V 章第 2～6 節と第 VI 章第 2 節を除き森藤が、第 VI 章第 2 節を高尾が行った。第 V 章第 2～6 節は、分析委託業者が執筆した原稿を論旨に影響しない範囲で語句の統一、編集を行なったうえで掲載した。
- 12 以下の諸機関には関連資料の調査及び実見でお世話になった。
一般財団法人米子市文化事業団埋蔵文化財センター、江府町教育委員会、大山町観光課文化財室、鳥取県埋蔵文化財センター、南部町教育委員会、日南町教育委員会、湯梨浜町教育委員会、米子市経済部文化振興局文化振興課
- 13 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々から御指導、御助言をいただいた。記して感謝申し上げます（敬称略、所属・肩書きは当時）。
河合忍（岡山県教育庁文化財保護課）、河合章行（鳥取県文化政策課）、高橋章司、水村直人（以上、鳥取県とっとり弥生の王国推進課）、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館名誉館長）

凡例

- 1 本報告における遺構番号のうち、墳丘墓については第1次発掘調査からの通し番号である。
- 2 遺物カード及び遺物の注記等に用いた本発掘調査の略号は、「33MG」、「34MG」である。数字は調査回数、MGは松尾頭地区の略号である。
- 3 遺物の取上番号は、調査回数に通し番号を付し、遺物カード等に記録している。
- 4 本報告書に使用した地図は、西伯郡大山町作成の地形測量図並びに米子市作成の都市計画基本図（1/2500）を縮小、合成し、加筆したものである。
- 5 本報告書に示した土層の土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』2005年度版に基づき、命名したものである。土中含有物の大きさについては、土層観察用哇の観察面で視認できるものの径を記した。
- 6 妻木晩田遺跡の調査における弥生時代の時期区分は、I期＝前期、II～IV期＝中期、V期＝後期、VI期（畿内庄内式併行期）＝終末期と表す。詳細は編年対照表を参照されたい。

編年対照表

松本他	清水	松井	辻	高尾	濱田	濱田	牧本	妻木晩田遺跡 時期区分		
2000	1992	1997	1999	2008	2009	2016	1999			
	I -1 様式					I		弥生時代前期	I	1
	I -2 様式				2					
	I -3 様式				3					
	II -1・2 様式				4					
	III -1 様式			III -1		II		弥生時代中期前葉	II	
	III -2 様式	西伯耆 I	III -1 期	III -2		III		弥生時代中期中葉	III	1
	III -3 様式	西伯耆 II	III -2 期	III -3	2					
1 期	IV -1 様式	西伯耆 III	IV -1a 期	IV -1		IV		弥生時代中期後葉	IV	3
2 期	IV -2 様式		IV -1b 期	IV -2 (古)・IV -2 (新)	1					
3 期	IV -3 様式	西伯耆 IV	IV -2 期							2
4 期	V -1 様式	西伯耆 V			1 期	V		弥生時代後期前葉		3
5 期			2 期	1						
6 期	V -2 様式	西伯耆 VI			3 期	VI		弥生時代後期中葉	V	2
7・(8) 期			4 期	2						
(8)・9 期	V -3 様式	西伯耆 VII			5 期	VII		弥生時代後期後葉		3
			6 期	3						
10 期	VI -1 様式	西伯耆 VIII・IX			7 期	VIII		弥生時代終末期前半	VI	1
11 期	VI -2 様式		西伯耆 X							8 期
12 期		西伯耆 XI				9 期		天神川 I		2
13 期		西伯耆 XII			10 期			天神川 II		
										古墳時代前期前葉

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

松井 潔 1997 「東の土器、南の土器」『古代吉備』19、古代吉備研究会

辻 信広 1999 「弥生時代中期中～後葉の土器について」『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会

牧本哲雄 1999 「第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ園第6遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

松本哲他 2000 「第4章 第1節 土器の分類と編年」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会

高尾浩司 2008 「山陰地方東部における弥生時代中期の土器編年－大山山麓地域を中心に－」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集』下條信行先生退任記念事業会

濱田竜彦 2009 「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 国立歴史民俗博物館

濱田竜彦 2016 「西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会

史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書
—第 33・34 次発掘調査、墳丘墓群総括報告—

目 次

序
例言
凡例

第 I 章	妻木晩田遺跡の位置と環境	(森藤)
第 1 節	妻木晩田遺跡の位置	1
第 2 節	地理的環境	1
第 3 節	歴史的環境	2
第 II 章	発掘調査に至る経緯	(森藤)
第 1 節	発掘調査の経緯	7
第 2 節	発掘調査の課題と計画	7
第 3 節	とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当）の記録	15
第 4 節	とっとり弥生の王国調査整備活用委員会・調査体制	17
第 III 章	発掘調査の方法と経過	(森藤)
第 1 節	名称と概念の整理	19
第 2 節	松尾頭墳丘墓群の調査概要	21
第 3 節	発掘調査区の設定	21
第 4 節	発掘調査の記録	23
第 5 節	発掘調査の経過	
	1. 第 28 次調査－平成 22 年度の調査、遺構発見の経緯－	24
	2. 第 33 次調査－平成 29 年度の調査－	26
	3. 第 34 次調査－平成 30 年度の調査－	27
第 IV 章	松尾頭墳丘墓群の発掘調査	(森藤)
第 1 節	調査前の状況	29
第 2 節	基本層序	29
第 3 節	松尾頭 3 号墓の調査	37
	1. 墳丘の調査	37
	2. 埋葬施設の調査	49
第 4 節	松尾頭 4 号墓・5 号墓の調査	52

第5節	その他の遺構の調査	55
第6節	出土遺物	65

第V章 自然科学分析の成果

第1節	自然科学分析の概要	(森藤) 75
第2節	第33次調査に伴う自然科学分析 (プラントオパール・花粉・微粒炭分析)	(株式会社パレオ・ラボ) 77
第3節	第33次調査に伴う自然科学分析 (放射性炭素年代測定)	(株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ) 85
第4節	第33次調査に伴う自然科学分析 (炭化材樹種同定)	(株式会社パレオ・ラボ) 92
第5節	第34次調査に伴う自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 95
第6節	出土遺物付着赤色顔料分析	(株式会社パレオ・ラボ) 113
第7節	小結	(森藤) 116

第VI章 総括

第1節	妻木晩田遺跡における墳丘墓群の変遷と評価	(森藤) 117
第2節	妻木晩田遺跡における外来系土器の受容と地域間交流	(高尾) 141
第3節	まとめ	(森藤) 163

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 I 章		第 24 図	松尾頭 3 号墓調査平面図 ……………40
第 1 図	妻木晩田遺跡の位置…………… 1	第 25 図	松尾頭 3 号墓墳丘土層断面図 …… 41 ~ 42
第 2 図	妻木晩田遺跡周辺の地形…………… 2	第 26 図	北側周溝遺物出土状況及び断面図 ……43
第 3 図	妻木晩田遺跡周辺の遺跡…………… 4	第 27 図	西側周溝遺物出土状況図及び立面図 ……44
第 II 章		第 28 図	西側周溝遺物出土状況微細図 ……45
第 4 図	妻木晩田遺跡調査区位置図……………11	第 29 図	東側周溝遺物分布図 ……46
第 III 章		第 30 図	南側周溝遺物分布図 ……47
第 5 図	墳丘墓の分類系統図……………19	第 31 図	南西部及び南東部陸橋部断面図 ……47
第 6 図	墳丘墓計測概念図……………20	第 32 図	墳丘分層概念図 ……49
第 7 図	松尾頭墳丘墓群調査区位置図……………22	第 33 図	墳頂部埋葬施設検出状況及び遺物分布図 ……………50
第 8 図	松尾頭墳丘墓群全体図……………22	第 34 図	トレンチ 2 遺構全体図 (松尾頭 4 号墓・ 5 号墓) ……53
第 9 図	マウンド状地形 A 調査状況 (第 28 次調査、 年報 2013 再掲)……………25	第 35 図	松尾頭 4 号墓・5 号墓周溝土層断面及び 遺物出土状況図……………54
第 10 図	マウンド状地形 A 出土遺物実測図 ……25	第 36 図	松尾頭 10 区北東部遺構全体図……………56
第 11 図	マウンド状地形 B (松尾頭 3 号墓) 内容 確認調査状況 (第 28 次調査) ……26	第 37 図	3403 遺構平面・土層断面図 ……57
第 12 図	マウンド状地形 C・D (松尾頭 4 号墓・ 5 号墓) 内容確認調査状況 (第 28 次調査 再掲) ……27	第 38 図	3407 遺構土層断面及び遺物分布図 ……58
第 13 図	第 33 次調査状況……………27	第 39 図	3404 遺構平面・土層断面図 ……59
第 14 図	第 34 次調査状況……………27	第 40 図	3405 遺構平面・土層断面図 ……60
第 15 図	第 34 次調査 T2 調査状況 ……28	第 41 図	3406 遺構平面・土層断面図 ……60
第 16 図	第 34 次調査現地説明会……………28	第 42 図	半裁ピット土層断面図 ……61
第 IV 章		第 43 図	マウンド状地形 E 地形測量図 ……62
第 17 図	松尾頭 10 区第 33・34 次調査前地形測量図 ……………30	第 44 図	トレンチ 1 平面・土層断面図 ……63
第 18 図	第 28・33・34 次調査範囲図……………31	第 45 図	松尾頭 10 区北東部遺物分布図……………64
第 19 図	10 区北東部基本層序断面図 (1) …………… 33 ~ 34	第 46 図	松尾頭 3 号墓西側周溝出土遺物 ……66
第 20 図	10 区北東部基本層序断面図 (2) …………… 35 ~ 36	第 47 図	松尾頭 3 号墓北・南側周溝、墳頂部 出土遺物……………67
第 21 図	松尾頭 10 区調査後地形測量図……………38	第 48 図	松尾頭 3 号墓出土遺物 ……68
第 22 図	松尾頭 3 号墓墳丘現況測量図 ……39	第 49 図	松尾頭 4 号墓・5 号墓出土遺物 ……69
第 23 図	松尾頭 3 号墓墳頂部調査前測量図 (周溝完掘後)……………39	第 50 図	3 号墓出土鉄器 ……69
		第 51 図	3301 落ち込み・3403 土坑・3405 溝 ・3407 遺構出土遺物……………70
		第 52 図	遺構外出土遺物 (1)……………71
		第 53 図	遺構外出土遺物 (2)……………73
		第 V 章	
		第 54 図	第 33 次調査分析試料採取位置……………75

第 55 図	第 34 次調査分析試料採取位置……………76	第 79 図	仙谷墳丘墓群全体図……………120
第 56 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓 北 A 5）から産出した植物珪酸体……………79	第 80 図	仙谷 1～3・5 号墓……………121
第 57 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓 北 A 5）から産出した花粉化石……………80	第 81 図	仙谷 4・6～9 号墓……………122
第 58 図	検出微粒炭……………81	第 82 図	松尾頭墳丘墓群全体図……………123
第 59 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓） における植物珪酸体分布図と微粒炭分布図…82	第 83 図	松尾頭 1～5 号墓……………124
第 60 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓） における花粉分布図……………83	第 84 図	妻木晩田遺跡における集落の変遷……………128
第 61 図	試料写真と採取位置（1）……………86	第 85 図	埋葬施設築造過程……………129
第 62 図	試料写真と採取位置（2）……………87	第 86 図	墳丘墓比較図（妻木晩田遺跡）……………130
第 63 図	暦年較正結果（1）……………88	第 87 図	埋葬施設（墓壙上端）規模比較図 （妻木晩田遺跡）……………130
第 64 図	暦年較正結果（2）……………89	第 88 図	埋葬施設軸と丘陵軸の関係……………130
第 65 図	マルチプロット図（No. 159（PLD-35756） を除く）……………90	第 89 図	埋葬施設配置の変遷……………131
第 66 図	妻木晩田遺跡出土炭化材の走査型電子 顕微鏡写真……………93	第 90 図	方形周溝墓にかかわる棺種と規模の比較…132
第 67 図	分析試料……………96	第 91 図	方形周溝墓及び埋葬施設の形態分類……………133
第 68 図	放射性炭素年代測定試料……………97	第 92 図	弥生時代後期～終末期を中心とした 墳丘墓の分布……………134
第 69 図	暦年較正結果……………100	第 93 図	山陰地域における方形周溝墓……………136
第 70 図	花粉化石・微粒炭写真……………102	第 94 図	中国山地山間部の弥生時代墳丘墓……………137
第 71 図	植物珪酸体写真……………104	第 95 図	妻木晩田遺跡土器編年（1）……………144
第 72 図	植物珪酸体含量……………105	第 96 図	妻木晩田遺跡土器編年（2）……………145
第 73 図	炭化材写真……………106	第 97 図	妻木晩田遺跡土器編年（3）……………146
第 74 図	大型植物遺体（炭化種実）写真……………107	第 98 図	妻木晩田遺跡土器編年（4）……………147
第 75 図	分析対象遺物の試料採取位置（a）及び 生物顕微鏡写真（b）……………114	第 99 図	妻木晩田遺跡出土外来系土器（1）……………150
第 76 図	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果……………115	第 100 図	妻木晩田遺跡出土外来系土器（2）……………152
第 VI 章			
第 77 図	妻木晩田遺跡全体図……………117	第 101 図	妻木晩田遺跡における外来系土器の分布…157
第 78 図	洞ノ原墳丘墓群……………119	第 102 図	伯耆地域出土吉備系土器……………159
		第 103 図	主な外来系土器の受容と変遷……………160
		第 104 図	妻木晩田遺跡からみた地域間交流概念図…166

挿表目次

第Ⅱ章		第12表	花粉分析・微粒炭分析結果	103
第1表	妻木晩田遺跡発掘調査年次計画	第13表	植物珪酸体含量	105
第2表	妻木晩田遺跡発掘調査一覧	第14表	炭化材観察・種実同定結果	107
	12～13	第15表	大型植物遺存体分析結果	108
第Ⅲ章		第16表	分析対象試料一覧	113
第3表	妻木晩田遺跡における墳丘墓の分類	第Ⅵ章		
	20	第17表	妻木晩田遺跡墳墓一覧	125
第Ⅴ章		第18表	妻木晩田遺跡弥生時代埋葬施設一覧	126
第4表	分析試料一覧	第19表	妻木晩田遺跡墳丘墓諸要素変遷表	131
第5表	試料1g当りのプラントオパール個数	第20表	中国地方における弥生時代後期～終末期の 方形周溝墓一覧表	134
第6表	試料の計量値と微粒炭数	第22表	妻木晩田遺跡出土外来系土器一覧表	155
第7表	産出花粉孢子一覧表	第23表	編年対照表	156
第8表	測定試料及び処理	第24表	遺構一覧表	166
第9表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果			
第10表	樹種同定結果一覧			
第11表	放射性炭素年代測定結果			

巻頭図版目次

巻頭図版 1	妻木晩田遺跡 松尾頭墳丘墓群全景 南東から	巻頭図版 5	松尾頭 3 号墓 調査終了状況 南西から
巻頭図版 2	1 松尾頭墳丘墓群遠景 北西から 2 松尾頭墳丘墓群 俯瞰 上が北西	巻頭図版 6	1 松尾頭 3 号墓 埋葬施設検出状況 南東から 2 松尾頭 4・5 号墓 周溝検出状況 (手前が 5 号墓) 南から
巻頭図版 3	1 松尾頭 3 号墓 周溝検出状況 南西から 2 松尾頭 3 号墓 周溝完掘状況 南から		
巻頭図版 4	松尾頭 3 号墓 周溝完掘状況 南西から		

写真図版目次

PL 1	1 松尾頭地区全景 北西から 2 松尾頭墳丘墓群遠景 北東から	PL 6	1 西側周溝 土層断面 南西から 2 東側周溝 土層断面 北東から 3 南東側陸橋部検出状況 北から
PL 2	1 松尾頭 3 号墓・4 号墓・5 号墓 俯瞰 (上が北西) 2 松尾頭 10 区北東部 調査区全景 俯瞰 (上が北西)	PL 7	1 北東側陸橋部検出状況 南西から 2 北西側陸橋部検出状況 南から 3 南西側陸橋部検出状況 北東から
PL 3	1 松尾頭 3 号墓 調査終了後全景 俯瞰 (上が北西) 2 松尾頭 4 号墓・5 号墓 調査終了後全景 俯瞰 (上が北西)	PL 8	1 西側周溝遺物出土状況① (周溝埋土 1 層 下面) 北から 2 西側周溝遺物出土状況② (周溝埋土 2 層 中) 俯瞰 (上が北東) 3 西側周溝遺物出土状況③ (周溝埋土 2 層 下面) 俯瞰 (上が北東)
松尾頭 3 号墓		PL 9	1 西側周溝遺物出土状況④ (周溝埋土 3 層 下面、周溝底面直上) 西から 2 北側周溝遺物出土状況 北東から 3 東側周溝鉄鍬出土状況 南から
PL 4	1 調査前状況 南から 2 周溝検出状況 東南から 3 周溝完掘削状況 東南から	PL10	1 墳頂部遺物出土状況① (第 33 次調査時点) 北から 2 墳頂部遺物出土状況② (第 34 次調査時
PL 5	1 周溝埋土から墳丘の層序 (東側周溝から墳丘) 東から 2 南側周溝 土層断面 西から 3 北側周溝 土層断面 東から		

	点) 北東から		3 松尾頭 5 号墓 周構内遺物出土状況 北東から
	3 墳頂部トレンチ調査前 (17 土坑完掘) 状況 北東から		
PL11	1 調査終了後全景① 南西から	PL19	1 確認用サブトレンチ 土層断面全体 南東から
	2 埋葬施設検出状況 南東から		2 確認用サブトレンチ 土層断面 (4 号墓側) 南東から
PL12	1 調査終了後 全景② 南から		3 確認用サブトレンチ 土層断面 (5 号墓側) 東から
	2 第 1 埋葬施設検出状況 北東から		
	3 第 3 埋葬施設検出状況 南西から		
PL13	1 墳頂部南東トレンチ 西側断面 (G - G') 南東から	PL20	1 松尾頭 10 区北東部 調査区東側調査終了 (遺構検出) 状況 西から
	2 墳頂部南東トレンチ 北側断面 (H - H') 南西から		2 松尾頭 10 区北東部 調査区東側調査終了 (遺構検出) 状況 南東から
	3 周溝から墳丘中央の層序 東側断面 東から	PL21	1 基本層序断面 A - A" 南西から
PL14	1 墳頂部東側トレンチ 南側土層断面 (D - D') 北東から		2 基本層序断面 A" - A"' 南東から
	2 墳頂部西側トレンチ 北側土層断面 (D - D') 南西から		3 基本層序断面 C' - C" 東から
	3 墳頂部トレンチ断面 断面交点西 西から	PL22	1 基本層序断面 B - B' 南から
PL15	1 墳頂部北側トレンチ 西側土層断面 (E - E') 南東から		2 3404 遺構検出状況 南西から
	2 墳頂部南側トレンチ 東側断面 (E - E') 南西から		3 3407 遺構土層断面 南西から
	3 墳頂部トレンチ断面 断面交点東 東から	PL23	1 3403 遺構検出状況 俯瞰 (上が南東)
			2 3403 遺構調査終了状況 南西から
			3 3403 遺構土層断面 西から
PL16	1 松尾頭 10 区南西部 調査前状況 東から	PL24	1 3406 遺構調査終了状況 南から
	2 松尾頭 10 区南西部 調査終了状況 東から		2 3406 遺構確認用サブトレンチ 西側土層断面 (A - A') 南東から
			3 3406 遺構確認用サブトレンチ 北側土層断面 (B - B') 南西から
松尾頭 4 号墓・5 号墓		PL25	1 松尾頭 10 区北東部 調査区東側遺構検出状況 俯瞰 (上が北西)
PL17	1 トレンチ 2 調査前状況 南から		2 P 1 土層断面 南東から
	2 トレンチ 2 表土除去状況 東から		3 P 2 土層断面 南東から
	3 周溝及び墳丘検出状況 東から		4 P 3 土層断面 南東から
PL18	1 周溝及び墳丘検出状況 南から		5 P 4 土層断面 南東から
	2 松尾頭 4 号墓 周構内遺物出土状況 北東から	PL26	1 マウンド状地形 E 調査前状況 北東から
			2 マウンド状地形 E 塹壕部清掃状況 北東から
			3 トレンチ 1 南側土層断面 北から

出土遺物

PL27	1	松尾頭3号墓 西側周溝・北側周溝出土遺物 (Po 1・2・4・8・17)	PL31	1	遺構外出土遺物 (Po61～73)
				2	遺構外出土遺物 (Po74～82)
PL28	1	松尾頭3号墓 西側周溝出土遺物 (Po 3・5～7・9～16)	PL32	1	松尾頭3号墓 東側周溝出土鉄鏃 (F 1)
	2	松尾頭3号墓 墳頂部・北側周溝・南側周溝出土遺物 (Po18～28)		2	松尾頭10区出土 石器 (S 1～6)
PL29	1	松尾頭3号墓 出土遺物 (Po30～41)		3	松尾頭1区 マウンド状地形 A 出土遺物 (a～f)
	2	松尾頭4号墓・5号墓 出土遺物 (Po42～46)		4	大山町加茂遺跡出土 外来系土器(搬入品)
PL30	1	3403 遺構・3405 遺構出土遺物 (Po47～51)		5	妻木山2区 SK-86 出土 外来系土器
	2	3407 遺構出土遺物 (Po53～60)		6	松尾頭1区 SI-20 出土 外来系土器

第1章 妻木晩田遺跡の位置と環境

第1節 妻木晩田遺跡の位置

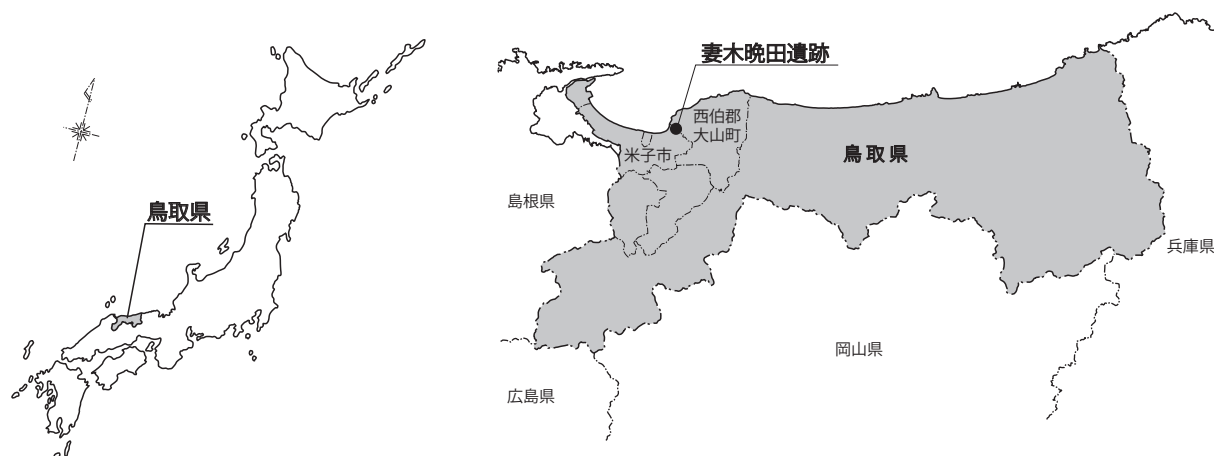
妻木晩田遺跡は、鳥取県西部、米子市（旧淀江町）および西伯郡大山町に所在する。遺跡は中国地方最高峰の大山（弥山、標高 1,709 m）の北麓に位置し、大山火山の寄生火山である孝霊山（標高 751 m）から北西方向に派生する通称「晩田山」丘陵上（標高 90 ～ 180 m）に弥生時代後半期の大規模弥生集落が展開する。この「晩田山」丘陵の西側尾根筋に米子市と大山町の境界があり、行政区分においては、妻木晩田遺跡全体の約 1 割を米子市、残り約 9 割を大山町が占めている。

妻木晩田遺跡が立地する「晩田山」丘陵は、小起伏の丘陵性の山地である。その地形は、深い谷地形に分断された 4 つの丘陵に大別される。丘陵の尾根筋は北側 3 つが比較的広くなだらかであるのに対し、最も南側はやや急峻である。弥生集落は主に北側の 3 つの丘陵上に営まれるが、最盛期にあたる弥生時代後期後葉には集落の規模が拡大し、急峻な南側の丘陵上にも竪穴住居が建てられるようになる。妻木晩田遺跡では、これまでの発掘調査によって、竪穴住居が丘陵頂部縁辺の緩斜面に分布することがわかってきているが、斜面下方から谷部にかけての土地利用の様相は不明な点が多く、今後の調査で確認していく必要がある。

第2節 地理的環境

妻木晩田遺跡の南にそびえる大山火山は、東西約 35km、南北約 30kmにおよぶ広がりをもつ複成火山で、主に約 100 ～ 40 万年前の古期噴出物と約 40 万年前以降の活動による新期噴出物から成る。妻木晩田遺跡がある「晩田山」丘陵の地形は、大山火山の影響を大きく受けており、大山の古期噴出物である溝口凝灰角礫岩層を基盤とする。また、遺跡内では新期噴出物である松江軽石層の堆積も部分的に見られる。

「晩田山」丘陵北側の裾野には、大山火山から噴出した火砕流を基盤とするなだらかな台地が広がり、放射状に流れる河川の活動により裾野に扇状地が発達している。特に阿弥陀川は急流でたびたび氾濫して流れを変えたと見られ、多量の砂礫を流下し広大な扇状地を形成した。阿弥陀川の河口から淀江



第1図 妻木晩田遺跡の位置

町今津に至る海岸は、主に阿弥陀川によってもたらされた角閃石安山岩の円礫で占められ、海岸線の背後には海岸段丘が認められる。

「晩田山」丘陵北西側では、山裾に段丘地形が広がり、妻木川や天井川、宇田川により形成された小規模な扇状地が山際から張り出すように認められる。その下流では、西側の壺瓶山と北側の海浜部に発達した砂州との間に三角州が形成された。これが淀江平野である。この三角州はかつて存在した潟湖の痕跡でもある。気候の寒冷化が進み海退が始まった縄文時代終わり頃から弥生時代にかけて淀江平野には汽水域が形成され、その後、砂州の発達によって外海から閉ざされ湖沼化した。淀江平野のほぼ中央に位置する井手跨遺跡からは弥生時代後期～古墳時代の木製農具が出土



第2図 妻木晩田遺跡周辺の地形

しており、この頃、湖沼の周辺で水田が営まれていたことがうかがえる。淀江平野の湖沼は古代から中世にかけて規模が縮小し、近世にはほぼ消滅したと考えられている。現在、平野一帯に水田が営まれておりかつての湖沼の面影は失われているが、三角州と砂州の境界は JR 山陰本線に沿う高まりに痕跡を確認することができる。

第3節 歴史的環境

旧石器時代

妻木晩田遺跡周辺の歴史は旧石器時代まで遡り、石器製作技術など多様なあり方を示している。鳥取県内で始良丹沢火山灰層以下で旧石器が確認されたのは、大山町にある門前第2遺跡（西畝地区）及び豊成叶林遺跡の2例である。門前第2遺跡では、始良丹沢火山灰層直下で黒曜石製のナイフ形石器や黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。豊成叶林遺跡では石器ブロックが2ヶ所確認され、その周辺からは玉髓製のナイフ形石器、石刃、剥片のほか、黒曜石製のナイフ形石器も出土している。その他、近隣の遺跡からは、米子市淀江町の原畑遺跡から杉久保型ナイフ形石器、大山町小谷遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している。妻木晩田遺跡洞ノ原地区でも、出土した黒曜石製の剥片石器のなかに縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器や打面を残置する一側縁加工のナイフ形石器などが少量確認できる。海に面した低丘陵という立地から、旧石器時代の生活痕跡が残されている可能性もあり、今後の調査で注意しておく必要がある。

縄文時代

大山山麓では、サヌカイトや黒曜石を素材とした有舌尖頭器が出土されている。また、大山町南川遺跡では、後期の石組炉を伴う竪穴住居跡が確認されている。妻木晩田遺跡周辺では、旧淀江潟の縁辺に位置する米子市淀江町井手跨遺跡、福岡遺跡や、妻木川の扇状地に位置する大山町塚田遺跡、妻木法大神遺跡などから、縄文時代後晩期を中心とするまとまった量の遺物が出土している。これらの遺跡では居住に関わる遺構は確認されていないが、周辺の微高地や段丘上に集落跡が存在する可能性

がある。妻木晩田遺跡では落とし穴と考えられる土坑群も多数検出されており、稀に後晩期の土器を伴う。このことから、集落の狩猟採集の場として「晩田山」丘陵をはじめ近隣の丘陵が利用されていたことがうかがえる。

弥生時代

弥生時代には、おもに阿弥陀川の扇状地及び丘陵上、妻木川の扇状地、淀江平野、「晩田山」丘陵、佐陀川右岸の扇状地の5ヶ所を中心に遺跡が分布する。

前期後半から中期前葉にかけては、阿弥陀川左岸の扇状地にある上野遺跡群で土器が出土し、妻木川の扇状地に位置する妻木法大神遺跡では、自然河道から前期後半の土器が多量に出土している。この時期の居住域の具体的な様相は明らかになっていないが、妻木川と阿弥陀川流域の扇状地を生活の拠点としており、今津岸の上遺跡と大塚岩田遺跡において前期の環壕が確認されていることから、これらが当該期の集落の一部であることは間違いないだろう。

中期中葉から後葉になると、阿弥陀川左岸の扇状地において塚田遺跡に竪穴住居跡が確認できる。大道原遺跡や新田原遺跡などでも当該期の土器が出土していることから、遺跡の分布が扇状地高所側へ広がり始めたことが読み取れる。阿弥陀川右岸では、大山北麓のなだらかな台地上において、中期中葉から古墳時代にかけて茶畑遺跡群を中心に集落が営まれる。茶畑遺跡群では独立棟持柱を持つ大型掘立柱建物跡が検出され、この時期に祭祀空間を伴う大きな集落が形成されている点は特筆される。

妻木川左岸の扇状地では、晩田遺跡などで中期中葉から後葉の土器が認められ、遺跡の分布が「晩田山」西側裾野に広がり始める。中期中葉までは遺跡が確認できない大井川、宇田川の扇状地においても角田遺跡や日吉塚古墳盛土から中期後葉の土器が認められ、当該期に遺跡の分布域が拡大している。角田遺跡、日吉塚古墳盛土からはいずれも絵画土器が出土し、当地における祭祀空間を伴う集落の存在が示唆される。

一方、佐陀川右岸の扇状地においては、中期後葉から古墳時代にかけて百塚遺跡群を中心とした集落が営まれる。後期前葉には四隅突出型墳丘墓と環濠を伴う集落が尾高浅山遺跡に認められる。尾高浅山遺跡では後期中葉以降には台状墓が営まれ、墳丘墓の造営が継続されている。

妻木晩田遺跡では、中期中葉の土器を伴う土坑が洞ノ原地区西側丘陵で確認されている。ただし、竪穴住居跡は未検出であり、この頃に居住域として利用されていたのかどうかは判然としない。「晩田山」丘陵下には晩田遺跡があることから、山裾の段丘上が居住地であった可能性もある。

「晩田山」丘陵上に確実に居住域が形成されるのは中期後葉で、松尾頭地区で竪穴住居跡や貯蔵穴と推測される土坑などが確認される。他の地区では貯蔵穴や土坑が点在するのみであり、全体的に遺物の出土数も少ないことから、この段階の妻木晩田遺跡はまだ小規模な集落である。ただし、松尾頭地区では絵画土器や分銅形土製品などが認められ、時期は不確定であるが銅剣形石製品も出土している。松尾頭地区に祭祀空間を伴う集落があったのは間違いない。

後期になると、妻木晩田遺跡がこの地域の中心的な集落となる。後期前葉には、洞ノ原地区では、環壕や墳丘墓群が造られ、妻木新山地区や妻木山地区、松尾頭地区においても、数棟の竪穴住居からなる居住域が形成される。このうち、洞ノ原地区の洞ノ原1号墓、同2号墓は、米子市尾高浅山遺跡の四隅突出型墳丘墓と並び、大山北西麓最古の首長墓として位置づけられている。首長墓の登場と同時に、その後の大規模集落発展に繋がる居住域の形成が始まる点は重要である。後期中葉になると、洞ノ原地区の環壕は徐々に埋没し、墓域は仙谷墳丘墓群に移る。この頃から集落規模は拡大し、最盛

期を迎える後期後葉になると、丘陵全体に居住域が広がり、洞ノ原地区や松尾城地区にも分布が拡大する。仙谷墳丘墓群から松尾頭墳丘墓群に墓域が移り始める終末期前半には集落全体の竪穴住居跡数が一度減少するものの、その後回復し、集落は古墳時代前期前葉まで継続的に営まれる。

集落最終段階とも言える古墳時代前期初頭に築かれたのが、仙谷8号墓、同9号墓である。これら「晩田山」丘陵上に展開する首長墓と、妻木晩田遺跡から約1km離れた丘陵縁辺に位置し四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されている徳楽方墳（大山町長田）や、荘田2号墓（大山町荘田）との関係は、大規模弥生集落の最終段階の首長墓の系列を考える上で重要な検討課題である。

古墳時代

古墳時代前期中葉になると、妻木晩田遺跡の集落は急速に縮小し、その後の集落がどこに移ったの



第3図 妻木晩田遺跡周辺の遺跡

かは未だ明らかになっていない。

代わって「晩田山」丘陵上には多くの古墳が造営されるようになる。洞ノ原地区には晩田山古墳群、妻木山地区には番田山古墳群、妻木新山地区には妻木山古墳群、松尾頭地区には松尾頭古墳群がそれぞれ所在する。このうち、古墳群の形成が最も早いのは、洞ノ原地区の晩田山古墳群である。築造時期を明確に示す土器は出土していないが、前期に遡る古墳と考えられるのは、前方後円墳である晩田山3号墳のほか、方墳である晩田山11号墳、円墳の晩田山10・17号墳である。晩田山古墳群での最古相の古墳の様相を明らかにすることは、大規模弥生集落終焉後の集落と、当地域の古墳築造開始期の墓制の在り方を考える上で大変重要である。

中期から後期にかけて首長墓の系譜は、丘陵下に位置する小枝山古墳群、向山古墳群、富岡播磨洞

阿弥陀川右岸扇状地周辺の遺跡	47 国信第1遺跡	90 瓶山古墳群	壺瓶山～尾高丘陵周辺の遺跡
1 荒田遺跡	48 国信第2遺跡	Ka-1 瓶山4号墳	116 壺瓶山第4遺跡
2 山村遺跡	49 国信第3遺跡	91 福岡谷ノ上遺跡	117 壺瓶山古墳群
3 下大山第4(d)遺跡	50 唐王遺跡	92 向山古墳群	Tu-1 壺瓶山029号墳
4 富長第1遺跡	51 清原遺跡	Mu-1 向山1号墳	(大転場古墳)
5 下大山第2(a)遺跡	52 中高遺跡	(岩屋古墳)	118 福頼遺跡
6 下大山第3(b)遺跡	53 平古墳群	Mu-2 向山3号墳	119 大下畑遺跡
7 富長城跡	Ta-1 平6号墳(平狐塚)	Mu-3 向山4号墳	120 小波遺跡
8 富長第2遺跡	54 仁王堂遺跡	Mu-4 向山5号墳	121 百塚第1～7遺跡
9 古御堂遺跡	55 宮内古墳群	(長者ヶ平古墳)	122 百塚古墳群
10 古御堂曾利遺跡	Mi-1 宮内1号墳	93 小枝山古墳群	123 西小原遺跡
11 文珠領屋敷遺跡	Mi-2 宮内2号墳	Ko-1 小枝山4号墳	124 小波城跡(小浪城)
12 文珠領遺跡	56 宮内第3遺跡	(上ノ山古墳)	125 小波下原田遺跡
13 古御堂新林遺跡	57 末吉城跡	Ko-2 小枝山3号墳	126 小波上遺跡
14 古御堂金蔵ヶ平遺跡	58 末吉遺跡	Ko-3 小枝山5号墳	127 小波原畑遺跡
15 古御堂笹尾山遺跡	59 上万遺跡	(石馬谷古墳)	128 小波狭間谷遺跡
16 原遺跡	60 妻木法大神遺跡	Ko-4 小枝山6号墳	129 原田遺跡
17 茶畑第1遺跡	61 新田原遺跡	Ko-5 小枝山012号墳	130 泉上経前遺跡
18 茶畑山道遺跡	62 大道原遺跡	94 小枝山遺跡	131 泉中峰・泉前田遺跡
19 押平尾無遺跡	63 塚田遺跡	95 彼岸田遺跡	132 岡成古墳群
20 茶畑古墳群	64 庄田古墳群	96 稲吉遺跡	133 喜多原第5遺跡
21 茶畑第2遺跡	65 長田古墳群	97 城山古墳群	134 喜多原第1遺跡
22 大塚塚根遺跡	Na-1 長田014号墳	Si-1 城山010号墳	135 喜多原第2遺跡
23 大塚岩田遺跡	(徳楽墳丘墓)	(持給院古墳)	136 喜多原第3遺跡
24 大塚殿信遺跡	66 長田第3遺跡	98 稲吉古墳群	137 喜多原第4遺跡
25 大塚成仏遺跡	67 長田早稲田遺跡	99 四十九谷横穴墓群	138 岡成第1遺跡
26 大塚第4遺跡	68 長田玉谷遺跡	100 鮎ヶ口遺跡	139 岡成第9遺跡
27 道垣遺跡	69 長田的場遺跡	101 富繁渡り上り遺跡	140 岡成第2遺跡
28 茶畑六反田遺跡	70 長田大新田遺跡	102 河原田遺跡	141 岡成第7遺跡
29 茶畑本家遺跡	71 長田第5遺跡	103 稲吉角田遺跡	142 仲間古墳群
30 東高田遺跡	72 長田第8遺跡	104 高井谷遺跡	143 尾高古墳群
31 大塚第2遺跡	73 長田第9遺跡	105 高井谷古墳群	144 岡成第6遺跡
32 大塚三反田遺跡	74 長田大新田ノ二遺跡	Tak-1 高井谷5号墳	145 尾高御建山遺跡
33 大塚第3遺跡	75 香原山城(カヲ城)	106 井手挾遺跡	146 尾高泉原遺跡
34 大塚屋敷遺跡		107 井手挾古墳群	147 尾高城跡
35 押平上六反遺跡	淀江平野周辺の遺跡	Ide-1 井手挾3号墳	148 尾高遺跡
36 押平天王屋敷遺跡	76 安原遺跡	108 中西尾古墳群	
37 押平弘法堂遺跡	77 富岡播磨洞遺跡	Na-1 中西尾7号墳	
38 京ヶ坪遺跡	78 安原溝尻遺跡	(日吉塚古墳)	
39 西高田遺跡	79 今津岸の上遺跡	Na-2 中西尾5号墳	
40 高田古墳群	80 今津塚田遺跡	Na-3 中西尾3号墳	
Taka-1 高田26号墳	81 晩田遺跡	(長塚古墳)	
	82 楚利遺跡	109 高井谷東美谷古墳群	
阿弥陀川左岸扇状地周辺の遺跡	83 北尾宮廻遺跡	110 富繁流田遺跡	
41 福尾城跡	84 福岡北尾尻遺跡	111 富繁古墳群	
42 福尾第1遺跡	85 福岡柳谷遺跡	112 富繁城跡(亀山城)	
43 福尾第2遺跡	86 北尾城跡	113 西尾原横穴墓群	
44 上野第1遺跡	87 上淀麿寺跡	114 西尾原古墳群	
45 上野第3遺跡	88 福岡遺跡	115 福頼古墳群	
46 上野第2遺跡	89 淀江井手勝遺跡		

古墳群に移る。特に、向山古墳群は後期における伯耆最有力の首長系譜を形成する。この時期、妻木晩田遺跡の各古墳群では小規模な古墳の築造が続き、松尾頭地区では小規模な居住が認められる。その後、終末期になると、洞ノ原地区丘陵裾部において、出雲地域の影響を強く受けた切石積の横穴式石室をもつ晩田山1号墳、2号墳、31号墳が築造される。

また、中期後葉から後期にかけて「百塚遺跡群」を中心に大規模な集落が営まれる。付近には百塚古墳群があり、いわゆる群集墳と、それを造営した集団の居住域が確認されている点は注目される。

古代・中世以降

飛鳥時代になると、小枝山古墳群や向山古墳群が位置する米子市淀江町字福岡に、彩色壁画の出土等で注目される上淀廃寺が建立される。奈良時代になると、妻木晩田遺跡松尾城地区、松尾頭地区に小規模な集落が認められる。平安時代以降には、洞ノ原地区において土師器や須恵器が少量出土するものの、この頃の集落の存在は明らかになっていない。中世には、松尾城地区に山城が築かれる。斜面地に確認できる地形には、この頃の土塁や曲輪状の遺構も含まれている可能性があるが、現況では判然としない。今後の発掘調査で明らかにしていく必要があるだろう。

主要参考文献

- 岩田文章編 1997 『妻木晩田遺跡 小真石清水地区発掘調査報告書』 淀江町埋蔵文化財調査報告書 42、淀江町教育委員会
- 岩田文章編 2000 『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』 淀江町埋蔵文化財調査報告書 50、淀江町教育委員会
- 君嶋俊行編 2008 『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書－第16・19次調査－』 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅲ集、鳥取県教育委員会
- 佐々木謙 1981 『宇田川』、淀江町教育委員会
- 大山町誌編さん委員会編 1980 『大山町誌』、大山町役場
- 大山町誌編集委員会編 2010 『続大山町誌』、大山町
- 玉木秀幸編 2011 『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書－第20・21・23次調査－』 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅳ集、鳥取県教育委員会
- 津久井雅志 1984 「大山火山の地質」『地質学雑誌』 第90巻第9号、日本地質学会
- 中原斉 2001 「分布調査について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2000』、鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦編 2003 『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－』 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅰ集、鳥取県教育委員会
- 馬路晃祥編 2006 『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集、鳥取県教育委員会
- 松井潔 1996 「山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期」『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集刊行会
- 松本哲他編 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ』 大山町埋蔵文化財調査報告書第17集、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 山口剛編 2000 『大山町内遺跡発掘調査報告書』 大山町教育委員会
- 淀江町誌編纂委員会編 1985 『淀江町誌』、淀江町

第Ⅱ章 発掘調査に至る経緯

第1節 発掘調査の経緯

妻木晩田遺跡の第1次調査は、ゴルフ場開発を契機に平成7年に始まった。第1次調査では、当初は丘陵ごとに「洞ノ原遺跡」「妻木山遺跡」などの遺跡名を付し、別個の遺跡として認識、調査されていた。その後、丘陵頂部を中心に平成10年までに約17haにおよぶ調査がおこなわれ、弥生時代中期中葉から古墳時代前期及び後期の集落跡、古墳群、奈良時代の集落跡などが発見された（大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000、淀江町教育委員会2000）。特に、弥生時代後期から古墳時代前期には、丘陵の尾根上に居住域が展開し、約170haと推測される大規模な集落跡が形成されていたことが明らかになったことから、通称「晩田山」丘陵で確認された別個の遺跡を同一の遺跡群ととらえ、「妻木晩田遺跡群」と呼称されるようになった。

妻木晩田遺跡は、山陰地方の弥生時代集落を研究するうえで貴重な遺跡として平成11年に全面保存が決定し、約150haの範囲が国の史跡に指定された。史跡指定にあたり、遺跡全体をひとつの大きな集落遺跡として捉えるべきという観点から、遺跡名を「妻木晩田遺跡」と呼びかえることになった。なお、松尾頭地区と同一丘陵にある小真石清水遺跡については、平成5年から平成6年にかけて発掘調査が行われ、弥生時代後期後葉から終末期の竪穴住居跡が検出されている（淀江町教育委員会1997）。よって、妻木晩田遺跡と同一の集落と評価でき、松尾頭地区の一部として位置づけられている。

第2節 発掘調査の課題と計画

1. 調査計画

鳥取県では、妻木晩田遺跡の全体像を明らかにするために、平成12（2000）年度から妻木晩田遺跡発掘調査委員会（現・とっとり弥生の王国調査整備活用委員会調査研究部会）の指導、助言のもと、計画的、継続的に発掘調査等の考古学的調査を実施している。平成12（2000）年度に発掘調査を実施するにあたり、はじめに以下の5つの調査課題を設定した。

- A 集落の構造と変遷に関する問題
- B 墓制に関する問題
- C 生活空間・生業に関する問題
- D 古環境に関する問題
- E 弥生時代以前、弥生時代以降の妻木晩田遺跡とその周辺に関する問題

また、平成14（2002）年度以降は、発掘調査をその方法と目的に応じて以下の①～③のように分類し実施することとした。

- ①重点調査：妻木晩田遺跡の詳細を明らかにするために行う特定地区を対象とする発掘調査。

長期計画、短期計画、及び内容確認調査の成果に基づき発掘調査を計画、実施する。

- ②内容確認調査：妻木晩田遺跡の全体像を把握することを目的に、史跡指定地内及びその周辺を含む広域を対象とした発掘調査。分布調査の成果に基づき内容を確認するためにトレンチ調査を実施する。

③分布調査：妻木晩田遺跡の全体像を現況から把握することを目的に、史跡指定地内及びその周辺を対象とした踏査を実施する。

これらの調査がそれぞれ関連性をもつように発掘調査年次計画を第1表のとおり定め、調査研究課題の解決を図っている。これまでの発掘調査の一覧は第2表のとおりである。

2. 長期計画第Ⅰ期の概要

平成12年から平成21年までの10年間を長期計画第Ⅰ期とし、重点調査については、調査課題Aを中心に、課題C・Dの解明を目指して調査を実施した。

短期計画第1期

平成12年度、平成13年度の2年間は短期計画第1期とし、「形成期の集落像の解明」を目的として、洞ノ原地区西側丘陵の環壕とその内部空間の在り方を明らかにするために重点調査をおこなった。その結果、環壕が機能していた後期前葉には内部空間に居住に関わる建物は認められないこと、後期中葉以降に環壕は埋没が進み、集落最盛期にあたる後期後葉に洞ノ原西側丘陵は居住域へ変遷することが明らかになった（鳥取県教育委員会2003）。

短期計画第2期

続く平成14年から平成16年度までの3年間は短期計画第2期とし、「最盛期の集落像の解明」を目的として妻木山地区で重点調査をおこなった。その結果、最盛期となる後期後葉の集落は、3棟前後の竪穴住居を1単位とする居住単位が丘陵頂部の縁辺部に分布し、これらのまともりは廃絶と建て替えを行いながら2～3段階にわたり変遷していたことが明らかになった（鳥取県教育委員会2006）。内容確認調査は、平成15年度に、妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ丘陵鞍部で、旧地形の復元と居住域の分布を確認するためのトレンチ調査をおこない（鳥取県教育委員会2004）、平成16年には、松尾頭地区及び妻木山地区で斜面地の遺構分布を把握するためにトレンチ調査をおこなった（鳥取県教育委員会2005）。

短期計画第3期

平成17年度、平成18年度の2年間は、短期計画第3期とし、「首長層居住域の実態解明」を目的として松尾頭地区で重点調査をおこなった。特に妻木晩田遺跡では唯一庇付きの構造をもつ大型庇付掘立柱建物跡（第41建物跡）を取り巻く遺構の分布状況と時期を明らかにすることを目的として調査を進めた。その結果、第41建物跡は、同時期に存在した竪穴住居の居住単位に含まれ、区画溝などの施設を伴わない形で存在していたことが明らかになった。第41建物跡を含む竪穴住居群は、大型竪穴住居や青銅鏡などの首長の存在を直接示すような遺構・遺物は認められないが、第41建物跡の北西に位置する第53竪穴住居跡からは21点の鉄製品が出土し、鉄製品を多く保有する竪穴住居群であったことが明らかになった（鳥取県教育委員会2008）。内容確認調査は、遺構の分布状況を把握するために、松尾頭地区・松尾城地区・妻木新山地区においてトレンチ調査をおこなった（鳥取県教育委員会2006、鳥取県教育委員会2007）。

短期計画第3期の調査成果をうけ、大型掘立柱建物と、大型竪穴住居を含む居住単位との関係を明らかにすること、旧小真石清水遺跡を含む松尾頭地区全体の集落構造を明らかにすることが、「首長層居住域」である松尾頭地区の構造を解明するために必要と考えられたことから、第Ⅰ期計画を延長して、新たに短期計画第4期を策定し、松尾頭地区の発掘調査を継続することが決定した。

短期計画第4期

平成19年度から平成21年度までの3年間を短期計画第4期とし、「松尾頭地区の集落像の解明」を目的とする重点調査を行った。第1次調査において、松尾頭地区では最盛期となる後期後葉に床面積30㎡を超える大型竪穴住居群が検出され、周囲に庇付きの大型掘立柱建物が確認されたことから、松尾頭地区の中心的な役割を果たす居住単位と考えられてきた。短期計画第4期の重点調査によって、大型掘立柱建物を含む周囲の居住単位の在り方を確認した結果、これらの居住単位では鉄製品やガラス製品などを保有する傾向にあることが明らかになったが、新たな大型竪穴住居は確認されなかった。仙谷墳丘墓群から松尾頭墳丘墓群に墓域が変遷する終末期後半には、大型竪穴住居の立地が東に移り、松尾頭地区の中心が同一丘陵の東側へ移動したことが明らかになった（鳥取県教育委員会2011a）。

3. 長期計画第Ⅱ期の概要

長期計画第Ⅱ期は、平成22年度から平成30年度までの8年間とし、調査課題Bを中心に、課題C、課題Dの解明を目指した。妻木晩田遺跡の墓域については、集落最盛期の墳丘墓や、墳丘をもたない土壙墓・木棺墓群の有無の確認など課題が多く残されているなか、墳丘墓群周辺の分布調査や内容確認調査によって、未確認の墳丘墓の存在が明らかとなり、既知の墳丘墓群の中での位置づけを確認するために、各墳丘墓群において重点調査を実施した。

短期計画第1期

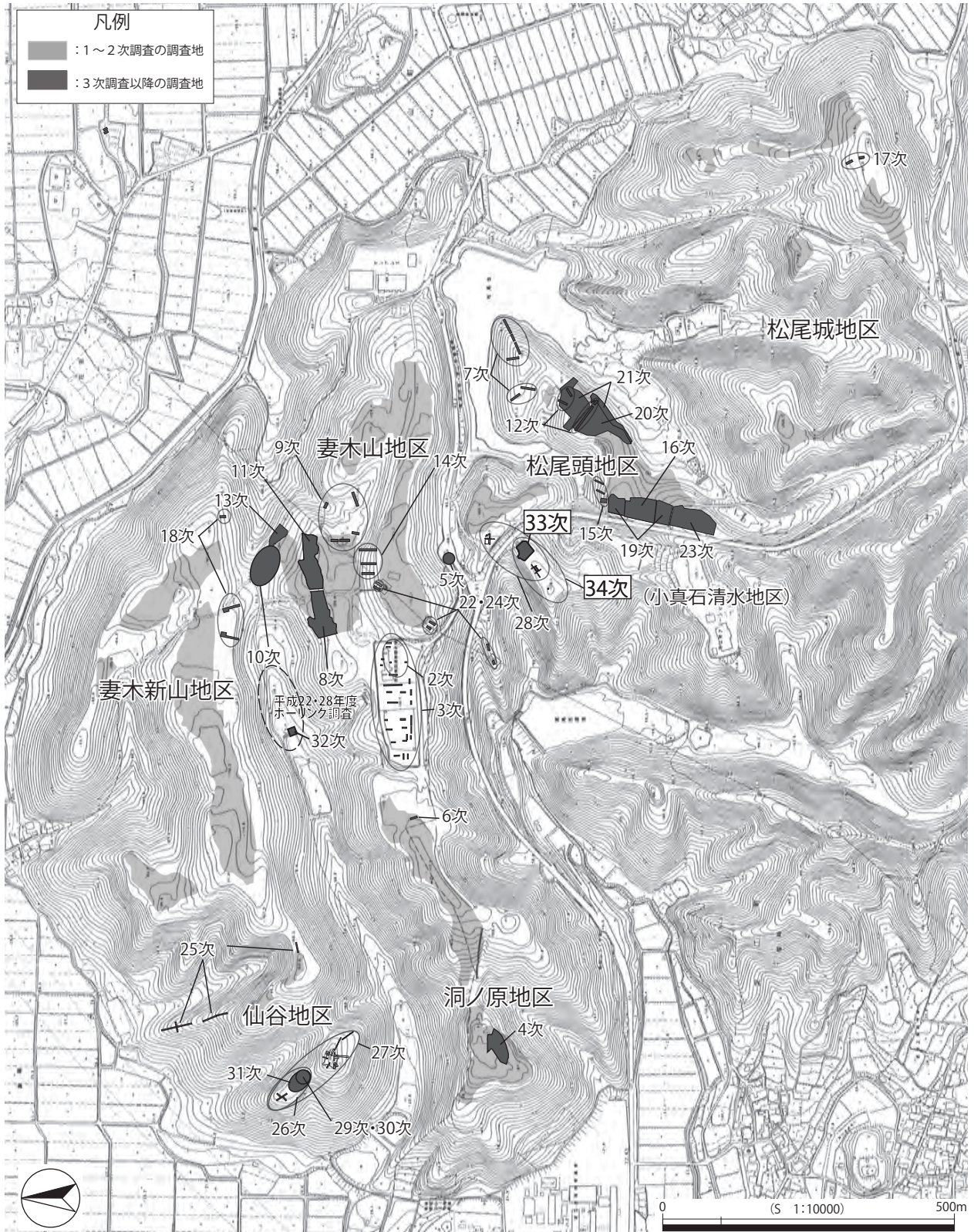
平成22年から平成27年度までの5年間を短期計画第1期とし、「墳墓域の実態解明」を調査課題として仙谷墳丘墓群の重点調査を行った（鳥取県教育委員会2011b～2016）。仙谷墳丘墓群は、1次調査において妻木晩田遺跡最大の四隅突出型墳丘墓である仙谷1号墓や後期中葉～終末期の2～7号墓が知られているが、分布調査によって未調査地に段状の地形や高まり、平坦な地形などが認められ、さらに墓域が広がることが想定された（鳥取県教育委員会2006b）。そこで、仙谷墳丘墓群の範囲及び帰属する墳丘墓の構造と築造時期、妻木晩田遺跡における弥生時代後半期の墓域と居住域との関係を明らかにすることを目的として調査した結果、新たに古墳時代前期前葉で石棺の埋葬施設を持つ仙谷8号墓と円形に地山を削り出した9号墓を検出し、新しい葬送儀礼を取り入れながら、集落終焉期まで仙谷丘陵において墳丘墓の築造があったことが明らかとなった。

短期計画第2期

平成29年から平成30年度までの2年間を短期計画第2期とし、「墳墓域の実態解明」を調査課題として松尾頭墳丘墓群の重点調査を行った（鳥取県教育委員会2018、2019）。松尾頭墳丘墓群は、第1次調査時に2基の墳丘墓が確認されており、弥生時代終末期における墓域と推測された場所である（大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000）。平成25年度に、未調査地である墓域西側の様相を把握するための内容確認調査を実施したところ、同一丘陵上に終末期の墳丘墓を確認し、墓域が西へ展開することが明らかになった（鳥取県教育委員会2014）。そこで、松尾頭墳丘墓群の範囲及び帰属する墳丘墓の構造と築造時期、埋葬施設の構造を確認すること、墓域と居住域との関係を明らかにすることを目的として、松尾頭10区東側を平成29年度（第33次）、10区全体を平成30年度（第34次）に重点調査を行うことが決定した。

第1表 妻木晩田遺跡発掘調査年次計画

年次	重点調査		内容確認調査	分布調査	報告書
	調査課題	調査地			
H12	形成期の集落像の解明	洞ノ原地区西側丘陵	初期整備に伴う確認調査	全域	
H13				松尾頭地区	
H14	最盛期の集落像の解明	妻木山地区	妻木山地区	妻木山地区	洞ノ原
H15			妻木山地区	松尾頭地区・松尾城地区	
H16			松尾頭地区	妻木新山地区	
H17	首長層居住域の実態解明	松尾頭地区（4～6区）	松尾頭・松尾城地区	仙谷地区	妻木山
H18			妻木新山地区		
H19	松尾頭地区の集落像の解明	松尾頭地区（7区）			松尾頭
H20		松尾頭地区（8区）			
H21		松尾頭地区（9区）			
H22	墳墓域の実態解明	仙谷地区東側丘陵			松尾頭
H23		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓ほか）			
H24		仙谷地区西側丘陵（仙谷1号墓・8号墓ほか）			
H25		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓）	松尾頭地区1区・10区		
H26		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓）			
H27		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓・9号墓）			
H28			妻木山地区谷部の内容確認調査／谷部のポーリング調査		仙谷
H29		松尾頭10区東			
H30		松尾頭10区（全体）			
R1		出現期、展開期における集落像の解明	妻木新山地区		
R2					
R3以降	※調査成果を踏まえて調査地を検討し、継続的に発掘調査を実施。				妻木新山
※令和3年度以降は予定					



第4図 妻木晩田遺跡発掘調査区位置図

第2表 妻木晩田遺跡発掘調査一覧

次数	調査区	目的	期間(S:昭和 H:平成)	面積(m ²)	文献
	松尾頭遺跡	試掘調査	S52. 4.20 ~ S53. 3. 2	720.00	大山町教育委員会 1978
	松尾頭遺跡	記録保存	S53.12 ~ S54. 3		大山町教育委員会 1979
	妻木新山遺跡	試掘調査	H 4.10.21 ~ H 4.12. 8	302.00	大山町教育委員会 1993
	妻木新山遺跡(含仙谷1号墓)	試掘調査	H 4.12. 9 ~ H 5. 9. 1	432.00	大山町教育委員会 1994b
	妻木新山遺跡(含仙谷2・3号墓)、 妻木山遺跡、 松尾頭遺跡、 松尾城跡	試掘調査	H 5. 9. 2 ~ H 6. 1.11	1,252.75	大山町教育委員会 1994a
	小真石清水遺跡	試掘調査	H 5. 5.20 ~ H 5. 6. 4	226.00	淀江町教育委員会 1995
	小真石清水地区	記録保存	H 5. 7. 2 ~ H 5. 9.13	6,800.00	淀江町教育委員会 1997
	晩田遺跡群(洞ノ原地区)	試掘調査	H 5.10. 5 ~ H 6. 2.24	143.00	淀江町教育委員会 1995
	妻木山遺跡	試掘調査	H 6. 1.12 ~ H 6. 3.31	288.50	大山町教育委員会 1994b
1次	妻木新山地区、 仙谷地区 妻木山地区、 洞ノ原地区 松尾頭地区、 松尾城地区	記録保存 (現状保存)	H 7. 3. 5 ~ H10. 3.31	164,500.00	大山町教育委員会他 2000 淀江町教育委員会 2000
2次	仙谷地区 妻木山地区 洞ノ原地区	試掘調査	H11.11. 4 ~ H12. 2.14	411.50	大山町教育委員会他 2000 淀江町教育委員会 2000
3次	妻木山地区	試掘調査	H12. 4.24 ~ H12. 5.18	505.40	鳥取県教育委員会 2001
4次	洞ノ原地区	内容確認	H12. 7. 6 ~ H14.12.28	3,500.00	鳥取県教育委員会 2003b
5次	妻木山地区	試掘調査	H12.12. 4 ~ H13. 1.11	9.00	鳥取県教育委員会 2001
6次	洞ノ原地区	内容確認	H13. 2.19 ~ H13. 7.23	14.00	鳥取県教育委員会 2002
7次	松尾頭地区	試掘調査	H13. 2.19 ~ H13. 5.21	266.00	鳥取県教育委員会 2002
8次	妻木山地区	重点調査	H14. 6.14 ~ H15. 2.26	2,300.00	鳥取県教育委員会 2006b
9次	妻木山地区	内容確認調査	H14.10. 2 ~ H14.11.29	96.50	鳥取県教育委員会 2003a
10次	妻木山地区	内容確認調査	H15. 4.23 ~ H15.11.28	135.00	鳥取県教育委員会 2004
11次	妻木山地区	重点調査	H15. 5.15 ~ H15.12. 9	2,500.00	鳥取県教育委員会 2006b
12次	松尾頭地区	内容確認調査	H16. 4.23 ~ H16.11.28	270.00	鳥取県教育委員会 2005
13次	妻木山地区	重点調査	H16. 5.31 ~ H16.12. 9	1,200.00	鳥取県教育委員会 2006b
14次	妻木山地区	内容確認調査	H16.10. 1 ~ H16.12.21	190.00	鳥取県教育委員会 2005
15次	松尾頭地区	内容確認調査	H17. 4.26 ~ H17. 9.27	112.00	鳥取県教育委員会 2006a
16次	松尾頭地区	重点調査	H17. 5.25 ~ H17.12.23	1,100.00	鳥取県教育委員会 2008a
17次	松尾城地区	内容確認調査	H17.11.11 ~ H18. 3.17	34.00	鳥取県教育委員会 2006a
18次	妻木新山地区	内容確認調査	H18. 5.15 ~ H18.10.12	199.00	鳥取県教育委員会 2007
19次	松尾頭地区	重点調査	H18. 6. 6 ~ H19. 1.16	1,488.00	鳥取県教育委員会 2008a
20次	松尾頭地区	重点調査	H19. 6.20 ~ H19.12.27	2,350.00	鳥取県教育委員会 2011a

次数	調査区	目的	期間(S:昭和 H:平成)	面積(m ²)	文献
21次	松尾頭地区	重点調査	H20. 5. 7 ~ H20.11.27	1,600.00	鳥取県教育委員会 2011a
22次	妻木山地区、 松尾頭地区	試掘調査	H20. 6.10 ~ H20.11. 4	40.00	鳥取県教育委員会 2009
23次	松尾頭地区	重点調査	H21. 4.20 ~ H21.10.30	2,100.00	鳥取県教育委員会 2011a
24次	妻木山地区 松尾頭地区	試掘調査	H21.10. 5 ~ H21.12. 2	73.00	鳥取県教育委員会 2011b
25次	仙谷地区	重点調査	H22. 4.16 ~ H22. 9.30	244.00	鳥取県教育委員会 2014/2017a
26次	仙谷地区	重点調査	H23. 4.15 ~ H23. 9.30	152.50	鳥取県教育委員会 2017a
27次	仙谷地区	重点調査	H24. 4.19 ~ H24.10.29	248.00	鳥取県教育委員会 2014/2017a
28次	松尾頭地区	内容確認調査	H25. 5.20 ~ H25.12. 9	144.30	鳥取県教育委員会 2014
29次	仙谷地区	重点調査	H25. 9.10 ~ H25.12. 9	204.80	鳥取県教育委員会 2017a
30次	仙谷地区	重点調査	H26. 7. 1 ~ H26.10. 8	832.00	鳥取県教育委員会 2017a
31次	仙谷地区	重点調査	H27. 7. 6 ~ H27.10.17		鳥取県教育委員会 2017a
32次	妻木山地区谷部	内容確認調査	H28.10. 3 ~ H28.12. 6	100.00	鳥取県教育委員会 2017b
33次	松尾頭地区	重点調査	H29. 8.23 ~ H29.12.17	600.00	鳥取県教育委員会 2018/2020
34次	松尾頭地区	重点調査	H30. 6.18 ~ H30.11.13	638.00	鳥取県教育委員会 2019/2020
			延べ調査面積	198,321.25	

妻木晩田遺跡 発掘調査関係文献

淀江町教育委員会 1997『妻木晩田遺跡 小真石清水地区発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 42

大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17

淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 50

鳥取県教育委員会 2003『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書—洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅰ集

鳥取県教育委員会 2004『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2003』

鳥取県教育委員会 2005『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2004』

鳥取県教育委員会 2006a『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書—第8・11・13次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集

鳥取県教育委員会 2006b『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2005』

鳥取県教育委員会 2007『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2006』

鳥取県教育委員会 2008『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書—第16・19次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅲ集

鳥取県教育委員会 2011a『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書—第20・21・23次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅳ集

鳥取県教育委員会 2011b『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2010』

鳥取県教育委員会 2012『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2011』

鳥取県教育委員会 2013『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2012』

鳥取県教育委員会 2014『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2013』

鳥取県教育委員会 2015『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2014』

鳥取県教育委員会 2016『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2015』

鳥取県教育委員会 2017a『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書—第25・26・27・29・30・31次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅴ集

鳥取県教育委員会 2017b『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2016』

鳥取県教育委員会 2018『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2017』

鳥取県教育委員会 2019『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2018』

鳥取県立むきばんだ史跡公園 2020『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書—第33・34次発掘調査、墳丘墓群総括報告—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅵ集（本書）

第3節 とっとり弥生の王国調査整備活用委員会調査研究部会（妻木晩田遺跡担当）の記録

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会（以下、委員会）は、鳥取県附属機関条例（平成25年10月11日公布鳥取県条例第53号）で定める鳥取県の附属機関である。当初の委員会は、妻木晩田遺跡発掘調査委員会として、平成11年度に「妻木晩田遺跡を解明するための学術的な発掘調査の方法や計画について、専門的に検討すること」を目的に設置された。

平成28年度には、「妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡の学術的な発掘調査の方法・計画及び整備活用の方法・計画に関する事項」を検討することを目的に、青谷上寺地遺跡発掘調査委員会と統合、再編され、新たに「とっとり弥生の王国調査整備活用委員会」が発足した。委員会を構成する調査研究部会の妻木晩田遺跡担当には、当初の妻木晩田遺跡発掘調査委員会から継続する委員4名と、新たに加わる委員1名の計5名が委嘱され、調査の指導・助言にあたった。委員任期が満了する平成30年7月21日付けで、妻木晩田遺跡発掘調査委員会発足当初から委員長として妻木晩田遺跡の保存と調査に関わってきた渡邊貞幸委員長兼部会座長が退任し、和田晴吾副座長が新たな委員長兼部会座長に就任した。この時、部会委員5名のうち、渡邊座長を含めた2名の委員が交代し、新体制で調査の指導・助言に当たっている。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第1回）

開催日時 平成29年3月9日（木）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 渡邊貞幸（座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）、李 素妍（委員）
米子市教育委員会 下高瑞哉（課長補佐） 大山町教育委員会 西尾秀道（室長）
事務局 信組義彦（所長）、高尾浩司（係長）、長尾かおり、濱本利幸（以上、文化財主事）、
君嶋俊行（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査担当 係長）、山柊雅美（文化財課歴史遺産室 室長）

内 容 妻木地区谷部の内容確認調査について報告を行なった。また、平成29年度の調査計画及び第Ⅲ期以降の調査計画（案）について議論がなされた。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第2回）

開催日時 平成29年9月29日（金）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 和田晴吾（副座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）、李 素妍（委員）
事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司（係長）、家塚英詞（文化財主事）、濱田竜彦（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査整備担当 係長）、山柊雅美（文化財課歴史遺産室 室長）

内 容 第33次重点調査（松尾頭10区北東部）について、現地で調査経過の報告を行なった。マウンド状地形Bについて、墳丘墓の可能性が高まったことから第33次調査では周溝の調査と墳頂部の埋葬施設プランの精査が優先された。尾根から斜面部にかけての遺構の分布状況については平面精査により確認することとなった。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第3回）

開催日時 平成30年3月16日（金）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 渡邊貞幸（座長）、和田晴吾（副座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）、李 素妍（委員）

事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司、濱本利幸（以上、係長）、家塚英詞（文化財主事）、濱田竜彦（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査整備担当 係長）、山柘雅美（文化財課歴史遺産室 室長）

内 容 第33次重点調査（松尾頭10区北東部）について、報告を行った。マウンド状地形Bについて、「松尾頭3号墓」と呼称することが承認された。委員からは、松尾頭3号墓は「方形周溝墓」であり、用語は「周溝」と「陸橋」を使用するように指摘された。平成30年度実施の第34次発掘調査については、引き続き松尾頭10区北東部の松尾頭3号墓と斜面部の遺構分布状況、10区南西部のトレンチ調査を行うこととなったが、松尾頭3号墓の埋葬施設について優先的かつ慎重に調査することを念頭に、次回部会において調査方針を決定することとなった。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第4回）

開催日時 平成30年7月12日（木）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 渡邊貞幸（座長）、和田晴吾（副座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）

事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司（係長）、梅村大輔、森藤徳子（以上、文化財主事）、濱田竜彦（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査整備担当 係長）、大野哲二（同、文化財主事兼係長）、君嶋敏行（文化財課歴史遺産室 係長）

内 容 第34次重点調査（松尾頭10区）について、現地で調査方針が検討された。松尾頭3号墓及び墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形C～Eといった墳丘墓群の調査を優先的に行い、調査中に委員による現地指導を実施することで、調査の進捗に合わせて調査方法を変更する方針となった。7月20日に委員が改選となり、調査中の9月～10月にかけて、新委員を含めて現地指導を受け、松尾頭3号墓の調査方法の変更及びマウンド状地形C～Eの調査状況など承認を得ながら進めた。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第5回）

開催日時 平成31年3月5日（火）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 和田晴吾（座長）、吉田 広（副座長）、佐々木由香（委員）、平郡達哉（委員）

大山町教育委員会 山口 剛（主幹兼文化財調査員）

事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司、濱本利幸（以上、係長）、梅村大輔、森藤徳子（以上、文化財主事）、北浦弘人（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査担当 課

長補佐)、大野哲二(同、文化財主事兼係長)、水村直人(文化財課歴史遺産室文化財主事)

内 容 第34次重点調査(松尾頭10区)について調査成果を報告し、マウンド状地形C・Dについて、それぞれ松尾頭4号墓・同5号墓と呼称することが承認された。委員からは、総括報告書刊行に向けて複数の課題が出され、用語などの整理を行ったうえで編集作業を行うこととなった。また、平成31年度(令和元年度)の調査計画について、妻木新山2区南側斜面部の内容確認調査を行うことを提案し、承認された。

第4節 とっとり弥生の王国調査整備活用委員会・調査体制

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会 妻木晩田遺跡担当

平成28～30年度

座 長 渡邊貞幸(出雲弥生の森博物館 名誉館長)

副座長 和田晴吾(兵庫県立考古博物館 館長)

委 員 吉田 広(愛媛大学ミュージアム 准教授)

佐々木由香(株式会社パレオ・ラボ 総括部長/昭和女子大学 講師/明治大学黒耀石研究センター センター員)

李 素妍(鳥取大学准教授)

(職名は平成30年度時点のもの)

助言機関 文化庁文化財部記念物課、米子市教育委員会、大山町教育委員会

事 務 局 鳥取県立むきばんだ史跡公園

平成30～31年度(令和元年度)

座 長 和田晴吾(兵庫県立考古博物館 館長)

副座長 吉田 広(愛媛大学ミュージアム 准教授)

委 員 松本直子(岡山大学大学院 教授)

平郡達哉(鳥根大学 准教授)

佐々木由香(明治大学黒耀石研究センター 客員研究員/昭和女子大学 講師)

(職名は令和元年度時点のもの)

調査主体

平成28年度

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長 信組 義彦

総務担当

係 長 大塚 義喜

主 事 齊木 敦

調査活用担当

係 長 高尾 浩司(総括) 塚田 浩

文化財主事	長尾 かおり (調査担当)	濱本 利幸 (副査)
	潮 純一	
主 事	齋藤 恵	

平成 29 年度

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長	黒田 真	
次 長 (兼係長)	黒見 恵子 (総務担当)	
総務担当		
主 事	齊木 敦	
調査活用担当		
係 長	高尾 浩司 (総括)	濱本 利幸
文化財主事	家塚 英詞 (調査担当)	
	潮 純一	荊尾 郷
主 事	齋藤 恵	

平成 30 年度

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長	黒田 真	
次 長 (兼係長)	黒見 恵子 (総務担当)	
総務担当		
主 事	齊木 敦	
調査活用担当		
係 長	高尾 浩司 (総括)	濱本 利幸
文化財主事	森藤 徳子 (調査担当)	梅村 大輔 (副査)
	潮 純一	荊尾 郷

平成 31 年度 (令和元年度) (報告書作成)

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長	黒田 真		
調査活用担当			
係 長	高尾 浩司 (総括)	濱本 利幸	本池 優子
文化財主事	森藤 徳子 (調査担当・報告書作成担当)	梅村 大輔 (副査)	
	荊尾 郷	枅家 豊	

第Ⅲ章 発掘調査の方法と経過

第1節 名称と概念の整理

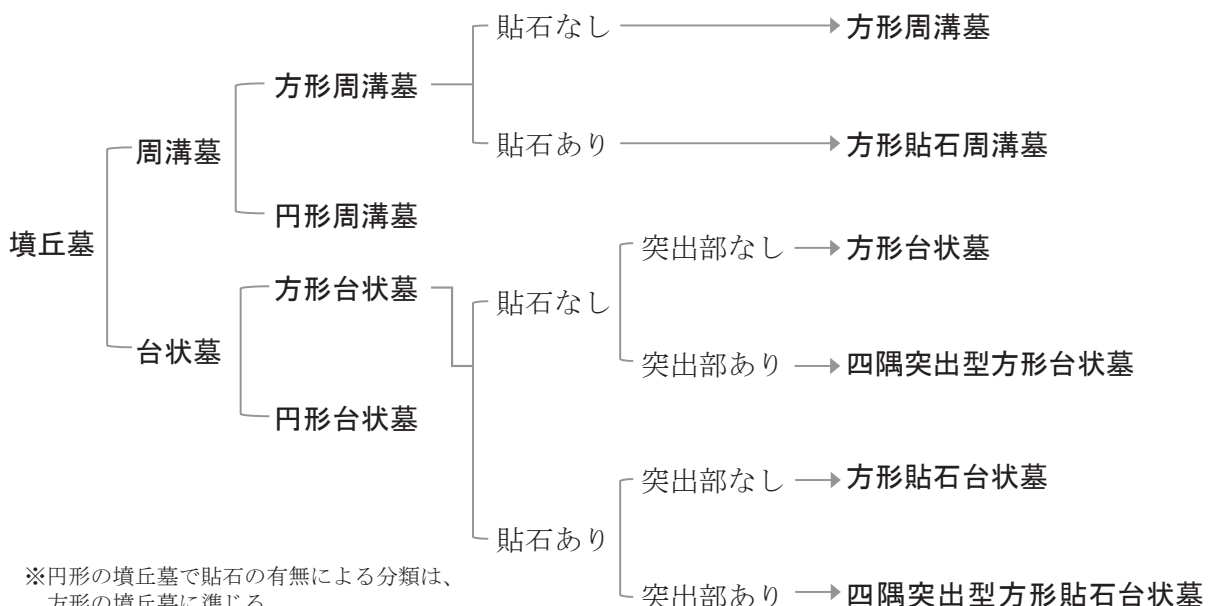
妻木晩田遺跡の墳丘墓群を総括するにあたり、名称と概念を整理する。妻木晩田遺跡において初めて存在が確認された墳丘墓は、1993年9月の大山町教育委員会による仙谷遺跡（現在の仙谷地区）の試掘調査で見つかった四隅突出型墳丘墓（現在の仙谷1号墓）である。その後、本格的な発掘調査が始まり、松尾頭墳丘墓群、洞ノ原墳丘墓群が確認されたが、調査主体が複数存在したことも要因となり、墳丘墓の名称や種別、計測方法など統一がなされないまま、評価・報告され今日に至っている。

妻木晩田遺跡の既報告書で、墳丘墓の名称は「四隅突出型墳丘墓」や「方形貼石墓」、「方形墳丘墓」といった呼称が用いられてきた。今回、総括報告書をまとめるにあたり、墳丘墓の名称と概念を整理し、新たに墳丘墓の計測方法にも基準を設ける。

【墳丘墓の種別と定義】

「墳丘墓」とは、盛土や地山の削り出しによって造られた墳丘を持つ墓である。ここでいう「墳丘墓」は、時期による区別をしていない。「墳丘墓」＝「弥生時代の墳丘を持つ墓」とする研究者や、「古墳」も「墳丘墓」の一種であることから、弥生時代のものを特に「弥生墳丘墓」とする研究者がいる。妻木晩田遺跡の墳丘墓のうち、築造時期が古墳時代前期前葉の仙谷8号墓・9号墓については、時期で区分するならば古墳として「仙谷1号墳・2号墳」とすべきであるが、台状墓の築造方法と同じで弥生時代の墳丘墓の系譜上に位置づけられると評価しており（平成25年度第23回発掘調査委員会で審議、決定）、「墳丘墓」として扱う。

墳丘墓の種別は、和田晴吾氏（和田2003）の概念を基に再分類・整理した。墳丘墓は平面の形状から「方形」原理と「円形」原理に区分される。方形原理の中には四隅が突出した「四隅突出型」が含まれる。墳丘の築造法は、周溝によるものを「周溝墓」に、ないものを「台状墓」とする。周溝墓



第5図 墳丘墓の分類系統図

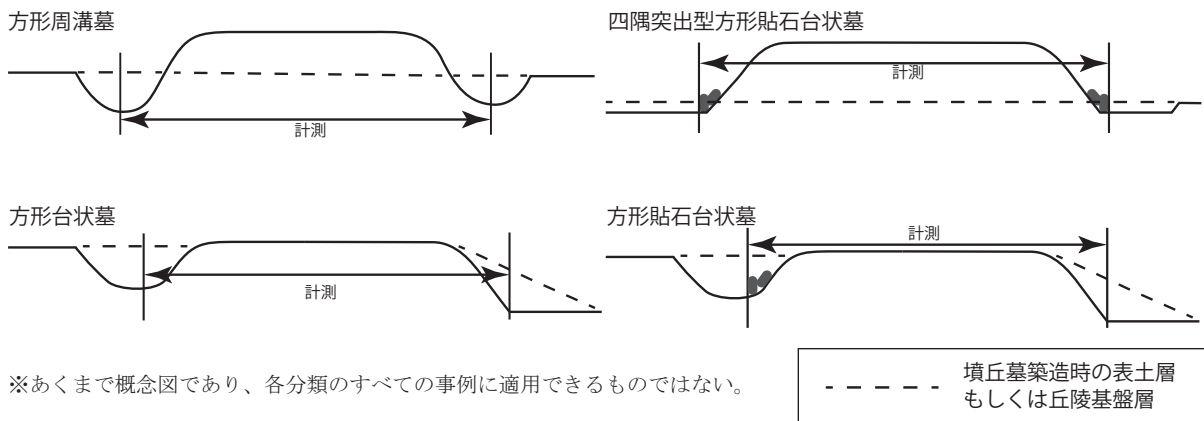
は4辺ないしは3辺に溝を穿つことで区画する。「台状墓」の墳丘は地山の削り出しが卓越し、尾根を切断して区画を明示するものがある。「台状墓」の中には、浅い溝を伴うものが含まれるが、明確な周溝を持たないものは「台状墓」として扱う。さらに付属施設（貼石や突出部）の有無により変容型を細分する。以上から、墳丘墓の種別と呼称については第5図のとおりとして本書では取り扱う。

なお、「四隅突出型方形（貼石）台状墓」については、「四隅突出型墳丘墓」という呼称が一般的であるため、各墳丘墓の分類を述べる場合には前者を、総括して記述する場合には後者を用いることとする。これらの定義に基づき、妻木晩田遺跡の各墳丘墓の分類を当てはめたものを第3表に示した。

続いて、墳丘墓を比較する際に重視されるのが、墳丘の規模である。規模の計測方法についても、これまでの妻木晩田遺跡の研究においては統一的な基準が設けられていなかったため、第6図のとおり先に分類した種別ごとに基準を設けて計測・比較することとする。なお、計測基準の詳細については、墳丘規模計測表中に記載している（第Ⅵ章第17表）。

第3表 妻木晩田遺跡における墳丘墓の分類

墳丘墓	周溝墓	方形周溝墓	貼石なし	方形周溝墓	…仙谷5号墓、松尾頭1～5号墓	(計6基)	
			貼石あり	方形貼石周溝墓	…なし		
		円形周溝墓	貼石なし	円形周溝墓	…なし		
			貼石あり	円形貼石周溝墓	…なし		
	台状墓	方形台状墓	貼石なし	突出部なし	方形台状墓	…仙谷8号墓	(計4基)
				突出部あり	四隅突出型方形台状墓	…なし	
			貼石あり	突出部なし	方形貼石台状墓	…洞ノ原2号墓ほか5基、仙谷3号墓	(計7基)
				突出部あり	四隅突出型方形貼石台状墓	…洞ノ原1号墓ほか10基、仙谷1・2号墓	(計13基)
		円形台状墓	貼石なし	円形台状墓	…仙谷9号墓	(計1基)	
			貼石あり	円形貼石台状墓	…なし		



第6図 妻木晩田遺跡における墳丘墓墳丘規模計測概念図

第2節 松尾頭墳丘墓群の調査概要

松尾頭墳丘墓群のある松尾頭地区は、通称「晩田山丘陵」の南側に位置する（第7図）。北側は弥生時代後期後葉の集落が復元整備された妻木山地区、南側は妻木晩田遺跡で最も高所に立地する松尾城地区があり、両地区に挟まれて日本海への眺望は他の地区と比較してよくないが、東側の大山町の平野が望める。松尾頭地区は狭小な谷を挟んで大小2つの丘陵に分かれており、北側の小丘陵は松尾頭地区「北側丘陵」、南側の大丘陵は同「南側丘陵」と呼ぶ。このうち、北側丘陵には第1次調査において1区が、南側丘陵には2区・3区が設定され、さらに第16次・19次調査で4～6区、第20次・21次・23次調査で7～9区が新たに設定、調査された。なお、南側丘陵は現在中央に広域農道が通っているが、分断された東西の丘陵は本来は一連のものであり、西側の小真石清水遺跡（小真石清水地区）も松尾頭地区の一部として評価している。松尾頭地区では、妻木晩田遺跡の中で唯一、居住が開始された時期にあたる弥生時代中期後葉の竪穴住居群が存在し、集落終焉期の古墳時代前期前葉まで断絶することなく集落が営まれる。妻木晩田遺跡最盛期の後期後葉には祭殿跡とみられる大型の総柱建物跡が検出されており、妻木山地区と並んで集落の中心的な区域であったことが判明している。

松尾頭地区の中で松尾頭墳丘墓群が立地する丘陵は北側丘陵である。第28次内容確認調査において1区に加えて新たに10区が設定され、遺構の存在が確認された。現在、広域農道によって東側の1区と西側の10区は分断されているが、本来は一つの丘陵である。

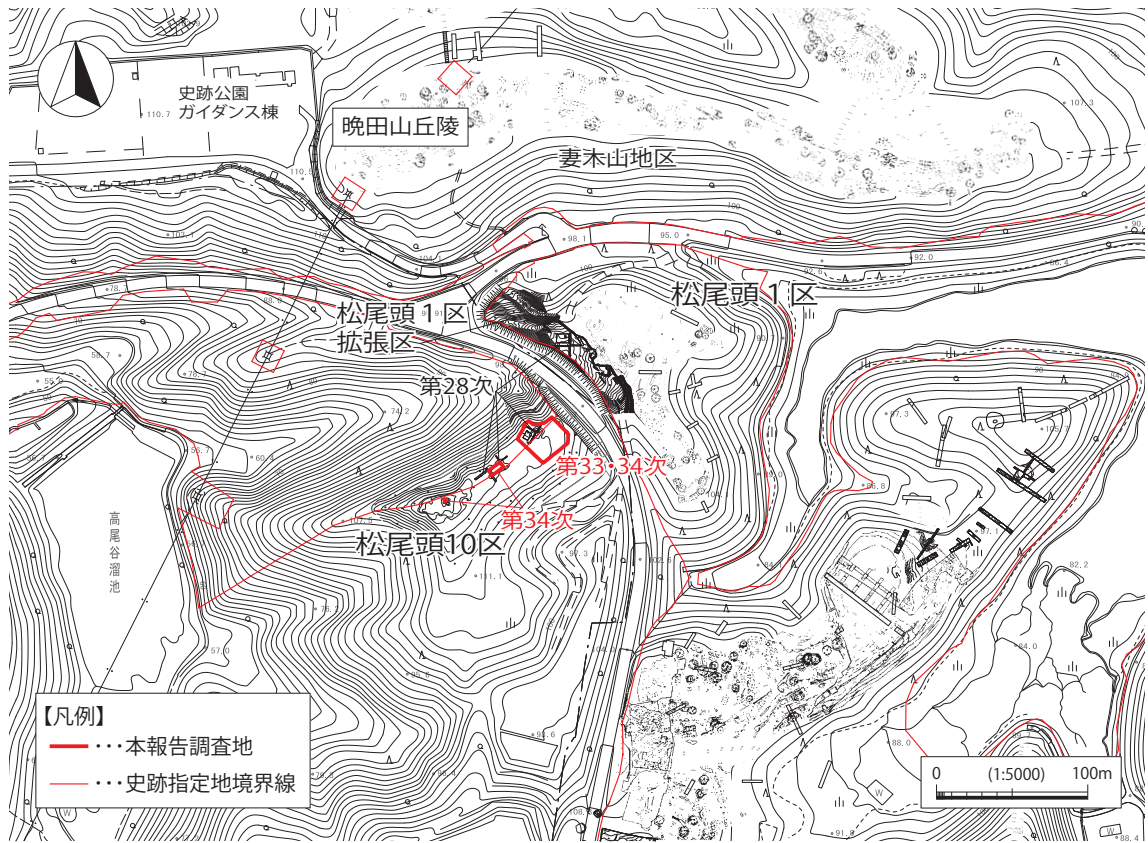
第1次調査で調査された1区では、弥生時代終末期後半に築造された2基の墳丘墓が確認された。1区西側の高所に立地し、2基のうち西側が松尾頭1号墓、東側が松尾頭2号墓である。いずれも方形周溝墓であり、溝の角が陸橋状に途切れた構造をしている。溝は西側、北側、南側の三方で確認されているが、本来は斜面下方にあたる東側にも周溝が存在した可能性がある。埋葬施設は、1号墓で2基（墳丘中央1基、周溝内1基）、2号墓で3基（墳丘中央1基、墳丘内2基）が検出された。各墳丘墓の築造契機となった第1埋葬施設（中心埋葬）は、築造時の旧表土層から掘り込まれており、埋葬施設構築後に墳丘全体を盛土で覆っていた。

松尾頭10区が位置する南西尾根部には、今回の重点調査で新たに発見された3号墓・4号墓・5号墓が立地する。いずれも弥生時代終末期前半の方形周溝墓であり、妻木晩田遺跡における墳丘墓群の変遷の中で詳細が分かっていた時期の墳丘墓築造方法等を明らかにすることができた。

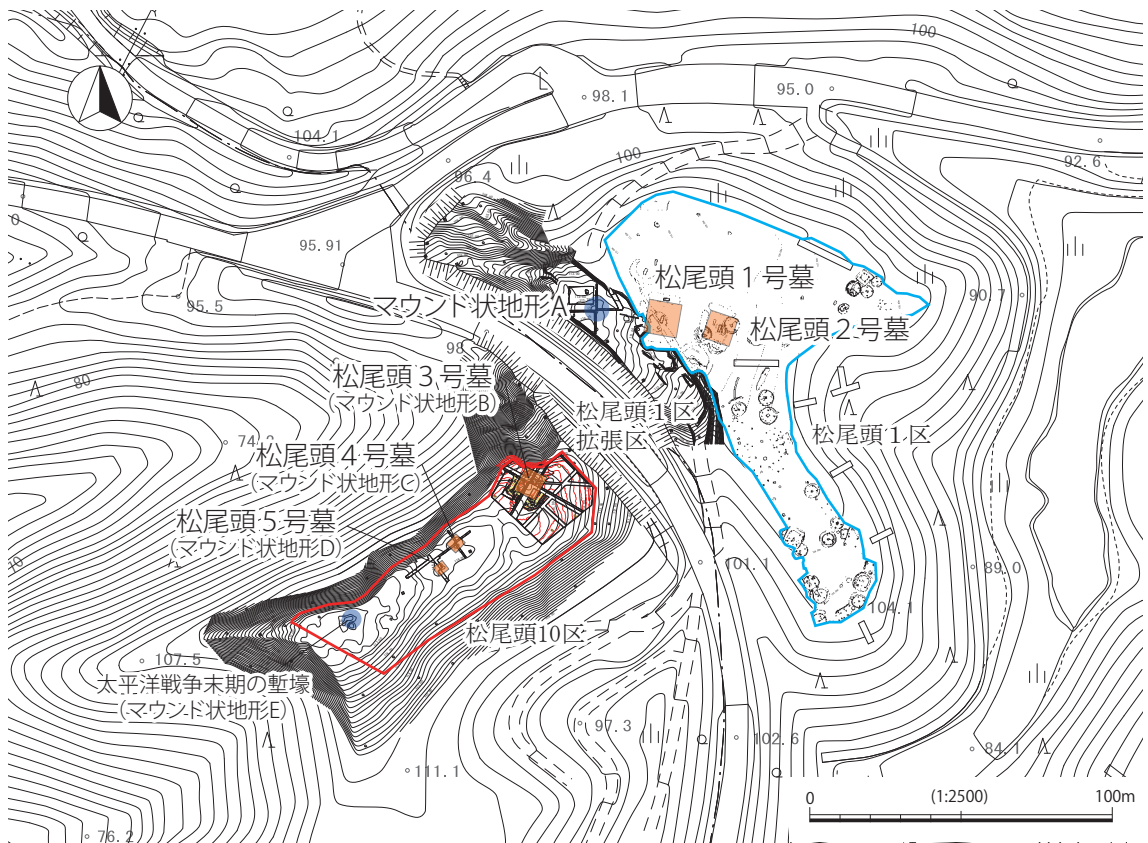
第3節 発掘調査区の設定

第Ⅱ章第2節で述べたとおり、長期計画第Ⅱ期は「墳墓域の実態解明」を調査課題としており、短期計画第2期では、2ヵ年の計画で松尾頭墳丘墓群を対象地とした発掘調査を実施した。調査目的①集落衰退期である弥生時代終末期の首長墓（松尾頭墳丘墓群）の実態解明と、②集落における居住域から墓域への変遷過程の解明を達成するため、松尾頭10区を東側の北東部と西側の南西部に分け、北東部は丘陵頂部の平坦面から緩斜面部にかけての600㎡を面的に調査し、南西部は墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形を中心にトレンチ調査を行った。

平成29年度（第33次調査）は、北東部のみ調査を実施した。3号墓（マウンド状地形B）は、平成25年度（第28次調査）に設定したトレンチ7～10（Tr.7～10）を利用して十字軸を決定し、幅



第7図 松尾頭墳丘墓群調査区位置図



第8図 松尾頭墳丘墓群全体図

1 mの土層観察畔を残してサブトレンチを設定しながら調査を行った。北東部全体の面的な調査では、3号墓を含み斜面部との境となる傾斜変換線まで範囲を広げ、東西最長28 m、南北最長26 m、面積600㎡の調査区を設定した。調査区は全て墳丘基盤層まで掘削をするのではなく、3号墓の東側にベルトAを設定し、ベルトAより西側は墳丘墓検出面以下は掘削せず、東側は墳丘墓群築造以前の遺物包含層を除去して下層の遺構を確認することとした。丘陵全体の層序や、墳丘墓群と墳丘墓群築造以前の遺構との関係性を確認するために、3号墓の調査軸を基準として、北方向(A-A'')、北東方向(B-B')、東西方向(C-C'')の観察畔を設定した。既存の松尾頭地区の調査で設定された調査グリット(座標10 mごとの方眼)を援用し、遺物の取り上げはグリットを記録しながら行った。

平成30年度(第34次調査)は、10区全体の調査を行った。北東部の調査区は、平成29年度の設定を変更せずに行った。南西部は、4号墓(マウンド状地形C)及び5号墓(マウンド状地形D)と太平洋戦争末期の塹壕(マウンド状地形E)の調査のため、トレンチ1(T1)及びトレンチ2(T2)を設定した。トレンチ1は、マウンド状地形Eのマウンド部分の北西側に設定した。マウンドの堆積を確認するため、マウンド中央から西側に長さ(東西)1.5 m、幅(南北)0.3 m、面積0.45㎡のトレンチを設定し、基盤層まで掘削を行った。4号墓・5号墓については、平成25年度の調査時に設定したトレンチ11～16(Tr.11～16)のうち、両墳丘墓を面的に調査可能なTr.13～15に囲まれた範囲をトレンチ2(T2)として設定した。トレンチの規模は、長さ(南北)9.4 m、幅(東西)4.0 m、面積は37.6㎡である。表土を掘削した段階で周溝の範囲が概ね把握できたため、4号墓南側周溝及び5号墓北側周溝に跨がるように土層観察畔を残し、畔東側にサブトレンチを設定して周溝の形状や切り合い関係を確認した。なお、当初の計画では、南東部の緩斜面部についてもトレンチ調査を行う予定であったが、墳丘墓群の調査を優先したため今回は見送った。ただし、未発掘調査の範囲にも竪穴住居跡の可能性が高い窪地を確認しており、遺跡の範囲は10区の丘陵全体に広がるとみられる。

第4節 発掘調査の記録

遺物・遺構の記録

墳丘墓群と集落との関係を明らかにするため、基盤層の確認、遺構の分布、遺物の出土位置などに留意して記録をとった。また、墳丘墓の調査では、構築手順並びに築造時期を明らかにできるように、墳丘墓及び周辺の地形、墳丘盛土の確認、遺物の出土状況に特に留意して記録をとった。

遺物はトータルステーションを用いて出土位置を国土座標系で記録することとし、残りの良い遺物がまとまって出土した地点については、出土状況図(微細図)を作成した。なお、出土遺物の中には、調査日・グリット・トレンチごとに一括して取り上げたものがある。時期が特定できる特徴的な遺物や、一定の範囲でまとまりをもって出土したものについては、出土状況を写真でも記録した。

遺構及びトレンチ調査の記録は、主にトータルステーションを用いて記録をとり、平面図は電子平板や手測り、断面図は写真測量や手測りによって記録した。各年度の調査後にデジタルトレースを行い、関連する図面を編集して最終的な図面を作成した。第34次調査では、第33次調査時のセクションポイントや断面図を利用し、統合・調整を行ったうえで最終的な図面を作成した。

写真による記録

中型（6×7）一眼レフカメラ、フルサイズのデジタルカメラ（センサーサイズ約36×24mmフルサイズ、有効画素数2230万画素以上）を基本とし、フルサイズのデジタルカメラによる撮影は、RAW・JPEG形式で画像データを取得し、保存した。なお、中型一眼レフカメラには、リバーサルフィルム（富士フィルム社プロビア100F）、白黒フィルム（富士フィルム社ネオパン100ACROS）を使用した。ただし、今後はフィルムカメラの需要低下によるフィルム生産の中止と入手困難が予想されるため、デジタルカメラによる記録を重視し、フィルムカメラでの撮影は重要な遺構や全景写真のみで行った。また、調査のメモ写真の撮影にも、フルサイズのデジタル一眼レフカメラを用いた。

第5節 発掘調査の経過

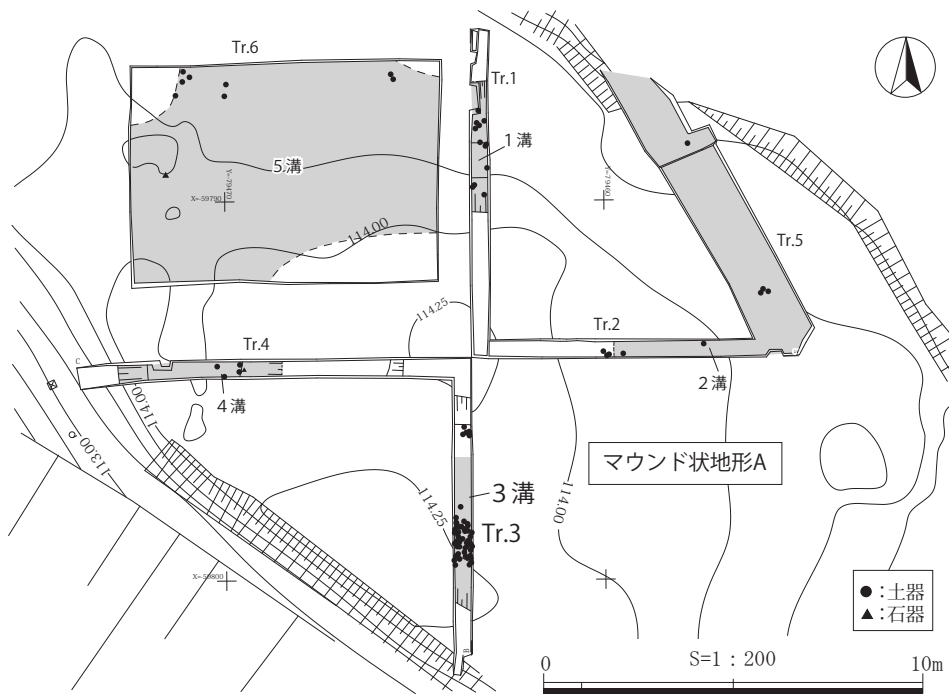
1. 第28次調査－平成25年度の調査、遺構発見の経緯－

平成25年度調査は、松尾頭1区拡張区及び10区の内容確認調査が実施された。これは発掘調査計画第Ⅱ期に該当し、松尾頭墳丘墓群の墓域の範囲を明らかにすることを目的として、第1次調査において知られていた松尾頭1号墓・2号墓の立地する松尾頭1区西側の未調査地が調査対象となった。松尾頭1区の立地する北側丘陵は、現在、広域農道によって分断されているが、元々は東西に延びる一つの丘陵であったことが地形から確認できる。調査区は、広域農道を境に、東側の1区に隣接する未調査地を「1区拡張区」、広域農道よりも西側の丘陵を「10区」として設定した。

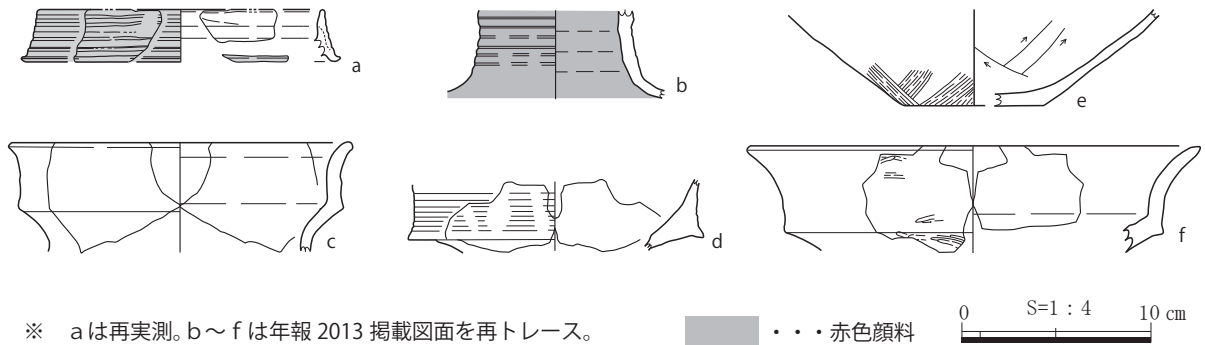
まず、踏査と地形測量を実施し、マウンド状の地形の高まりと窪地を複数確認した。マウンド状地形は、1区拡張区において1か所、10区において4か所確認し、それぞれ、マウンド状地形A、マウンド状地形B～Eと名前を付し、そのうちマウンドの範囲が概ね史跡指定地内であるマウンド状地形A～Dが内容確認調査の対象となった。この調査では、マウンド状の高まりが墳丘墓か否か、さらに、墳丘墓だった場合、その規模と形状を確認するため、高まりを四分割し、十字にトレンチを設定して調査した。掘削深度は、墳丘及び溝などの遺構の検出面までとしたが、溝状遺構については断面形状及び時期を確認するため、部分的に底面まで調査を行っている。

調査の結果、マウンド状地形A～Dについては、溝を伴う墳丘墓の可能性が高まり、松尾頭墳丘墓群の墓域が10区中央まで広がる可能性が生じた。マウンド状地形Aは、全てのトレンチで周溝の可能性のある遺構を検出し、このうちTr. 1・3・4の遺構は幅4～4.6m、深さ0.35～0.5m、断面U字形の溝（1溝・3溝・4溝）であることが判明した。溝の埋没時期は、出土遺物から弥生時代後期後葉～終末期と考えられる。よって、マウンド状地形Aは、松尾頭1号墓・2号墓に先行する墳丘墓の可能性が高まった。周溝を含む規模は南北約13mと推定される。また、Tr. 6北西隅において新たにマウンド状の高まりを検出した。この高まりの周辺では、複数の遺構が重複している可能性があり、マウンド状地形Aの周辺の遺構の分布状況については不明である。

今回、マウンド状地形Aの出土遺物を改めて確認した結果、3溝から出土した1点について、吉備南部からの搬入品であることが確認できた（第10図－a）。内傾する口縁部外面にはヘラ描きによる多条沈線が巡り、口縁下端をつまみ出す特徴的な形状をしており、外器面には赤色顔料を塗布している。さらに、角閃石の砂粒を含む褐色系の胎土をしており、これらの特徴を持つ土器は、弥生時代後期後葉から終末期の吉備南部において制作された長頸壺と考えられ、復元した口径からは小型品と



第9図 マウンド状地形 A 調査状況 (第28次調査、年報2013再掲)



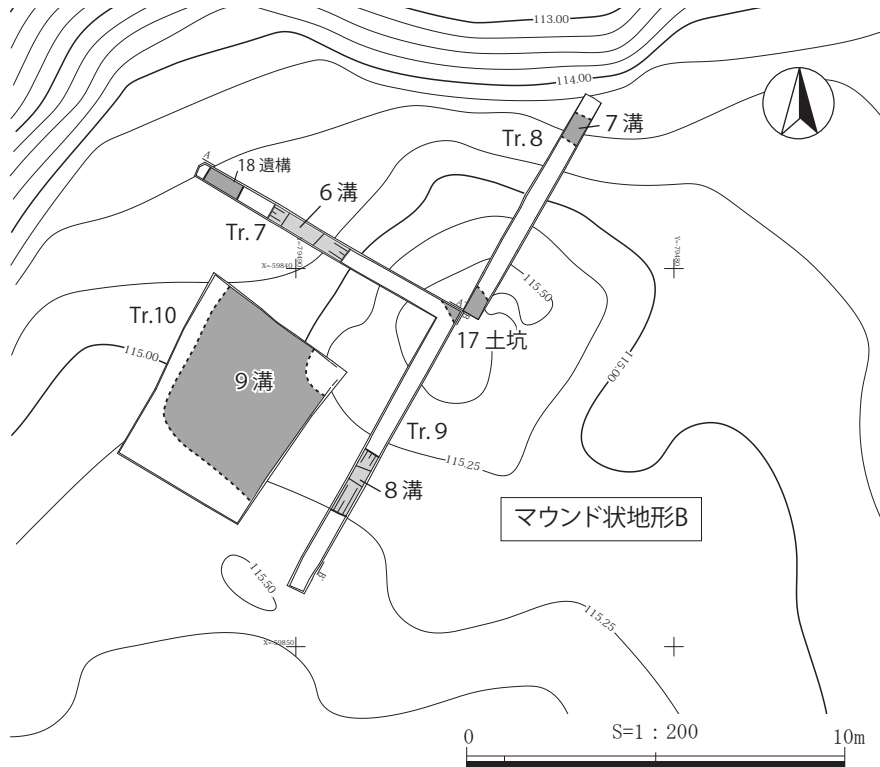
※ aは再実測。b～fは年報2013掲載図面を再トレース。

赤色顔料

第10図 マウンド状地形 A 出土遺物実測図

遺物観察表

No.	取上番号	トレンチ	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)	調整/施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高 口径 底径					
a	(28MG) 122-1	28MG Tr.3	3溝	②層	壺	口縁部	△2.8 ※15.0 -	外面: ナデ/6条の平行沈線文 内面: ナデ	密	良好	外面: にぶい赤褐 内面: にぶい赤褐	外面に赤色顔料、搬入品
b	(28MG) 1	28MG Tr.3	3溝	②層	壺	頸部	△4.7 ※8.0 -	外側: ナデ/ 6条の浅い平行沈線文 内面: 頸部ナデ、頸部下ぐり	密	良好	外面: 明赤褐 内面: 橙	
c	(28MG) 63	28MG Tr.3	3溝	②層	壺か甕	口縁部	△5.8 ※18.0 -	外面: ナデ 内面: ナデ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
d	(28MG) 123	28MG Tr.3	3溝	②層	器台	口縁部	△3.8 ※15.0 -	外面: ナデ/8条の平行沈線文 内面: ナデ?	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: にぶい黄橙	
e	(28MG) 130, 131	28MG Tr.3	3溝	②層	壺	底部	△5.1 - ※7.4	外面: ハケ後ナデ 内面: ケズリ	密	良好	外面: 橙~灰黄褐 内面: 灰黄褐	
f	(28MG) 144	28MG Tr.3	-	14層	器台	口縁部	△5.6 ※24.0 -	外面: ミガキ 内面: ナデ?	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	



第 11 図 マウンド状地形 B (松尾頭 3号墓) 内容確認調査状況 (第 28 次調査)

みられる^{註1}。このほかにも、この時期の山陰の土器にはみられない形状と文様を持つ壺（第 10 図 - b）が供伴している点にも注目したい。マウンド状地形 A 出土遺物の評価については松尾頭 3号墓とも関連するため、第 VI 章で詳述する。

マウンド状地形 B は Tr.7 ～ 10 において溝状遺構を確認し、そのうち Tr.7・9 の遺構を掘り下げた結果、断面 U 字形の溝であることがわかった（6 溝・8 溝）。溝の埋没時期は、出土遺物から弥生時代終末期とされ、9 溝（Tr.10）の平面形から、マウンド状地形 B は方形を呈する墳丘墓であり、墳丘中央の 17 土坑付近から土器の碎片が多数出土したことから、埋葬施設の存在も想定された。

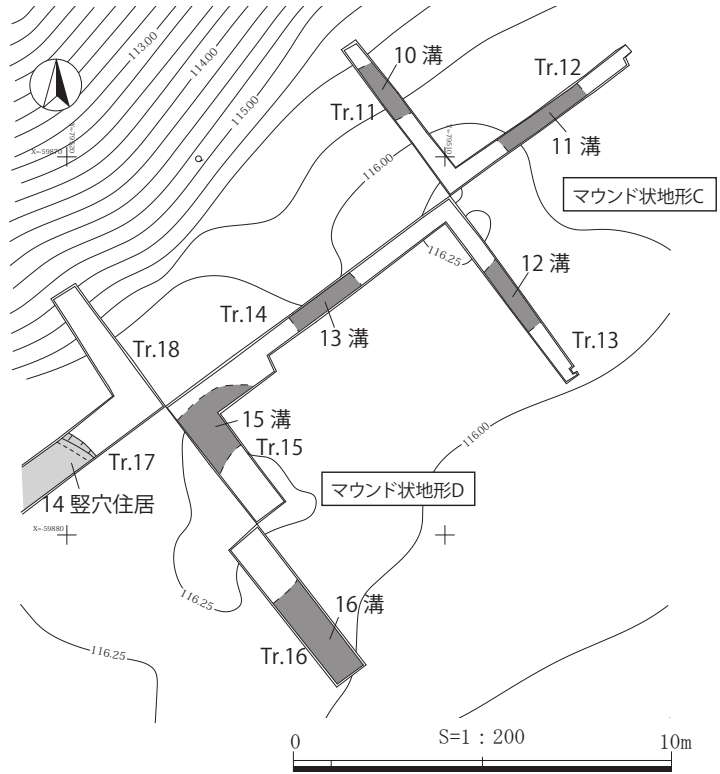
マウンド状地形 C・D についても、Tr.11 ～ 16 の調査で溝状遺構を確認した。この時、溝内の掘削調査は行われていない。また、Tr.18 では、窪地として認識していた地点において弥生時代後期中葉の竪穴住居跡（14 竪穴住居、焼失住居）が確認され、集落域も 10 区まで広がることが判明した。このほかに点在する窪地状の地形も埋没した竪穴住居である可能性が高まった。

これらの調査成果をうけて、発掘調査計画第 II 期短期計画後半に松尾頭 10 区の重点確認調査が 2 カ年の計画で追加され、平成 25 年 11 月 27 日の第 23 回発掘調査委員会において承認された。

2. 第33次調査－平成29年度の調査－

平成 29 年 3 月 9 日に開催した第 1 回調査研究部会において、第 33 次調査では松尾頭 10 区を調査対象とし、松尾頭墳丘墓群の実態解明を目的として重点調査を行うことが承認された。調査箇所は 10 区北東部のマウンド状地形 B を中心とした範囲及び南西部の緩斜面地におけるトレンチ調査である。調査地には民有地を含むため、土地所有者に承諾を得て借地した上で調査を開始した。平成 29 年 8 月 1 日から北東部の伐採を行い、株式会社安西工業に発掘調査の支援（測量及び労務管理）を委託し、8 月 23 日に空撮を行い、現地作業に着手した。10 区全体の調査前地形測量図は第 28 次調

査の図面を利用したが、マウンド状地形 B の範囲については新たに 10cmコンターの調査前地形図を作成した。8月29日からマウンド状地形 B の表土掘削を開始し、墳丘外へと調査範囲を広げていった。表土下で墳丘盛土及び周溝を検出し、墳丘外では表土下に墳丘墓築造以前の堆積層があり、この層を掘削して周溝が造られていることを確認した。9月29日に第2回調査研究部会を開催し、調査経過を報告した。10月20日には周溝の検出写真を撮影し、墳丘東西軸より南側の周溝埋土掘削を開始した。11月9日には委員による現地指導を受けた。墳丘南側の周溝掘完了後、11月17日に2回目の空撮を実施し、調査区南東側の遺構検出を行い、土嚢とシートで保護して現地作業を12月7日に終了した。なお、南西部のトレンチ調査は次年度に見送っている。



第12図 マウンド状地形 C・D (松尾頭4号墓・5号墓) 内容確認調査状況 (第28次調査再掲)

3. 第34次調査－平成30年度の調査－

平成30年3月16日に開催した第3回調査研究部会において、マウンド状地形 B を弥生時代終末期前半の墳丘墓と認定し、「松尾頭3号墓」と呼称することが決定した。第34次調査では引き続き松尾頭10区北東部の調査及び南西部のトレンチ調査を行うことが承認された。

4月26日から南西部の伐採を行い、5月21日から北東部調査区以外の平坦面について10cmコンターの調査前地形測量を行った。国際文化財株式会社に発掘調査支援(測量・労務管理)を委託して6月18日から現地調査を開始、19日に空撮を行い、3号墓北半分の周溝から着手した。7月12日に第4回調査研究部会を開催して調査経過を報告し、18日には文化庁調査官による現地指導を受けた。



第13図 第33次調査状況



第14図 第34次調査状況



第15図 第34次調査T2調査状況



第16図 第34次調査現地説明会

8月2日には周溝完掘写真を撮影し、墳丘部分のトレンチ調査に着手した。墳丘のトレンチ調査は慎重を期すため、部会及び文化庁と調査方針を協議しながら進めた。同時に、Aベルトから東側の表土掘削、墳丘墓築造以前の堆積層の掘削及び遺構検出を進めた。マウンド状地形Eについては、周辺の清掃を行って現地形を把握し、マウンドの一部にトレンチ(T1)を設定して調査した。マウンド状地形C・Dについては、第28次調査のトレンチを利用して調査区を設定し、9月12日から調査を開始した。3号墓墳頂部の調査において埋葬施設らしき落ち込みを確認したことから、13日～26日の間に委員による現地指導を受け、3号墓墳頂部南東側に新たにトレンチを設けて面的な掘り下げを行った結果、埋葬施設3基を検出した。なお、遺構の保存を優先したため、今回は埋葬施設の基数と規模を確認するまでに留め、棺内の調査は行っていない。また、南西部の緩斜面地におけるトレンチ調査は、墳丘墓群の調査を優先したため、未着手のまま終わることとなった。

10月21日に現地説明会を開催したところ、68名の参加者があった。24日に調査後の空撮、25日に全景写真撮影を行い、調査区壁面及び3号墓のトレンチを土嚢で保護し、調査区全体をシートで覆って11月13日に現地調査を完了した。なお、廃土による調査区全体の埋め戻しは、令和元年度に実施している。平成31年3月5日に開催した第5回調査研究部会において、マウンド状地形C・Dは松尾頭3号墓と同構造・同時期の墳丘墓と認められたため、それぞれ「松尾頭4号墓」・「松尾頭5号墓」と呼称することが決定し、妻木晩田遺跡の墳丘墓は計39基となった。

註1 岡山県教育庁文化財保護課 河合忍氏の助言による。

参考文献

和田晴吾2003「弥生墳丘墓の再検討」『古代日韓交流の考古学的研究－墓制の比較研究－』、3～29頁

第Ⅳ章 松尾頭墳丘墓群の発掘調査

第1節 調査前の状況

松尾頭10区は平成25年度（第28次調査）において設定された調査区であり、民有地を含む範囲で遺構の存在を確認した。第Ⅲ章で記述したとおり、1次調査において検出された松尾頭1区の松尾頭1号墓・2号墓（弥生時代終末期後半築造）と松尾頭10区の墳丘墓は一つの丘陵上に位置する（第Ⅲ章第8図）。丘陵最高所は、マウンド状地形Eのある丘陵南西端であり（標高約118m）、南西方向に伸びる痩せ尾根状を呈す。墳丘墓群の最東端は2号墓であり、2号墓の西側周溝から5m北西の位置に1号墓、墳丘墓の可能性が高いマウンド状地形Aが1号墓の西側周溝から西に7mの位置にある。広域農道を挟み、マウンド状地形Aから南西75mの位置に3号墓があり、さらに3号墓から20m西に4号墓、5号墓と並んでいる。今回確認できた墓域全体の範囲は、東西135m、南北50mである。墳丘墓のうち最高所に立地するものは、標高116.3mの5号墓であり、最も低い位置に立地するものは、標高110mの2号墓である。

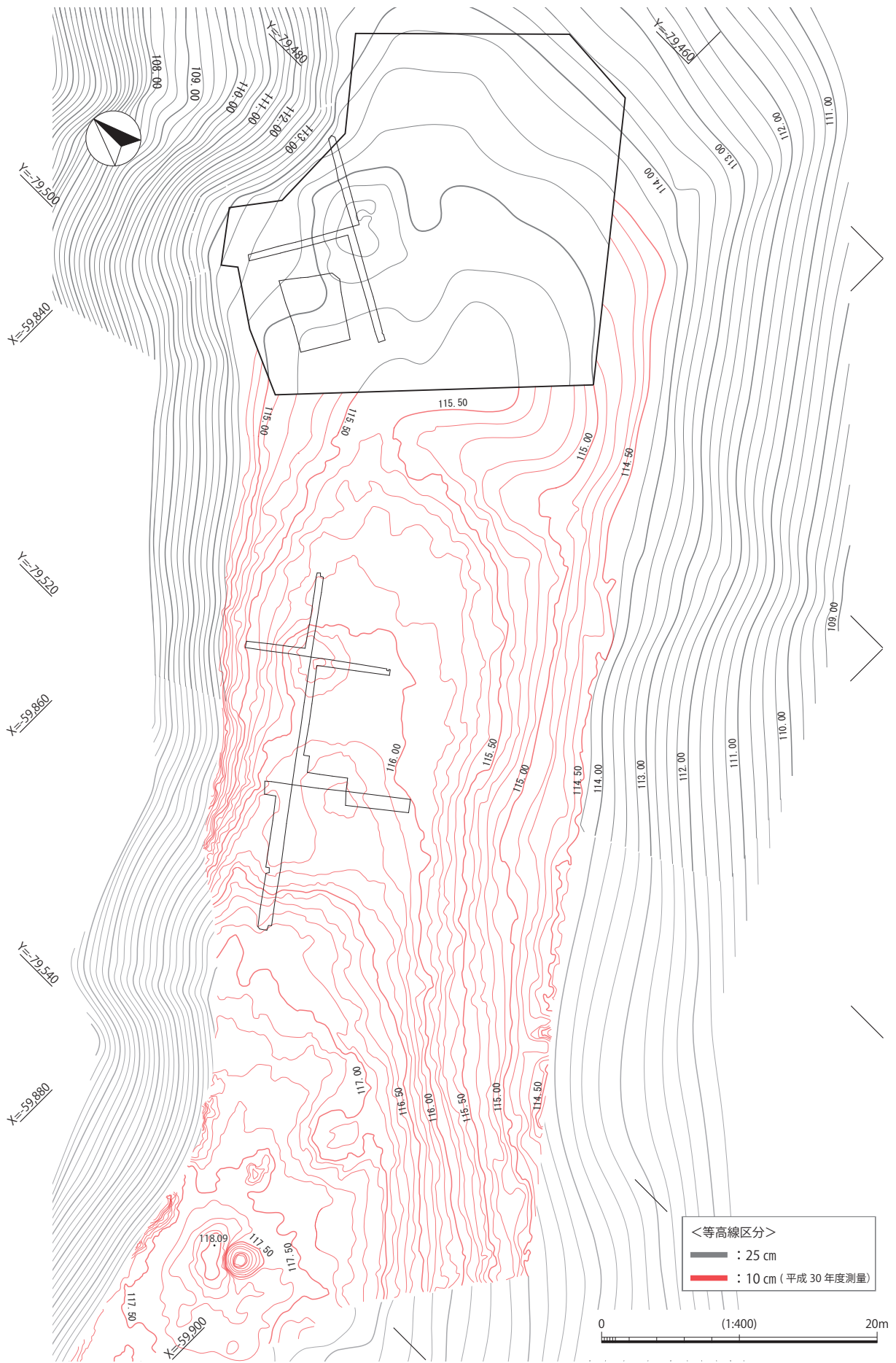
調査前の地目は山林で、民有地を含む丘陵頂部に遺構が分布する。調査地内には腐植したマツの切株が点在し、雑木が生長している。マツの切株については、第2次調査以後に、マツクイムシ被害で枯れたアカマツの伐採が行われており、その際の切株が残されたままとっている。

第Ⅲ章で詳述したとおり、第28次調査の際、地形測量と踏査が行われ、松尾頭10区の範囲では、マウンド状地形B～Eと複数の窪地が確認された（第17図）。特に、マウンド状地形Bについては、雑木の中にあってもマウンドの高まりが認識でき、当初から古墳か墳丘墓の可能性が高いと考えられた。第28次調査の成果から、点在する窪地も墳丘墓群築造以前の竪穴住居跡が埋没した状況のまま残されていると推察でき、丘陵頂部の平坦面から緩斜面にかけては大きな改変なく遺構が良好に残存していることが予想された。丘陵の斜面部については、10区の東側は広域農道の切通しにより崖面が露出し、南東側も林道の造成によって削平を受けている。丘陵北側や南西側についても一部土砂崩落などによって発生した崖面が確認できる。崖面については部分的な崩落や改変を受けているものの、10区丘陵部全体としては、弥生時代以降の地形が大きく損なわれることなく残存している。

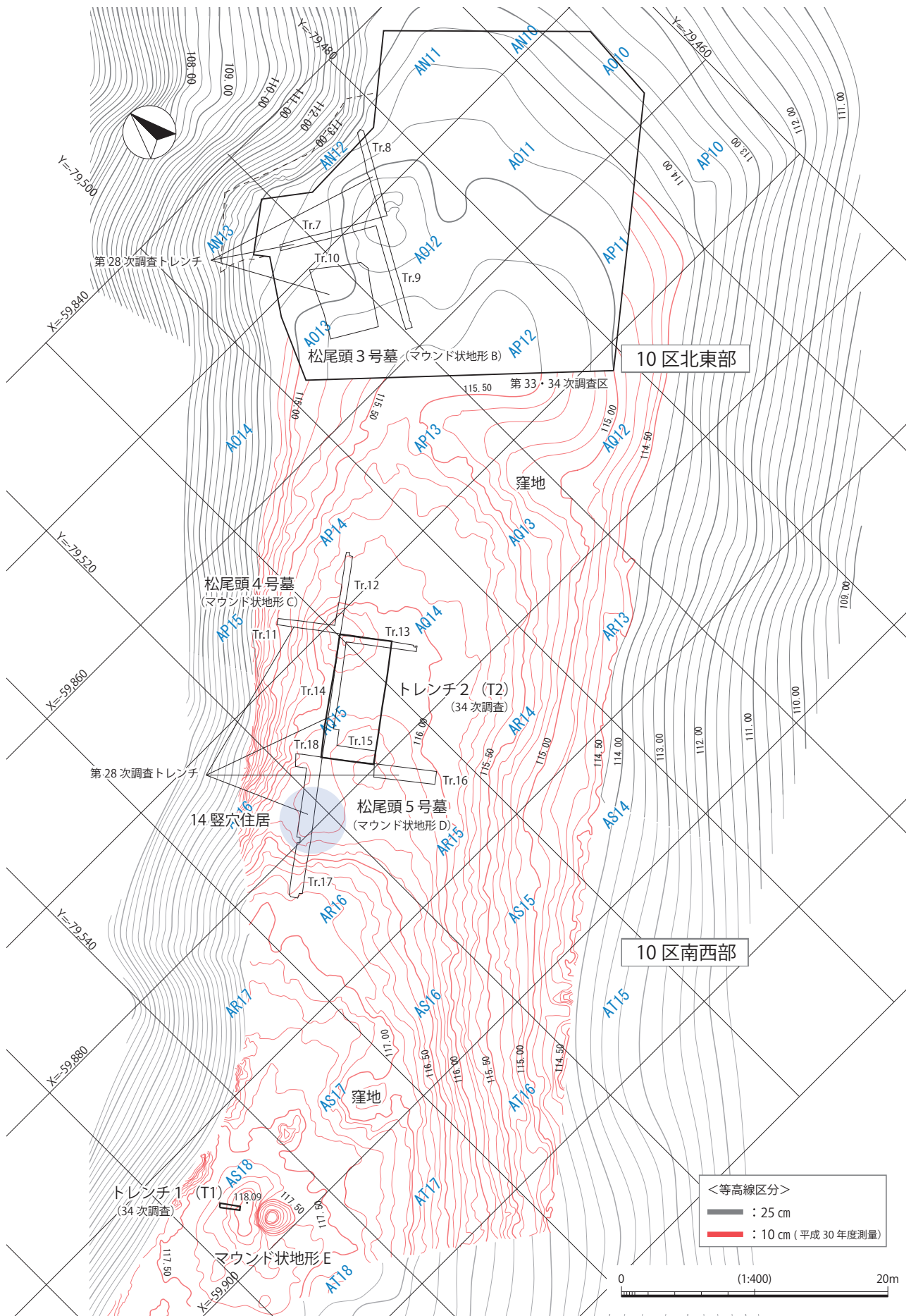
第2節 基本層序

今回の調査区は、10区北東部に丘陵平坦面を面的に調査する調査区（以降、北東部調査区）と、10区南西部にマウンド状地形C～Eを調査するためのトレンチ（以降、トレンチ1・2）を設定した。北東部調査区とトレンチ2は、第28次調査時のトレンチや設定を利用して設定している（第18図）。このうち、墳丘墓と丘陵部の基本層序を把握するために、北東部調査区において、3つの断面を設定した。Aライン、Bライン、Cラインそれぞれに基盤層までの確認用サブトレンチを設定し、断面層序を記録した（第19・20図）。また、トレンチ1・2については、トレンチ断面及び墳丘墓の先後関係を確認するサブトレンチにおいて基盤層までの層序を確認している（第35・44図）。

10区の丘陵平坦面から緩斜面部にかけての層序は、大きく3つに分けられる。地表面から順に、表土を含む墳丘墓群築造以後の堆積（概ね弥生時代終末期前半以降のもの、以降、表土・遺物包含層）、



第17図 松尾頭10区第33・34次調査前地形測量図



第18図 第28・33・34次調査範囲図

墳丘墓群築造以前の堆積（概ね弥生時代後期以前のもの、以降、基盤層上の堆積）、丘陵を形作る堆積層（以降、基盤層）に分けられ、さらに層の性格によって6つに細分できる。墳丘墓群の遺構検出面は、遺物包含層1下面であり、墳丘墓群築造以前の遺構の検出面は、遺物包含層2の下面である。

全ての断面について、これらの基本層序を確認することができた。遺構は、終末期前半の墳丘墓群は、墳丘墓群築造以前の堆積層を基盤層まで掘削して築かれ、盛土は墳丘墓群築造以前の堆積層上に盛られている。弥生時代後期以前の遺構については、基本的には墳丘墓群築造以前の堆積層の下面からの掘込みとみられるが、後述する3407遺構で確認できたように、遺構埋土上面が土壌化（黒色化）する現象があり、表土下面での検出が困難を極めたため検出はできなかった。なお、今回の調査区内では、近代遺構であるマウンド状地形Eを除いて、古墳時代以降の明確な遺構は確認できなかった。

表土（墳丘墓群築造以後の堆積）（第19図1、第20図1）

にぶい黄褐色～暗褐色の極細砂層で、しまりが弱い。丘陵全体に堆積する。須恵器・土器（弥生土器）・石器が出土。

第1層（第19図2・3、第20図2・3）

褐色のシルト層で、しまりが弱い。後世に墳丘墓が削平を受けたことで生じた墳丘盛土を母材とする二次堆積土である。3号墓北側周溝及び北東部陸橋付近で顕著に認められる。

第2層（第20図4～8）

灰黄褐色～黒褐色のシルト～極細砂層で、しまりが弱い。丘陵全体に堆積する。墳丘墓群築造以後の堆積で、土壌化が進み黒色を呈す。須恵器・土器（弥生土器）・石器が出土。

第3層（第19図4・5、第20図9～13）

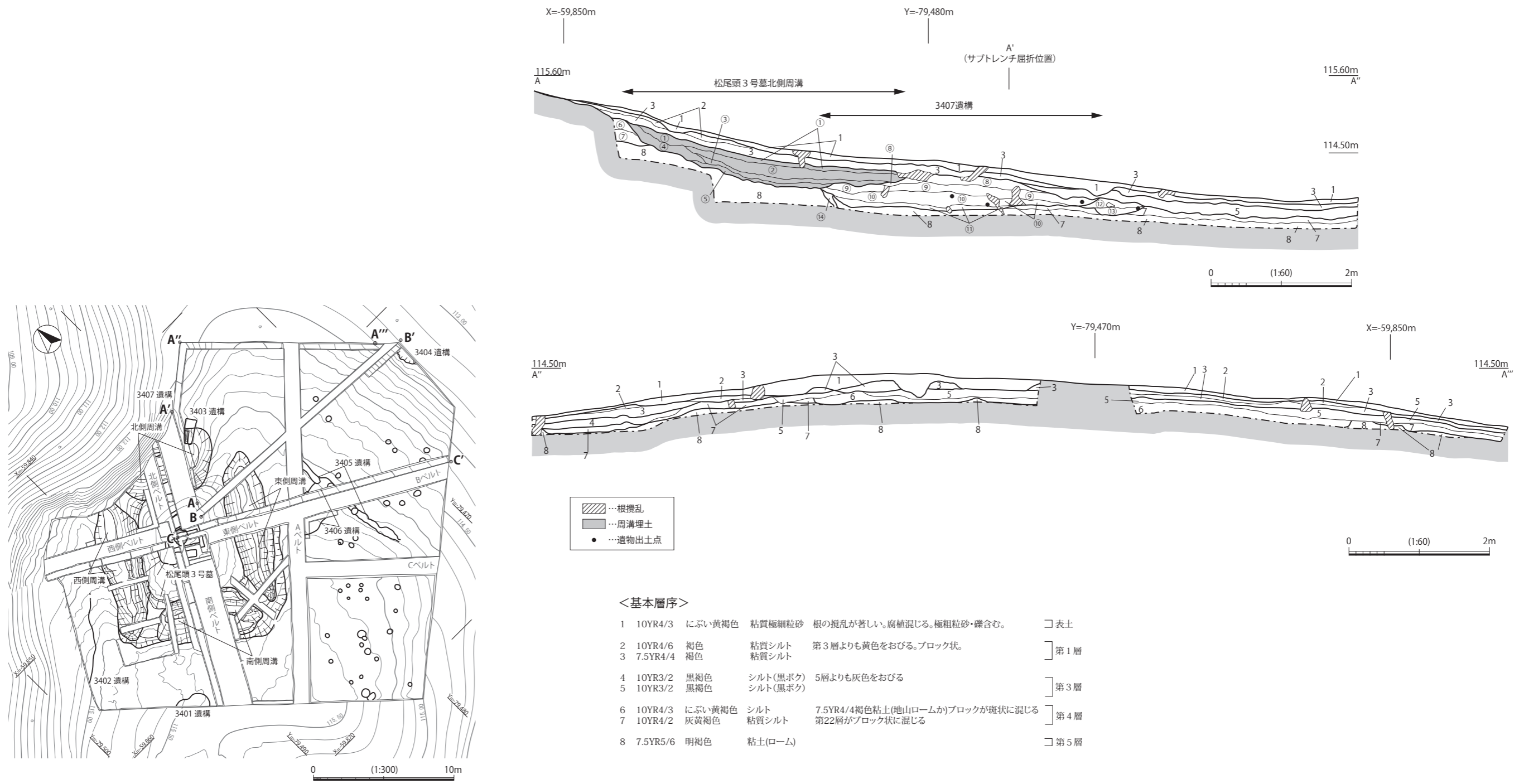
暗褐色～黒褐色のシルト層で、しまりがやや弱い。墳丘墓築造以前の土壌で丘陵全体に堆積が認められるが、丘陵東側の緩斜面部の一部は流失したのかみられない（Bライン・Cライン）。また、黒ボク化が進行した箇所も確認できる（第19図4・5、第20図11・12）。土器（弥生土器）が出土。

第4層（第19図6・7、第20図14～17）

にぶい黄褐色～黒褐色のシルト層で、しまりがやや強い。炭粒を含み、基盤層が風化・二次堆積した層とみられ、基盤層のブロックが混入するが、遺物は含まれない。

第5層（第19図8、第20図18～22）

にぶい黄褐色～黒褐色のシルト層で、しまりが強い。基盤層で、丘陵全体に見られる。



基本層序確認断面の位置

<基本層序>

1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質極細粒砂	根の攪乱が著しい。腐植混じる。極粗粒砂・礫含む。	□表土
2	10YR4/6	褐色	粘質シルト	第3層よりも黄色をおびる。ブロック状。]第1層
3	7.5YR4/4	褐色	粘質シルト		
4	10YR3/2	黒褐色	シルト(黒ボク)	5層よりも灰色をおびる]第3層
5	10YR3/2	黒褐色	シルト(黒ボク)		
6	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	7.5YR4/4褐色粘土(地山ロームか)ブロックが斑状に混じる 第22層がブロック状に混じる]第4層
7	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト		
8	7.5YR5/6	明褐色	粘土(ローム)		□第5層

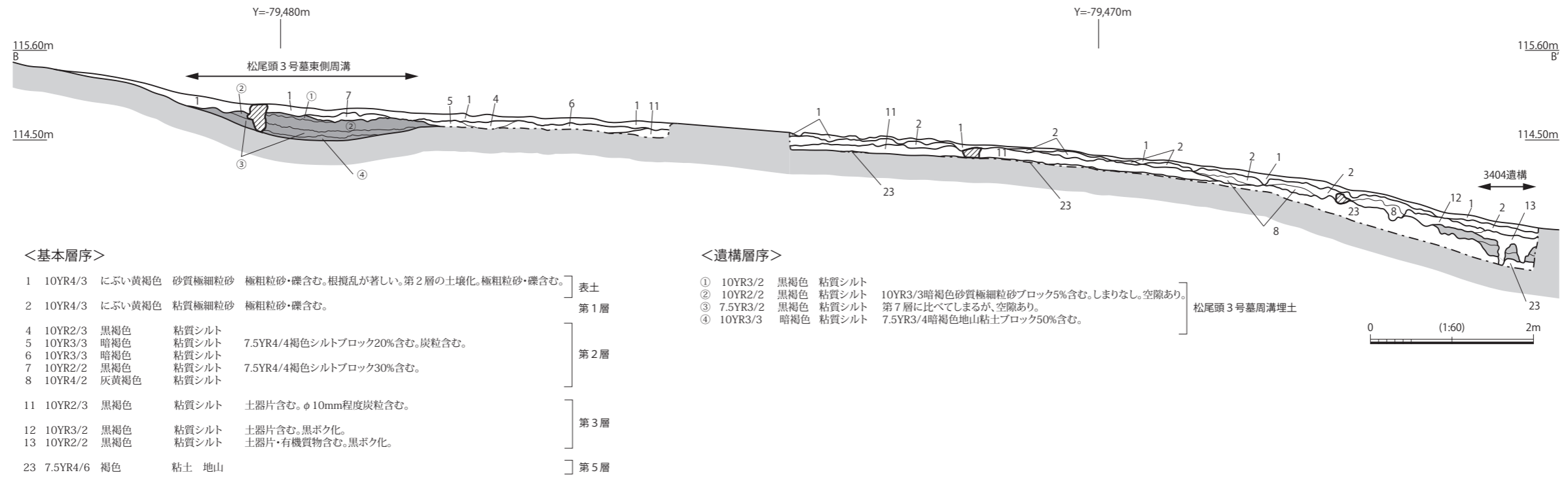
<遺構層序>

①	10YR3/3	黒褐色	粘質シルト	松尾頭3号墓北側周溝埋土	
②	10YR1.7/1	黒色	粘質シルト		
③	10YR2/2	黒褐色	粘質シルト		
④	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト		
⑤	10YR3/4	黒褐色	粘質シルト		
⑥	10YR3/4	黒褐色	粘質シルト		
⑦	7.5YR4/6	褐色	粘土(ローム)		
⑧	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	3407遺構	
⑨	10YR4/6	褐色	粘質シルト		
⑩	10YR4/4	褐色	粘質シルト		
⑪	5YR5/6	明赤褐色	粘質シルト		
⑫	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト		
⑬	7.5YR3/2	黒褐色	粘質シルト		
⑭	10YR3/4	暗褐色	粘土		
					別遺構か

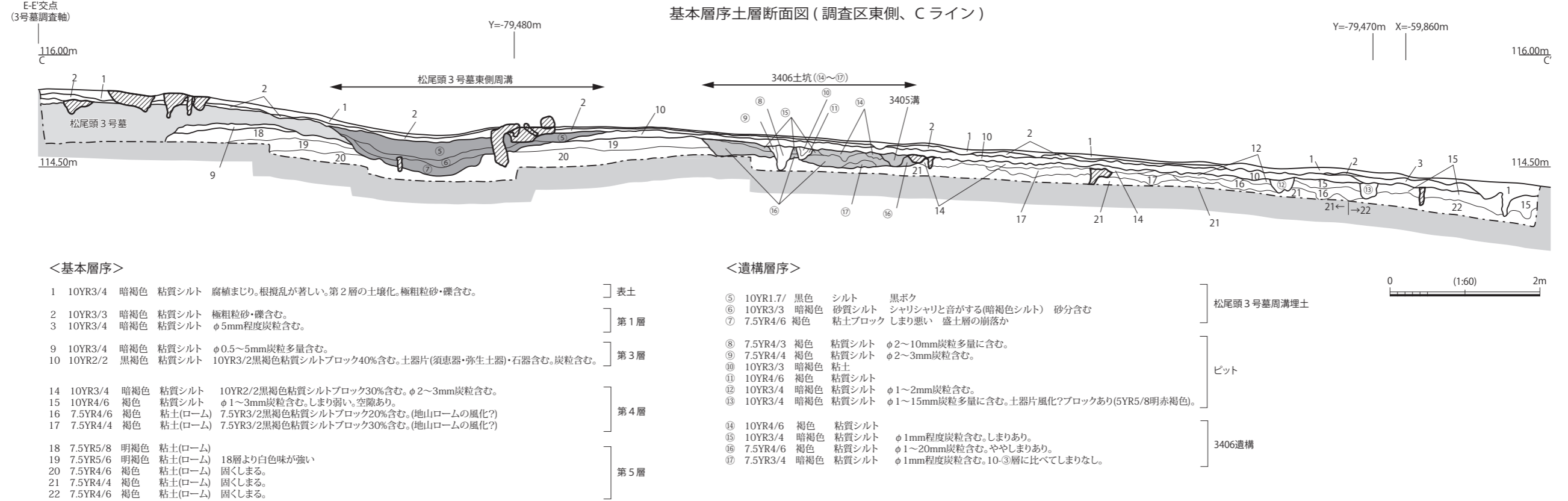
① 黒ボク。土器片含む。
② 土器片含む。
③ 10YR4/6褐色粘質シルトブロック40%含む。
④ 7.5YR4/6褐色粘土(地山ローム)ブロック40%含む。
⑤ φ1~3mm炭粒含む。
⑧ 固くしまる。φ1mm程度白色砂含む。φ1~5mm炭粒含む。土器片含む。第14層の土壌化層。
⑨ 固くしまる。φ1mm程度白色砂含む。φ1~5mm炭粒含む。土器片含む。角柱状ブロックあり。
⑩ しまるが空隙あり。全体的に土がブロック状になっており、第13層よりも角柱状ブロックが多い。φ1~10mm炭粒含む。土器片含む。
⑪ φ1mm程度白色砂含む。φ1mm程度炭粒含む。φ1mm程度炭粒ごくわずかに含む。
⑫ φ1~5mm炭粒含む。
⑬ φ1~2mm炭粒含む。土器片含む。
⑭ 固くしまる。3407遺構に伴うものか不明。

第19図 10区北東部基本層序断面図(1)

基本層序土層断面図 (調査区北東側斜面部、Bライン)



基本層序土層断面図 (調査区東側、Cライン)



第20図 10区北東部基本層序断面図(2)

第3節 松尾頭3号墓の調査

松尾頭3号墓（以降、3号墓）は妻木晩田遺跡において37番目に確認した墳丘墓で、方形周溝墓に分類される。墳丘の最頂部の標高はDラインとEラインの交点で115.54mを測る。松尾頭墳丘墓群の中では中央付近に立地し、松尾頭4号墓・5号墓（以降、4・5号墓）からは東に約20m離れた位置にあり、近接する墳墓等は確認していない。3号墓の形態は、周溝の四隅が途切れて墳丘内外がつながる構造となっており、周溝内からは葬送儀礼に使用されたとみられる土器が大量に出土した。埋葬施設は、墳丘内に少なくとも3基存在し、木棺2基及び土壙1基（築造契機となった中心埋葬（第1埋葬）は木棺）であることを確認した。史跡内の遺構の調査については、保存を前提に調査を行う必要があり、3号墓の墳丘構造上、埋葬施設の詳細な調査のためには盛土部分を完全に除去しなければならないため、遺構全体の保存を優先して埋葬施設の基数、構築方法、重複関係の把握に留めた。よって、棺の詳細な構造や副葬品等の埋葬施設に伴う遺物は確認していない。

周溝内等から出土した土器から、松尾頭3号墓の築造時期は弥生時代終末期前半と考えられ、終末期後半の方形周溝墓である松尾頭1号墓・2号墓よりも先行する時期に位置づけられる。

1. 墳丘の調査

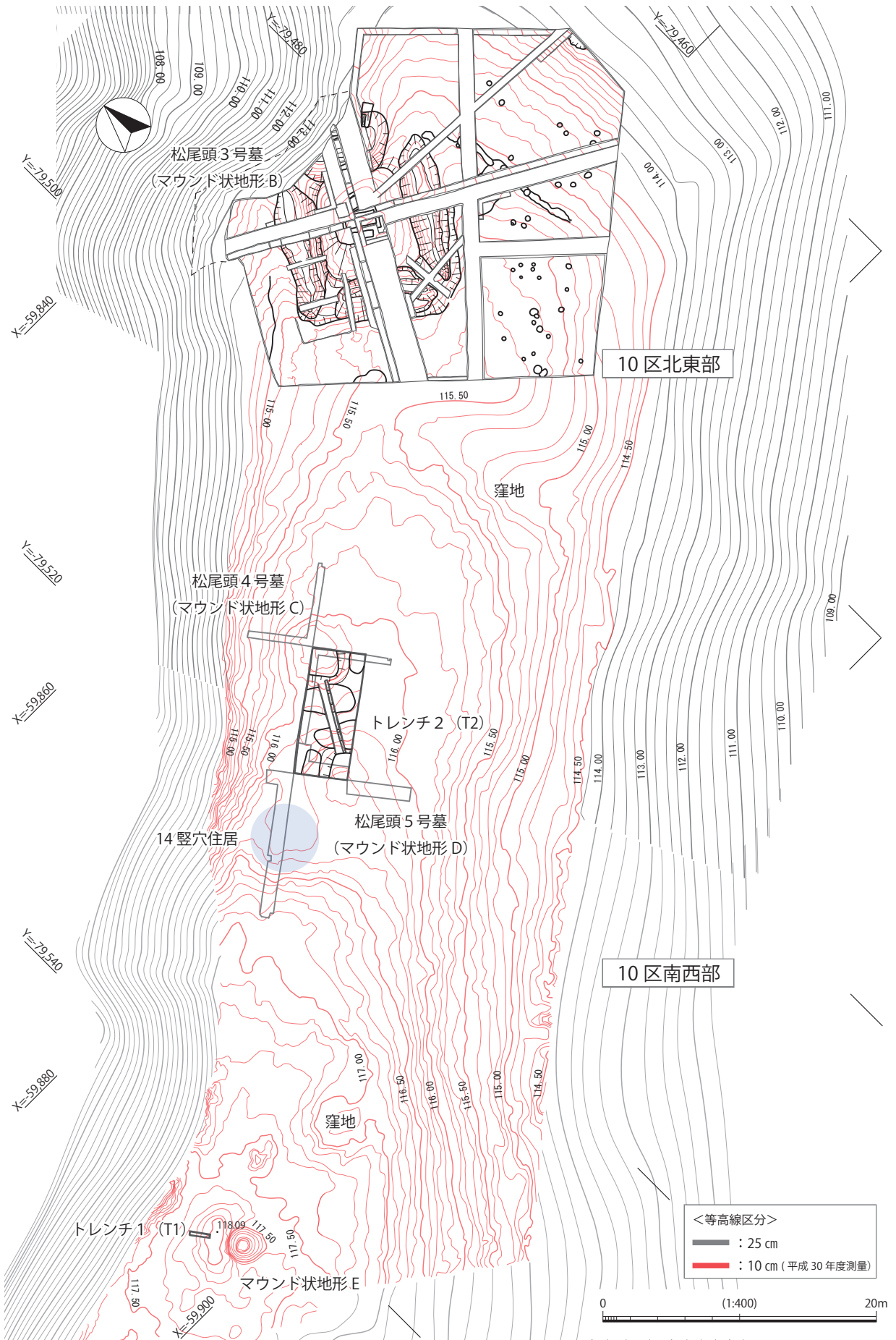
(1) トレンチの設定と遺構名（第24、25図）

第Ⅲ章第3節及び第5節で説明したとおり、第28次調査時に設定されたトレンチを基準に十字に幅1～2mの畔を設定し、Dライン（東西）、Eライン（南北）を軸として調査を進めた。十字軸の交点は、墳丘から丘陵緩斜面部との関係を把握するため、基本層序を記録したCラインのセクションポイント（S.P.C）と共有し、Cラインの軸はDラインと一致するように設定している（第20図）。そして、十字軸を基準に幅50cmの土層観察用トレンチを設定（東側トレンチ、西側トレンチ、北側トレンチ、南側トレンチ）し、墳丘から周溝外までの層序を記録した。このトレンチ名称に沿い、東側トレンチのかかる周溝を東側周溝、西側トレンチのかかる周溝を西側周溝、北側トレンチのかかる周溝を北側周溝、南側トレンチのかかる周溝を南側周溝と呼称し、周溝が途切れて墳丘内外が陸続きになる箇所を陸橋状遺構（以降、陸橋部）と呼称する。周溝の調査では、これらのトレンチ以外に、周溝内堆積や陸橋部との関係を確認するための畔を複数箇所を設定し、畔以外は完掘して周溝及び墳丘の形状、規模を確認している。

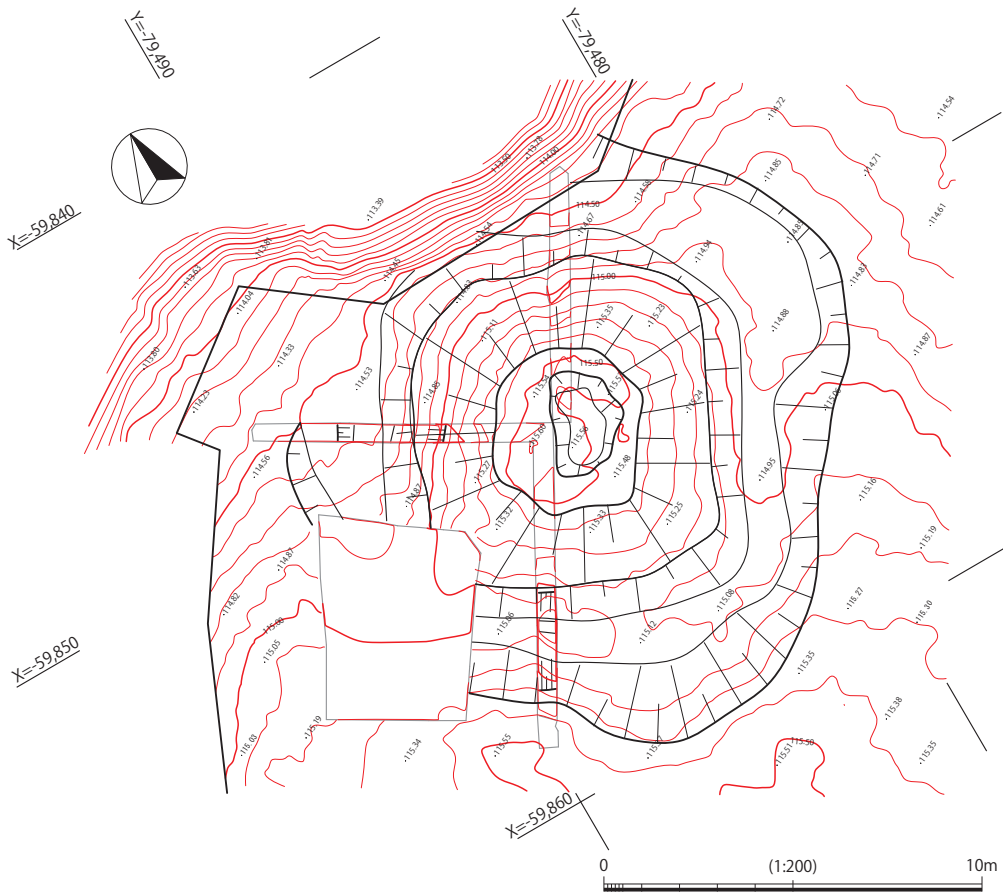
墳頂部の調査では、東西南北のサブトレンチによって埋葬施設らしき落ち込みを確認した段階で、埋葬施設の規模や形状、基数を平面的に確認するため、追加でトレンチを設定した。平面図記録後、土層観察のための十字畔の幅を30cm残し、墳頂部北西トレンチ、南東トレンチを設定した。墳頂部北西トレンチは表土除去後の検出作業では木根による攪乱の影響もあり新たな埋葬施設が確認できなかったため、調査面積を確保でき、中心埋葬の状況を確認できる墳頂部南東トレンチのみ掘り下げを行った。トレンチの掘削は、第3層から中心埋葬施設が掘り込まれていることを断面で確認できたため、概ね基盤層の高さで止めている。他の副次的な埋葬施設についても、平面プランを検出できた段階で掘削を止めており、棺底までの調査をしていない。

(2) 周溝（第24～26図）

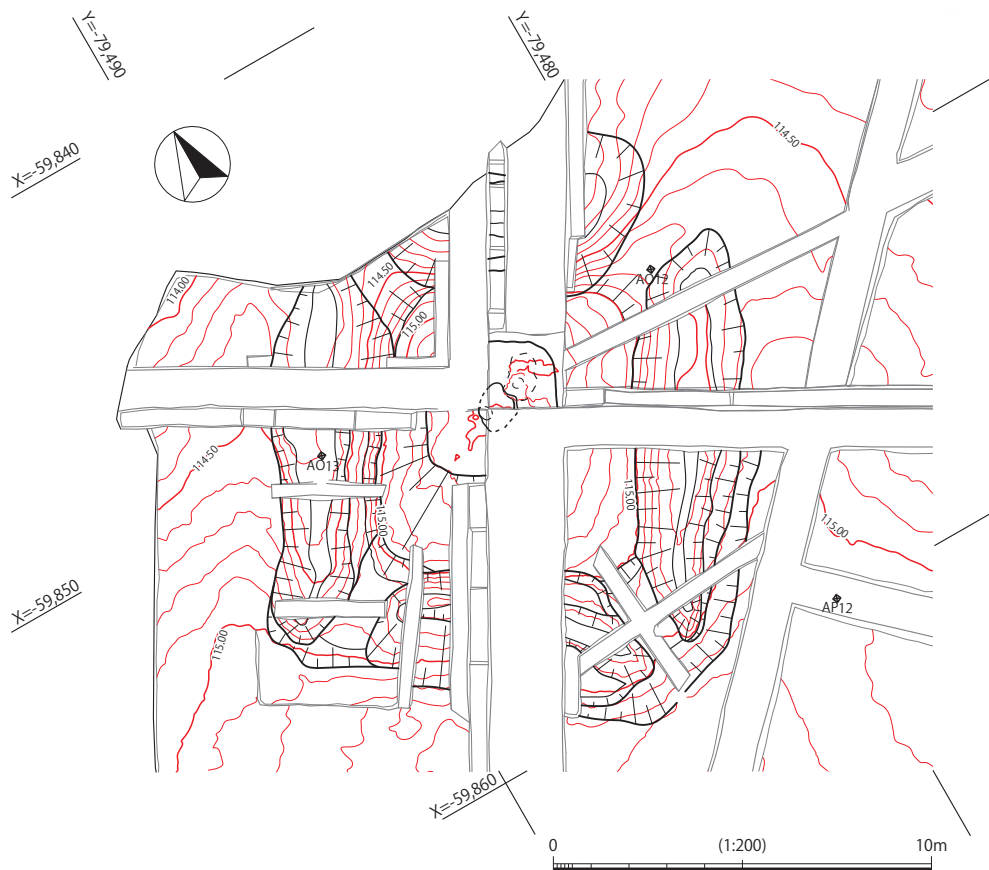
周溝の埋土は、表土層以下、土色及び含有物の違いから、上から順に埋土①（黒色土）、埋土②（灰



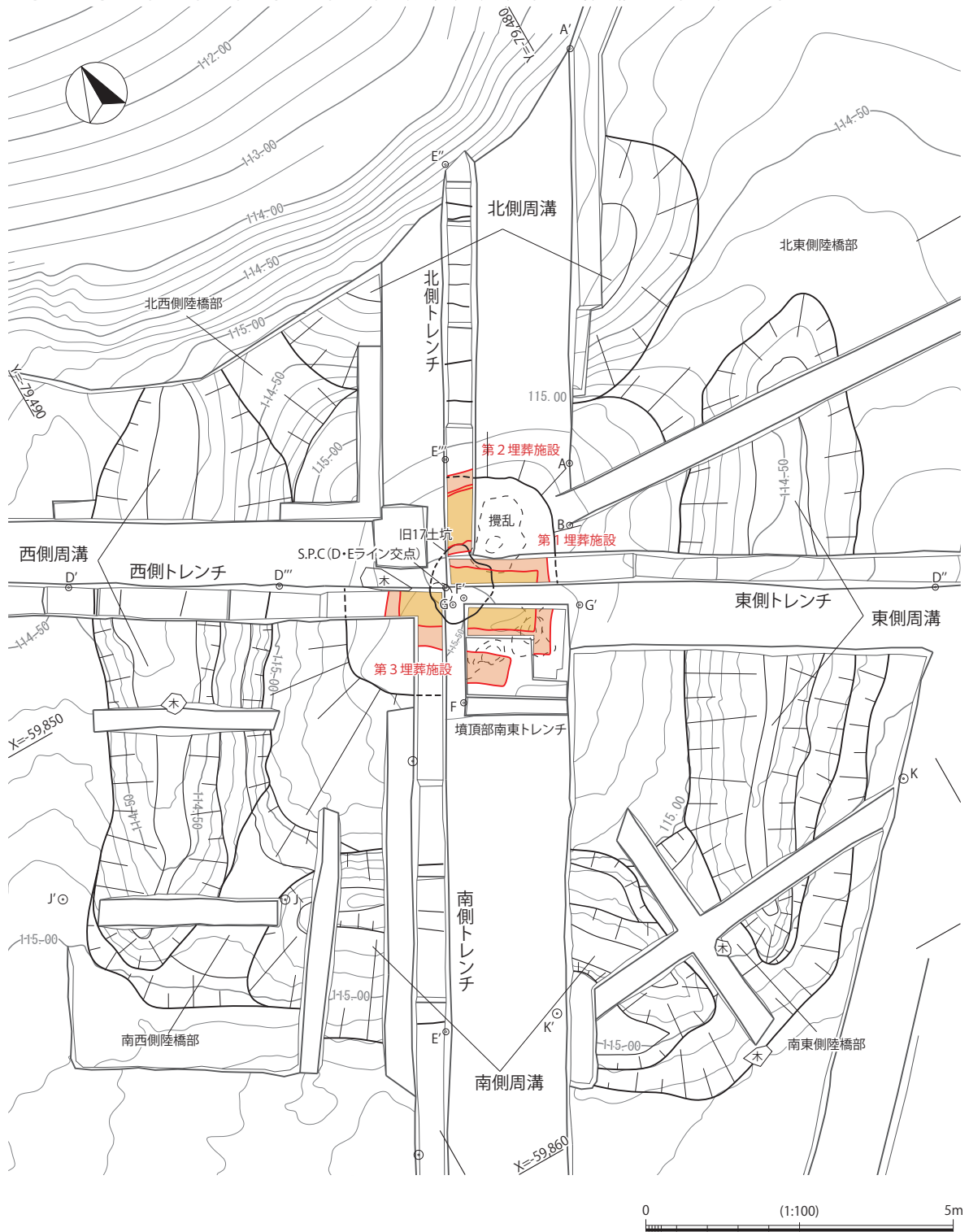
第21図 松尾頭10区調査後地形測量図



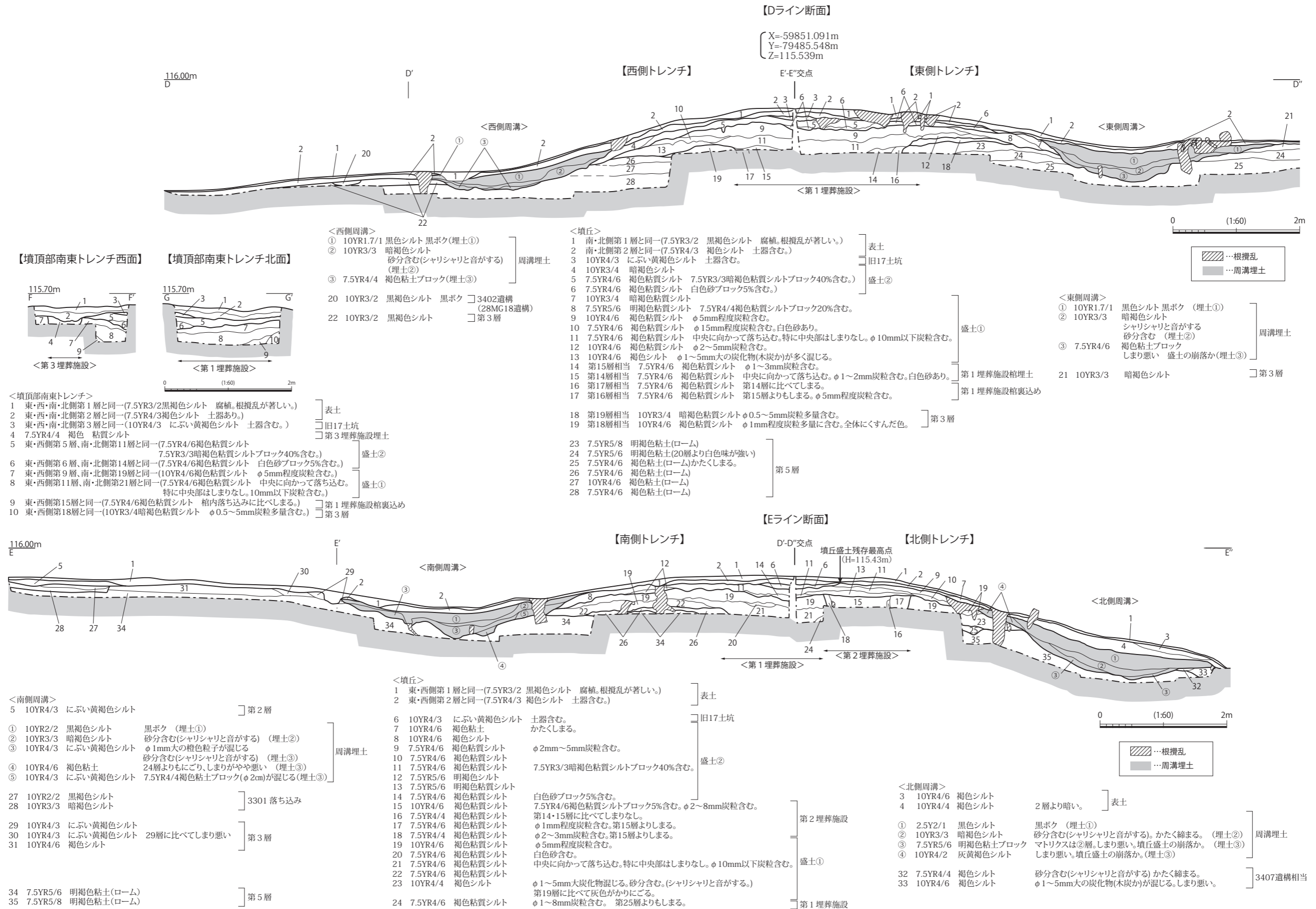
第22図 松尾頭3号墓墳丘現況測量図



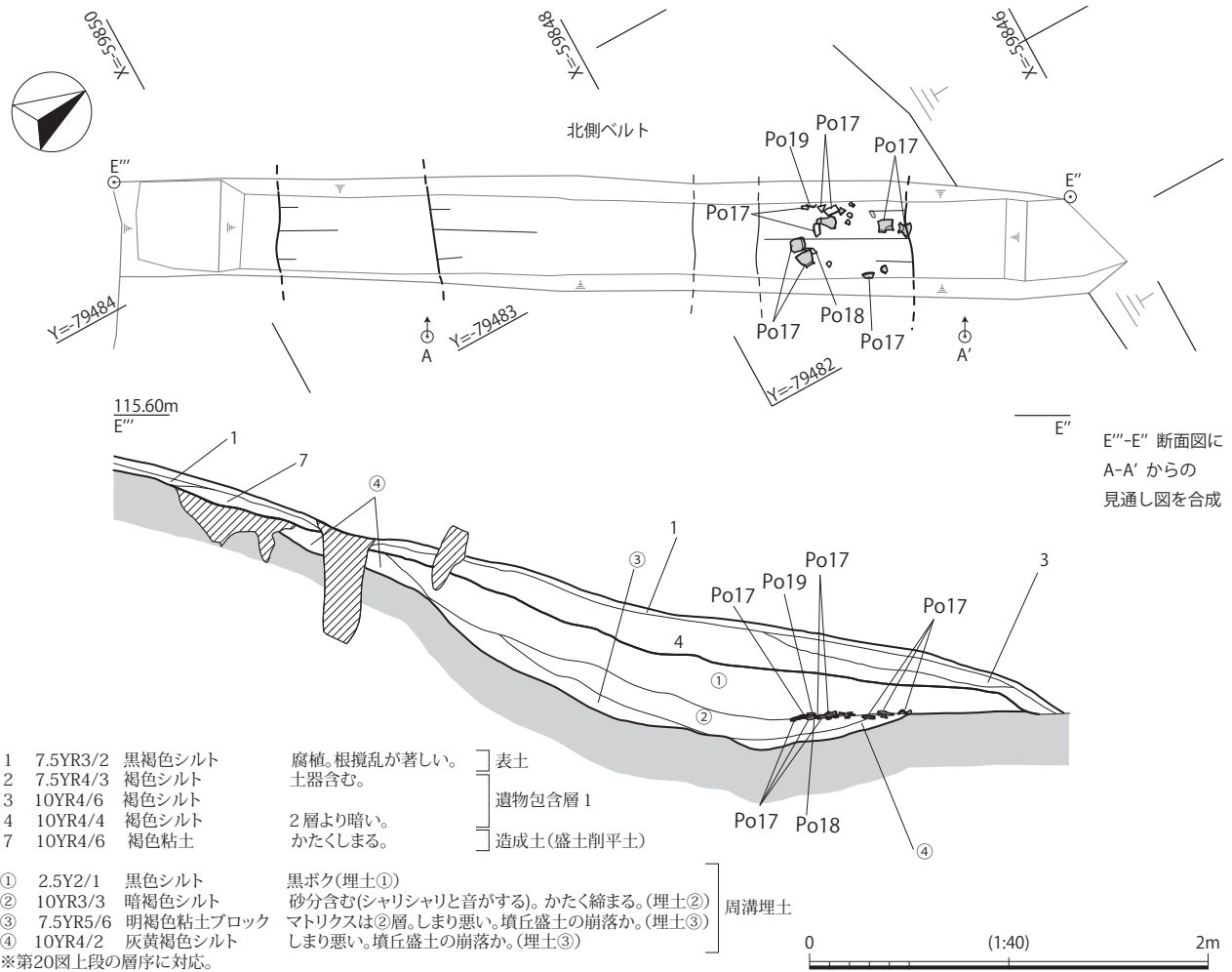
第23図 松尾頭3号墓墳頂部調査前測量図（周溝完掘後）



第24図 松尾頭3号墓調査平面図



第25図 松尾頭3号墓墳丘土層断面図



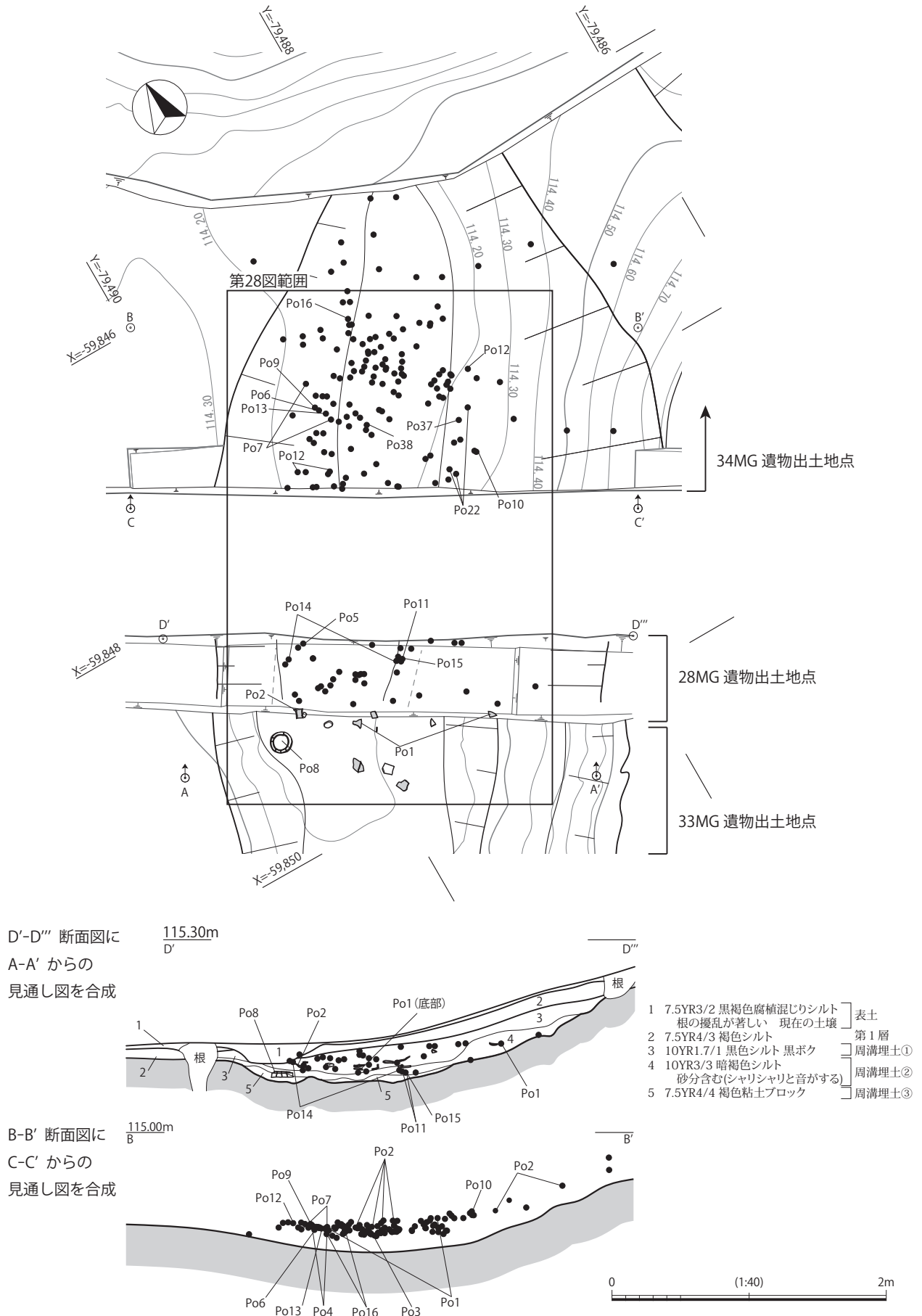
第26図 北側周溝遺物出土状況及び断面図

褐色土)、埋土③(埋土②にロームのブロックが混じる)の3層に大別される(第25図)。埋土②及び③は墳丘からの流入土と推定される。第33次調査では、Dラインから南の墳丘南半の周溝を調査し、土器、土製品、鉄器、礫が出土した。第34次調査ではDラインから北の墳丘北半を調査し、土器、礫が出土した。出土位置には偏りがあり、墳丘墓の築造時期に関わる遺物は西側周溝で最も多く出土し、壺、甕、高坏などの土器の破片を確認した。出土層位は埋土①の下面から埋土②に集中し、埋土③や周溝底面での出土はほとんど無い。

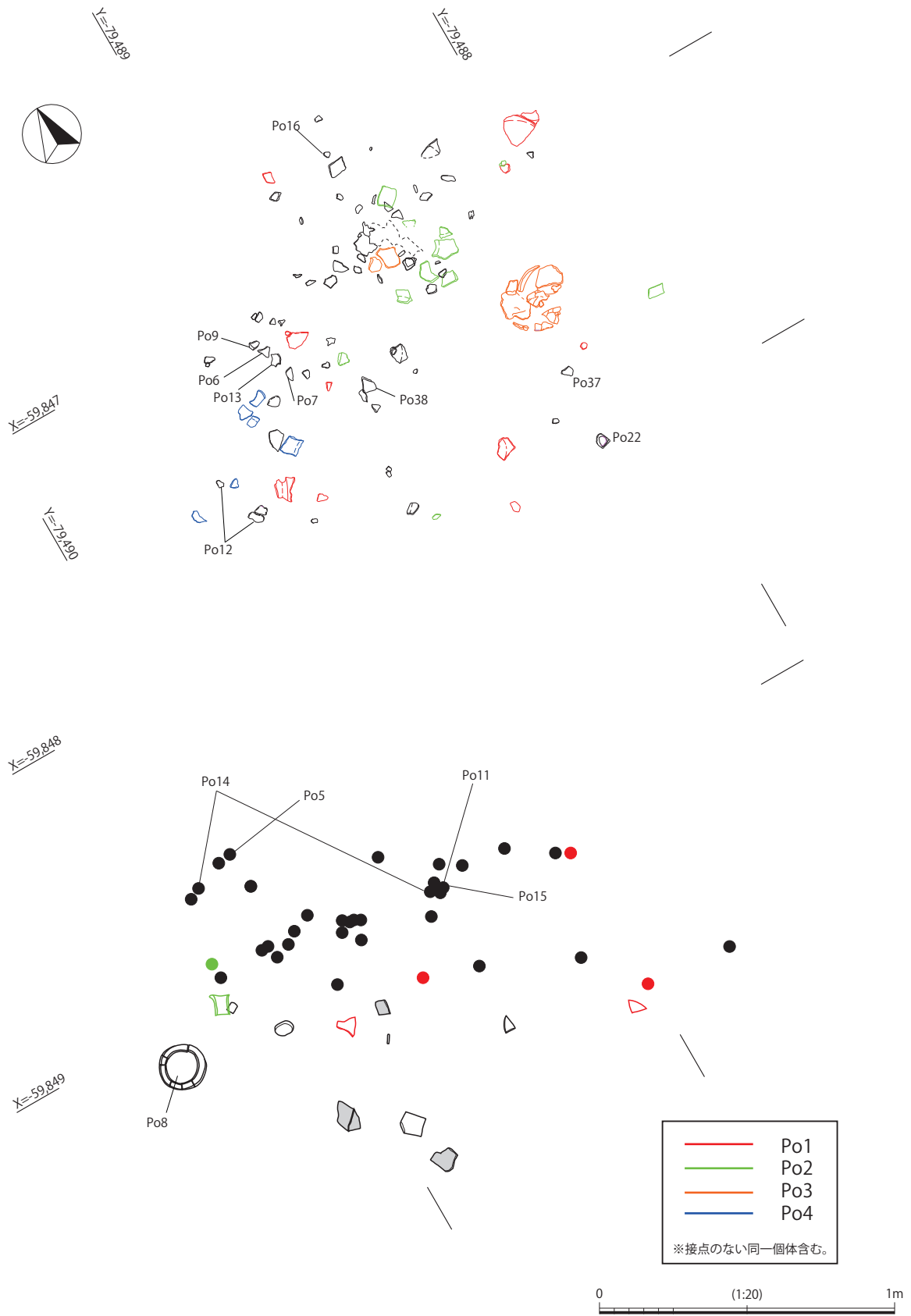
同じ墳丘墓群にあり、弥生時代終末期後半の松尾頭1号墓では、周溝内埋葬が確認されているが、松尾頭3号墓では周溝内埋葬を伴わないことが明らかとなった。

①北側周溝(第24、25、26図)

第28次調査でTr.8の7溝として検出した遺構である。第33次調査において北側トレンチの掘削を、第34次調査において周溝全体の検出及び周溝内埋土の掘削を行った。北側周溝の東半は第3層が広がり、周溝の埋土との判別が難しかったため、基本層序Aライン(北側サブトレンチ)の断面(第19図)を確認しながら掘削を進めた。結果、北側サブトレンチ断面に周溝の立ち上がりを確認でき、しまりのない黒色土の範囲を周溝埋土として検出した。西側は地滑りにより崩落しているため、周溝の長さは東西6.75m以上、幅は南北最大4.34m、墳丘墓外からの深さは0.2m、残存墳丘最高点(第25図Eライン上矢印、標高115.43m)から底面までの高低差は最大1.49mである。畔幅を広く設定



第27図 西側周溝遺物出土状況図及び立面図



第28図 西側周溝遺物出土状況微細図



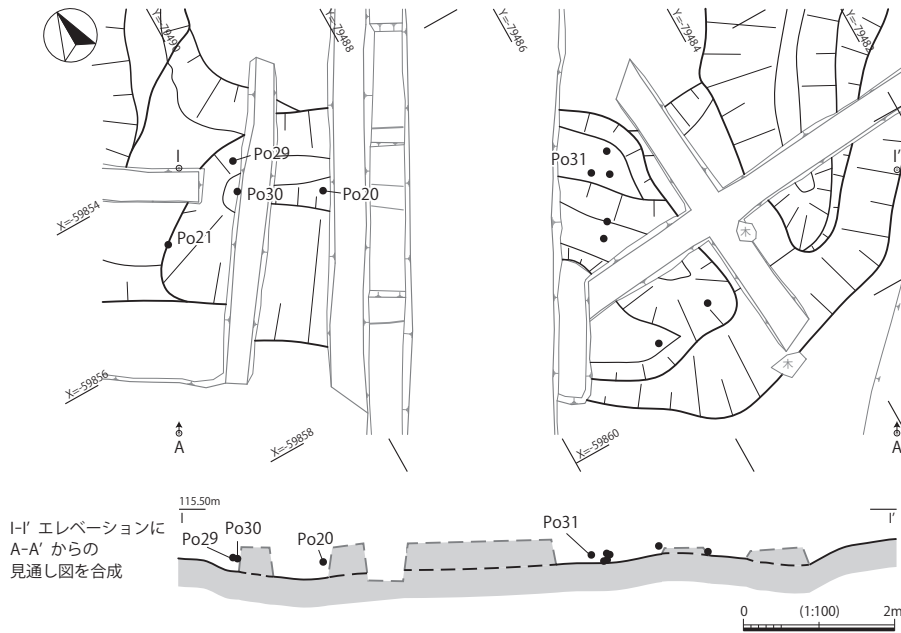
第 29 図 東側周溝遺物分布図

していたため掘削面積がほかの周溝と比較して狭いが、北側トレンチ内から壺頸部（第 47 図 Po17）や底部の破片（第 47 図 Po18、19）が出土し、周溝の東西端部では、西側周溝や墳頂部出土のものと同一体と考えられる壺胴部の破片（第 47 図 Po22）が出土している。特に Po17 については、頸部外器面をタテハケで調整した後に貝殻による多重沈線文を巡らす特徴的なつくりをしている。

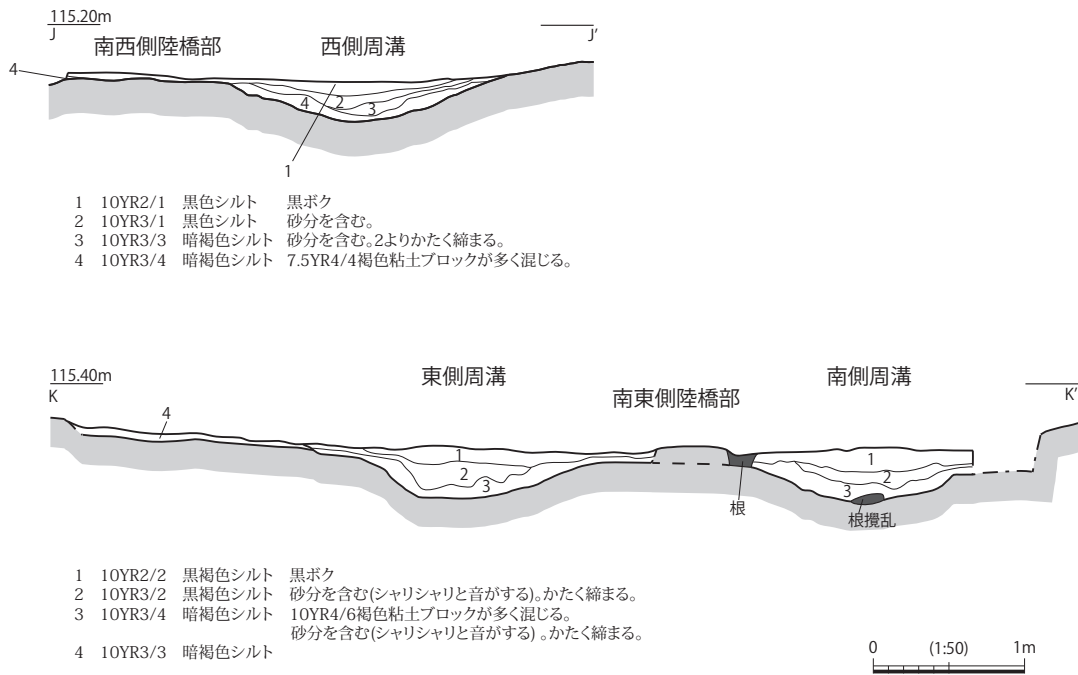
②西側周溝（第 24、25、27、28 図）

第 28 次調査 Tr. 7 及び 10 で検出された 6 溝、9 溝の一部である。Tr. 7 では周溝底まで調査された。トレンチに充填されていた土嚢を除去して層序を再確認した後、第 33 次調査では D ラインより南側、第 34 次調査では北側の調査を行った。

周溝の長さは 9.54 m 以上、残存幅は最大 2.76 m、墳丘墓外からの深さは 0.14 m、墳丘盛土残存最高点から底面までの高低差は最大 1.20 m である。遺物は、埋土①層下面から埋土②層にかけて、大量の土器片が出土した（第 27・28 図）。遺物の記録と取り上げは、4 段階に分けて行った。周溝底面付近の土器は土圧による劣化が激しく、出土した形状のまま保存できなかった破片がある。同一個体とみられる土器片の分布をみると、多くが周溝北半分全体に広がる。中には墳丘上の土器片と特徴が一致するものがあり、墳丘上に据えられた土器が転落した可能性が考えられる。また、周溝中央の底面付近では、甕口縁部の完形品が口縁側を周溝底に向けた状態で出土した（第 46 図 Po 8）。胴部の破片は一切出土せず、頸部の割れ口が一定の高さを保っていることから、頸部以下を割り、器台として転用したものと考えられる。特徴的な遺物としては、北側周溝で出土した Po17 同様、タテハケ後に頸部に多重に沈線を巡らせる壺がある（第 46 図 Po 1、2）。口縁部の形態はいずれも在地の土器と同じものであり、弥生時代終末期前半の特徴を示すが、頸部が八字状に開く形状と、製作・施文方法は在地の土器には見られない特徴であり、これまで妻木晩田遺跡ではほとんど出土していない。器種としては壺・甕が多く、器台の可能性のあるものは 1 点程度しかないことから、甕転用器台と合わせて、墳墓上の葬送儀礼に用いられた土器と考えられる。



第30図 南側周溝遺物分布図



第31図 南西部及び南東部陸橋部断面図

③東側周溝 (第24、25、29図)

民有地であるため第28次調査の対象から外れており、第33次調査ではDラインから南側、第34次調査では北側を調査した。周溝の長さは10.09m、幅は最大2.95m、墳丘墓外からの深さは0.46m、墳丘盛土残存最高点から底面までの高低差は最大で1.03mである。周溝埋土①及び②から弥生時代後期の土器片が出土しているが、西側周溝のように、終末期に比定されるものはみられなかった(第29、48図)。第33次調査では、埋土②から有茎柳葉式の鉄鏃が1点出土した(写真PL9-3、32-1、第49図)。墳丘側の位置で出土しているため(第29図)、墳頂部からの流れ込みの可能性はあるが、今回検出した埋葬施設には伴わないものと考えられ、用途・性格は不明である。

④南側周溝（第24・25・30図）

第28次調査Tr. 9及び10で検出された8溝と9溝の一部である。周溝の長さは7.58 m、幅は最大3.75 m、墳丘墓外からの深さは0.60 m、墳丘盛土残存最高点から底面までの高低差は最大で0.87 mである。周溝埋土①及び②から土器片が出土しているものの、全周溝の中では一番点数が少ない。3号墓に伴う時期とみられるPo20・21が出土しているが、それ以外では墳丘墓の時期に対応するものはみられなかった。

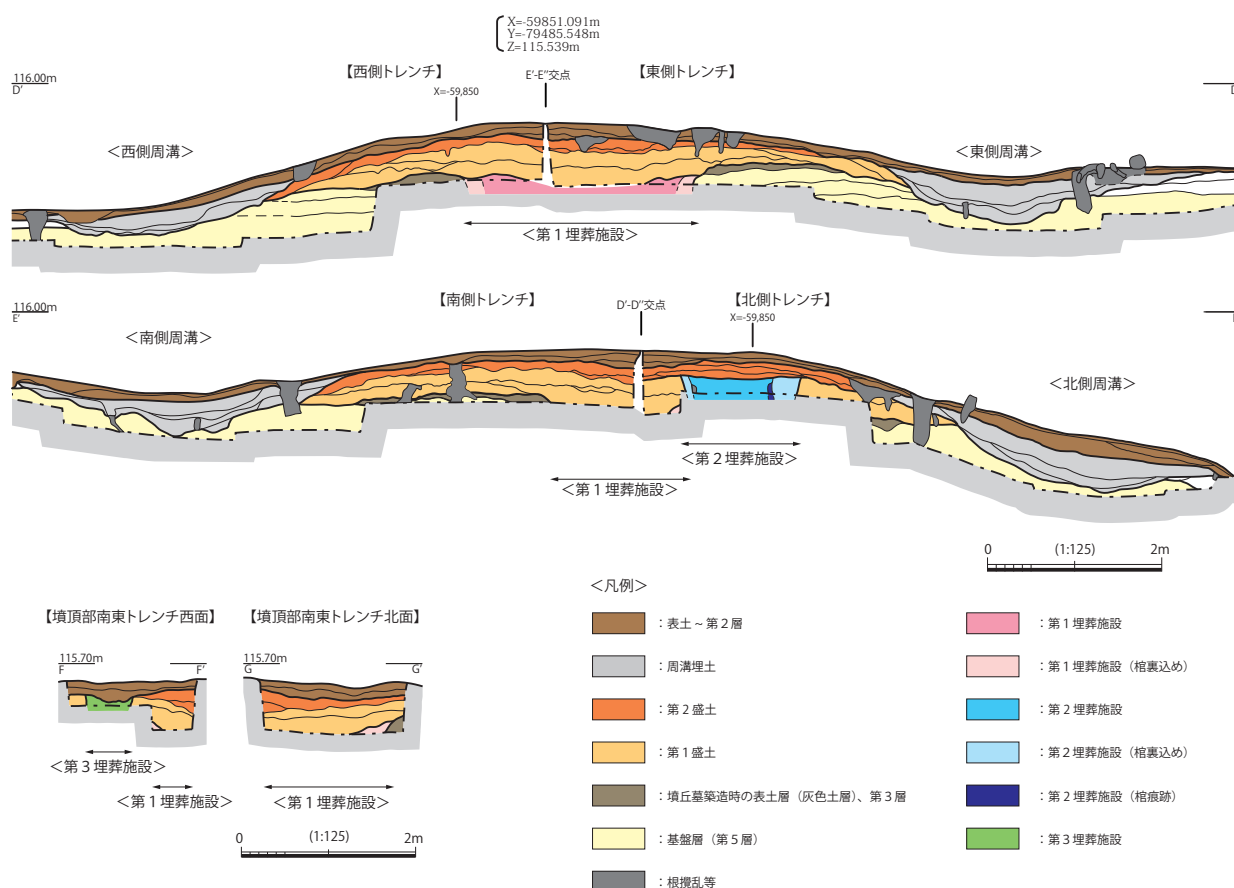
(3) 陸橋部

松尾頭1号墓・2号墓と同じく、墳丘墓の四隅において溝が途切れ、墳丘側と溝の外側が陸橋状につながる状況を確認した（以下、陸橋部と呼称）。第33次調査で南東側と南西側、第34次調査で北東側と北西側を検出した。南東側と南西側の陸橋の規模はほぼ同じであり、陸橋の長さ約3 m、上幅約1 m、下幅約2 m、周溝底からの高さ約0.3 mである。北西側は端部が崩落によって失われているものの、長さ1.8 m以上、上幅約1.2 m、下幅約3.3 m、周溝底からの高さ約0.4 mである。北東側は最も高く造られており、長さ約4 m、上幅約1.3 m、下幅約3 m、周溝底からの高さ約0.7 mである。陸橋部は一部に墳丘盛土がのるものの、盛土成形ではなく、基盤層の削り出しによって造り出されている。

(4) 墳丘盛土及び墳丘構造

周溝完掘後、墳丘内の調査を行うため、D・Eラインに沿って十字状にトレンチを設定した（第24・25図）。墳丘の層序は上から、表土、第2層、追葬に伴う盛土（2次盛土）、初葬に伴う盛土（1次盛土）、墳丘構築時の表土層と考えられる灰色土層（第3層相当）、大山火山灰に由来するローム層（第5層）となっている。丘陵全体は、マウンド状地形Eのある南側が最高所となっており、北側に向かってなだらかに下がっている（第21図）。3号墓下の基盤層も南東側が高く北西側に向かって下がっており、本来の自然地形を反映していると考えられる。その直上に堆積する灰色土層は厚みが10cm程度あり、全トレンチで確認できた。灰色土層中には炭化粒が多量に混入し、基盤層や盛土に比べてくすんだ色をしている。この灰色土層の上面レベルは、各トレンチの高いところで、東側が標高115.09 m、南側が標高115.07 m、西側が標高114.98 m、北側が標高114.79mを測り、東西で11cm、南北で28cmの高低差があるが、下位の基盤層と高低差はほぼ同じであり、墳丘構築時の表土層にはほとんど手が加えられていないと考えられる。ただし、いずれの断面でも周溝の手前1 m前後はこの層が残っていなかったため、周溝に面した墳丘（斜面部）成形の一環として盛土と基盤層の接着強度を高めることを目的に取り除かれていると考えられる。

埋葬施設は墳丘内に少なくとも3基あり、墳丘墓の築造契機（初葬）は墳丘中央の木棺1基（第1埋葬施設）、追葬として木棺1基（第2埋葬施設）、土壙1基（第3埋葬施設）を確認している。第1埋葬施設の墓壙は、灰色土層から掘り込まれており、棺を裏込め土によって固定した後に、周溝の掘削で生じた基盤層土で盛土を行っている。初葬に伴う盛土の手順は、まず①周溝側の灰色土層を除去して墳丘の範囲を確定した上で、②周溝を掘削した基盤層土を灰色土層上に盛り（Dライン12・13層、Eライン22・23層）③棺を土で覆い（Dライン11層、Eライン21層）、④最後に墳丘全体を覆う（Dライン8～10層、Eライン19層）というものである。墳丘端部は微調整のため細かく盛土されている（Dライン7・8層）。盛土上面の高さは115.3 m前後であり、平坦に整えられている。この1次盛土の厚さは、30cm程度である。最初の埋葬行為が終了した後、第1埋葬施設の北側で第2埋葬が



第32図 墳丘分層概念図

行われた。第2埋葬施設は第1埋葬後の盛土上面から掘り込まれており、埋葬終了後は、1～3層、合わせて15cm程度の盛土によって墳丘全体が覆われた。第3埋葬施設も第1埋葬の盛土上面から掘り込まれていることから、第2埋葬施設と第3埋葬施設は第1埋葬終了後ほぼ同時期に設置されたものと考えられるが、先後関係は不明である。なお、盛土にも土器片が含まれていたが、小破片ばかりであり、各埋葬直後あるいは盛土前の土器供献は認められなかった。

(5) 墳丘規模及び軸

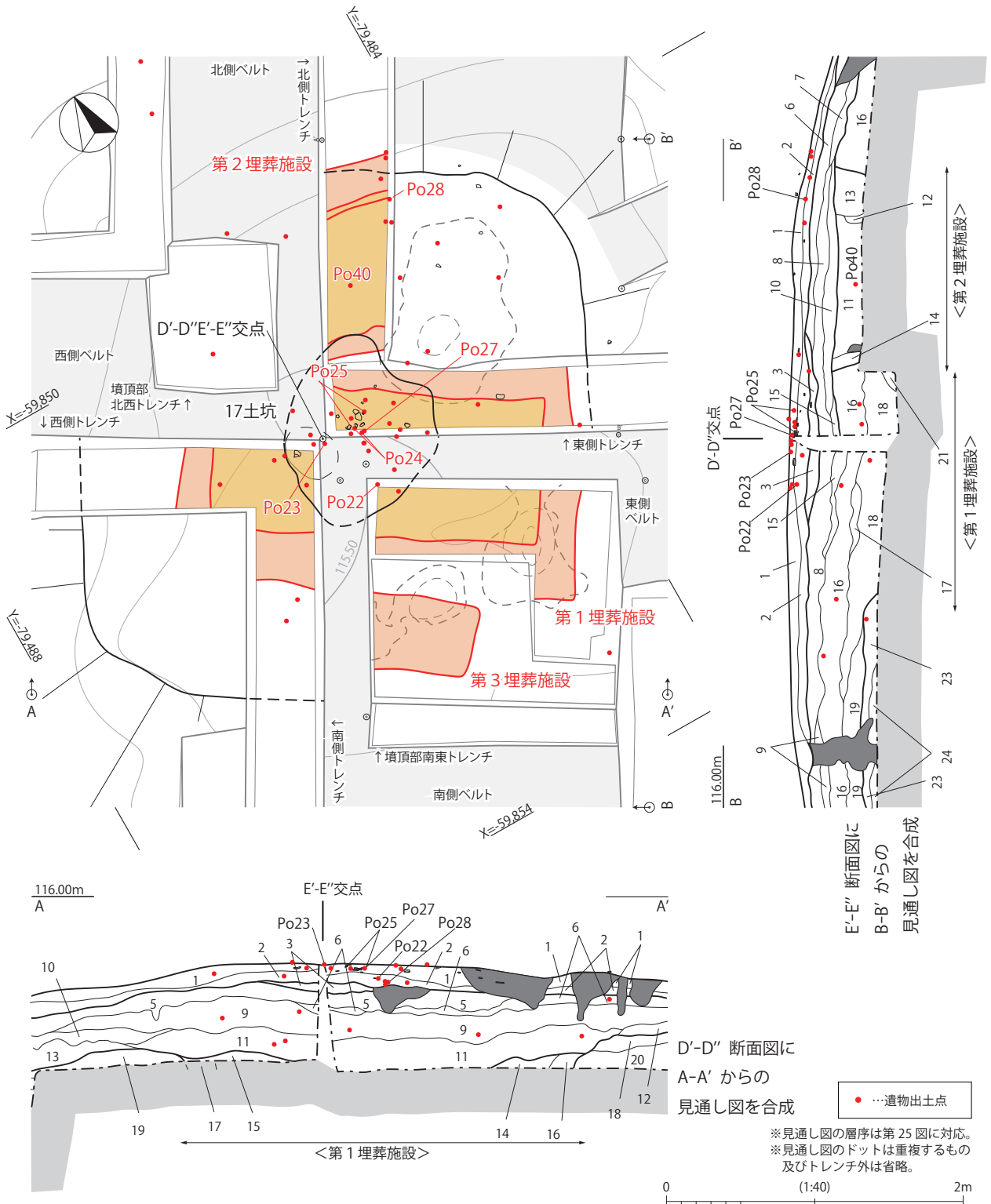
周溝の中心軸で墳丘規模を計測すると、南北（長軸）10.41 m、東西（短軸）9.78 mを測る。墳頂部の残存高は標高115.43 m、盛土の厚さは最大で0.42 mである。また、墳丘の長軸は、N - 31° - E となり、立地する丘陵の軸とほぼ平行するように設定されている。

2. 埋葬施設の調査

(1) 調査の手順及び目的

埋葬施設の確認は、墳頂部におけるトレンチ調査のみとし、墓壙の位置や規模が判明したところで調査を終了しており、棺内部の構造や副葬品は確認していない。第28・33次調査では、墳頂部中央において17土坑（第28次調査時の呼称）を検出しており、埋葬施設検出の手掛かりになることが想定された。17土坑の上面を中心に弥生時代終末期前半の土器片が出土しているが、いずれも小片である。17土坑の規模は、南北1.3 m、東西0.9 m、深さ7cmで薄い皿状の形状をしており、位置も第1埋葬施設の直上にあることから、木棺の腐朽に伴う陥没によって生じた窪みに土器の破片が残ったものと判断した。墳丘のトレンチ調査では17土坑周辺以外での土器片は少なく、墓壙直上での破

碎土器供献等は確認できなかった。墳頂部と西側周溝とで同一個体と考えられる破片が出土しており、墳丘上にあった土器が破片となって周溝に転落したと考えられる。平面検出では埋葬施設を確認できなかったため、東・西・南・北の周溝確認トレンチを延長し、墳丘中央まで断ち割って確認した。その結果、墳頂部北側トレンチにおいて埋葬施設を確認した。この埋葬施設は、墳丘の北側に寄っており、第2盛土の下面から掘り込まれていたため、この墳丘墓の主体となる埋葬施設は別にあると判断し、北側トレンチは埋葬施設底面まで掘削せずに南・東・西トレンチの掘削を進めた。そして、盛土



第33図 墳頂部埋葬施設検出状況及び遺物分布図

の下に灰色土層と基盤層、墳丘墓築造の契機となる埋葬施設の落ち込みを確認した。これを第1埋葬施設とし、先に北側で検出していた埋葬施設を副次的な埋葬と考え第2埋葬施設とした。ただ、第1埋葬施設の北側縁が第2埋葬施設の下にあり墓壙の形状や規模が把握できないこと、また墳頂部の埋葬施設数を把握しきれていないことから、それらの課題を解決するために墳頂部南東側（以下、墳頂部南東トレンチ）を掘り下げることにした。盛土を第2埋葬施設上面と同程度の高さまで掘り下げた段階で、墳頂部南東トレンチの南側において埋葬施設とみられる遺構を検出し、断面でも立ち上がり確認できたため、第3埋葬施設とした。第3埋葬施設を残しつつ第1埋葬施設の確認をするため、墳頂部南東トレンチの北東側をL字に掘削して基盤層まで掘り下げた結果、第1埋葬施設の墓壙掘方を確認して規模を特定することができた。

(2) 埋葬施設の配置と基数

埋葬施設は、少なくとも3基あることを確認し、いずれも墳丘内に位置する（第24・33図）。第1埋葬施設は、墳丘中央のわずかに北寄りに位置する。第2埋葬施設は墳丘北側に位置し、平面的には第1埋葬施設の墓壙北辺と第2埋葬施設の墓壙南辺が重複する。第3埋葬施設は墳丘中央のやや南寄りに位置し、平面的には第1埋葬施設の墓壙南辺と第3埋葬施設の北辺が重複する。

(3) 各埋葬施設の詳細

①第1埋葬施設

第1埋葬施設は、3号墓築造の契機となった埋葬であり、松尾頭3号墓のほぼ中央に位置する。第1埋葬施設の範囲は、東・西・南トレンチ及び墳頂部南東トレンチにおいて検出した。墳丘墓築造時の表土層である灰色土層の上面から掘り込まれている。墓壙の規模は、灰色土層上面で長軸（東西）2.97 m、短軸（南北）1.62 m以上で隅丸長方形を呈す。東西頭位であり、墓壙の軸は、S - 57° - Eである。断面では墓壙の掘り込みとともに、木棺の腐朽に伴う盛土の落ち込みも確認できた（Dライン11層、Eライン21層、墳頂部南東トレンチ8層）。棺は木棺と考えられ、木棺痕跡は確認できなかったが、木棺を固定したと考えられる裏込めの締まった土と木棺内への落ち込み土を検出することができた。裏込めの厚さは、東側で25cm、西側で22cm、南側36cmとなっており、木棺の推定規模は、長軸（東西）2.20 m、短軸（南北）1.00 mである。1つの墓壙に1つの棺が納められたと考える。

②第2埋葬施設

第2埋葬施設は、3号墓の調査において最初に発見した埋葬施設であるが、副次的な埋葬施設であり、今回は第1埋葬施設の調査を優先したため、墓壙規模や形状など得られた情報は少ない。第2埋葬は、1次盛土後、第1埋葬施設よりも北側で行われた。墓壙の規模は、短軸（南北）1.37 mで、長軸（東西）の規模は不明である。主軸は、S - 73° - Eをとり、第1埋葬施設よりも北側に振れる。しかし、墓壙の端が第1埋葬施設の墓壙と重複することを考えると、第1埋葬を意識して墓壙の位置を決定している。墓壙内には木棺が据えられたとみられ、棺裏込めの土との締め具合の違いから、棺は短軸（南北）0.93 mと考えられる。第1埋葬施設や第3埋葬施設よりも掘削深度は深い、棺底部まで達していないことから、棺構造や副葬品は確認できなかった。

③第3埋葬施設

第3埋葬施設は、第1埋葬施設の南側に位置し、第2埋葬施設と同じく、1次盛土上面から掘り込まれている。検出面での規模は、長軸（東西）0.73 m以上、短軸（南北）0.55 mで隅丸長方形の形状をしており、軸はS - 50° - Eと第1埋葬施設に比べてわずかに南側に振れる。墓壙の位置は、第

1 埋葬施設の墓壙と重複する位置にあり、軸もほぼ同じことから、第2埋葬と同様、第1埋葬を意識して埋葬行為が行われたと考えられる。第3埋葬施設についても墓壙を検出できた任意の高さで掘削を止めたため、棺の有無や墓壙下部の構造、副葬品については確認していない。なお、掘削範囲では遺物は出土していない。墓壙の東側は検出できたが、西側は幅30cmの畔の中に納まっているものとみられ、墓壙の規模が1.0 m未満ということから被葬者は小児と考えられる。

第4節 松尾頭4号墓・5号墓の調査

松尾頭4号墓・5号墓（以降、4号墓、5号墓）は、妻木晩田遺跡で38・39番目に確認した弥生時代の方形周溝墓である。松尾頭墳丘墓群の中では西端に位置し、3号墓からは西に約20 m離れるが、4号墓と5号墓の間隔は約1 mで近接して存在する。周溝は隅が途切れて陸橋状になる構造をしており、松尾頭1～3号墓と同じ形態をとる（第34図）。盛土の上部は後世に削平されており、残存する墳丘の最頂部の標高は4号墓で116.10 m、5号墓で116.20 mである。築造時期は、5号墓の周溝から出土した土器の年代観から3号墓と同じ弥生時代終末期前半と考えている。埋葬施設は盛土下に存在すると考えられたが、同時期に比定される3号墓で墳丘墓築造過程を明らかにするための断ち割り調査を行って成果が得られたこともあり、4・5号墓については遺構の保護を優先して断ち割り確認は行っていない。

（1）トレンチの設定と遺構名

4・5号墓は、松尾頭10区の丘陵の中でほぼ中央に位置する。第28次調査で墳丘墓の可能性のあるものとしてマウンド状地形C・Dと仮称し、トレンチによる内容確認調査が実施された（Tr.11～16）。その結果、マウンドの周囲に溝状遺構を確認した（10～16溝）ため、第34次調査では、第28次調査のTr.13・14を開けて溝の位置を確認したうえで既存トレンチに囲まれた範囲をトレンチ2（T2）として設定し、掘削を行った。

今回の調査で検出した周溝は、4号墓の東側周溝（第28次調査12溝）、南側周溝（同13溝）、5号墓の西側周溝（同15溝）、北側周溝（新検出）である。第28次調査時のそのほかの溝についても、おおむね周溝位置を反映しているものと考えられる。

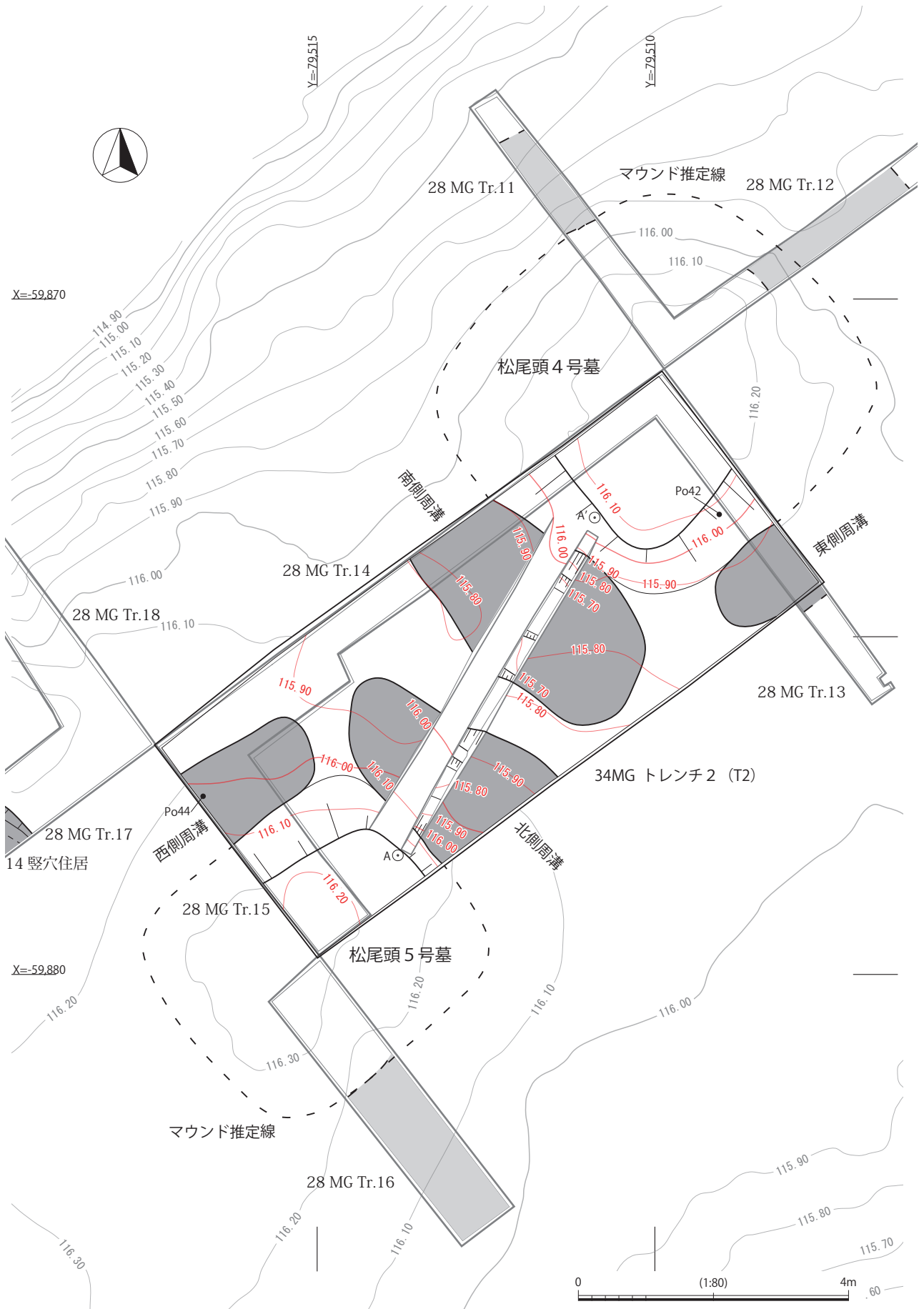
トレンチ全体の掘削は、表土及び遺物包含層のみに留め、墳丘及び周溝を検出した段階で終了した。なお、周溝の切り合い関係を確認するために、4号墓の南側周溝及び5号墓の北側周溝に掛かる位置に土層観察畔とサブトレンチを設定して周溝部分は基盤層まで確認している。

（2）調査の成果

調査の結果、4・5号墓は方形の墳丘を持つ方形周溝墓であることが確認できた。土層確認用ベルトとサブトレンチを設定して掘削を行ったところ、土層断面の観察所見から両者の前後関係は明確にできなかった。5号墓の北側周溝から弥生時代終末期前半の遺物が出土したこと、松尾頭3号墓と同じく周溝の隅が途切れて陸橋状になるなど構造が似ていることから、2基の墳丘墓は3号墓とほぼ同時期の方形周溝墓であると判断した。

① 4号墓

4号墓は、今回検出した南側周溝、東側周溝の範囲と第28次調査時のTr.11・12の位置から、墳丘規模は長軸（南北）7.3 m、短軸（東西）7 mと推定でき、南側周溝底からの残存高は0.43 mである。



第34図 トレンチ2遺構全体図 (松尾頭4号墓・5号墓)

墳丘は3号墓と同じく、周溝掘削土を盛り上げて成形していると考えられる。なお、確認ベルト断面に盛土が混じる層が堆積しており（第35図第3層）、墳丘は後世に削平を受けていると考えられる。

周溝は、東側周溝及び南側周溝を検出した。東側周溝は、幅1.34 m、長さ1.42 m以上、南側周溝は、幅2.17 m、長さ3.67 m以上、墳丘墓外からの深さは0.18 mである。陸橋は南東部を検出し、幅は最小で1.19 mである。サブトレンチや周溝検出面、墳丘直上から土器の破片が出土しているが、時期を特定できるものはない（第49図Po42・43）。また、残存する墳丘頂部で埋葬施設の検出を試みたが確認はできなかった。

②5号墓

5号墓は、今回検出した周溝の範囲と第28次調査時のTr.16の溝の位置から、墳丘規模が長軸（南北）6.6 m、短軸（東西）5.7 mと推定でき、周溝底からの残存高は0.48 mである。墳丘は3号墓と同じく、周溝掘削土を盛り上げて成形していると考えられる。周溝は北側周溝及び西側周溝を検出した。西側周溝は、幅1.27 m、長さ1.84 m以上、北側周溝は、幅2.09 m、長さ2.88 m以上、墳丘墓外からの深さは0.07 mである。陸橋部は北西部を検出し、幅は最小で0.58 mである。北側周溝からは弥生時代終末期前半の器台が出土した（第49図Po46）が、そのほかは弥生時代後期の土器である（第49図Po44・45）。また、残存する墳丘頂部で埋葬施設の検出を試みたが確認はできなかった。

第5節 その他の遺構の調査

（1）弥生時代後期以前の遺構分布と遺構名称（第36図）

墳丘墓群築造以前の遺構の分布状況について確認するため、10区北東部のAベルトより東側では第3層を除去し、面的な調査を行った。なお、松尾頭1区の調査では、弥生時代中期後葉～後期後葉の竪穴住居等が確認されており、第28次調査の際には10区中央のTr.17において弥生時代後期中葉の竪穴住居跡（14竪穴住居）が1棟検出されている。

第33・34次調査において新たに遺構を検出したが、遺構の性格が明らかにできなかったものが多かったため、それぞれの調査回数に通し番号を付けて呼称した（例：3301遺構、3401遺構）。なお、3401遺構及び3402遺構については、第2層下面で検出しており、遺構の時期も弥生時代後期とは断定できていないため、第24表の遺構一覧表に掲載するのみとする。

（2）松尾頭3号墓周辺の弥生時代後期遺構（第36図）

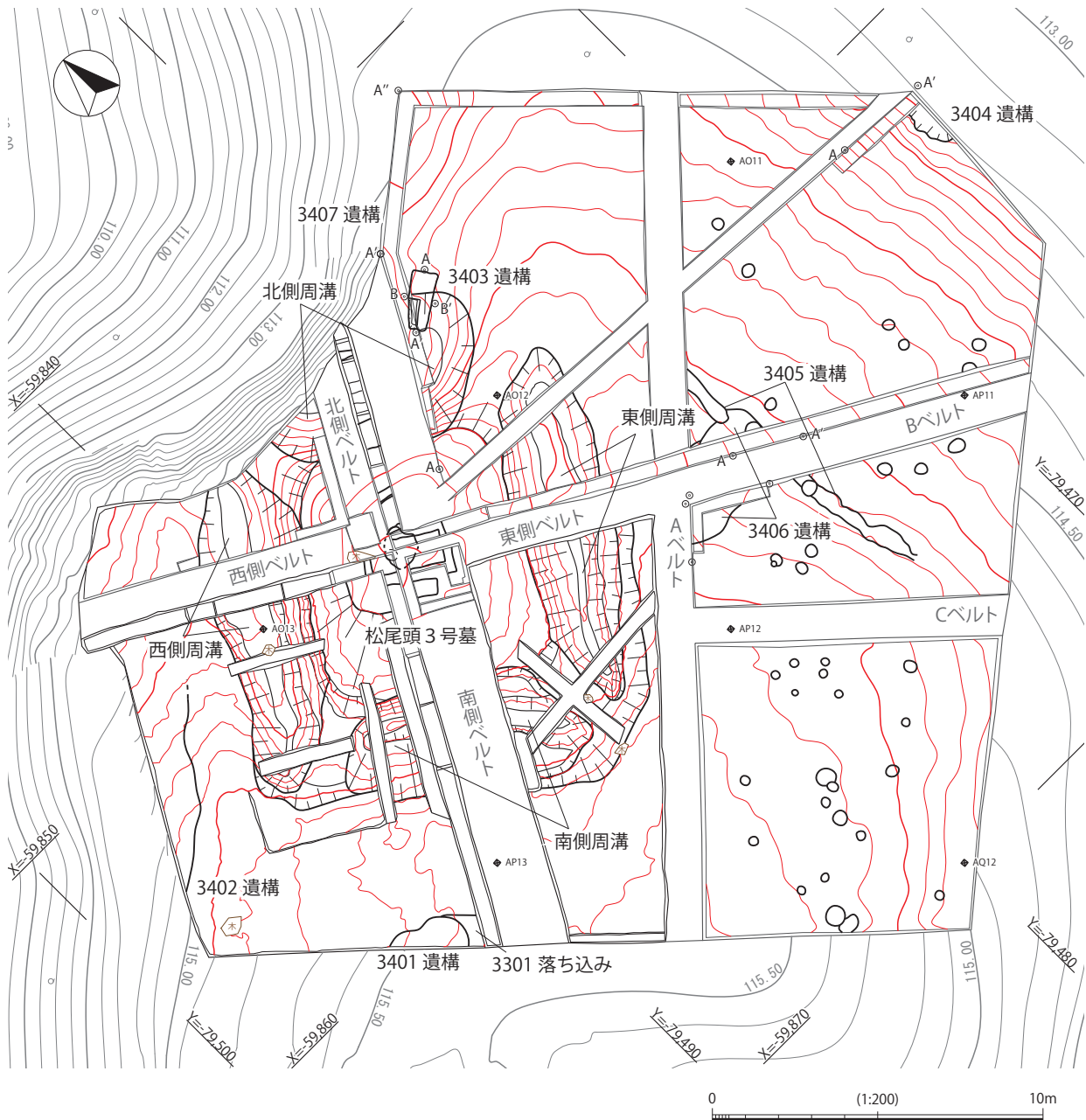
3号墓北側では、北側サブトレンチ付近において2基の遺構を確認した。北側周溝は、弥生時代後期以降の遺物を含む第3層の上面から掘り込まれている。第3層の下面で3403遺構と3407遺構を確認した。

①3403遺構（第37図）

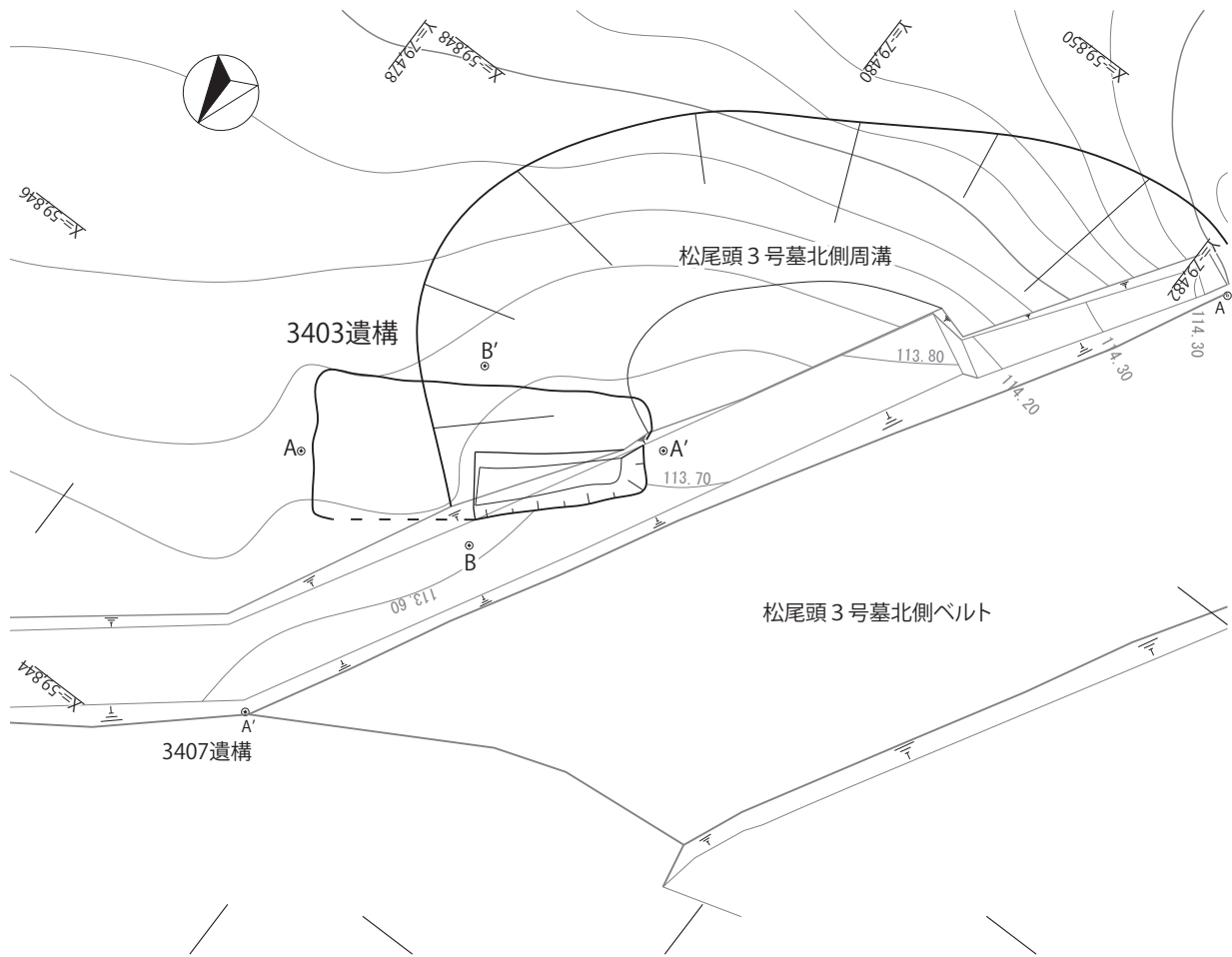
隅丸長方形の土坑である。遺構の南側は3号墓の北側周溝に切られており、後述する3407遺構を切ることがAラインのトレンチ調査によって判明した。遺構の規模は第3層を部分的に除去して確認し、長軸（南北）1.80 m、短軸（東西）0.78 mで深さは0.85 mである。遺構の性格を明らかにするために北側サブトレンチに係る四分割範囲を掘削した。埋葬施設の可能性も考えたが、土層堆積や遺構床面で木棺や小口の痕跡を確認できなかったことから遺構の用途は不明である。8・9層以外に土器（第51図Po49）や炭粒が混入しており、弥生時代後期前葉以降の遺構と考えられる。

② 3407 遺構（第 38 図）

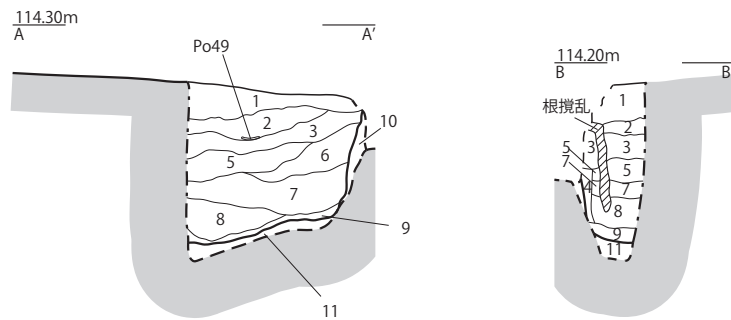
Aラインのトレンチ断面で確認した遺構であり、竪穴住居跡か丘陵斜面部を断面L字状にカットして利用された段状遺構もしくは竪穴住居跡の可能性はある。遺構の南側は3号墓の北側周溝に切られており、東側は3403遺構に切られている。遺構の平面形は不明である。遺構の規模は、南北の立ち上がりの範囲で約4mである。なお、Aライン断面でのみ確認した⑤～⑦層についても、遺構の可能性が高いが、3407遺構に伴うものかどうか判断できなかった。遺構の埋土は4層に分けられるが、①層と②層は土色は異なるものの含有物や堆積状況、しまり具合が酷似しているため、②層の上部が土壌化作用により黒色化したものが①層と考える。①・②層と③層は角張ったブロックを多量に含み、土器片や炭化物が混入することから、人為的に埋め戻されたと判断した。ただし、①・②層はよく締まり空隙がほとんど無い点、③層はしまりが弱く空隙が多い点から、下層は大雑把に埋め戻され、上層は締め固めながら埋め戻されたことが推察できる。なお、④層はよくしまり、混入物が少ない粘土



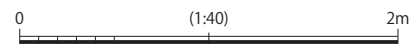
第 36 図 松尾頭 10 区北東部遺構全体図



3403遺構断面図



- | | | | | | |
|----|----------|-----|-------|--------------------------------------------|----------------------|
| 1 | 10YR4/6 | 褐色 | 粘質シルト | φ 1~5mm炭粒多量に含む。(層の上側2~4cm程度黒色化。10YR2/3黒褐色) | 3403遺構埋土
第5層(基盤層) |
| 2 | 7.5YR4/4 | 褐色 | 粘質シルト | φ 5~10mm炭粒多量に含む。土器片含む。 | |
| 3 | 10YR4/6 | 褐色 | 粘質シルト | φ 5~10mm炭粒多量に含む。土器片含む。 | |
| 4 | 7.5YR4/6 | 褐色 | 粘質シルト | 暗褐色ブロック40%程度含む。 | |
| 5 | 7.5YR4/6 | 褐色 | 粘質シルト | φ 20mm程度炭粒含む。土器細片含む。 | |
| 6 | 7.5YR4/6 | 褐色 | 粘質シルト | φ 2~5mm炭粒含む。他の埋土に比べて固くしまる。 | |
| 7 | 7.5YR5/6 | 明褐色 | 粘質シルト | φ 30mm程度炭化物含む。土器細片含む。 | |
| 8 | 7.5YR5/8 | 明褐色 | 粘質シルト | φ 1mm程度白色砂含む。 | |
| 9 | 7.5YR5/8 | 明褐色 | 粘質シルト | φ 1~3mm白色砂多量に含む。シャリシャリ。 | |
| 10 | 7.5YR4/6 | 褐色 | 粘質シルト | | |
| 11 | 7.5YR6/8 | 橙色 | 砂質シルト | φ 5~20mm白色・黄色・橙色砂岩(?)ブロック多量に含む。シャリシャリ。 | |

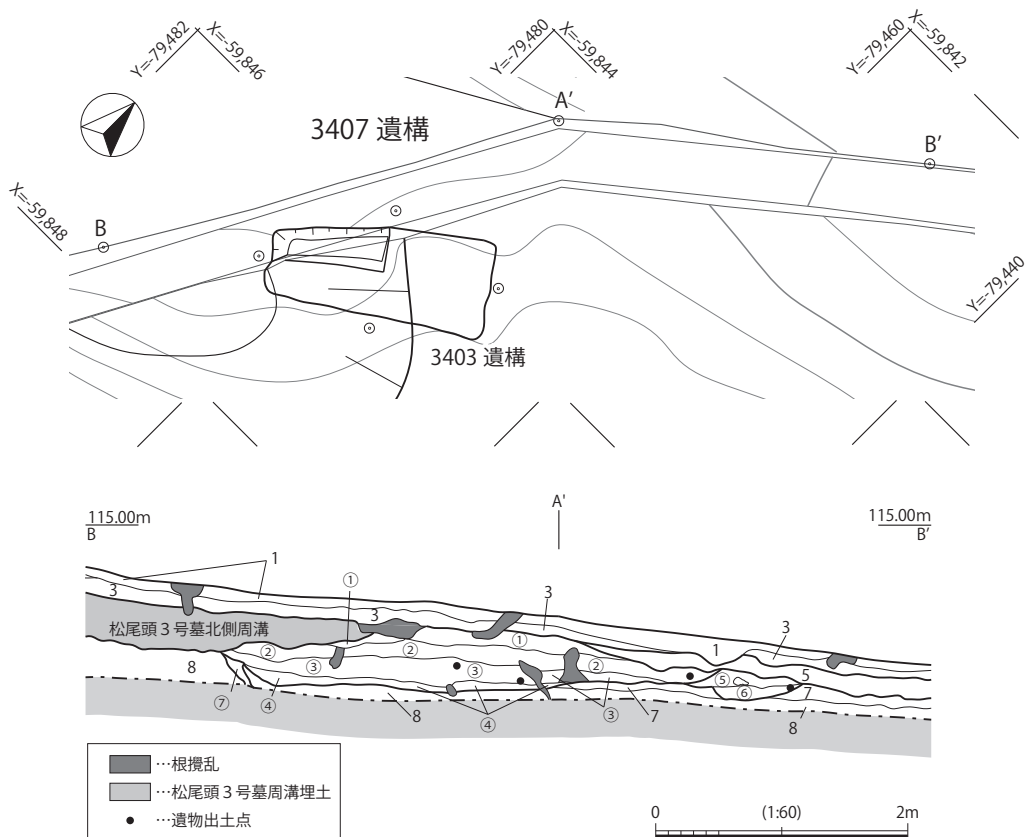


第37図 3403遺構平面・土層断面図

質の層が水平に堆積していることから、貼床の可能性はある。3407 遺構埋土を分析した結果、種子炭化物が出土している。また、年代測定の結果は、遺物の年代と齟齬が少ない（第V章第5節参照）。遺物は、①～③層から土器片が出土し（第51図）、黒曜石の剥片も確認している。Po60については赤色顔料分析を行い、外器面にベンガラが付着していたことが判明した（第V章第6節参照）。出土遺物から、3407 遺構の埋没時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

(3) 10区北東部（第36図）

北東部東側斜面では弥生時代終末期の遺構は確認できなかったため、遺物包含層2を掘削して遺物包含層2の下面で遺構検出を行った。その結果、北東端（3404 遺構）や A ベルトと B ベルトが交差



<遺構層序>

①	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	固くしまる。φ1mm程度白色砂含む。φ1~5mm炭粒含む。土器片含む。②層の土壌化層。	} 3407遺構
②	10YR4/6	褐色	粘質シルト	固くしまる。φ1mm程度白色砂含む。φ1~5mm炭粒含む。土器片含む。角柱状ブロックあり。	
③	10YR4/4	褐色	粘質シルト	しまるが空隙あり。全体的に土がブロック状になり、②層よりも角柱状ブロックが多い。φ1~10mm炭粒含む。土器片含む。	
④	5YR5/6	明赤褐色	粘質シルト	φ1mm程度白色砂含む。φ1mm程度炭粒含む。φ1mm程度炭粒ごくわずかに含む。	} 別遺構か
⑤	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	φ1~5mm炭粒含む。	
⑥	7.5YR3/2	黒褐色	粘質シルト	φ1~2mm炭粒含む。土器片含む。	
⑦	10YR3/4	暗褐色	粘土	固くしまる。3407遺構に伴うものか不明。	

<基本層序>

1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質極細粒砂	根の攪乱が著しい。腐植混じる。極粗粒砂・礫含む。	□表土
3	7.5YR4/4	褐色	粘質シルト		□第1層
5	10YR3/2	黒褐色シルト	黒ボク		□第3層
7	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	第2層がブロック状に混じる	□第4層(基盤層風化)
8	7.5YR5/6	明褐色	粘土(ローム)		□第5層(基盤層)

※基本層序は、第19図の層番号に対応。

第38図 3407 遺構土層断面及び遺物分布図

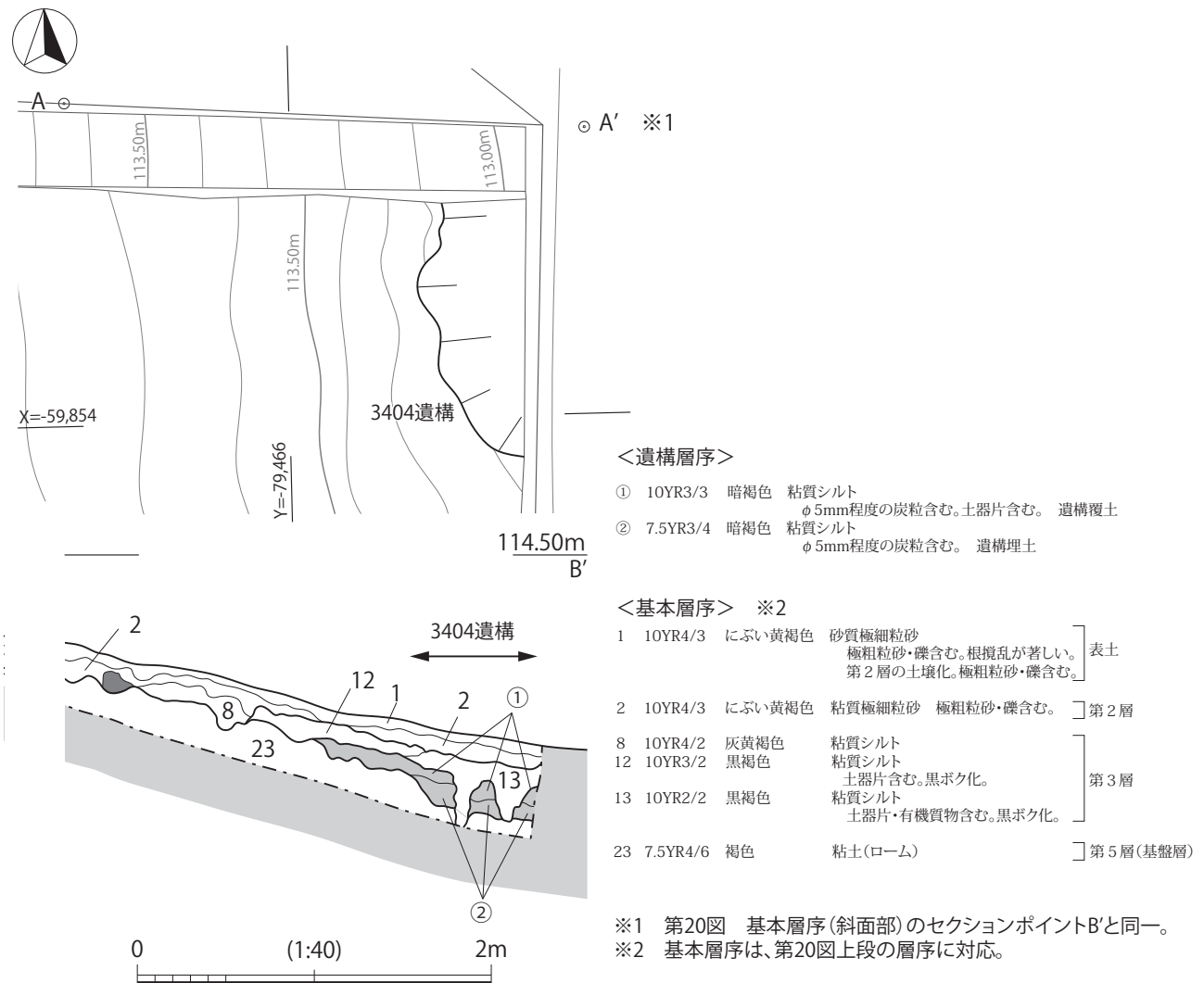
する地点（3406 遺構）で土坑の可能性が高い遺構、溝状の遺構（3405 遺構）を確認したが、そのほかに目立った遺構はなく、性格不明のピットを検出したのみであった。これまでの妻木晩田遺跡の遺構分布をみても、丘陵頂部は堅穴住居などの大型の遺構は少なく、丘陵から少し下がった地点に分布することが多いことから、今回の調査範囲外の丘陵斜面付近に存在する可能性がある。

① 3404 遺構（第 39 図）

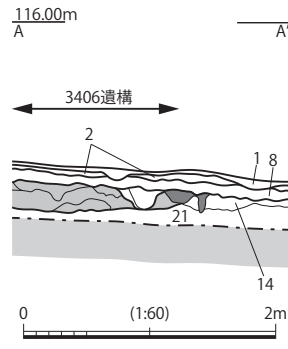
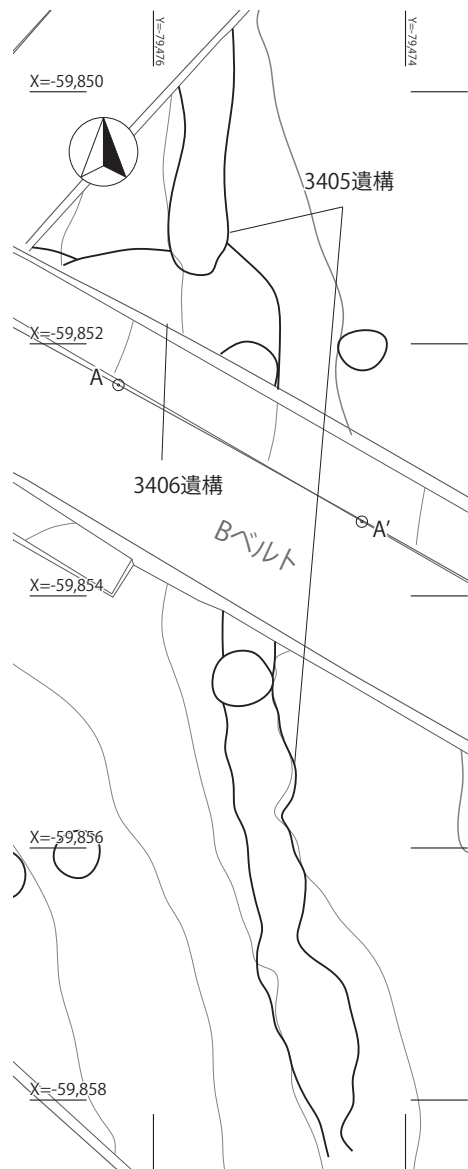
Bラインの北東端で検出した遺構であり、土坑の可能性はある。ほとんどが調査区外にあるため全体形は不明である。検出範囲における遺構の規模は、東西 1.89 m、南北 0.58 m、深さ 0.2 mである。遺構内から遺物は出土しなかったが、3404 遺構を覆う 2・3層から弥生時代後期前葉の遺物が出土している（第 52 図 Po74）。

② 3405 遺構（第 40 図）

Cライン付近で検出した溝状遺構である。ほぼ真北から真南方向に向かう。北側はAベルトより先に続いているものとみられる。土層断面は、Cベルトで確認しており、3406 遺構を切ることがわかっている。検出できた規模は、南北（長さ）8.85 m、幅約 0.56 m、深さ 0.17 mである。遺構内には土器の小片が含まれる。遺構上面で出土した土器から、時期は弥生時代後期以降とみられる（第 51 図 Po51）。



第 39 図 3404 遺構 平面・土層断面図



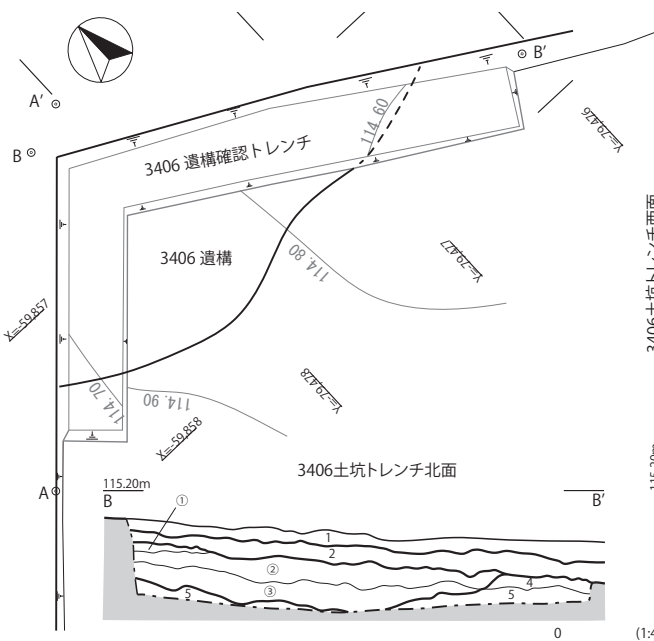
<遺構層序>

- ① 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト
10YR3/4暗褐色粘質シルトブロック40%含む
(下方に多い)。
- ② 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト

<基本層序>

- | | | |
|----|-----------------------------------------------------------------------------|-----|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト
腐植まじり。根攪乱が著しい。第2層の土壌化。
極粗粒砂・礫含む。 | 表土 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト 極粗粒砂・礫含む。 | 第2層 |
| 8 | 10YR2/2 黒褐色 粘質シルト
10YR3/2黒褐色粘質シルトブロック40%含む。
土器片(須恵器・弥生土器)・石器含む。度炭粒含む。 | |
| 14 | 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト
10YR2/2黒褐色粘質シルトブロック30%含む。
φ2~3mm炭粒含む。 | 第4層 |
| 21 | 7.5YR4/4 褐色 粘土(ローム) 固くしまる。 | |

第40図 3405 遺構平面・土層断面図



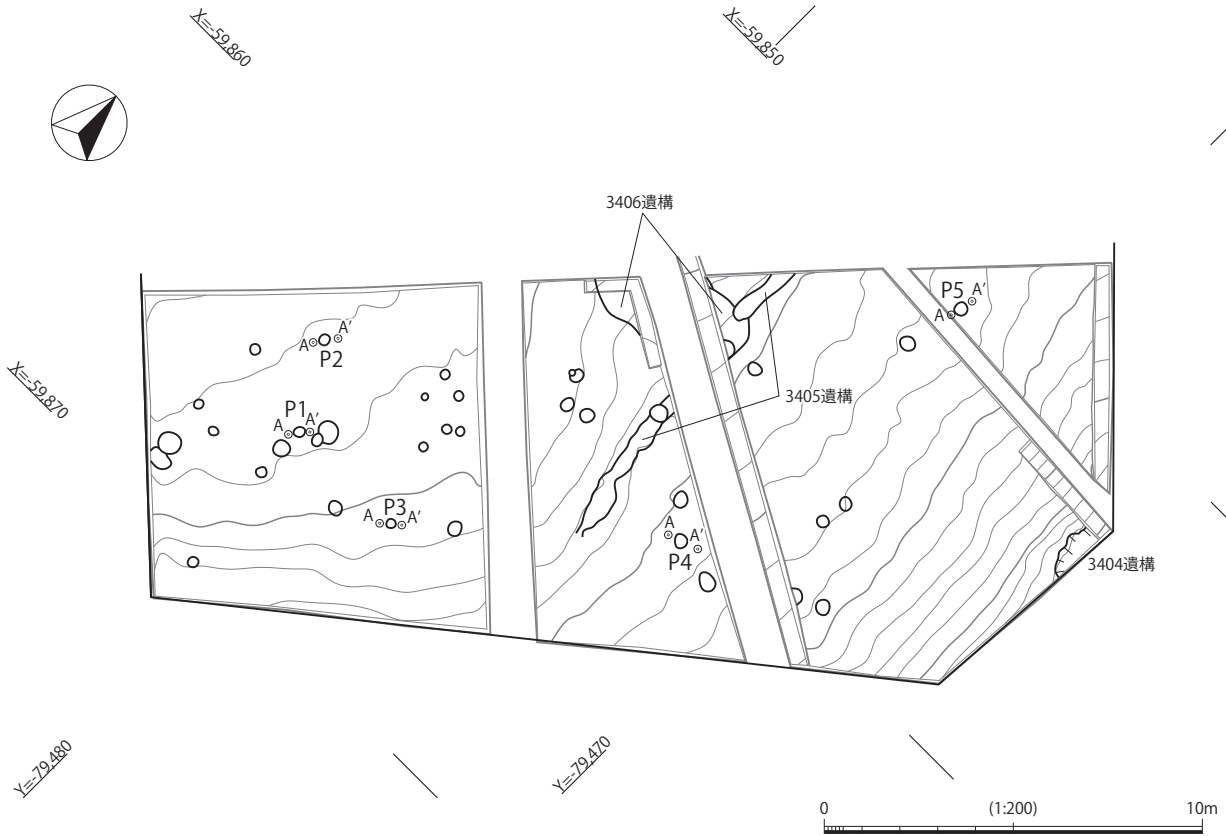
<遺構層序>

- ① 10YR4/4 褐色 粘質シルト
φ1mm程度炭粒含む。
第2層に比べしまる。
- ② 10YR4/4 褐色 粘質シルト
φ1~5mm炭粒含む。
第4層に比べて空隙が多い。
しまりもやや弱い。
- ③ 7.5YR4/4 褐色 粘質シルト
φ1~2mm炭粒含む。
空隙があり、第5層に比べてしまる。

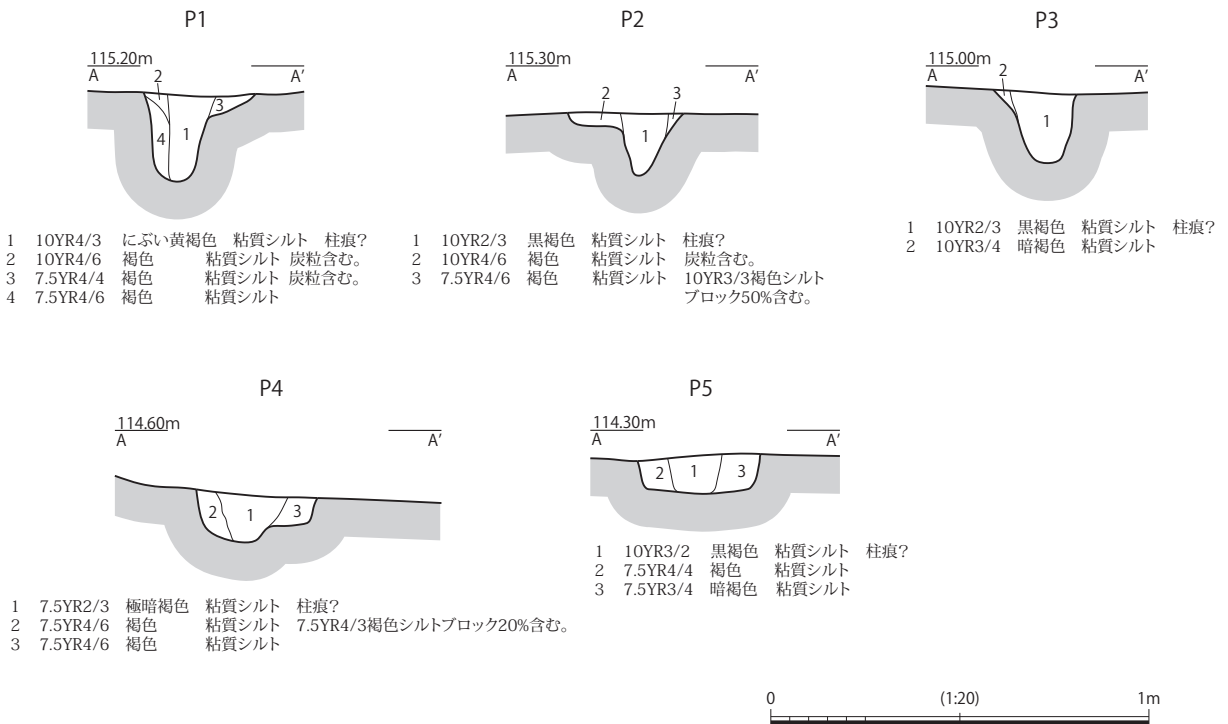
<基本層序>

- | | | |
|---|-------------------------------------------------------------------|----------|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 砂質極細粒砂
極粗粒砂・礫含む。
根攪乱が著しい。 | 表土 |
| 2 | 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト
φ1~2mm炭粒含む。 | 第3層 |
| 3 | 10YR4/6 褐色 粘質シルト
10YR4/3にぶい黄褐色
シルトブロック40%含む。
φ1~2mm炭粒含む。 | |
| 4 | 10YR4/6 褐色 粘土(ローム) | 第5層(基盤層) |
| 5 | 7.5YR4/4 褐色 粘土(ローム) | |

第41図 3406 遺構平面・土層断面図

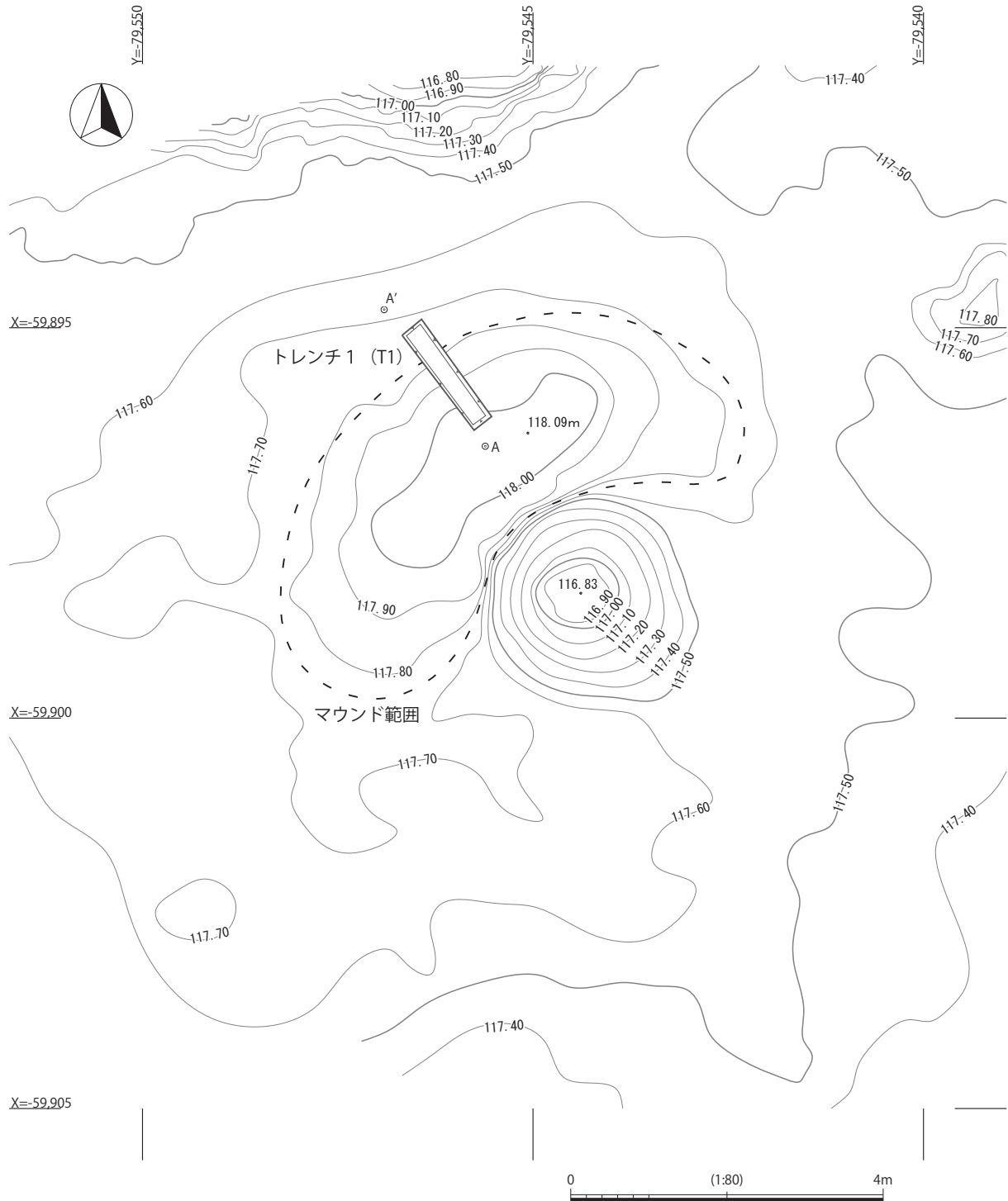


<各ピット位置図>



<各ピット断面図>

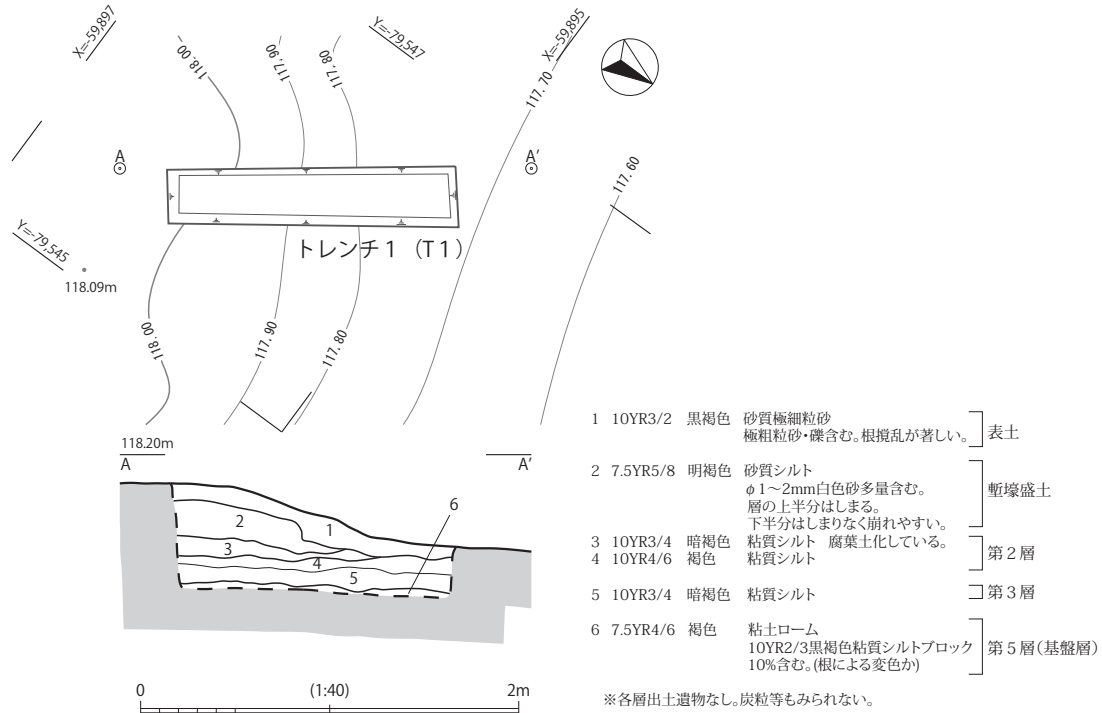
第 42 図 半裁ピット土層断面図



第 43 図 マウンド状地形 E 地形測量図

③ 3406 遺構 (第 41 図)

C ライン付近で検出した土坑状遺構である。C ライン断面では、3405 遺構や複数のピットに切られる。堆積を確認するため、さらに A ベルト・B ベルトに沿ってサブトレンチを設定して調査を行った。その結果、遺構の平面形状は隅丸長方形であり、遺構の規模は、東西 4.4 m、南北 2.0 m、深さ 0.26 m である。埋土は水平に 2 層堆積するが、炭化物を含むのみで遺物は出土しなかったため、遺構の性格は不明である。自然科学分析の結果から、遺構の時期は概ね弥生時代中期後葉～後期前葉頃とみられる (第 V 章第 6 節参照)。



第44図 トレンチ1平面・土層断面図

④ピット群 (第42図)

ピットは北東部調査区東側の範囲で37基確認した。そのうち埋土の異なる10基について半裁して土層堆積を確認した結果、そのうち5基を柱痕状の堆積から遺構と認めた(第42図P1~5)。よって、P1~5と同じ埋土が確認できるものは、遺構の可能性が高い。ピット群にはまともではなく、建物や柵列のように列状になるものも認められなかったため、遺構の性格は不明であるが、P1~3については断面から杭状のものと考えられる。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。ただし、Cベルトのトレンチを調査した際ピットの範囲で出土した遺物(第52図Po71)は弥生時代後期前葉~中葉を示す。

(4) 10区南西部 (第18図)

10区西側では、第28次調査において5号墓の南側に設定したTr.17で弥生時代後期中葉の竪穴住居(焼失住居)を検出している(第13図)。それ以外の地点でも明確な窪地が存在し、丘陵の稜線からなだらかに下る東側の傾斜変換点から緩斜面に竪穴住居等が分布することが想定できる。第34次調査では10区西側でもトレンチ調査を行う計画であったが、松尾頭墳丘墓群の調査を優先したため実施しなかった。松尾頭10区の丘陵全体の遺構分布については将来的な課題としたい。

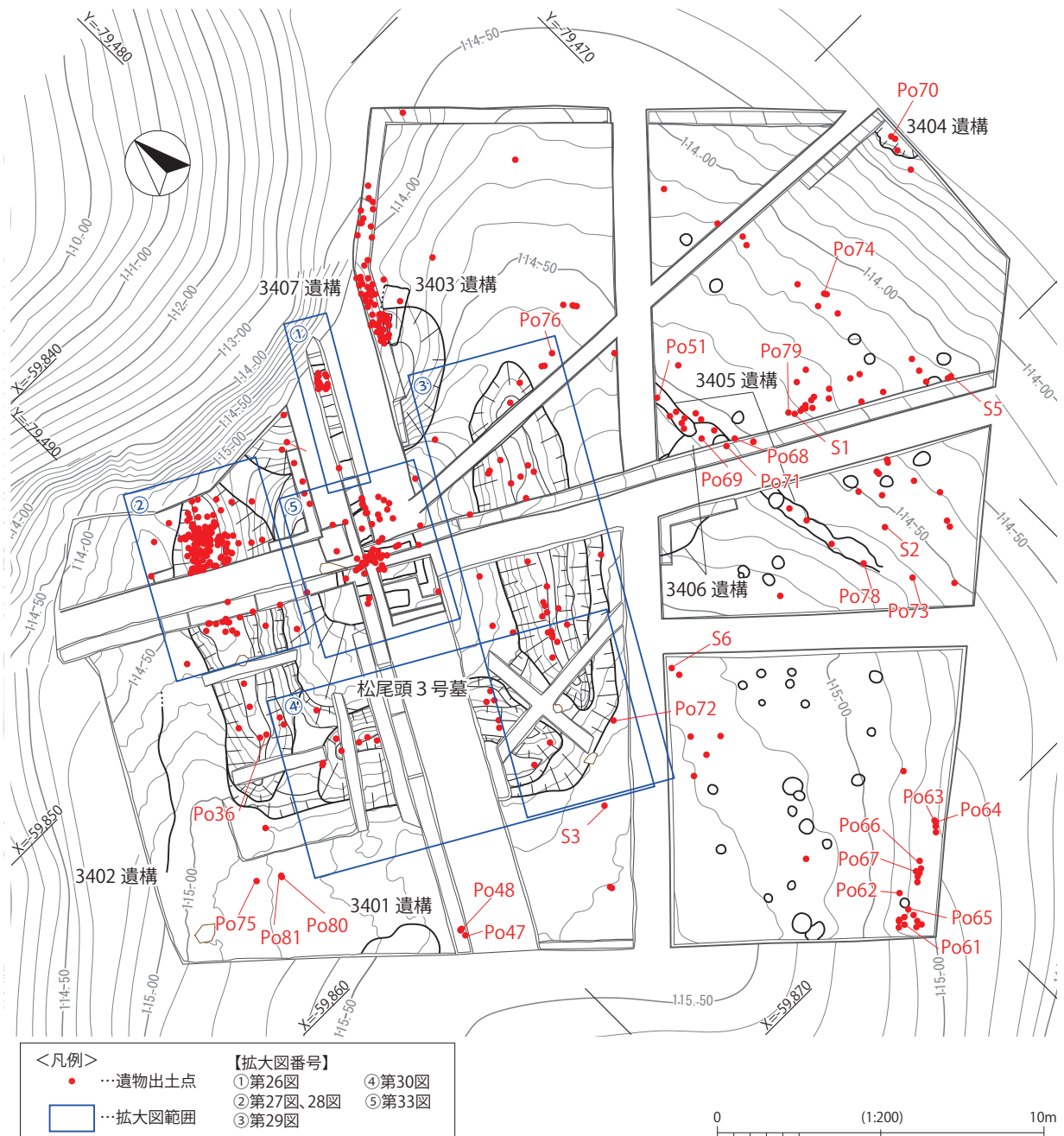
(5) 太平洋戦争末期の遺構 (第43、44図)

マウンド状地形Eは、松尾頭10区の丘陵上で最南端に位置する。第28次調査の踏査で確認し、墳丘墓や古墳の可能性があるので、今回トレンチ調査を行った。

マウンド状地形Eは、東側はほとんど平坦で西側が高い三日月状に近いマウンドを持ち、マウンドの最高点はこの丘陵で最も高い標高118.09mである。そして、マウンドの中央には、盗掘坑のような円形の坑が確認できた。まずはマウンドと円坑の関係を確認するため、マウンド上や坑内の落ち葉等を除去し、マウンドの正確な形を測量した(写真14)。その結果、坑は正円形で深さは0.7mであり、坑の東側には明確なマウンドを持たないことが判明した(第15図)。過去の松尾頭9区の調査

において、同様のマウンドを持つ太平洋戦争末期の立射式塹壕（たこ壺）が複数基確認されており（鳥取県教育委員会 2011）、マウンド状地形 E は墳丘墓ではない可能性が高まった。よって、当初は坑の部分を含めて十字にトレンチを設定する予定であったが、マウンドの堆積のみ確認することとし、マウンド中央の頂部から北西側に幅 30cm、長さ 150cm のトレンチ 1（T1）を設定した。

調査の結果、マウンドの堆積は基盤層掘削土であり（第 44 図 2 層）、その下に基本層序第 2 層に相当する腐植土層（3 層）が確認できた。マウンドは表面だけ締め固められており内部は全く締まりがなく、弥生墳丘墓の盛土とは堆積状況が異なる。マウンドの厚さは約 20cm、腐植土層を含めると約 30cm である。さらに、腐植土層の下は基本層序第 3 層相当層が水平に堆積し、直下に基盤層となる粘土ロームを検出した。これらのことから、地表面の落ち葉や草木を一緒に掘って盛った最初の堆積が第 44 図 3 層であり、引き続いて一人用の穴を掘ってその西側に基盤層の掘削土を積み上げて土塁と



第 45 図 松尾頭 10 区北東部遺物分布図

した作業手順が想像でき、規模や坑の深さが過去に調査された塹壕や文献と類似することから、この遺構は太平洋戦争末期の塹壕であると断定した^{註2}。なお、T1の調査では古い時代の遺構は検出できず、トレンチ内や周辺を含めて、近代や弥生時代の遺物は出土していない。

第6節 出土遺物

(1) 調査区全体の遺物出土状況

報告書作成にあたり、第28次調査を含めて墳丘墓に関わる出土遺物の接合関係と個体数を確認した。過去の年報掲載の遺物も含まれるが、中には再実測したものや第34次調査出土遺物と接合したものがあつた。調査全体で出土した遺物は破片が多く、完形品はごくわずかである。土器については、個体数として認識できたのは10区全体で81点であり、内、3号墓からは40点が出土した(第46～53図)。3号墓からはこのほかに、土製品1点、鉄器1点が出土している。4号墓、5号墓は点数が少なく、個体としてはそれぞれ2点と3点で、マウンド状地形E付近では遺物が出土していない。

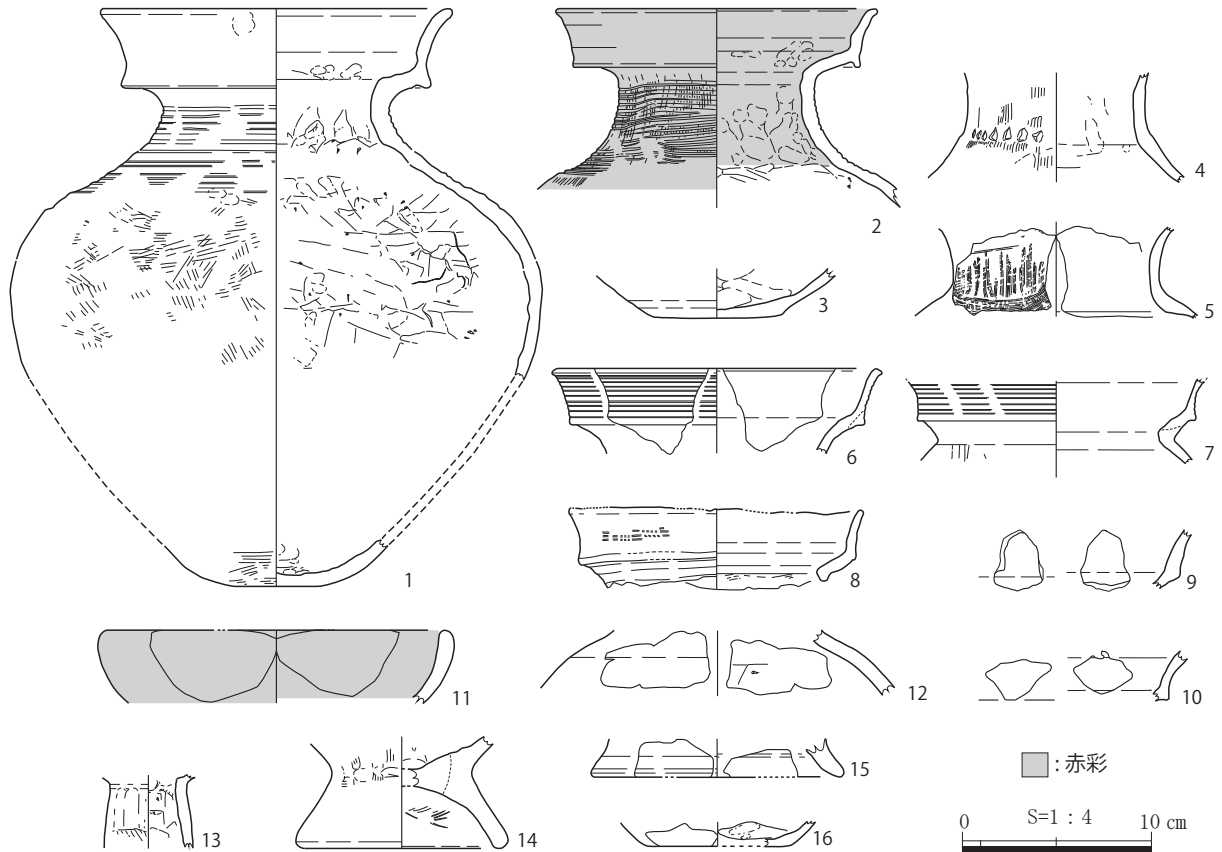
10区北東部では、表土、第2層、第3層から弥生土器、須恵器、石器が出土している。また、10区丘陵平坦面では石器を、北東側斜面部では須恵器を表採している。

(2) 松尾頭3号墓(第46～48図)

3号墓では、表土、周溝、墳頂部、盛土、第3層から弥生土器が出土している。識別できた個体数は、3号墓の築造時期とみられる弥生時代終末期前半に該当するものが29点、弥生時代後期または時期不明のものが13点である。器種は壺、甕、高坏、器台があり、ほとんどが壺・甕で、高坏・器台の点数は少ない。出土位置は西側周溝が最も多く、墳頂部、北側周溝がそれに次ぐ。墳頂の遺物は小片であること、それぞれから出土した遺物に同一個体が確認できたこと、周溝内の出土状況から破片の位置が広範囲に広がることから、墳頂部で祭祀に使用された土器が転落して周溝内に散逸したと想定できる。

3号墓出土遺物の中で特筆すべきは、吉備北部地域の土器を模倣した「模倣土器」が含まれる点である^{註3}(第46図Po1・2、第47図Po17・24)。いずれも壺であり、西側周溝、北側周溝、墳頂部から出土した。模倣土器と判断した特徴の一つは、頸部をタテハケ調整後、多条の沈線が引かれている点である。さらに全体のプロポーシヨンをみると、いずれも口縁部は在地の形態をとるが、特にPo1・2・24は頸部がハ字状に開いて胴部が張り、複合口縁内側が明瞭な平坦面をもって屈曲し頸部に至る点は、当該期の在地の土器にはみられない特徴である。

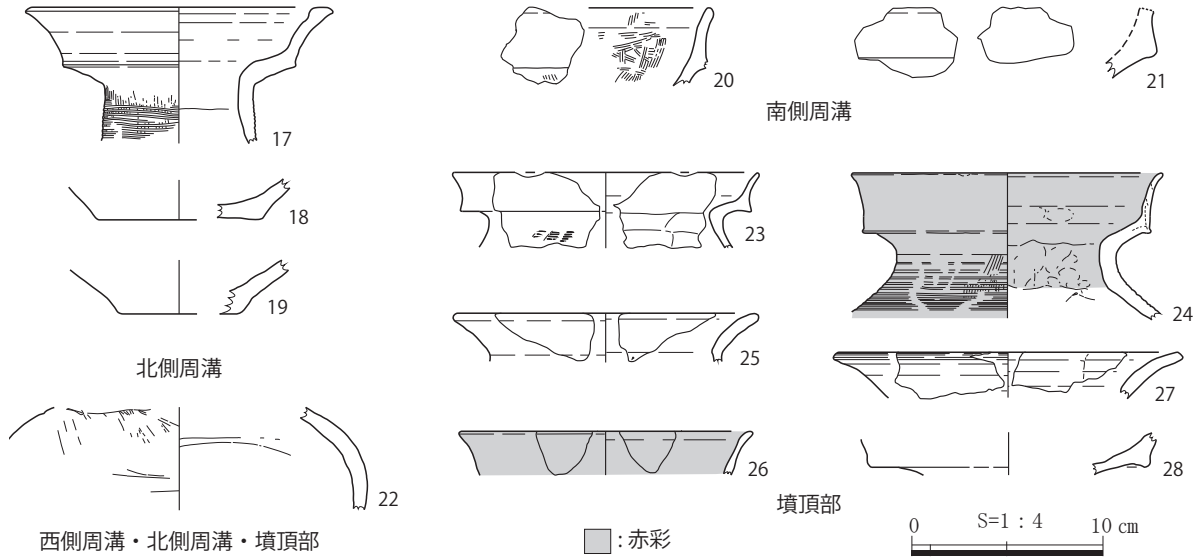
以上を踏まえ、各遺物の詳細について説明する。Po1～5、17、24は壺である。Po1・2・17・24は頸部にタテハケ調整後多条の沈線を施す。Po3は出土位置からPo2の底部と考えられるが接点はない。平底を呈し、胴部にむけての立ち上がり方から、Po1と同様の形態であったと推察できる。Po4は頸部に板状工具小口の刺突による列点文を施す。頸部下に列点文を施す壺は当該期の在地土器には見当たらず、他地域の影響を受けた可能性がある。Po5は外面に細かく丁寧なミガキを施す。Po1は胎土に赤色顔料を練り込んでおり、赤褐色に発色し、Po2・24は外器面と内器面の頸部下端まで赤色顔料が塗布されている(第V章第6節参照)。Po21・25・27は壺の口縁部の可能性がある。Po6～10・20は甕口縁部である。擬凹線文を残すもの(Po6・7)とナデ消すもの(Po8)がある。Po23は甕口縁部から肩部にかけて残存しており、肩部にハケ状工具を用いた連続刺突



第46図 松尾頭3号墓西側周溝出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	層位	器種	部位	法量 (cm. ※:復元, △:残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
						器高	口径	底径					
1	(34MG) 35、100、122ほか (33MG) 61、65 (28MG) 86、87、99ほか	10区 北東部	埋土①、②	壺	口縁部～ 頸部	△ 30.6	※ 18.4	※ 4.4	外面：口縁部ナデ、頸部貝殻腹縁による多条沈線、肩部～底部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部指押さえ、ナデ、絞り痕、肩部～胴部指押さえ成形後、ハケ状工具によるケズリ、底部指押さえ	密	良好	外面：橙 内面：橙～明赤褐	胎土にベンガラ多い
2	(34MG) 49ほか (33MG) 69 (28MG) 78ほか	10区 北東部	埋土②	壺	口縁部～ 肩部	△ 10.5	※ 17.0	-	外面：口縁部ナデ、頸部貝殻腹縁による多条沈線 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ、指押さえ、絞り痕、肩部ケズリ	密	良好	外面：明黄褐 内面：明黄褐	表面にベンガラ
3	(34MG) 163ほか	10区 北東部	埋土②	甕?	底部	△ 2.6	-	7	外面：ナデ、ミガキ 内面：指押さえ	密	良好	外面：黄橙 内面：にぶい黄橙	
4	(34MG) 31、41ほか	10区 北東部	埋土①	壺	頸部	△ 5.8	-	-	外面：頸部ナデ、列点文、ハケメ 内面：ハケメ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
5	(28MG) 92	28MG Tr. 7		壺	頸部	△ 4.8	-	-	外面：頸部ミガキ 内面：頸部ナデ?、頸部下ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
6	(34MG) 121	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 4.5	※ 16.8	-	外面：口縁部 10条擬凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部～頸部ナデ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
7	(34MG) 104、120	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 4.6	-	-	外面：口縁部貝殻腹縁による擬凹線文後ナデ、頸部ナデ、下半タテ方向ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部上半ナデ、下半ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
8	(33MG) 76	10区 北東部	埋土②	甕	口縁部 (完形)	△ 4.4	※ 15.6	-	外面：口縁部貝殻腹縁による擬凹線文後ナデ消し、口縁下部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ?	密	良好	外面：浅黄橙～褐灰 内面：にぶい黄橙	
9	(34MG) 45	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 3.1	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
10	(34MG) 60	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 2.2	-	-	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	
11	(28MG) 268-1	28MG Tr. 7	床直	高坏	口縁部	△ 3.9	※ 18.0	-	外面：口縁部ヨコ方向ハケメ、ナデ 内面：ヨコ方向ケズリ後ナデ	密	良好	外面：赤～にぶい黄褐 内面：にぶい赤褐	ベンガラ塗布
12	(34MG) 32ほか	10区 北東部	埋土①	甕?	胴部	△ 3.4	-	-	外面：ナデ 内面：ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい橙	
13	(34MG) 156	10区 北東部	埋土① 下面	高坏	脚部	△ 3.8	-	-	外面：脚接合部ナデ、脚部ミガキ、脚部下半ハケメ 内面：ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
14	(28MG) 80、96	28MG Tr. 7	埋土①	低脚坏?	脚部	△ 5.9	※ 10.6	-	外面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、下半ハケメ 内面：口縁部ミガキ?、頸部下半指頭圧痕とナデ?	密	良好	外面：にぶい橙～ にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
15	(28MG) 268-2	28MG Tr. 7	埋土② 下面	甕	脚部	△ 2.2	※ 15.6	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄褐 内面：にぶい黄褐	
16	(34MG) 67、136	10区 北東部	埋土①	不明	底部	△ 1.3	-	※ 7.8	外面：風化内面：指押さえ	やや粗	良好	外面：橙 内面：にぶい橙	

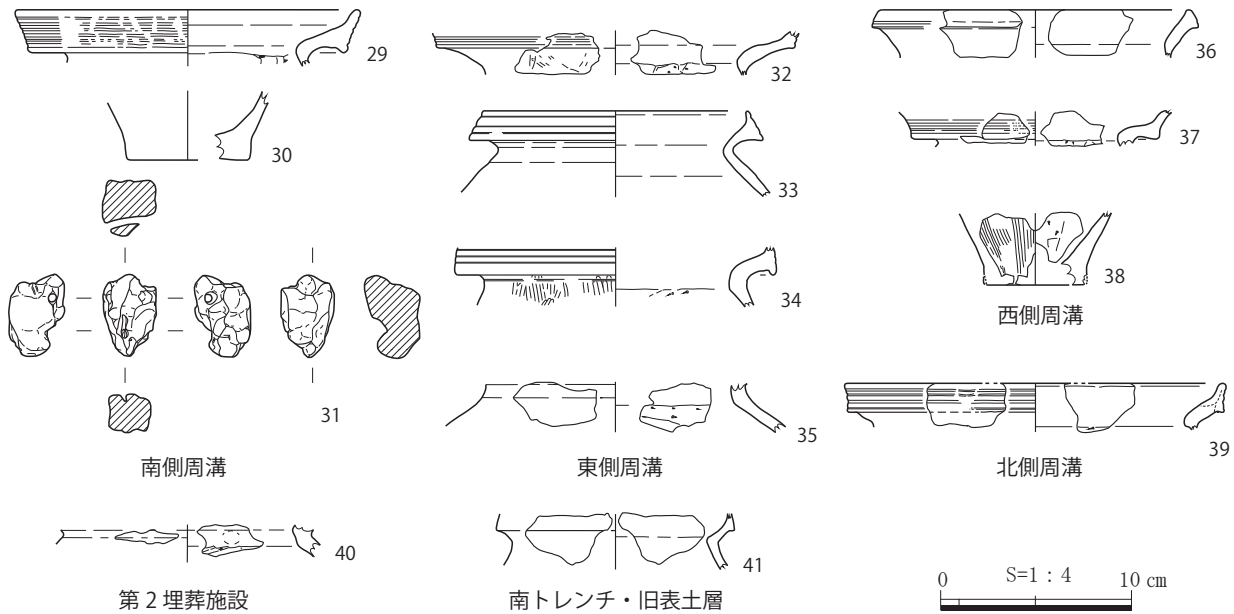


第47図 松尾頭3号墓北・南側周溝、墳頂部出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径					
17	(33MG) 21、22、24、29、30、32、33、34、38、41	10区北東部	北側周溝	埋土①下面	壺	口縁部～頸部	△7.1	※15.6	-	外面：口縁部ナデ 頸部上半タテハケ後ナデ、 頸部下半に貝殻腹線による 多条沈線文 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ?	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
18	(33MG) 40	10区北東部	北側周溝	埋土①下面	壺?	底部	△2.1	-	※8.6	内外面とも風化により調整不明	密	良好	外面：灰黄褐 内面：明黄褐	
19	(33MG) 31	10区北東部	北側周溝	埋土①下面	壺?	底部	△2.8	-	※6.0	内外面とも風化により調整不明	密	良好	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	
20	(33MG) 72	10区北東部	南側周溝	埋土②	壺	口縁部	△5.1	-	-	外面：口縁下端部以下ナデ? 内面：ミガキ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
21	(28MG) 171	28MG Tr10	9溝(南側周溝)	上面	壺	口縁下部	△3.6	-	-	外面：ナデ 内面：風化により調整不明	密	良好	外面：浅黄橙 内面：橙	
22	(34MG) 81、88、89、114、190、254、(33MG) 10 (28MG) 260	10区北東部	西側周溝 北側周溝 墳頂部	埋土① 埋土① 表土	壺	胴部	△5.35	-	-	外面：肩部に擬凹線文、胴部ハケメ 内面：ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：灰黄	
23	(33MG) 1	10区北東部	墳頂部 17土坑	表土上面	壺	口縁部～肩部	△3.9	※15.8	-	外面：肩部にハケ状工具による連続 刺突文 内面：頸部ヘラケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
24	(28MG) 176、177	10区北東部	墳頂部	表土	壺	口縁部～肩上部	△7.6	※16.2	-	外面：口縁部ハケ状工具によるナデ、 頸部タテ方向のハケメ後11条 以上の多条沈線文 内面：口縁部ナデ、指押さえ 頸部指押さえ後ナデ、ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	ベンガラ塗布
25	(34MG) 22 (33MG) 13、140	10区北東部	墳頂部 17土坑	上面	壺	口縁部	△2.5	※15.4	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄～ 橙 内面：にぶい黄～ 灰黄褐	
26	(34MG) 10	10区北東部	墳頂部 攪乱	下層	高坏?	口縁部	△2.3	※15.2	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	内外面 赤彩
27	(34MG) 21	10区北東部	墳頂部 17土坑	上面	壺?	口縁部	△2.4	※17.8	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄橙 ～褐灰 内面：にぶい黄橙	
28	(34MG) 199	10区北東部	墳頂部 第2層	表土	器台	口縁部	△2.2	-	-	外面：ナデ 内面：風化により調整不明	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	

文を施す。Po 8は本章第3節でも触れたが、出土状況と頸部の破面状態から器台として転用されたものとする。Po12は甕か壺の肩部、Po22は壺肩部にあたり、頸部との境界付近に擬凹線文を施す。Po16・18・19は壺か甕の底部であり、平底を呈す。Po16は二次的に比熱している。Po11・26は高坏の坏部の可能性がある。Po13は高坏脚部である。調整は不明瞭で器壁も薄い。Po14・15は低脚坏



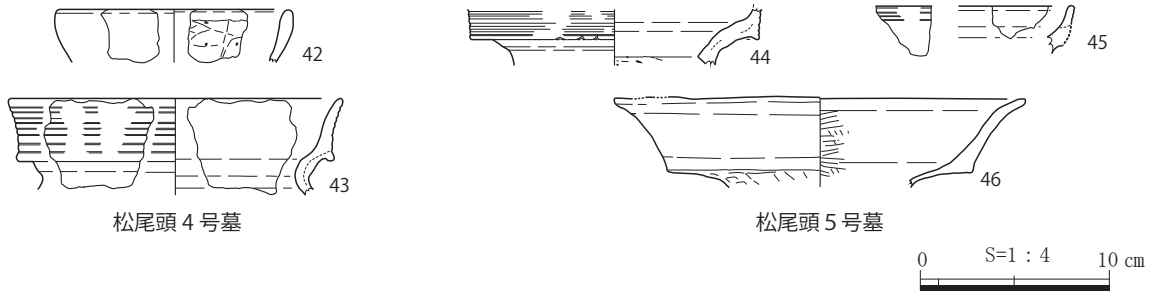
第48図 松尾頭3号墓出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径					
29	(33MG) 74 (28MG) 170	10区 北東部	南側周溝	埋土 ②	壺	口縁部~ 頸部	△ 3.0	※ 18.0	-	外面：口縁部6条の平行沈線文 口縁部下~頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
30	(33MG) 73	10区 北東部	南側周溝	埋土 ②	壺	底部	△ 3.6	-	※ 6.4	内外面とも風化により調整不明	密	良好	外面：明黄褐 内面：黄褐	
31	(33MG) 57	10区 北東部	南側周溝	埋土 ①下面	土製品	-	長 4.3	幅 2.8	厚 2.9	外面被熱、破面5面、貫通孔1、未貫通孔1	密	良好	外面：明黄褐	
32	(33MG) 7	10区 北東部	東側周溝	表土 上面	壺?	口縁部	△ 2.3	-	-	外面：口縁部に2条以上の凹線文 口縁部下~頸部上半ナデ・下半ハケメ 内面：口縁部~頸部工具ナデ・頸部下ケズリ	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
33	(34MG) 12	10区 北東部	東側周溝	埋土 ①	壺	口縁部~ 胸部	△ 4.5	※ 13.8	-	外面：口縁部に行沈線3条、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部上半ナデ・下半ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：にぶい黄橙	外器ス ス付着
34	(33MG) 75	10区 北東部	東側周溝	埋土 ②	壺	口縁部~ 頸部	△ 3.1	-	-	外面：口縁部ナデ、頸部以下ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	やや粗	良好	外面：黄橙 内面：橙	口縁端 部欠損
35	(34MG) 6	10区 北東部	東側周溝	埋土①	壺	頸部	△ 2.6	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ、ケズリ	やや粗	良好	外面：灰黄褐 内面：にぶい黄褐	
36	(33MG) 82	10区 北東部	西側周溝	埋土 ②	壺	口縁部	△ 2.5	※ 16.0	-	外面：口縁部に本数不明の沈線? 内面：風化により調整不明	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙	
37	(34MG) 115	10区 北東部	西側周溝	埋土 ②	壺	口縁部	△ 1.8	-	-	外面：口縁部擬凹線文後ナデ消し 内面：口縁部~頸部上半ナデ、頸部下半ケズリ	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 ~灰黄褐 内面：にぶい黄橙 ~灰黄褐	
38	(33MG) 118	10区 北東部	西側周溝	埋土	壺	底部	△ 3.8	-	※ 5.2	外面：ハケメ 内面：ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
39	(34MG) 82	10区 北東部	北側周溝	埋土①	壺	口縁部~ 頸部	△ 2.6	※ 20.0	-	外面：口縁部に4条の凹線文 口縁部下~頸部ナデ 内面：口縁部~頸部上半ナデ、頸部下半ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄褐 内面：にぶい黄橙	
40	(34MG) 251	10区 北東部	第2埋葬施設	埋土	壺	頸部	△ 1.7	-	-	外面：ナデ内面：ナデ、ヘラケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
41	(34MG) 246	10区 北東部	墳頂部 南東 Tr.	旧表土層	壺	頸部	△ 2.9	-	-	外面：ナデ内面：ナデ	密	良好	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	

の脚部とみられる。Po28は器台の受部である。F 1は、東側周溝の底面付近から出土した有茎柳葉式の鉄鏃で、3号墓に伴うとみられるが、出土位置を含め遺物の性格については不明である(第50図)。

3号墓よりも古い時期の遺物も13点出土している。ほとんど甕だが、南側周溝から出土したPo31は不定方向の穿孔が3方向にある用途・時期不明の土製品である。各遺物の時期は、Po33・36・41



第49図 松尾頭4号墓・5号墓出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)	調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径			
42	(34MG) 315	34MG T2	松尾頭4号墓	墳丘直上	鉢?	口縁部~頸部	△ 2.8 ※ 12.2 -	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部上半ナデ・下半ケズリ	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: 橙	
43	(34MG) 272	34MG T2	松尾頭4号墓 南側周溝	周溝埋土	甕	口縁部	△ 5.1 ※ 17.6 -	外面: 口縁部8条の平行沈線文 口縁部下~頸部ナデ 内面: 口縁部~頸部ナデ、頸部下半ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
44	(34MG) 259	34MG T2	松尾頭5号墓 北側周溝	周溝埋土	壺?	口縁部	△ 2.95 - -	外面: 口縁部に5条の擬凹線文 口縁部下~頸部ナデ 内面: 口縁部~頸部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 明褐	
45	(34MG) 274	34MG T2	松尾頭5号墓 北側周溝	周溝埋土	甕	口縁部	△ 2.6 ※ 17.0 -	外面: 口縁部3条の擬凹線文 内面: 口縁部~頸部ナデ	密	良好	外面: 灰黄褐 内面: 黒褐	
46	(34MG) 276, 277	34MG T2	松尾頭5号墓 北側周溝	⑧・⑨層	器台	口縁部~頸部	△ 4.7 ※ 21.8 -	外面: ナデ 内面: 口縁部上半ナデ 口縁部下半~頸部ミガキ	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: 橙	

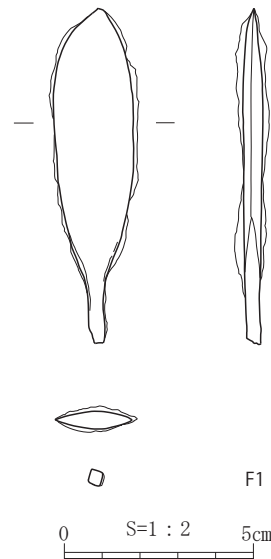
は弥生時代後期前葉、Po34・39は後期中葉、Po29・32・37は後期後葉にあたる。北側周溝から出土したPo39は3407遺構に伴う土器が二次的に混入したものである可能性が高い。

(4) 松尾頭4号墓出土遺物 (第49図)

4号墓出土遺物の点数は少なく、個体が認識できたのはPo42・43の2点である。Po42は墳丘直上で採取した鉢、Po43はサブトレンチの周溝内から出土した甕である。Po43は口縁部外面に擬凹線文を施す。弥生時代後期後葉の甕だが、1片しか出土せず、周溝内にも他に土器が散乱する様子が見られなかったため、4号墓に伴うものではないと判断した。

(5) 松尾頭5号墓出土遺物 (第49図)

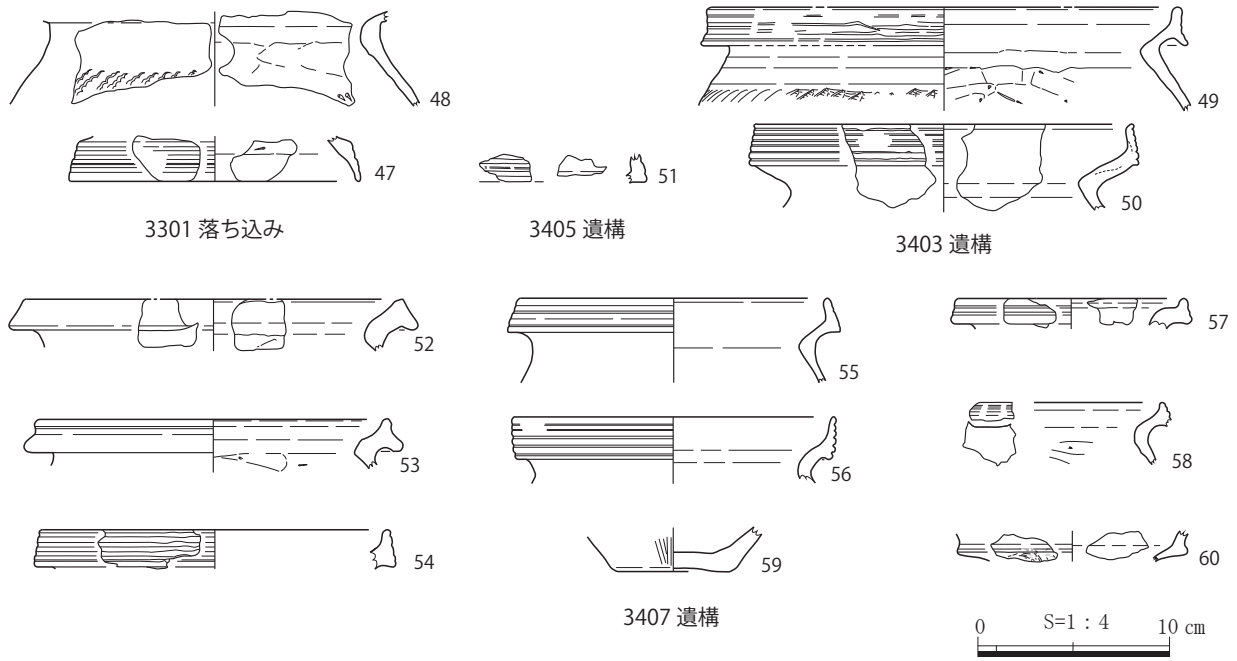
5号墓出土遺物の点数は少なく、個体認識できたものは3点である。いずれも周溝内から出土しているが、Po44・45は弥生時代後期中葉頃の土器とみられ、5号墓に伴わない遺物である。Po46は北側周溝に設定したサブトレンチから出土した器台である。外器面はナデ調整、内器面はミガキを施す。破片3点が近接して出土しており、受部の概ね1/2が残存していた。遺物の時期は、弥生時代終末期前半にあたり、遺物の出土状況から祭祀に用いられた器台が周溝内に転落したと考えられ、5号墓に伴う遺物と判断した。



遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	法量 (cm, ※:復元, △:残存)	重量 (g)	備考	
						最大長	最大幅	最大厚	
F1	(33MG) 42	10区 北東部	3号墓 東側周溝	埋土② 下面	鉄鏃	9 2 0	15	有茎柳葉式、酸化土砂含む	

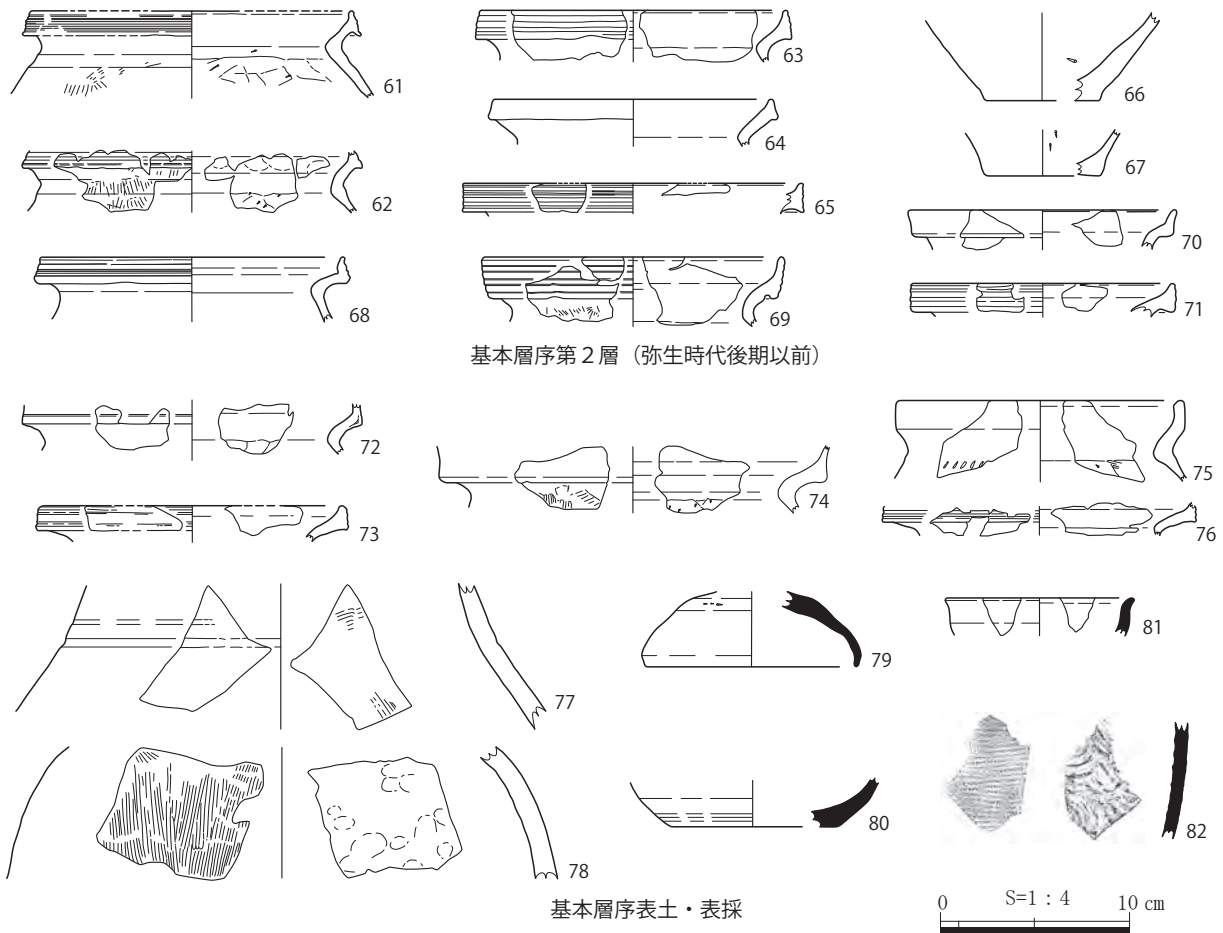
第50図 3号墓出土鉄器



第51図 3301 落ち込み・3403 土坑・3405 溝・3407 遺構出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm. ※: 復元、△: 残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径					
47	(33MG) 14	松尾頭 3号墓 南側 Tr.	3301 落ち込み	埋土	器台	脚部	△ 2.4	※ 15.0	-	外面: 平行沈線文 内面: 端部ナデ、上部ケズリ	密	良好	外面: 浅黄橙 内面: にぶい黄橙	外面赤彩
48	(33MG) 16、 19	松尾頭 3号墓 南側 Tr.	3301 落ち込み	埋土	甕	頸部～ 肩部	△ 4.9	-	-	外面: 頸部にナデ 肩部に貝殻による連続刺突文 内面: 頸部ナデか?、頸部下ケズリ	やや粗	良好	外面: 明黄褐 内面: にぶい黄橙	口縁部欠損、 頸部外面に スス附着
49	(34MG) 325	10区 北東部	3403 土坑	3層	甕	口縁部～ 肩部	△ 5.4	※ 24.6	-	外面: 口縁部4条の凹線文 頸部ナデ、烈点文 内面: 口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 明黄褐～灰黄褐	頸部外面に スス附着
50	(34MG) 240	10区 北東部	3403 土坑	7層	甕	口縁部～ 頸部	△ 4.5	※ 19.6	-	外面: 口縁部6条の沈線文、頸部ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
51	(34MG) 295	10区 北東部	3405 溝	埋土	甕	口縁部	△ 1.5	-	-	外面: 口縁部3条の凹線文 内面: 風化、ナデ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
52	(33MG) 120	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 2.7	※ 19.7	-	外面: ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下風化	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
53	(33MG) 126	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 2.8	※ 18.0	-	外面: 口縁部凹線文、ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: にぶい黄橙	
54	(33MG) 105	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 2.1	※ 18.0	-	外面: 口縁部4条の平行沈線文、ナデ 内面: ナデ	密	硬質	外面: 黄橙～橙～ 褐灰～灰黄褐 内面: 橙～褐灰～灰黄褐	
55	(33MG) 129	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部～ 胴部	△ 4.4	※ 16.0	-	外面: 口縁部凹線文 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
56	(34MG) 322	10区 北東部	3407 遺構	③層	甕	口縁部	△ 3.5	※ 16.8	-	外面: 口縁部5条の平行沈線文 頸部ナデ 内面: ナデ、指押さえ	密	良好	外面: 褐灰 内面: 橙	
57	(33MG) 108	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 1.6	※ 11.7	-	外面: 口縁部2条の凹線文、ナデ 内面: ナデ	密	良好	外面: にぶい黄橙～橙 内面: 橙	
58	(33MG) 109	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部～ 頸部	△ 3.3	-	-	外面: 口縁部3条の沈線文 頸部以下ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: 明黄褐～ にぶい黄橙	口縁部外面 にスス附着
59	(33MG) 106	10区北 東部	3407 遺構	埋土	壺?	底部	△ 2.8	-	※ 6.4	外面: ハケメ 内面: ナデか?	密	良好	外面: 褐灰 内面: 褐灰	
60	(34MG) 318	10区北 東部	3407 遺構	④層	高坏?	坏部	△ 1.6	-	-	外面: ナデ、頸部ハケメ 内面: ナデ	密	良好	外面: 橙 内面: にぶい黄橙	外面ベンガ ラ塗布



第52図 遺構外出土遺物(1)

(6) そのほか遺構出土遺物(第51図)

墳丘墓以外で遺物が出土した遺構は、3301 落ち込み、3403 遺構、3405 遺構、3407 遺構である。3301 落ち込みからは、器台脚部とみられる Po47 と外器面に連続刺突文を施した甕肩部の Po48 が出土している。いずれも弥生時代後期後葉頃とみられる。3403 遺構からは Po49・50 が出土しており、いずれも甕である。Po49 は口縁部に凹線文、肩部にハケ状工具による連続刺突文を施し、Po50 は口縁部に平行沈線文を施す。時期はいずれも弥生時代後期前葉頃とみられる。3405 遺構では遺構上面で土器の小片が複数点出土したが、Po51 のみ個体認識できた。51 は甕口縁部であり、外面に凹線文を施す。時期は弥生時代後期前葉とみられる。3407 遺構からは、他の遺構と比較して多くの土器が出土した。図化していないが、黒曜石の剝片も2点出土している。土器は、個体認識できたものが9点あり、ほとんどが甕の口縁部や底部である。Po53～55・57・58 は口縁部に(擬)凹線文を施し、口縁端部が内傾するものを主体とすることから、弥生時代後期前葉と考えられる。56 は後期中葉に比定される。Po60 については、小型の台付壺の可能性はある。自然科学分析の結果、外面には赤色顔料が塗布されていることが判明している(第V章第6節参照)。

(7) 表土及び遺物包含層層並びに表採遺物(第52図)

第3層出土の土器のうち、個体認識できたものは11点である。いずれも甕口縁部である。このうち、Po61～67 は10区北東部調査区の南東隅に集中しているが、付近に遺構の立ち上がりはみられず、窪地に土器が集中したものと考えられる。時期は、弥生時代後期前葉である。Po68・69 は3406 遺構

第52図 遺物観察表

No.	取上番号	調査区 層位	器種	部位	法量 (cm、※:復元、△:残存)			調整/施文	胎土	焼成	色調	備考
					器高	口径	底径					
61	(34MG) 298	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部～ 肩部	△ 4.6	※ 16.8	-	外面:口縁部5条の凹線文 頸部ナデ、肩部ハケメ 内面:口縁部～頸部ナデ、頸部下半～ケズリ	密	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
62	(34MG) 306	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部	△ 3.2	-	-	外面:口縁部3条(以上)凹線文 頸部上半・頸部下半ナデ後ハケメ 内面:口縁部指押さえ・頸部上半ナデ 頸部下半ケズリ	やや粗	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
63	(33MG) 204	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部～ 頸部	△ 2.7	※ 16.2	-	外面:口縁部5条の平行沈線文 内面:口縁部ナデ?、頸部ケズリ	やや粗	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
64	(33MG) 203	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部	△ 2.5	※ 14.6	-	外面:口縁部風化、口縁以下ナデ 内面:風化により調整不明	やや粗	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
65	(34MG) 305	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部	△ 1.6	※ 17.8	-	外面:口縁部4条の平行沈線文、ナデ 内面:ナデ、風化剥離著しい	やや粗	良好	外面:橙 内面:橙	
66	(33MG) 200	10区 旧土壌層 北東部	甕	底部	△ 4.6	-	※ 6.0	外面:ヘラミガキ(単位不明) 内面:ケズリ	密	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
67	(33MG) 199	10区 旧土壌層 北東部	甕	底部	△ 2.4	-	※ 6.0	外面:風化により調整不明 内面:ケズリ	密	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
68	(34MG) 287	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部～ 頸部	△ 3.4	※ 16.0	-	外面:口縁部3条の凹線文・頸部ナデ 内面:口縁部～頸部上半ナデ、頸部下半ケズリ	密	良好	外面:橙 内面:橙	
69	(34MG) 296	10区 旧土壌層 北東部	甕	口縁部～ 頸部	△ 3.7	※ 15.7	-	外面:口縁部6条の平行沈線文 頸部上半ナデ、下半ハケメ 内面:口縁部～頸部上半ナデ、頸部下半ケズリ	密	良好	外面:にぶい黄褐～ にぶい黄橙 内面:にぶい黄褐～ にぶい黄橙	
70	(34MG) 279	10区 旧土壌層 北東部 下層	甕	口縁部～ 頸部	△ 2.1	※ 14.2	-	外面:ナデ 内面:ナデ	やや粗	良好	外面:橙 内面:橙	
71	(34MG) 288	10区 ビット埋土 北東部	甕	口縁部	△ 1.8	※ 13.6	-	外面:口縁部3条の平行沈線文 内面:ナデ	密	良好	外面:橙 内面:明褐	
72	(33MG) 214	10区 遺物包含層 北東部	甕	口縁下端 部～頸部	△ 2.6	-	-	外面:風化、口縁部1条の沈線文か? 口縁部下～頸部にかけて強いナデ 内面:口縁部ナデ、頸部ケズリ	やや粗	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	口縁部 下スス 付着
73	(33MG) 191	10区 遺物包含層 北東部	甕	口縁部	△ 1.9	※ 15.8	-	外面:風化、口縁部2条の平行沈線文 口縁部下ナデ 内面:風化、ナデ	やや粗	良好	外面:橙 内面:橙	口縁部 下スス 付着
74	(34MG) 205	10区 表土 北東部	甕	口縁部～ 頸部	△ 3.5	-	-	外面:口縁部工具ナデ、頸部ハケメ 内面:剥離著しい、口縁部ナデ、頸部ケズリ	やや粗	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
75	(34MG) 314	10区 表土 北東部	甕	口縁部～ 頸部	△ 4.3	※ 14.8	-	外面:口縁部～頸部ナデ、肩部烈点文 内面:口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良好	外面:にぶい黄 内面:浅黄	
76	(34MG) 264	10区 表土 北東部	甕	口縁部～ 頸部	△ 1.7	-	-	外面:風化、口縁部2条以上の平行沈線文 内面:風化、口縁部ナデ、頸部ケズリ?	粗	良好	外面:にぶい褐～橙 内面:にぶい黄橙	口縁部 下スス 付着
77	(33MG) 201	10区 遺物包含層 北東部	壺	頸部	△ 7.7	-	-	外面:風化、1条の凹線文 内面:頸部上半ヨコハケメ・下半タテハケ	密	良好	外面:にぶい黄橙 内面:にぶい黄橙	
78	(33MG) 178	10区 遺物包含層 北東部	壺	胴部	△ 6.4	-	-	外面:ミガキ 内面:指押さえ、ハケメ後ナデ消し	密	良好	外面:にぶい黄橙 内面:明黄褐～ にぶい黄橙	
79	(34MG) 208、 212、213、 214、216	10区 旧土壌層 北東部 上面	須恵器 蓋坏	口縁部～ 天井部	△ 4.0	※ 11.0	-	外面:口縁部ナデ 天井部にかけてケズリ後ナデ消し 内面:ナデ	密	硬質	外面:灰オリーブ 内面:灰オリーブ	
80	(34MG) 312	10区 表土 北東部	須恵器 坏	底部	△ 2.5	-	※ 9.0	外面:ナデ、底部静止糸切り 内面:ナデ	密	硬質	外面:灰オリーブ 内面:灰黄褐	
81	(34MG) 313	10区 表土 北東部	須恵器 坏	口縁部	△ 2.0	※ 9.7	-	外面:ナデ 内面:ナデ	密	硬質	外面:暗灰黄 内面:暗灰黄	
82	-	10区 表探 北東部	須恵器 甕	胴部	△ 6.1	-	-	外面:平行タタキ文 内面:当て具痕(青海波状文)	密	硬質	外面:灰 内面:灰	



第53図 遺構外出土遺物(2)

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	法量 (cm ※: 復元 △: 残存)			重量 (g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
S1	(34MG) 209	10区北東部	-	第2層	石斧	14	6	4	608	閃緑岩、一部被熱
S2	(33MG) 186	10区北東部	-	第2層	砥石	6	3	3	38	花崗岩
S3	(33MG) 18	10区北東部	-	表土	石鏃	4	2	0	2	黒曜石
S4	(34MG) 232	10区南西部	-	表探	石鏃	2	2	0	0	黒曜石
S5	(34MG) 222	10区北東部	-	第2層	石鏃	2	△ 1.7	0	0	黒曜石
S6	(33MG) 107	10区北東部	-	第2層	石鏃	2	2	0	1	玉髓

上面で出土した。Po68は弥生時代後期前葉、Po69は後期中葉頃とみられる。Po70は3404遺構を覆う黒ボク層から出土した。弥生時代後期中葉～後葉のものか。Po71は、Cラインの土層観察トレンチ内から出土した。位置と高さから、北側のピットに伴うものと考えられる。時期は弥生時代後期中葉である。

第2層及び表土出土の土器のうち、個体認識できたものは10点である。Po72・73・74～76は弥生時代後期の甕口縁部とみられる。Po77・78は弥生時代中期後半の壺頸部及び肩部である。Po79～81は須恵器である。79は蓋坏であり、陶邑編年のTK217にあたる。Po80は坏身の底部で、静止糸切りであるため7世紀末～8世紀前半とみられる。Po81は坏身の口縁部であり、7世～8世紀頃の可能性がある。

表採した土器は1点あり、10区北東側斜面（管理道北側）で採取した。Po82は甕胴部とみられ、外器面は平行タタキ、内器面は青海波紋状の当て具痕が残るが、時期は不明である。

（8）石器（第53図）

遺構から出土した石器はなく、全て第2層、表土、表採である。S3は10区北東部調査区Aベルトから西側で出土し、S4は調査区外の表採、それ以外はAベルトから東側で出土した。S1は、第2層から出土した石斧である。閃緑岩の蛤刃石斧である。長さが14cmと通常の蛤刃石斧と比較して短く、柄側に殴打による剥離がみられることから、楔として再利用されたものと考えられ、概ね弥生時代後期のものと考えられる^{註4}。S2は第2層から出土した砥石である。底面以外の3面を擦り面として利用している。時期は不明である。S3～6は石鏃である。S4はT2から南東に8mほど離れた位置で表採したものである。S6は玉髓、それ以外は黒曜石で作成された凹基式の鏃である。時期は不明である。

註1 3号墓出土土器の知見については、岡山県教育庁文化財保護課の河合忍氏にご教示いただいた。

註2 立射式塹壕（いわゆる「蛸壺」。文献1中の標記）については、太平洋戦争末期（昭和20年春～）に大山山麓において「チ号演習」が行われた記録が残っており、それに伴うものと考えられている（佐伯2017）。当時の軍事設備の築造基準が記された「国民築城必携」には、「蛸壺（一人用散兵壕）」の深さについて、防御するための盛土は幅1m、盛土から人が入る穴の底までの深さが1.3mと記されている。今回調査したマウンド状地形Eについても、マウンド頂点から穴の底までの深さ（穴は完掘していないが、ピンポールを刺したところ、深さ約30cmで固い基盤層に当たることを確認している）が約1.3mであったことから、立射式塹壕であると判断した。

註3 模倣土器の知見については、岡山県教育庁文化財保護課の河合忍氏に御教示いただいた。

註4 石器の知見については、鳥取県地域づくり推進部文化政策課・河合章行氏、とっとり弥生の王国推進課・高橋章司氏及び水村直人氏に御教示いただいた。

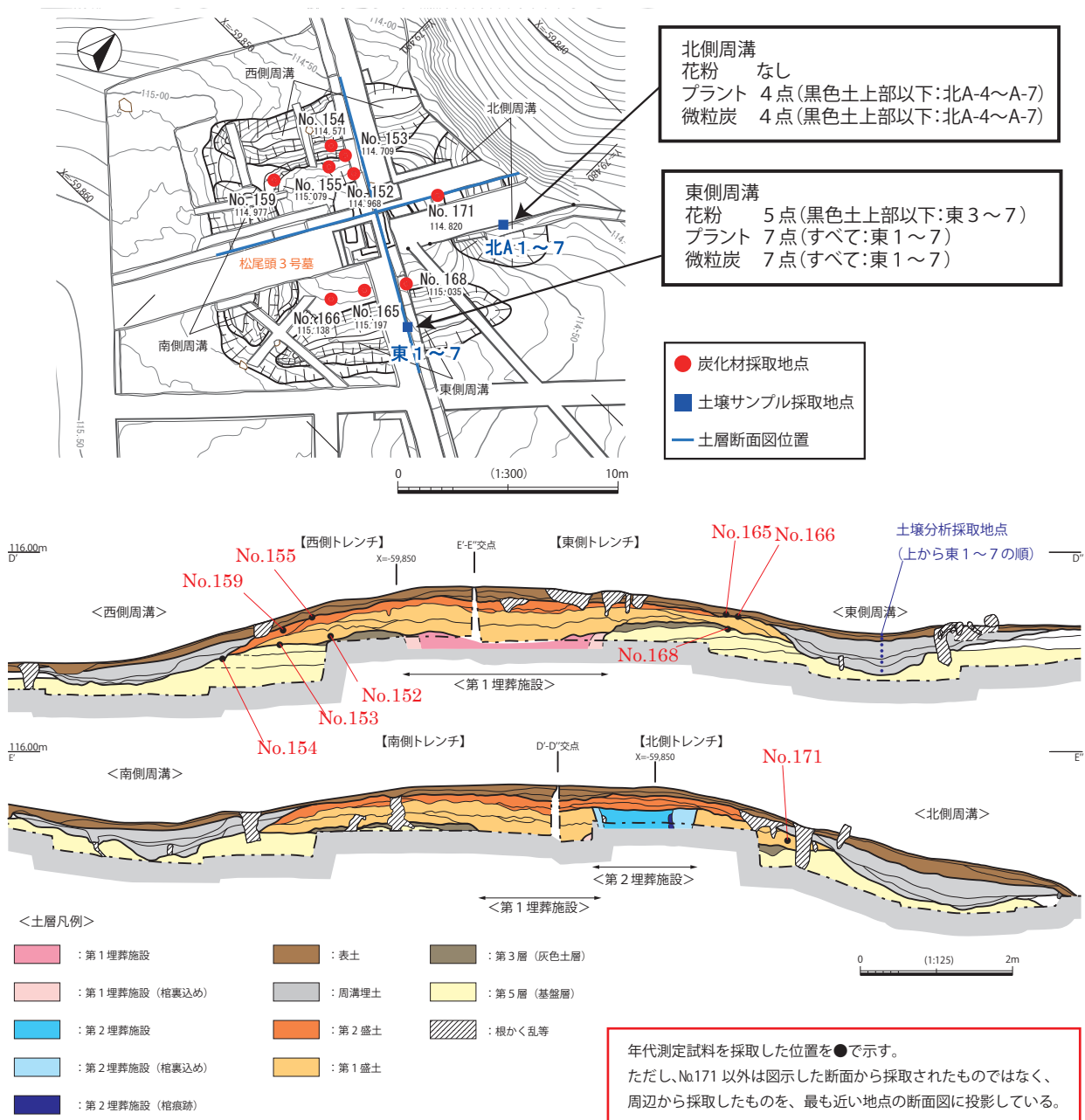
参考文献

- 佐伯純也 2017「越敷山における「チ号演習」関連遺構の発掘調査」『伯耆文化研究』第18号、伯耆文化研究会、10～19頁。
- 櫻本富雄 1999「特別資料・『国民築城必携』」『はくは皇国少年だった 古本から歴史の偽造を読む』、インパクト出版、125～139頁。
- 西村芳将「本土決戦と「チ号演習」、勤労義勇隊、国民義勇隊」『鳥取地域史研究』第19号、鳥取地域史研究会、61～74頁。

第V章 自然科学分析の成果

第1節 自然科学分析の概要

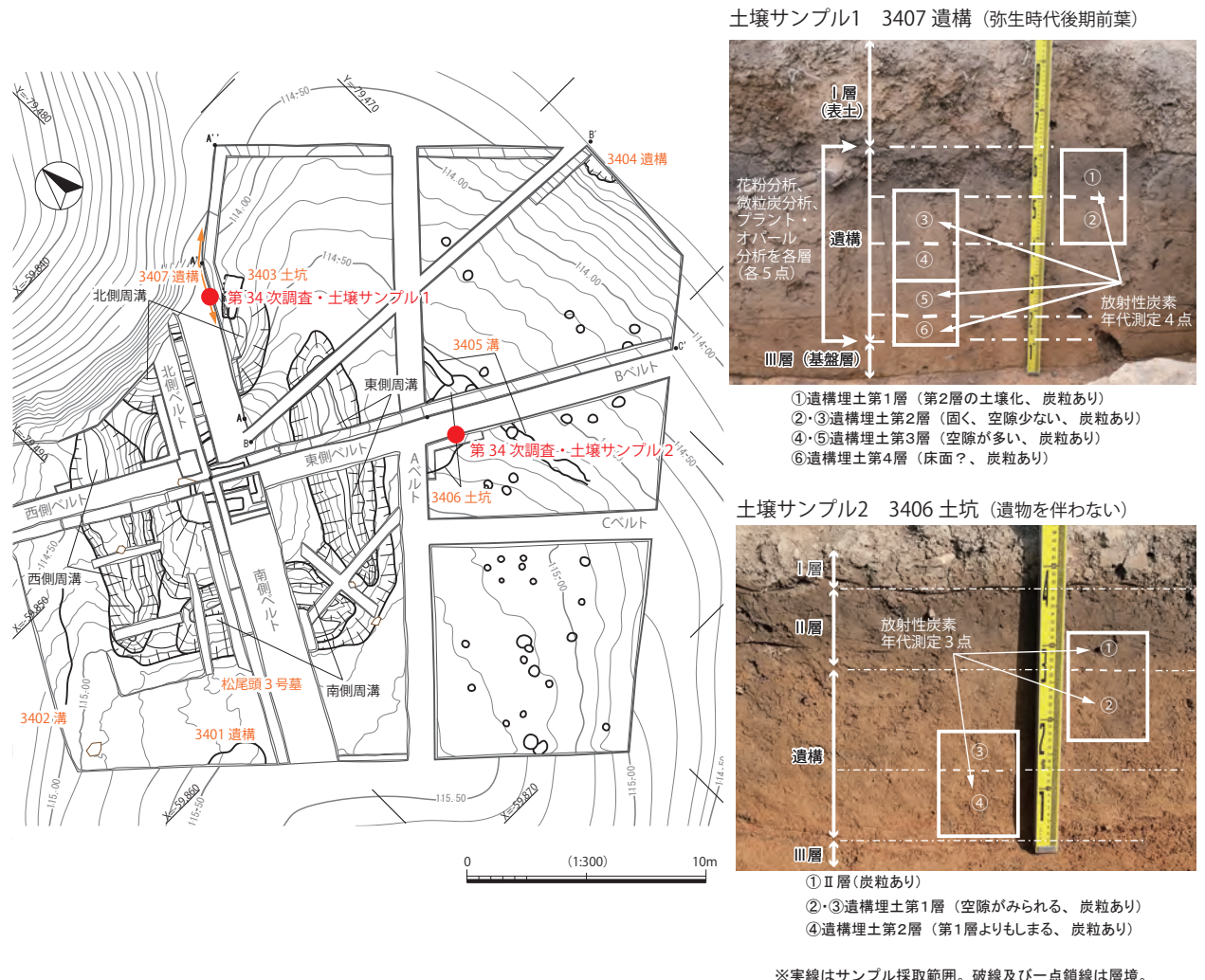
今回の調査目的の一つには、松尾頭墳丘墓群が造営される以前の様相、居住地から墓域への土地利用の変遷を明らかにすることを掲げている。自然科学分析によって明らかとなる各層の時期や、時期ごとの植生の変化といった成果を遺構・遺物の調査成果と関連づけることにより、より詳細に考察できると考える。そのため、平成29年度及び30年度の調査では、基本層序や遺構埋土、出土した炭化物や土器に付着した赤色顔料など、各種の自然科学分析を行った。今回実施した分析の概要は次のとおりである。



第54図 第33次調査分析試料採取位置

第33次調査 松尾頭3号墓を中心とした調査を行ったため、土壌サンプルの採取は墳丘墓のみで行い、周溝内埋土が厚く堆積する東側周溝及び北側周溝で柱状にサンプルを採取した。墳丘東西軸の東側トレンチにて7点（東1～7）、北側周溝付近に設定したサブトレンチ（基本層序A断面）のうち、北側周溝の中心付近において7点（北1～7）採取した。北地点については、7点のうち結果が期待できる4点に限定して分析している。また、掘削中に炭化物も採取することができたため、そのうちの残りの良いものを分析試料とした。分析内容は、微粒炭・花粉・プラントオパール分析と炭化材樹種同定・放射性炭素年代測定で、株式会社パレオ・ラボに委託して実施した。

第34次調査 第33次調査では松尾頭3号墓の試料で分析を行ったため、第34次調査では、墳丘墓群築造以前の弥生時代後期段階と考えられる遺構（2遺構）の土壌を柱状に採取し、分析を行った。松尾頭3号墓周溝構築の際に掘削された3407遺構（弥生時代後期前葉頃）では土壌サンプル1（6点）を採取し、そのうち5点を用いて分析を行った。調査区中央の緩斜面部にさしかかった3406土坑（遺物出土なし、時期不明）では、土壌サンプル2（4点）を採取し、そのうち3点を用いて分析を行った。分析内容は、微粒炭・花粉・プラントオパール分析、炭化材樹種同定・放射性炭素年代測定で、以上をパリオ・サーヴェイ株式会社に委託して実施した。また、松尾頭3号墓から出土した赤色系の土器について、赤色顔料塗布の有無を確認するため株式会社パレオ・ラボに依頼して成分分析（赤色顔料分析）を実施している。



第55図 第34次調査分析試料採取位置

第2節 第33次調査に伴う自然科学分析（プラントオパール・花粉・微粒炭分析）

株式会社パレオ・ラボ 森 将志

はじめに

妻木晩田遺跡第33次調査では、松尾頭10区において弥生時代終末期と考えられている墳丘墓（松尾頭3号墓）が検出された。この遺構では、周溝の埋土において黒色土（黒ボク）を含む3つの層が区別されており、古環境を検討するために周溝の埋土から分析試料が採取された。以下では、分析試料に対して行ったプラント・オパール分析と花粉分析、微粒炭分析の結果を示し、遺跡周辺の高植生や黒色土形成の要因について検討した。

1. 試料

分析試料は、墳丘墓の東側周溝と北側周溝、北側斜面の3地点で採取された。各地点では、真ん中に黒色土（黒ボク）を挟むという、おおまかに共通する3つの層に区分されている。これらの堆積時期は、墳丘墓が構築された弥生時代終末期以降と考えられる。東側周溝では7点、北側周溝では4点、北側斜面では3点の計14点の試料が採取された（第4表）。なお、プラント・オパール分析と微粒炭分析には全ての試料を、花粉分析には東側周溝と北側斜面の8点の試料を供した。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

2. 分析方法

（1）プラント・オパール分析

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約0.04mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01mm以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが300個に達するまで行った。また、保存状態の良い植物珪酸体を選んで写真を撮り、第56図に載せた。

（2）花粉分析・微粒炭分析

試料を乾燥後、遠沈管にとり、マーカーとしてパリノスフェア（SG06 スペシャルブレンド）を加える。そこに10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。花粉については、樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。また、十分な量の花粉が含まれていない試料についてはプレパラート1枚の全面を検鏡するに留めた。さらに、保存状態の良い花粉を選んで単体標本（PLC.2470～2479）を作製し、写真を第57図に載せた。

微粒炭については、次式で試料 1 g 中の個数を求め、写真を図版 3 に載せた。

$$X = p/m \times dv/g$$

X : 試料 1g 中の微粒炭個数 (個 /g)

p: カウントした微粒炭個数 (個)

m: 試料重量 (g)

d: マーカーグレイン濃度 (個 /ml)

第 4 表 分析試料一覧

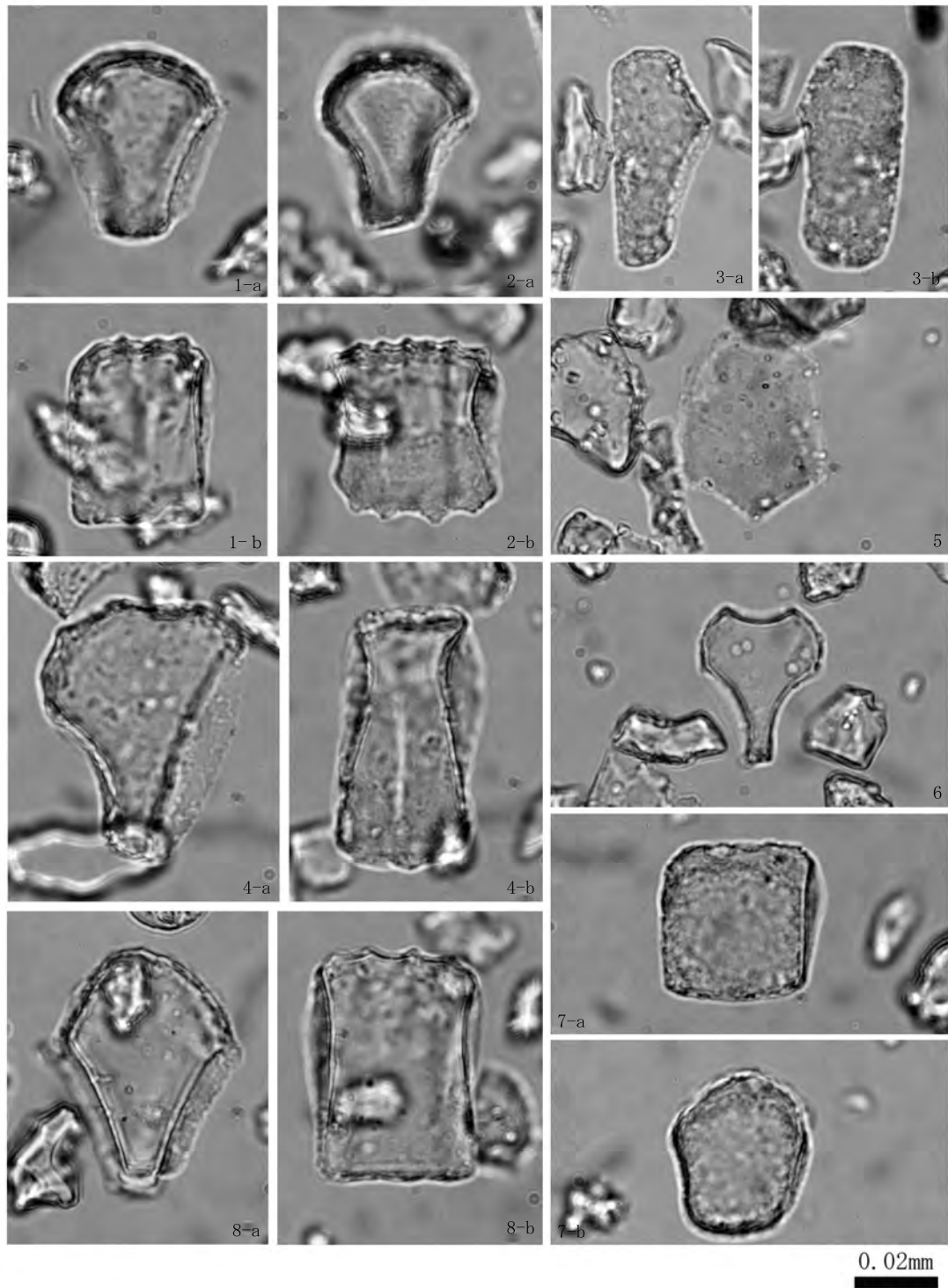
試料No.	地点	層位	土相	プラント	花粉	微粒炭
東1	東側周溝	1層	暗褐色 (10YR3/4) 腐植混じり暗褐色シルト	○		○
東2		2層	暗褐色 (10YR3/4) シルト	○		○
東3		3層上部	黒色 (10YR1.7/1) シルト(黒ボク)	○	○	○
東4		3層中部		○	○	○
東5		3層下部		○	○	○
東6		4層	暗褐色 (10YR3/3) シルト	○	○	○
東7		5層	褐色 (7.5YR4/6) 粘土ブロック	○	○	○
北A4	北側周溝	5層上部	黒色 (10YR1.7/1) シルト(黒ボク)	○		○
北A5		5層下部		○		○
北A6		6層	黒褐色 (10YR2/2) シルト	○		○
北A7		7層	暗褐色 (10YR3/4) シルト	○		○
北B2	北側斜面	3層	褐色 (7.5YR4/4) シルト	○	○	○
北B3		12層	黒褐色 (10YR3/2) シルト(黒ボク)	○	○	○
北B4		20層	灰黄褐色 (10YR4/2) シルト	○	○	○

第 5 表 試料 1 g 当りのプラントオパール個数

	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)
東1	4,200	0	360,600	61,700	16,800	0	37,900	21,000	136,100
東2	1,400	0	430,800	65,200	21,700	2,700	36,700	25,800	129,100
東3	0	0	734,500	69,300	38,200	0	56,600	32,600	240,600
東4	1,500	0	512,500	49,000	44,600	0	14,900	32,700	164,900
東5	0	0	426,100	66,000	15,800	1,400	7,200	23,000	136,300
東6	0	0	424,600	107,200	15,100	0	1,400	45,300	224,000
東7	0	0	165,000	34,000	2,600	0	0	10,500	74,600
北A4	3,000	0	733,800	65,200	17,800	0	5,900	34,100	164,600
北A5	2,800	0	766,200	91,100	42,000	0	1,400	72,800	189,100
北A6	2,700	0	459,600	91,900	25,700	0	0	33,800	128,400
北A7	2,700	0	531,400	101,700	42,800	1,300	0	46,800	123,100
北B2	0	0	342,800	59,100	8,900	0	16,300	28,100	91,600
北B3	2,800	1,400	504,900	147,200	20,600	0	0	70,200	156,800
北B4	0	0	373,200	88,100	46,100	0	1,400	29,400	69,900

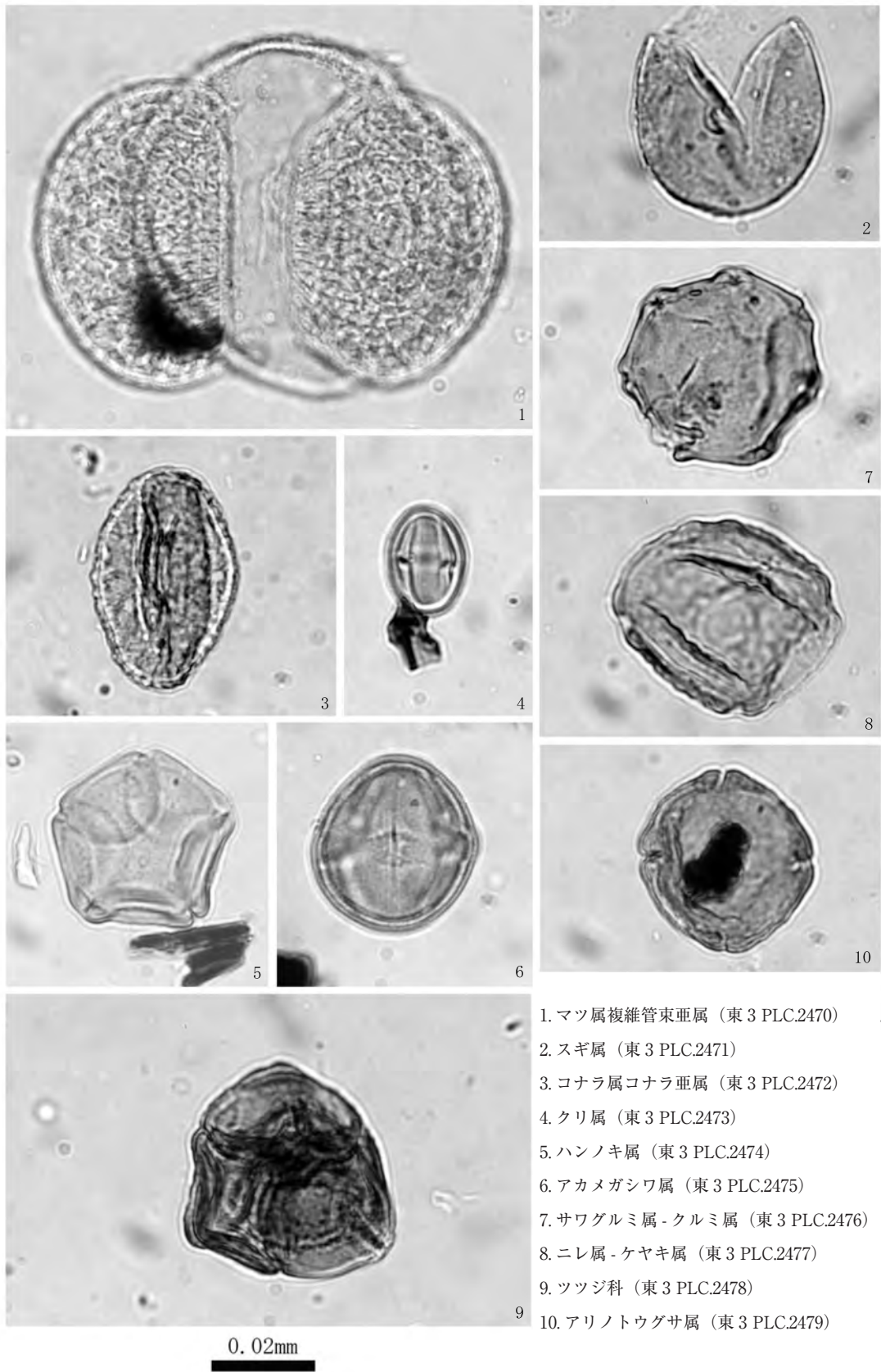
第 6 表 試料の軽量値と微粒炭数

試料No.	試料量 (g)	マーカー濃度 (個/ml)	加えたマーカー量 (ml)	カウントしたマーカー (個)	微粒炭数	試料1g中の微粒炭
東1	3.0861	17,800	1	49	8,972	1,056,096
東2	3.5001			44	15,813	1,827,684
東3	2.9264			38	15,854	2,537,708
東4	3.1041			34	25,909	4,369,744
東5	2.7263			30	23,482	5,110,462
東6	4.0403			33	20,925	2,793,559
東7	4.6997			44	16,109	1,386,647
北A4	3.3510			30	23,413	4,145,543
北A5	3.0223			30	30,227	5,934,119
北A6	2.9279			41	16,168	2,397,376
北A7	3.7237			40	15,874	1,897,019
北B2	4.1844			44	13,628	1,317,547
北B3	3.3210			32	29,312	4,909,606
北B4	2.9599			42	18,412	2,636,299



- | | | |
|-----------------|------------------|-----------------|
| 1. ネザサ節型機動細胞珪酸体 | 2. ネザサ節型機動細胞珪酸体 | 3. ウシクサ族機動細胞珪酸体 |
| 4. ウシクサ族機動細胞珪酸体 | 5. ササ属型機動細胞珪酸体 | 6. シバ属機動細胞珪酸体 |
| 7. キビ族機動細胞珪酸体 | 8. 他のタケ亜科機動細胞珪酸体 | |
- a: 断面 b: 側面

第56図 妻木晩田遺跡第33次調査（松尾頭3号墓 北A5）から産出した植物珪酸体



1. マツ属複維管束亜属 (東3 PLC.2470)
2. スギ属 (東3 PLC.2471)
3. コナラ属コナラ亜属 (東3 PLC.2472)
4. クリ属 (東3 PLC.2473)
5. ハンノキ属 (東3 PLC.2474)
6. アカメガシワ属 (東3 PLC.2475)
7. サワグルミ属-クルミ属 (東3 PLC.2476)
8. ニレ属-ケヤキ属 (東3 PLC.2477)
9. ツツジ科 (東3 PLC.2478)
10. アリノトウグサ属 (東3 PLC.2479)

第57図 妻木晩田遺跡第33次調査(松尾頭3号墓)から産出した花粉化石

v: 加えたマーカージェイン容量 (ml)

g: 微粒炭とともにカウントしたマーカージェインの個数 (個)

3. 結果

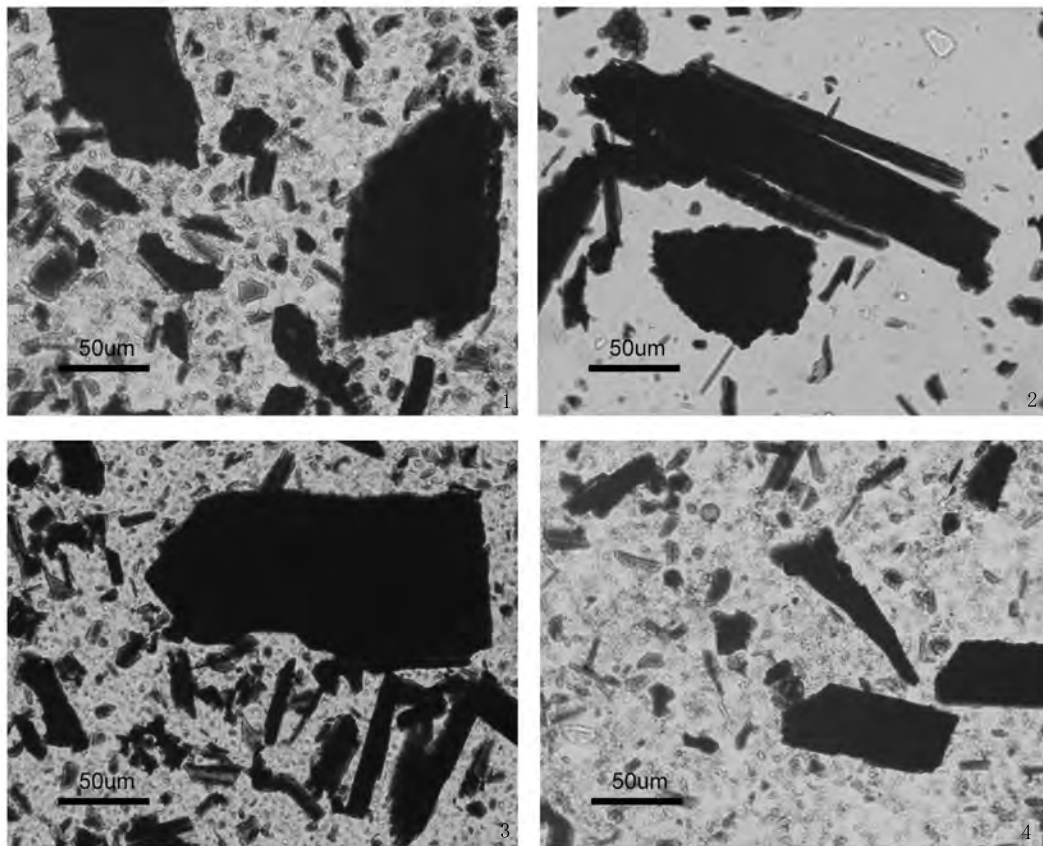
(1) プラント・オパール分析

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（第5表）、植物珪酸体分布図に示した（第59図）。

検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の8種類の機動細胞珪酸体が確認できた。また、イネの籾殻で形成されるイネ穎破片や、ポイント型珪酸体の産出も確認できた。いずれの地点においてもネザサ節型機動細胞珪酸体の産出が最も多いが、層位的には黒色土層で産出量が多くなる傾向が見られる。また、ウシクサ族機動細胞珪酸体もネザサ節型と同様、黒色土層において産出量が多くなる傾向がある。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

8試料のうち、十分な花粉が得られた試料は東3と北B2の2試料のみである。8試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉18、草本花粉9、形態分類のシダ植物胞子2の総計29である。これらの花粉・胞子の一覧表を第7表に、花粉分布図を第60図に示す。図表においてハイフン(-)で



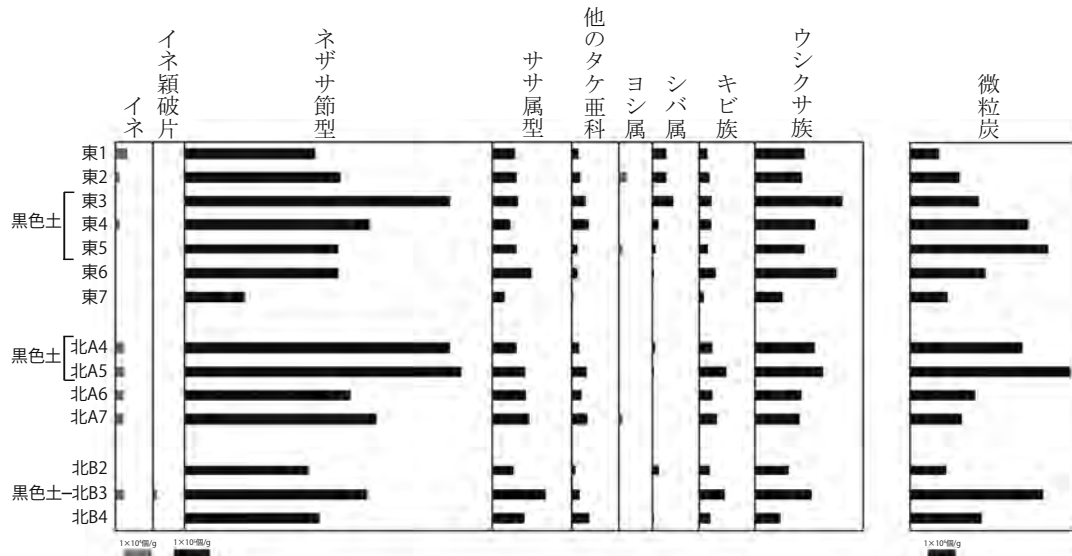
1. 東4 2. 東7 3. 北A5 4. 北B4

第58図 検出微粒炭

結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。東3と北B2は同様な花粉組成を示しており、マツ属複維管束亜属が優占する。

また、試料の計測値と試料1g中に含まれる微粒炭数を第6表に、微粒炭分布図を第59図に示す。微粒炭は試料1g中に1,056,096～5,934,119個含まれており、いずれの地点でも黒色土層に多く含まれる傾向がある。

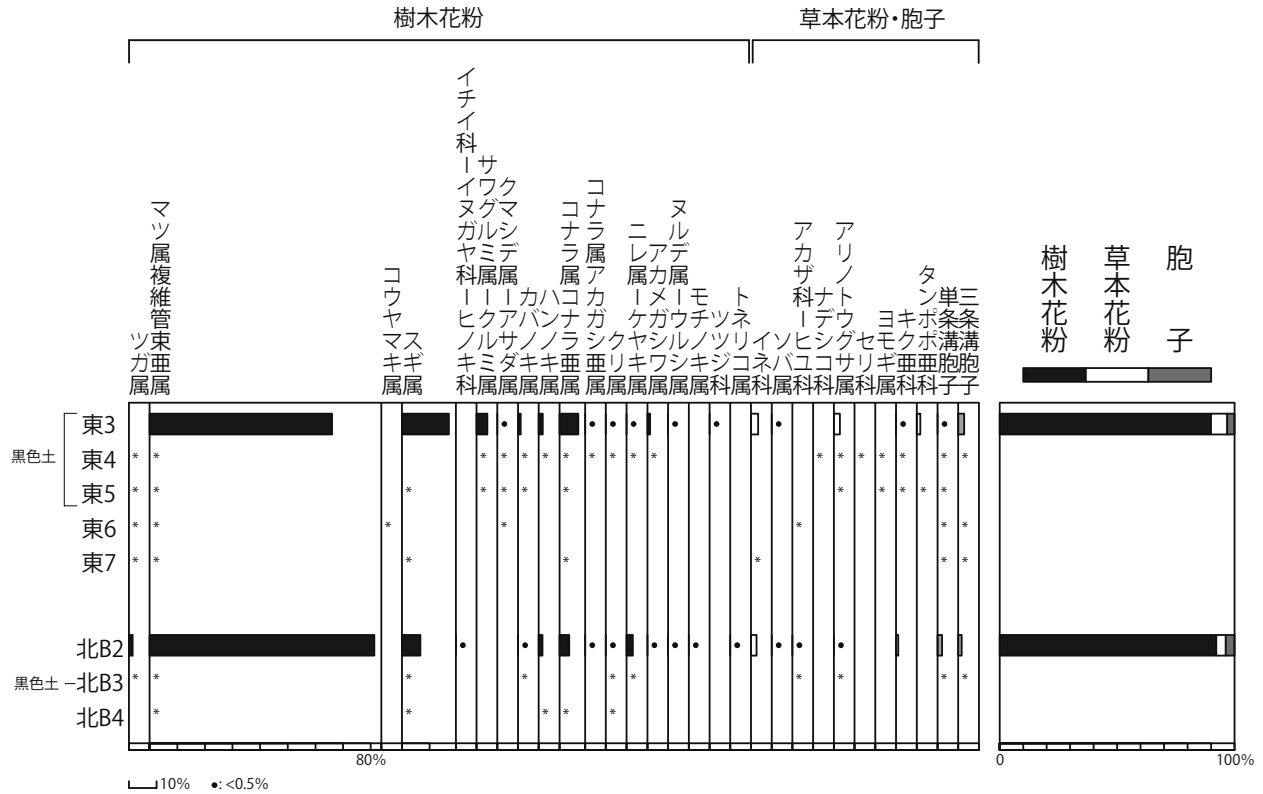
いずれにしても、黄白色という色調は、ATの火山ガラスが含まれていることに起因する可能性が高いと考えられる。



第59図 妻木晩田遺跡第33次調査（松尾頭3号墓）における植物珪酸体分布図と微粒炭分布図

第7表 産出花粉孢子一覧表

学名	和名	東3	東4	東5	東6	東7	北B2	北B3	北B4
樹木									
<i>Tsuga</i>	ツガ属	-	2	1	2	1	3	2	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	136	5	2	4	7	183	9	13
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	-	-	1	-	-	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	35	-	1	-	3	15	3	6
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	-	-	-	1	-	-
<i>Pterocarya</i> - <i>Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	8	1	1	-	-	-	-	-
<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	1	2	1	1	-	-	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	2	1	1	-	-	1	2	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	3	-	-	-	3	-	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	14	7	1	-	1	8	-	3
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	1	1	-	-	-	1	-	-
<i>Castanea</i>	クリ属	1	1	-	-	-	1	2	2
<i>Ulmus</i> - <i>Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	1	-	-	-	5	3	-
<i>Mallotus</i>	アカメガシワ属	2	1	-	-	-	1	-	-
<i>Rhus</i> - <i>Toxicodendron</i>	ヌルデ属-ウルシ属	1	-	-	-	-	1	-	-
<i>Ilex</i>	モチノキ属	-	-	-	-	-	1	-	-
Ericaceae	ツツジ科	1	-	-	-	-	-	-	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	-	-	-	-	-	1	-	-
草本									
Gramineae	イネ科	6	-	-	-	1	5	-	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1	-	-	-	-	1	-	-
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	-	-	-	1	-	1	1	-
Caryophyllaceae	ナデシコ科	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	5	1	1	-	-	1	1	-
Apiaceae	セリ科	-	1	-	-	-	-	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	-	1	2	-	-	-	-	-
Tubuliflorae	キク亜科	1	2	1	-	-	2	-	-
Liguliflorae	タンポポ科	3	-	2	-	-	-	-	-
シダ植物									
monolete type spore	単条溝孢子	1	3	3	12	1	4	3	-
trilete type spore	三条溝孢子	5	1	-	6	1	3	4	-
Arboreal pollen	樹木花粉	206	25	8	8	12	225	21	26
Nonarboreal pollen	草本花粉	16	6	6	1	1	10	2	-
Spores	シダ植物孢子	6	4	3	18	2	7	7	-
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	228	35	17	27	15	242	30	26
unknown	不明	1	-	-	-	-	2	-	-



樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は産出花粉孢子総数を基数として百分率で算出した。
 *は樹木花粉 200 個未満の試料について、検出した分類群を示す。

第 60 図 妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓）における花粉分布図

4. 考察

弥生時代終末期以降と考えられる周溝の埋土および北側斜面の土層は大きく 3 つの層に区分されているが、プラント・オパール分析の結果では、ネザサ節型機動細胞珪酸体がいずれの層準においても優占する。よって、墳丘墓周辺の陽が当たる、開けた明るい場所にはネザサ節型のササ類が分布を広げていたと思われる。また、ウシクサ族の産出もほぼすべての層準で目立ち、墳丘墓周辺の開けた場所にススキやチガヤなどのウシクサ族も分布していたと思われる。一方で、地点によって産出量が異なるのがシバ属である。シバ属については、東側周溝の黒色土層で産出量が増加し、その上位層でも産出が多い。よって、黒色土層の上部の堆積時からその上位のシルト層の堆積時にかけてシバ属が分布を広げていたと思われる。なお、北側周溝においても黒色土層中でわずかながらにシバ属の増加が見られるが、その産出量は東側周溝に比べるとわずかである。そのため、シバ属は墳丘墓の東側を中心として分布を広げていたと思われる。その他にも、黒色土やその上下の層準でイネ機動細胞珪酸体が産出する。墳丘墓は丘陵地上に位置するため、ここでのイネの産出は水田由来とするよりも、イネ藁が持ち込まれていたなどの人為的影響を考えるべきであろう。

花粉分析では、十分な量の花粉化石が得られた試料が少ないものの、東側周溝の黒色土（東3）と北側斜面の黒色土の上位層である北 B2 で十分な量の花粉化石が得られた。これらの試料は同様な花粉組成を示しており、二次林要素のマツ属複雑管束亜属が優占する。黒色土からその上位のシルト層の堆積時期にかけて、墳丘墓周辺はニヨウマツ類に囲まれていた状況が推測される。その他にも、陽樹を含む分類群であるコナラ属コナラ亜属やクリ属、アカメガシワ属、ヌルデ属-ウルシ属などの樹

木花粉の産出が見られ、墳丘墓周辺が明るい開けた場所であった様子が、花粉分析からも推測される。

このように、大きく3つに分かれる層に含まれる植物珪酸体や花粉からは、墳丘墓周辺が明るく開けた場所であり、そうした場所に適した植物が生育していた状況が推測された。しかしながら、黒色土に含まれる植物珪酸体はその他の層とは異なる特徴があり、ネザサ節型とウシクサ族の機動細胞珪酸体の産出量が多い傾向を示す。さらに、いずれの地点の黒色土も微粒炭の含有量が多い傾向がある。こうした特徴を含む黒色土（黒ボク）の形成要因について述べている論考には、山野井（1996）や細野・佐瀬（1997）がある。

山野井（1996）は、微粒炭が腐植を吸着・保持することで黒ボク土が形成されるとし、微粒炭は古代人の野焼きや山焼きなどの火入れによって生じると述べている。これに従うと、今回の分析結果は、黒色土の形成時には、遺跡周辺において火入れなどの植物燃焼を伴う事象が多く発生し、微粒炭が供給されることで黒色土が形成されたと理解できる。この場合、火入れの結果、ネザサ節やウシクサ族が生育できる環境がより整ったために、黒色土でネザサ節型やウシクサ族の珪酸体が多く検出されたと考えられる。

一方で細野・佐瀬（1997）は、黒ボク土形成における微粒炭の関与の重要性を認めながらも、腐植を吸着させるのは活性アルミニウムであるとしている。さらに、黒ボク土形成の条件の1つとして、腐植を供給する草原植生の重要性を述べており、草原の成立・維持には火入れなどの人間活動が必要としている。これに従うと、今回の分析結果から次のような状況が推測される。すなわち、遺跡周辺において火入れが行われると、微粒炭の増加とともに草原植生が広がる環境が強化され、ネザサ節やウシクサ族が分布を広げた。それによって、腐植の供給が増加し、黒色土が形成された。

今回の分析結果では、黒色土においてネザサ節型やウシクサ族の機動細胞珪酸体や微粒炭が多く含まれる事実が明らかになった。しかしながら、植物珪酸体・微粒炭の産出と黒ボク土の形成機構の関係については、上記したようにいくつかの状況が推測される。ただし、山野井（1996）にしる、細野・佐瀬（1997）にしる、火入れの重要性を指摘しており、妻木晩田遺跡においても黒色土堆積時には火入れの現象があったと推測される。

引用文献

細野 衛・佐瀬 隆（1997）黒ボク土生成試論. 第四紀, 29, 1-9.

山野井 徹（1996）黒土の成因に関する地質学的検討. 地質学雑誌, 102, 526-544.

第3節 第33次調査に伴う自然科学分析（放射性炭素年代測定）

株式会社パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtadze・黒沼保子

1. はじめに

妻木晩田遺跡の第33次調査で松尾頭10区の松尾頭3号墓から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

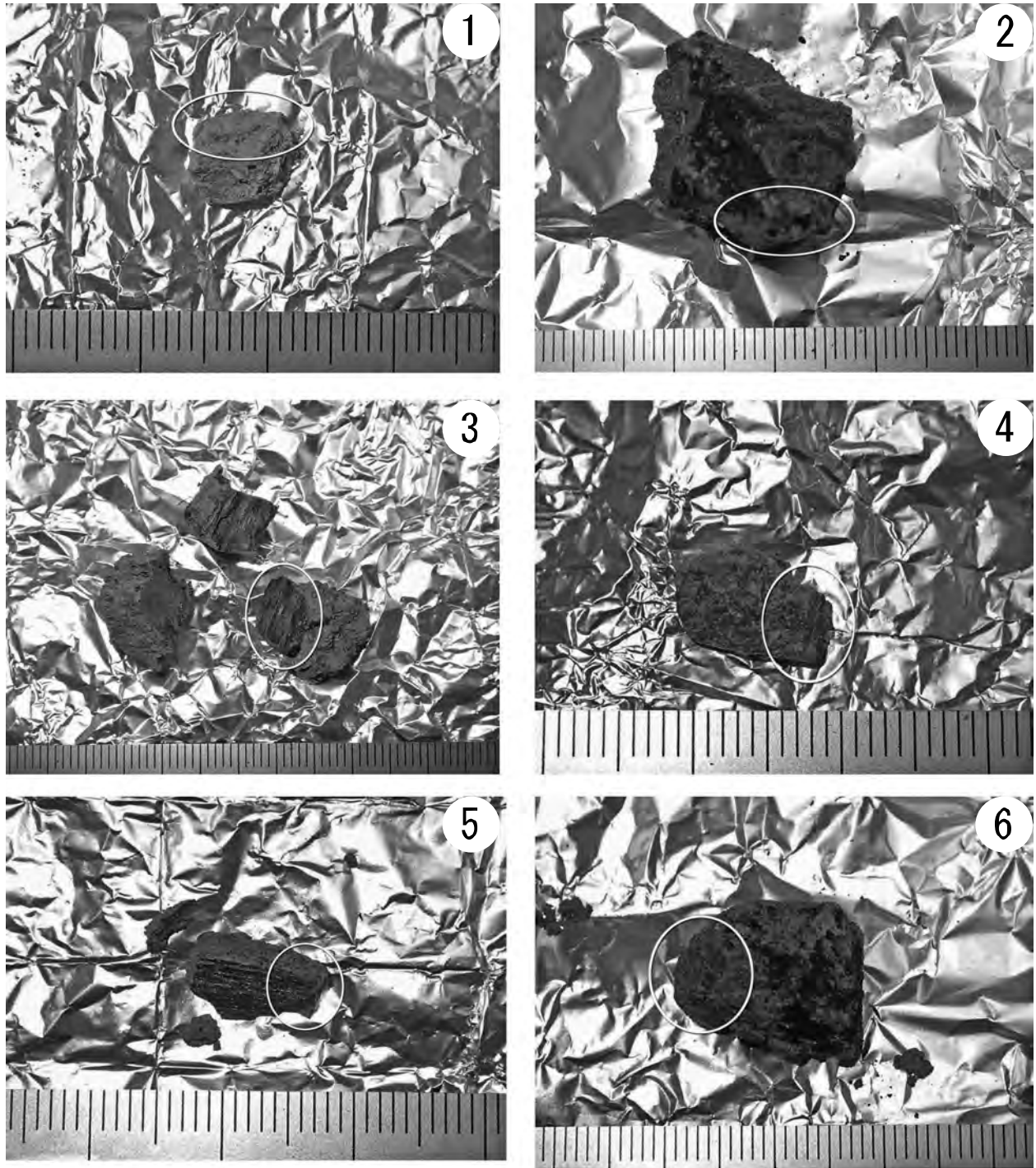
2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは第8表のとおりである。試料は、松尾頭3号墓から採取された炭化材で、盛土③から4点、盛土表面から4点、周溝壁面表層から1点の、合計9点である。試料の内訳

第8表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-35752	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘南西部 西側トレンチ南断面 層位：8層（盛土③） 取上No.152	種類：炭化材（スタジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35753	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘南西部 西側トレンチ南断面 層位：8層最下部（盛土③） 取上No.153	種類：炭化材（スタジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35754	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：西側周溝南半部 東壁面 層位：周溝壁面表層（埋土①または②下面） 取上No.154	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35755	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘南西部 層位：盛土表層（表土下面） 取上No.155	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35756	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘南西部 層位：盛土表層（表土下面） 取上No.159	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35757	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘南東部 層位：盛土表層（表土下面） 取上No.165	種類：炭化材（クスノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35758	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘南東部 層位：盛土表層（表土下面） 取上No.166	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35759	地区：松尾頭10区 グリッド：A012 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘北東部 東側トレンチ北断面 層位：7層（盛土③） 取上No.168	種類：炭化材（クスノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-35760	地区：松尾頭10区 グリッド：AN12 遺構：松尾頭3号墓 位置：墳丘北東部 北側トレンチ西断面 層位：10層（盛土③） 取上No.171	種類：炭化材（クスノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

は、盛土③の試料が、墳丘南西部の8層から採取された炭化材 No.152 (PLD-35752) と、同じく墳丘南西部の8層最下部から採取された No.153 (PLD-35753)、墳丘北東部の7層から採取された No.168 (PLD-35759)、墳丘北東部の10層から採取された No.171 (PLD-35760) の4点、盛土表層の試料が、墳丘南西部で採取された炭化材 No.155 (PLD-35755) と No.159 (PLD-35756)、墳丘南東部で採取された No.165 (PLD-35757) と No.166 (PLD-35758) の4点、周溝壁面表層の試料が、西側周溝南半部

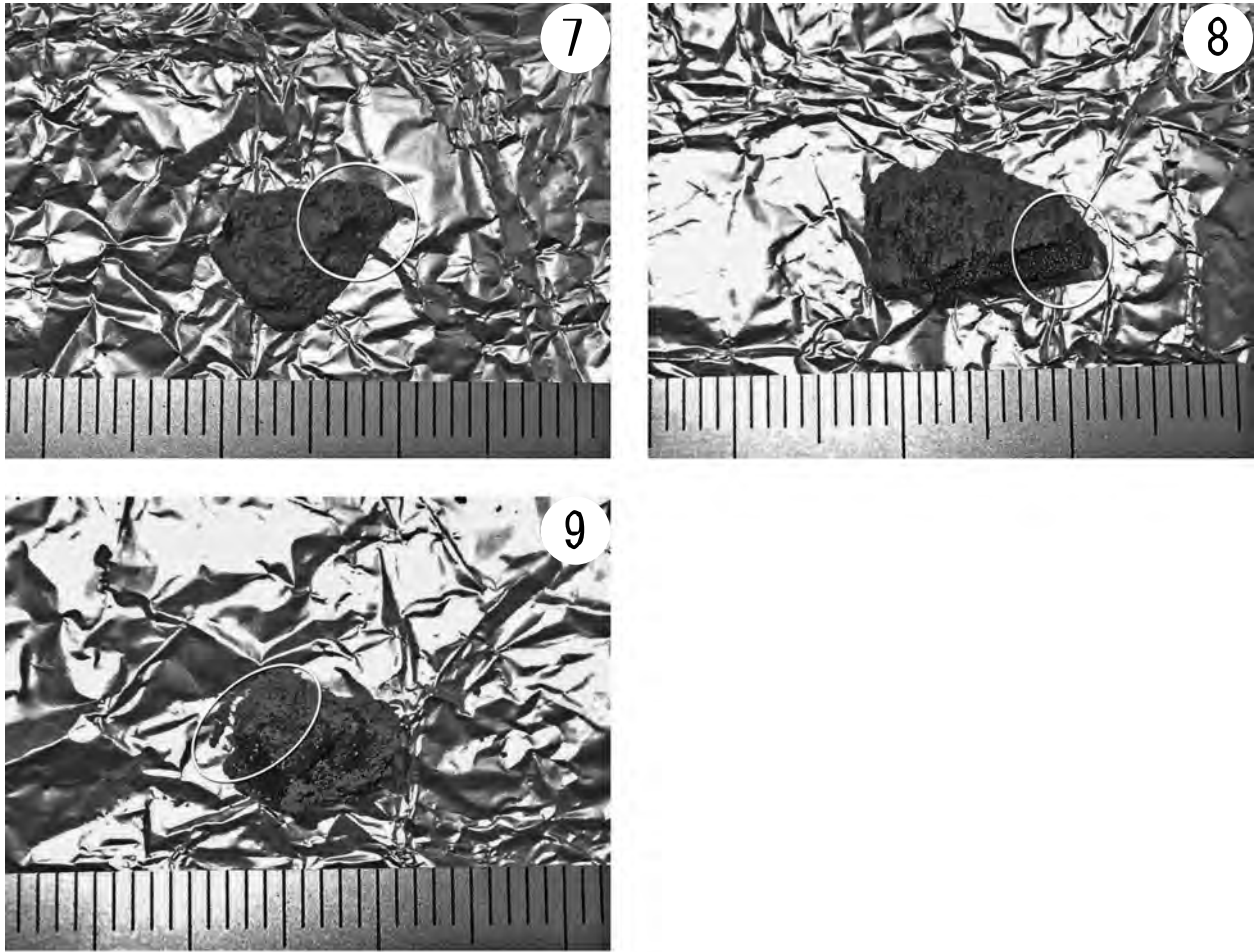


- 1. 取上 No.152 (PLD-35752)
- 3. 取上 No.154 (PLD-35754)
- 5. 取上 No.159 (PLD-35756)

- 2. 取上 No.153 (PLD-35753)
- 4. 取上 No.155 (PLD-35755)
- 6. 取上 No.165 (PLD-35757)

採取位置：○印箇所

第 61 図 試料写真と採取位置 (1)



7. 取上 No.166 (PLD-35758)
9. 取上 No.171 (PLD-35760)

8. 取上 No.168 (PLD-35759)

採取位置：○印箇所

第 62 図 試料写真と採取位置（2）

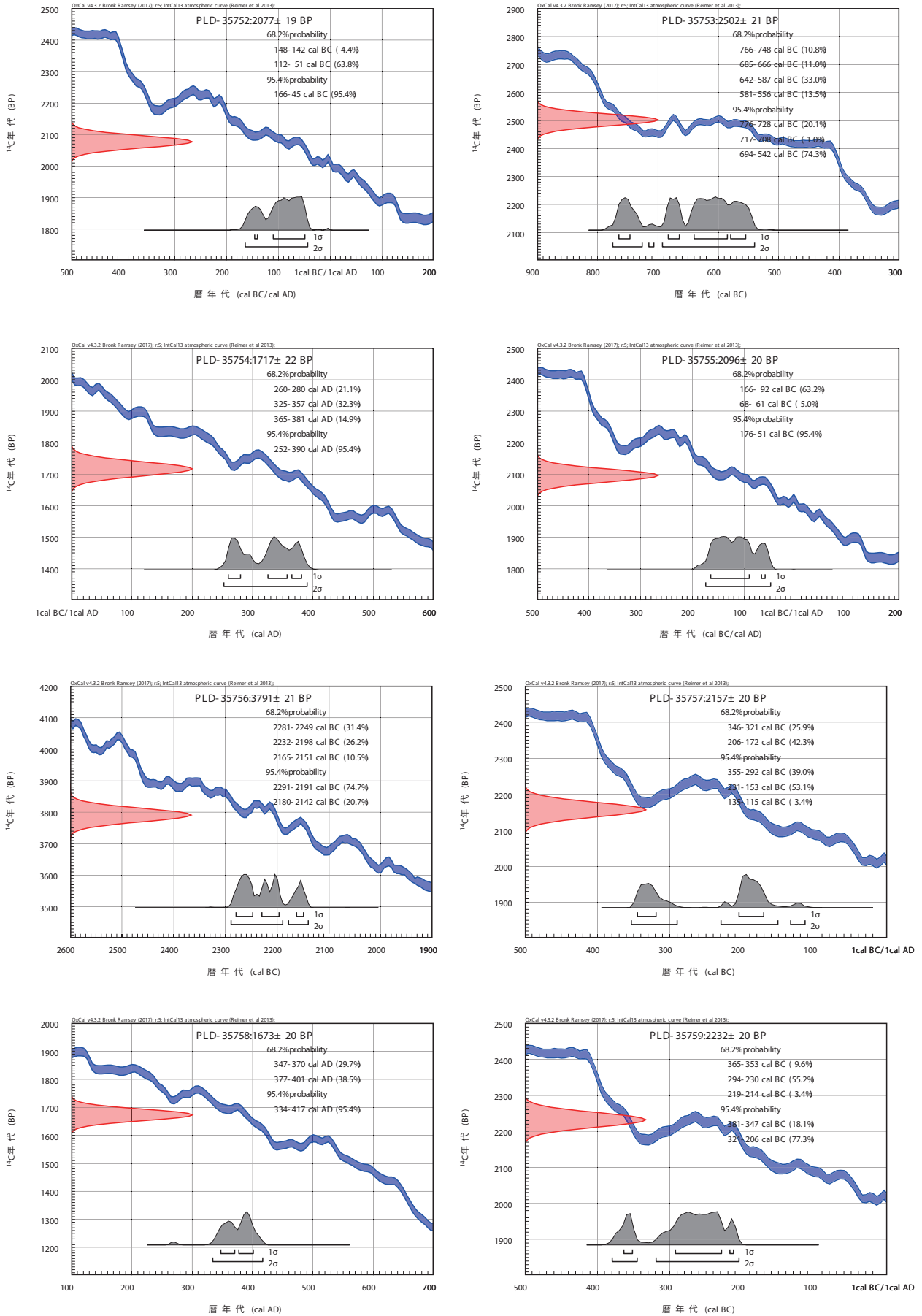
から採取された No.154 (PLD-35754) の 1 点である。いずれも最終形成年輪を欠く、部位不明の炭化材である。調査所見によれば、松尾頭 3 号墓は弥生時代終末期に築造されたと推測されている。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第 9 表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第 63・64 図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2%であることを示す。



第63図 暦年較正結果 (1)

第9表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

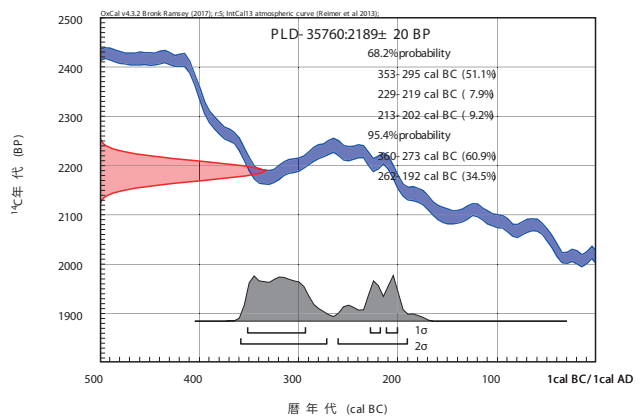
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-35752 取上No. 152	-25.96 \pm 0.13	2077 \pm 19	2075 \pm 20	148-142 cal BC (4.4%) 112- 51 cal BC (63.8%)	166-45 cal BC (95.4%)
PLD-35753 取上No. 153	-24.87 \pm 0.15	2502 \pm 21	2500 \pm 20	766-748 cal BC (10.8%) 685-666 cal BC (11.0%) 642-587 cal BC (33.0%) 581-556 cal BC (13.5%)	776-728 cal BC (20.1%) 717-708 cal BC (1.0%) 694-542 cal BC (74.3%)
PLD-35754 取上No. 154	-27.70 \pm 0.21	1717 \pm 22	1715 \pm 20	260-280 cal AD (21.1%) 325-357 cal AD (32.3%) 365-381 cal AD (14.9%)	252-390 cal AD (95.4%)
PLD-35755 取上No. 155	-25.91 \pm 0.13	2096 \pm 20	2095 \pm 20	166- 92 cal BC (63.2%) 68- 61 cal BC (5.0%)	176-51 cal BC (95.4%)
PLD-35756 取上No. 159	-24.86 \pm 0.11	3791 \pm 21	3790 \pm 20	2281-2249 cal BC (31.4%) 2232-2198 cal BC (26.2%) 2165-2151 cal BC (10.5%)	2291-2191 cal BC (74.7%) 2180-2142 cal BC (20.7%)
PLD-35757 取上No. 165	-26.43 \pm 0.12	2157 \pm 20	2155 \pm 20	346-321 cal BC (25.9%) 206-172 cal BC (42.3%)	355-292 cal BC (39.0%) 231-153 cal BC (53.1%) 135-115 cal BC (3.4%)
PLD-35758 取上No. 166	-26.70 \pm 0.14	1673 \pm 20	1675 \pm 20	347-370 cal AD (29.7%) 377-401 cal AD (38.5%)	334-417 cal AD (95.4%)
PLD-35759 取上No. 168	-26.25 \pm 0.13	2232 \pm 20	2230 \pm 20	365-353 cal BC (9.6%) 294-230 cal BC (55.2%) 219-214 cal BC (3.4%)	381-347 cal BC (18.1%) 321-206 cal BC (77.3%)
PLD-35760 取上No. 171	-26.57 \pm 0.19	2189 \pm 20	2190 \pm 20	353-295 cal BC (51.1%) 229-219 cal BC (7.9%) 213-202 cal BC (9.2%)	360-273 cal BC (60.9%) 262-192 cal BC (34.5%)

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出

された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第64図 暦年較正結果(2)

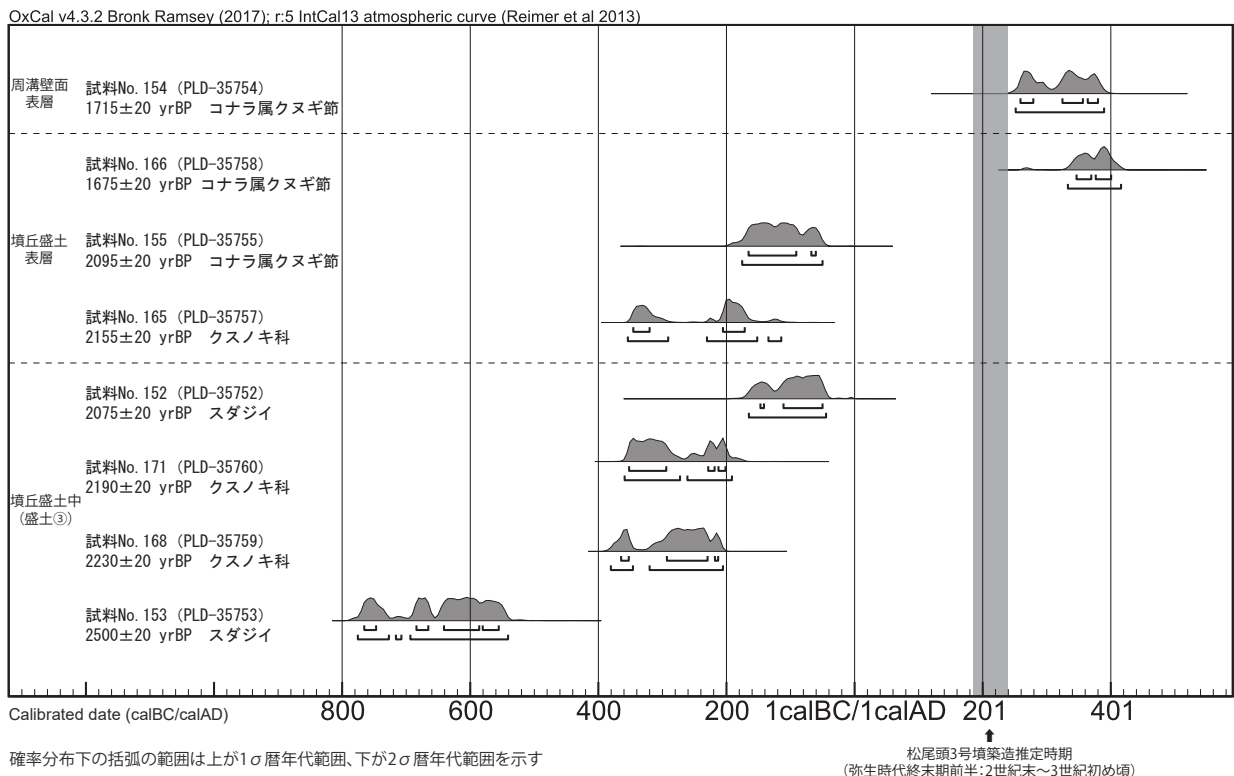
4. 考察

以下、各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して結果を整理する。第65図に暦年較正結果のマルチプロット図を示す（大幅に古い年代を示したNo.159（PLD-35756）を除く）。なお、縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2008）と千葉（2008）、弥生時代の暦年代については藤尾（2013）を参照した。

西側周溝南半部の区画溝壁面表層から出土したNo.154（PLD-35754）は、252-390 cal AD（95.4%）で、古墳時代前期に相当する暦年代を示した。松尾頭3号墓の推定時期である弥生時代終末期よりもやや新しい年代を示した。

盛土表層の試料4点は、墳丘南西部から採取されたNo.155（PLD-35755）が176-51 cal BC（95.4%）で、弥生時代中期中葉～後葉に相当する暦年代を、No.159（PLD-35756）が2291-2191 cal BC（74.7%）および2180-2142 cal BC（20.7%）で、縄文時代後期前葉に相当する暦年代を示した。また、墳丘南東部から採取されたNo.165（PLD-35757）は355-292 cal BC（39.0%）、231-153 cal BC（53.1%）、135-115 cal BC（3.4%）で、弥生時代前期後半～中期中葉に相当する暦年代を、No.166（PLD-35758）は334-417 cal AD（95.4%）で、古墳時代前期～中期に相当する暦年代を示した。松尾頭3号墓の推定時期である弥生時代終末期に対し、No.166は古墳時代前期～中期でやや新しい年代を、No.155とNo.165は弥生時代前期～中期でやや古い年代を、No.159は縄文時代後期で古い年代を示した。

盛土③の試料4点は、墳丘南西部の8層から採取されたNo.152（PLD-35752）が166-45 cal BC（95.4%）で弥生時代中期中葉～後葉に相当する暦年代を、8層最下部から採取されたNo.153（PLD-35753）が776-728 cal BC（20.1%）、717-708 cal BC（1.0%）、694-542 cal BC（74.3%）で縄文時代晩期後葉～弥生時代前期に相当する暦年代を示した。また、墳丘北東部の7層から採取されたNo.168（PLD-35759）



第65図 マルチプロット図 (No.159 (PLD-35756) を除く)

は 381-347 cal BC (18.1%) および 321-206 cal BC (77.6%) で弥生時代前期後半～中期中葉に相当する暦年代を、墳丘北東部の 10 層から採取された No.171 (PLD-35760) は 360-273 cal BC (60.8%) および 262-192 cal BC (34.5%) で弥生時代前期末～中期中葉に相当する暦年代を示した。いずれも縄文時代晩期後葉～弥生時代中期の年代におさまる炭化材で、松尾頭 3 号墓の推定時期である弥生時代終末期よりも、古い年代を示した。

今回の分析試料 9 点のうち 7 点は、縄文時代後期～弥生時代中期におさまる暦年代を示した。これらの試料は、松尾頭 3 号墓の築造以前に居住していた人々の生活に伴う炭化材であったと推測される。残り 2 点は古墳時代前期～中期におさまる暦年代で、墳丘築造後の試料と考えられる。

なお、木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、いずれも最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であったと考えられる。

引用文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 千葉 豊 (2008) 縁帯文土器. 小林達雄編「総覧縄文土器」: 642-649, アム・プロモーション.
- 藤尾慎一郎 (2013) 弥生文化像の新構築. 275p, 吉川弘文館.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学 2 歴史のものさしー縄文時代研究の編年体系ー」: 257-269, 同成社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

第4節 第33次調査に伴う自然科学分析（炭化材樹種同定）

株式会社パレオ・ラボ 黒沼保子

1. はじめに

妻木晩田遺跡の第33次調査で松尾頭10区の墳丘墓（松尾頭3号墓）から出土した炭化材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、松尾頭3号墓の墳丘および周溝から採取された炭化材9点である。試料の内訳は、盛土③で採取された炭化材では、墳丘南西部の第25図13層から1点と13層最下部から1点、墳丘北東部の同8層から1点と23層から1点の、計4点、西側周溝南半部で採取された炭化材では周溝壁面表層から1点、盛土表層で採取された炭化材では、墳丘南西部から2点と墳丘南東部から2点の、計4点である。調査所見では、墳丘墓は弥生時代終末期に築造されたと推測されているが、年代測定の結果は縄文時代後期～古墳時代中期まで幅広い年代が得られた（放射性炭素年代測定の項参照）。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。残りの試料は、鳥取県立むきばんだ史跡公園に保管されている。

3. 結果

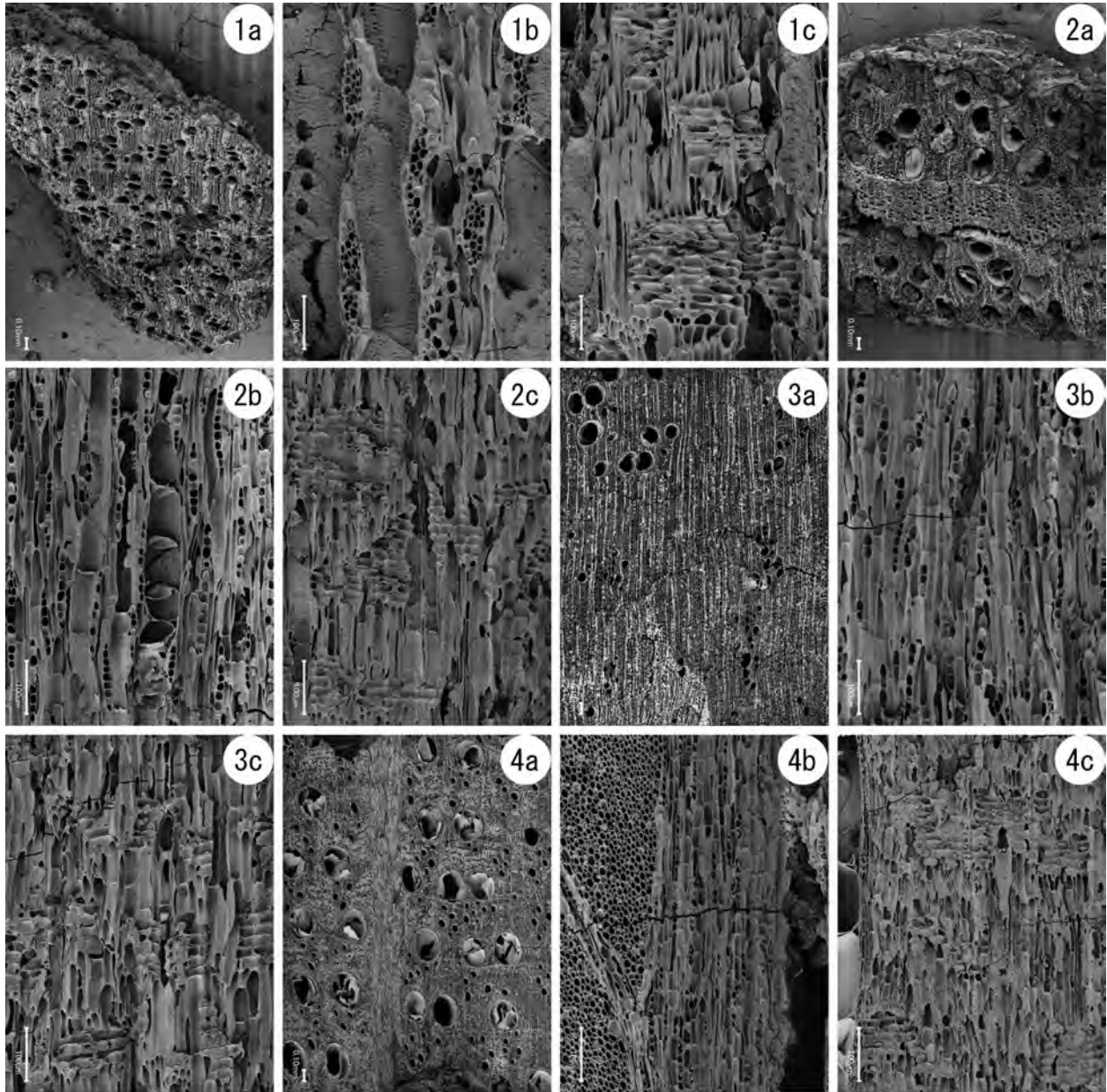
樹種同定の結果、広葉樹のクスノキ科とクリ、スダジイ、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）の4分類群が確認された。形状は、いずれも残存径2cm以下の破片で、残存年輪数は最大13年輪であった。結果の一覧を第10表に示す。

次に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

第10表 樹種同定結果一覧

取上No.	地区	グリッド	遺構	位置	層位	樹種	形状	残存径	残存年輪数	年代測定番号	年代測定結果
152	松尾頭10区	A012	松尾頭3号墓	墳丘南西部	13層（盛土③）	スダジイ	破片	0.5cm	2	PLD-35752	弥生中期中葉～後葉
153				西側トレンチ南断面	13層最下部（盛土③）	スダジイ	破片	1.5cm	9	PLD-35753	縄文晩期後葉～弥生前期
154				西側周溝南半部東壁面	周溝壁面表層（埋土①または②下面）	コナラ属クヌギ節	破片	1.5cm	13	PLD-35754	古墳前期
155				墳丘南西部	盛土表層（表土下面）	コナラ属クヌギ節	破片（節）	0.8cm	1	PLD-35755	弥生中期中葉～後葉
159				墳丘南西部	盛土表層（表土下面）	クリ	破片	0.8cm	2	PLD-35756	縄文後期前葉
165				墳丘南東部	盛土表層（表土下面）	クスノキ科	破片（節）	2cm	不明	PLD-35757	弥生前期後半～中葉
166				墳丘南東部	盛土表層（表土下面）	コナラ属クヌギ節	破片	1cm	5	PLD-35758	古墳前期～中期
168				墳丘北東部東側トレンチ北断面	8層（盛土③）	クスノキ科	破片	1cm	3	PLD-35759	弥生前期後半～中葉
171				AN12	墳丘北東部北側トレンチ西断面	23層（盛土③）	クスノキ科	破片	0.5cm	5	PLD-35760

※「層位」欄の層番号は第25図を参照



1a-1c. クスノキ科 (取上 No.171) 2a-2c. クリ (取上 No.159)
 3a-3c. スダジイ (取上 No.153) 4a-4c. コナラ属クスギ節 (取上 No.154)
 a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面

第 66 図 妻木晩田遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

(1) クスノキ科 Lauraceae 第 66 図 1a-1c (取上 No.171)

やや小型の道管が、単独ないし 2～4 個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3 列幅である。クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など 8 属がある。

(2) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 第 66 図 2a-2c (取上 No.159)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性

に優れ、保存性が高い。

(3) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 第66図 3a-3c (取上 No.153)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。スダジイは福島県と新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

(4) コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 第66図 4a-4c (取上 No.154)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靱で、加工困難である。

4. 考察

年代測定の結果、同じ層位からの試料でも時期が異なっていたため、ここでは年代測定の結果のおおまかな時期ごとに考察する。

縄文時代後期の暦年代を示した、盛土表層の No.159 はクリであった。

縄文時代晩期～弥生時代前期の暦年代を示した、盛土③の No.153 はスダジイであった。

弥生時代前期後半～中期中葉の暦年代を示した、盛土表層の No.165 と、盛土③の No.168 と No.171 は、いずれもクスノキ科であった。

弥生中期中葉～後葉の暦年代を示した、盛土③の No.152 はスダジイ、盛土表層の No.155 はクヌギ節であった。

古墳時代前期の暦年代を示した西側周溝南半部の周溝壁面表層の No.154 と、古墳時代前期～中期の暦年代を示した盛土表層の No.166 は、いずれもクヌギ節であった。

今回の分析試料の用途はいずれも不明であるが、古墳時代の試料は墳丘墓築造後、縄文時代～弥生時代中期の試料は墳丘墓築造以前に居住していた人々生活に伴う炭化材であると推測されている。したがって、分析結果はそれぞれの時期の周辺植生を反映していると考えられる。縄文時代後期にはクリ、縄文時代晩期～弥生時代前期にはスダジイ、弥生時代前期～中期にはクスノキ科、弥生時代中期にはスダジイとクヌギ節、古墳時代にはクヌギ節が遺跡周辺に生育しており、伐採もしくは枯死した樹木が利用されたと推測される。

なお、妻木晩田遺跡の弥生時代後期～古墳時代初頭の建築部材を中心とした炭化材の分析によれば、ケヤキやシイ属、クリ、クワ属、サクラ、アカガシ亜属、クスノキ科など多様な常緑および落葉広葉樹が確認されており（伊東・山田編，2012）、今回の試料の樹種構成は、これに類似している。

引用文献

平井信二（1996）木の大本科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．

第5節 第34次調査に伴う自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

妻木晩田遺跡は、鳥取県西伯郡大山町妻木に所在し、標高90～150mの通称「晩田山」丘陵に形成された弥生時代の遺跡である。

本分析調査では、第34次発掘調査地点における遺構の形成年代を推定し、遺構形成時の古環境、古植生、森林火災や人為の影響などについて明らかにすることを目的とし、放射性炭素年代測定、花粉分析、微粒炭分析、植物珪酸体分析、炭化材同定、大型植物遺体分析を実施する。

2. 試料

試料は、調査区北側の3407遺構、および調査区中央付近の3406土坑より採取されている。3407遺構は竪穴式住居あるいは段状遺構と想定されており、遺物などから弥生時代後期前葉と考えられている。一方、3406土坑は弥生時代終末期よりも古いと想定されているが、遺物がなく時期が不明である。

土壌サンプル1は、3407遺構より採取された土壌で、埋土断面は、上位から表土、遺構埋土1層～4層、地山に区分されている。遺構埋土4層は、住居の床であった可能性が想定されている。遺構埋土3層では空隙が多く見られるのに対して、遺構埋土2層は空隙が少なく、固い。遺構埋土1層は、遺構埋土2層が土壌化したものと見られる。いずれも、炭化物が見られる。この内遺構埋土1層から試料番号①、遺構埋土2層から試料番号②、③、遺構埋土3層から試料番号④、⑤、遺構埋土4層から試料番号⑥が採取されている。

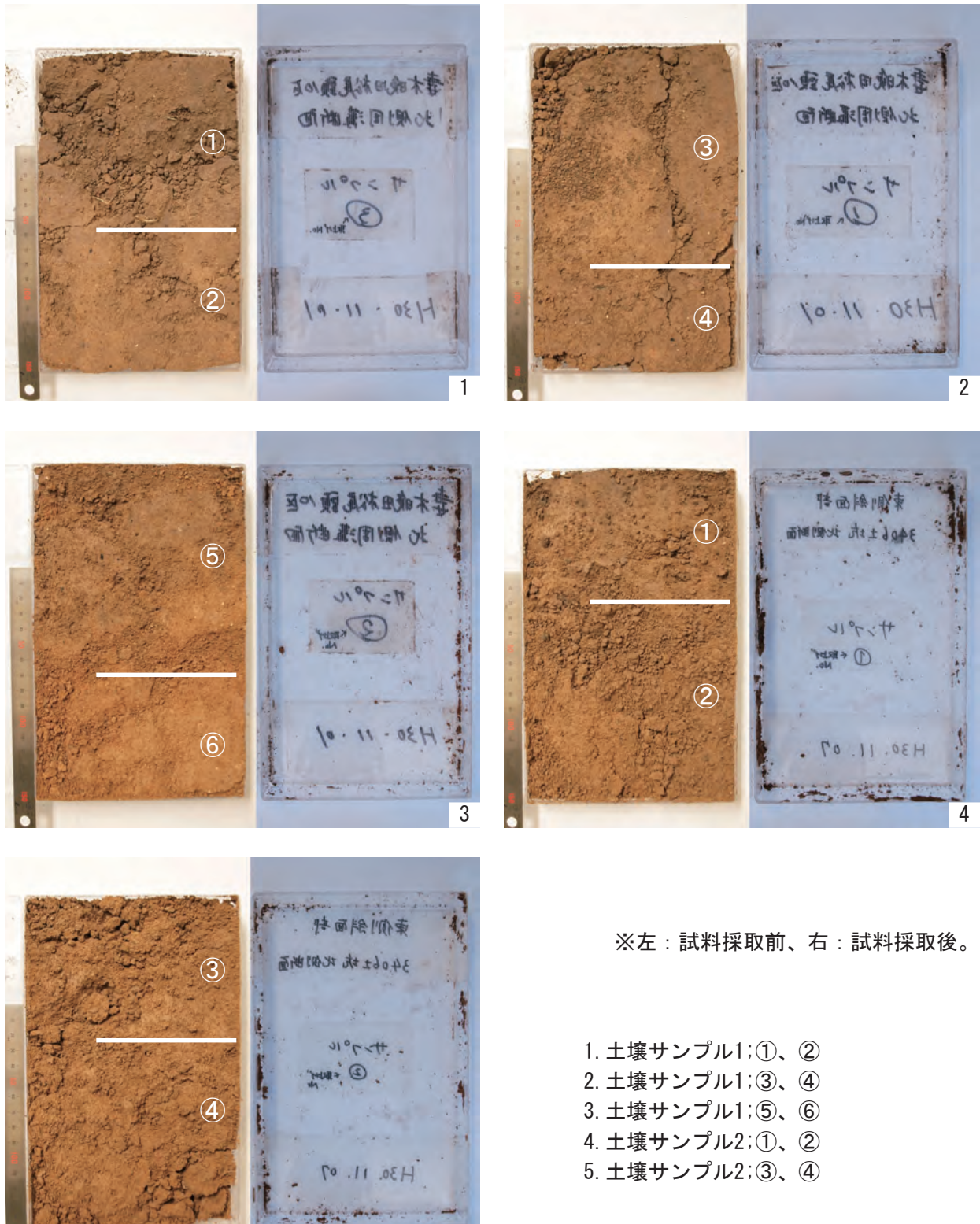
土壌サンプル2は、3406土坑より採取された土壌で、上位の遺物包含層および表土を含む断面から採取されている。上位から表土、遺物包含層、遺構埋土2層、遺構埋土1層、地山に区分されている。遺構埋土1層では空隙が見られるのに対し遺構埋土2層は1層よりも締まる。遺物包含層は土壌化が進んだ層である。いずれも、炭化物が見られる。この内、遺物包含層から試料番号①、遺構埋土2層から試料番号②、③、遺構埋土1層から試料番号④が採取されている。

これらの土壌試料、および土壌中より抽出した炭化材試料を用いて、放射性炭素年代測定7点、花粉分析5点、微粒炭分析5点、植物珪酸体分析5点、炭化材同定2式、大型植物遺体分析9式を実施する。試料の写真を第67・68図に示し、詳細は各分析の結果と合せて表に示す。

3. 分析方法

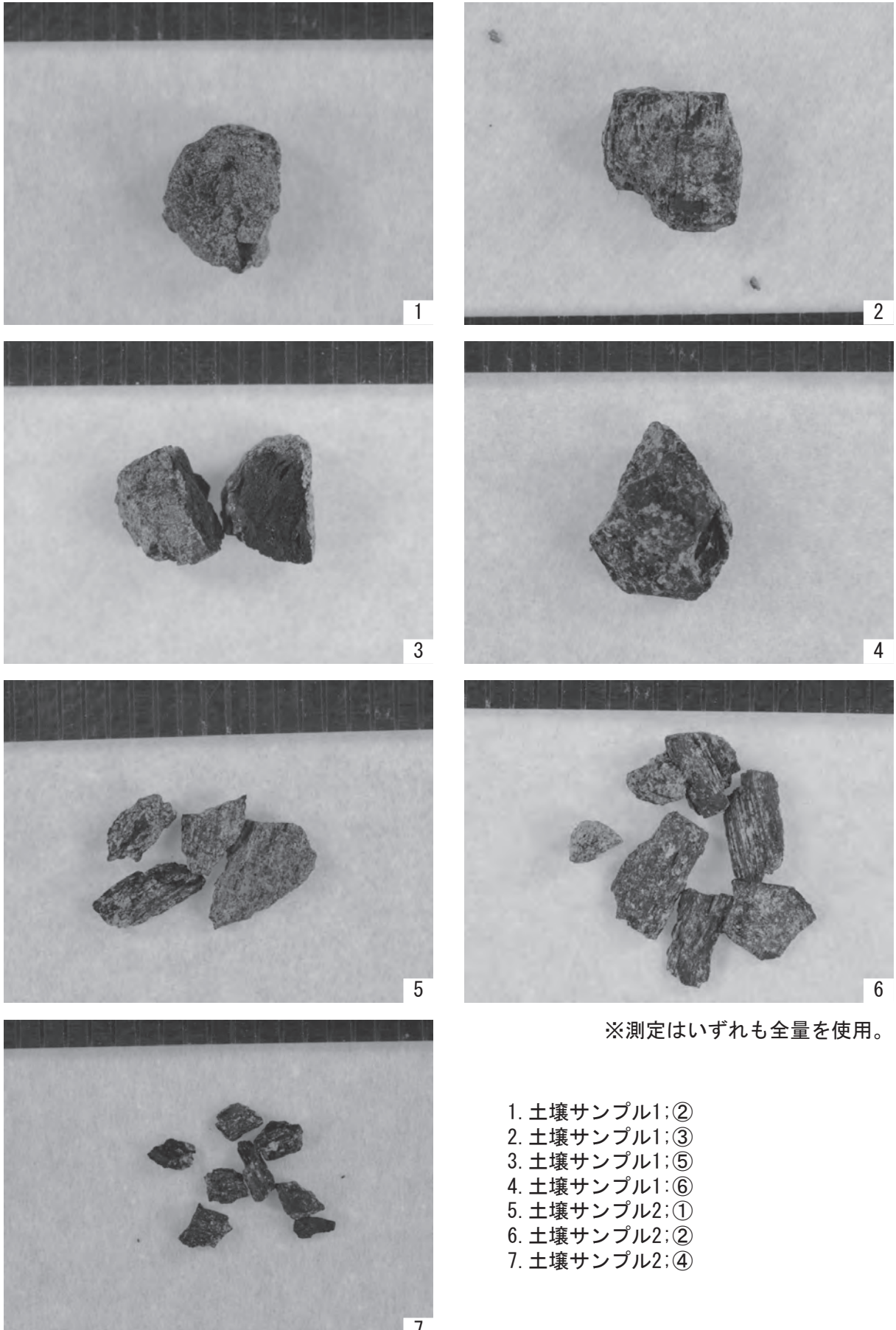
(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。周囲を土壌等削り落として試料を調整する。削り落とした残渣で樹種同定を行う。土壌サンプル2の試料は大きな炭化材がないため、複数の炭化材を集めて分析用試料とする。試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸)処理、原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基



第 67 図 分析試料

準試料からのずれを千分偏差 (%) で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3 (Bronk,2009)、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al.,2013) である。



第68図 放射性炭素年代測定試料

(2) 花粉分析・微粒炭分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭（微細な炭化植物片）の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから（安田,1987 など）、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井(1996)、井上ほか（2002）等を参考にする。計数は、山野井（1996）などを参考にし、長径が約 20 μ m 以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。有効な層位的変化などが認められた場合、ダイヤグラムを作成して表示する。微粒炭量は、山野井（1996）などを参考とし、分析土壌量（cc）、分析残渣量（ml）、プレパラート作成量（ μ l）を測定し、堆積物 1cc あたりに含まれる個数を一覧表、図に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

(3) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）及び葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(4) 炭化材同定

試料は、微細物分析で検出された炭化材のうち、2mm を超えるものについて観察を行う。ただし、土壌サンプル 2 については、2mm 以上の炭化材が存在しなかったため、1mm 以上について観察した。双眼実体顕微鏡下で、樹種、残存直径、残存年輪数、最終年輪形成、心材 / 辺材の区分を観察し、そこから、推定直径、推定年輪がわかる場合は計算で求める。重量を測定したあと、周りをトリミングして年代測定用の試料を作成し、トリミングの際に出た残渣を用いて、電子顕微鏡観察を行う。

炭化材は、年代測定用にトリミングを行った残渣を用い、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、電子顕微鏡で観察する。なお、土壌サンプル 2 については、複数個の炭化材を一括して年代測定するため、その中の 1 片の一部を用いる。木材組織の種類や配列の特徴を、

現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler 他(1998)、Richter 他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

(5) 大型植物遺体分析

試料から炭化材や炭化種実などの遺物を分離・抽出するために、試料を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、速やかに容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。

水洗後、水に浮いた試料(炭化材主体)と水に沈んだ試料(砂礫主体)を、粒径別に常温乾燥させる。乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実や主に2mm以上の炭化材、菌核、昆虫類、動物遺存体などの遺物を抽出する。

炭化種実の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数と重量、最大径を求め、結果を一覧表で示す。同定された分類群は、写真図版に示して同定根拠とする。炭化材は、2mm以上の個数と最大径、重量を求めて表示し、一部を樹種同定および放射性炭素年代測定試料に供する。炭化種実・炭化材以外の遺物類は、個数または重量と一部最大径を表示する。分析残渣は、炭化材主体、植物片主体、砂礫主体に大まかに分け、粒径別重量を表示する。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

第11表 放射性炭素年代測定結果

試料	性状	方法	補正年代 (暦年較正用)BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				確率%	Code No.	
					年代値						
土壌 サンプル1 ②	炭化材 ツバキ属	AaA (0.1M)	2145±25 (2143±23)	-26.7 ±0.5	σ	cal BC 343 - cal BC 325	2292 - 2274	calBP 11.1	TKA- 20579	pal- 11892	
						cal BC 205 - cal BC 161	2154 - 2110	calBP 49.7			
						cal BC 131 - cal BC 119	2080 - 2068	calBP 7.5			
					2σ	cal BC 352 - cal BC 300	2301 - 2249	calBP 19.5			
						cal BC 228 - cal BC 223	2177 - 2172	calBP 0.5			
						cal BC 211 - cal BC 94	2160 - 2043	calBP 75.4			
土壌 サンプル1 ③	炭化材 アカガシ亜属	AaA (0.1M)	3705±25 (3704±24)	-25.8 ±0.5	σ	cal BC 2137 - cal BC 2118	4086 - 4067	calBP 16.1	TKA- 20580	pal- 11893	
						cal BC 2097 - cal BC 2040	4046 - 3989	calBP 52.1			
						cal BC 2196 - cal BC 2170	4145 - 4119	calBP 7.1			
					2σ	cal BC 2147 - cal BC 2027	4096 - 3976	calBP 88.3			
						cal BC 44 - cal AD 16	1993 - 1935	calBP 68.2			
						cal BC 89 - cal BC 76	2038 - 2025	calBP 2.5			
土壌 サンプル1 ⑤	炭化材 シイ属	AaA (0.1M)	2015±25 (2016±24)	-22.8 ±0.4	σ	cal BC 56 - cal AD 54	2005 - 1897	calBP 92.9	TKA- 20581	pal- 11894	
						cal BC 19 - cal BC 13	1968 - 1962	calBP 4.7			
						cal AD 1 - cal AD 59	1950 - 1891	calBP 63.5			
					2σ	cal BC 41 - cal AD 70	1990 - 1880	calBP 95.4			
						cal BC 348 - cal BC 317	2297 - 2266	calBP 28.7			
						cal BC 208 - cal BC 171	2157 - 2120	calBP 39.5			
土壌 サンプル2 ①	炭化材 ブナ科	AaA (0.005M)	2160±25 (2158±23)	-25.5 ±0.5	σ	cal BC 356 - cal BC 287	2305 - 2236	calBP 40.1	TKA- 20583	pal- 11896	
						cal BC 234 - cal BC 147	2183 - 2096	calBP 50.3			
						cal BC 142 - cal BC 112	2091 - 2061	calBP 5.0			
					2σ	cal BC 352 - cal BC 297	2301 - 2246	calBP 49.7			
						cal BC 228 - cal BC 221	2177 - 2170	calBP 4.6			
						cal BC 211 - cal BC 195	2160 - 2144	calBP 13.9			
土壌 サンプル2 ②	炭化材 ブナ科	AaA (0.1M)	2175±25 (2177±24)	-26.6 ±0.6	σ	cal BC 358 - cal BC 278	2307 - 2227	calBP 55.7	TKA- 20584	pal- 11897	
						cal BC 259 - cal BC 171	2208 - 2120	calBP 39.7			
						cal BC 913 - cal BC 889	2862 - 2838	calBP 27.2			
					2σ	cal BC 881 - cal BC 844	2830 - 2793	calBP 41.0			
						cal BC 971 - cal BC 960	2920 - 2909	calBP 2.3			
						cal BC 936 - cal BC 831	2885 - 2777	calBP 93.1			
土壌 サンプル2 ④	炭化材 ブナ科	AaA (0.001M)	2750±25 (2748±24)	-27.5 ±0.4	σ	cal BC 913 - cal BC 889	2862 - 2838	calBP 27.2	TKA- 20585	pal- 11898	
						cal BC 881 - cal BC 844	2830 - 2793	calBP 41.0			
						cal BC 971 - cal BC 960	2920 - 2909	calBP 2.3			
					2σ	cal BC 936 - cal BC 831	2885 - 2777	calBP 93.1			
						cal BC 913 - cal BC 889	2862 - 2838	calBP 27.2			
						cal BC 881 - cal BC 844	2830 - 2793	calBP 41.0			

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差(測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAIは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAIは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、Intcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、2σが95.4%である

4. 結果

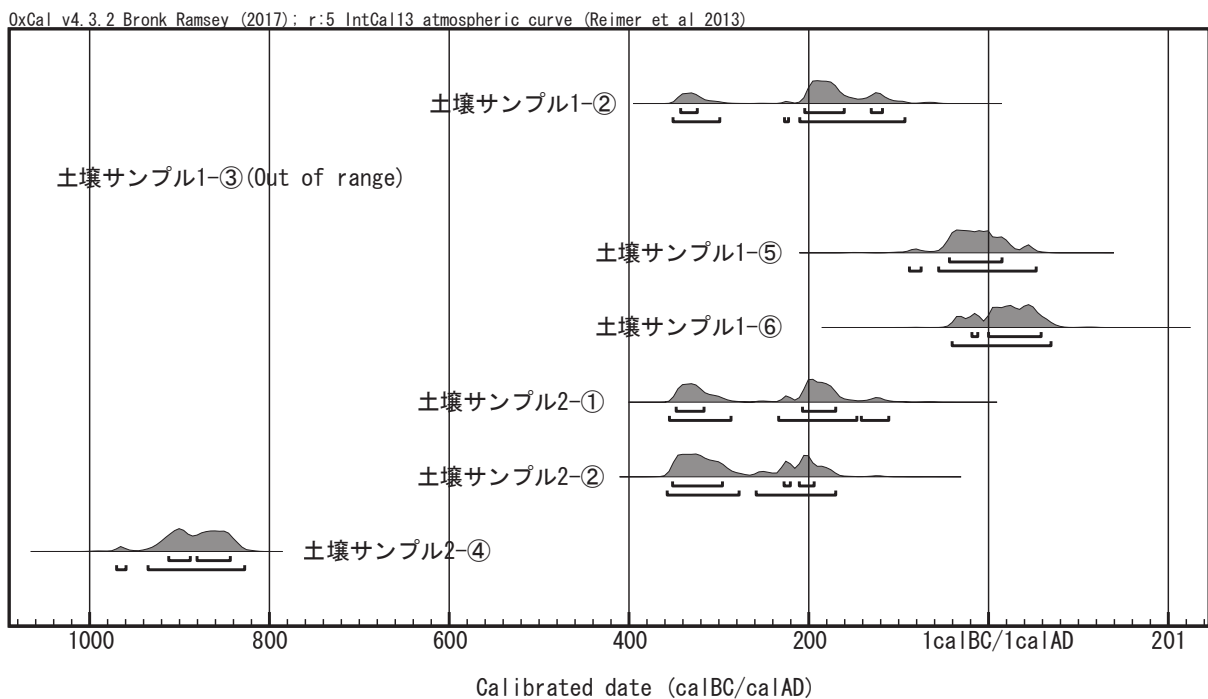
(1) 放射性炭素年代測定

結果を第11表に示す。今回は、分析量が通常(40～50mg)よりも少なかったため、アルカリの濃度を薄くして炭素の損耗を防いだ(表にはAaAと記載)。このような前処理の結果、測定に必要なグラファイトの量(1mg)は確保できた。同位体補正を行った測定値は、土壌サンプル1の試料番号②が $2,145 \pm 25$ BP、試料番号③が $3,705 \pm 25$ BP、試料番号⑤が $2,015 \pm 25$ BP、試料番号⑥が $1,980 \pm 25$ BP、土壌サンプル2の試料番号①が $2,160 \pm 25$ BP、試料番号②が $2,175 \pm 25$ BP、試料番号④が $2,750 \pm 25$ BPである。

暦年較正は、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、その後訂正された半減期(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、Intcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。2 σ の値は、土壌サンプル1の試料番号②がcalBC352～94、試料番号③がcalBC2,196～2,027、試料番号⑤がcalBC89～AD54、試料番号⑥がcalBC41～AD70、土壌サンプル2の試料番号①がcalBC356～112、試料番号②がcalBC358～171、試料番号④がcalBC971～831である。なお、土壌サンプル1の試料番号③は遺跡の年代に対して極端に古く、古い炭化材が混入した可能性がある。このため、図に表記しなかった。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

結果を第12表に示す。いずれの試料も花粉化石の産出状況が悪く、古植生推定のための定量解析を行えるだけの個体数が得られなかったため、ダイアグラムは作成しない。花粉化石やシダ類胞子の含有量も少なく、堆積物1ccあたりの個数は、一番多い土壌サンプル1の試料番号①で400個/cc、試料番号②、③で200個/cc、試料番号④、⑥で1ccあたり100個未満である。わずかに検出された花粉化石の保存状態も悪い。



第69図 暦年較正結果

検出された花粉化石は、木本花粉のツガ属、マツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属など、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、キク亜科などである。なお、試料番号③から、栽培種のソバ属も確認された。

微粒炭についてみると、土壌サンプル1の試料番号①で20,800個/cc、試料番号②で8,600個/cc、試料番号③で5,300個/cc、試料番号④で900個/cc、試料番号⑥で200個/ccであった。なお、微粒炭も花粉化石群集変化と併せて図示することが重要なため、ダイアグラムは作成しない。

(3) 植物珪酸体分析

結果を第13表、第71・72図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

土壌サンプル1の6点の植物珪酸体含量は、層位的に増減を繰り返す。試料番号⑥では400個/g程度であるが、上位の試料番号⑤から④にかけて15,500個/gまで増加する。その上位の（試料番号③で9,300個/gや）試料番号②では12,000個/gに減少するが、試料番号①では31,200個/gに増加する。

試料番号⑥では、タケ亜科やススキ属などが僅かに認められるに過ぎない。

試料番号④～①では、ほぼ同様な産状が見られる。すなわち、タケ亜科の産出が目立ち、イチゴツナギ亜科やススキ属が僅かあるいは稀に認められる。なおタケ亜科にはクマザサ属やメダケ属が見られ、この中ではクマザサ属の産出が目立つ。クマザサ属では特にミヤコザサ節が多く、チマキザサ節も見られる。メダケ属にはメダケ節やネザサ節が見られ、メダケ節の多い傾向が見られる。

イネ科では、この他に棒状珪酸体や毛細胞起源も検出される。また、イネ科の他に、樹木起源としてクスノキ科が検出される試料も見られる。

(4) 炭化材同定

計測結果ならびに樹種同定結果を第14表に示す。試料はいずれも小さく、樹皮もついていない。このため、いずれの試料も直径や樹齢を推定することは難しい。検出された樹種は広葉樹3種類（アカガシ亜属、シイ属、ツバキ属）である。土壌サンプル2の炭化材は、微細で広範囲の観察が難しく、ブナ科にとどめた。以下に検出された種類の解剖学的特徴を記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

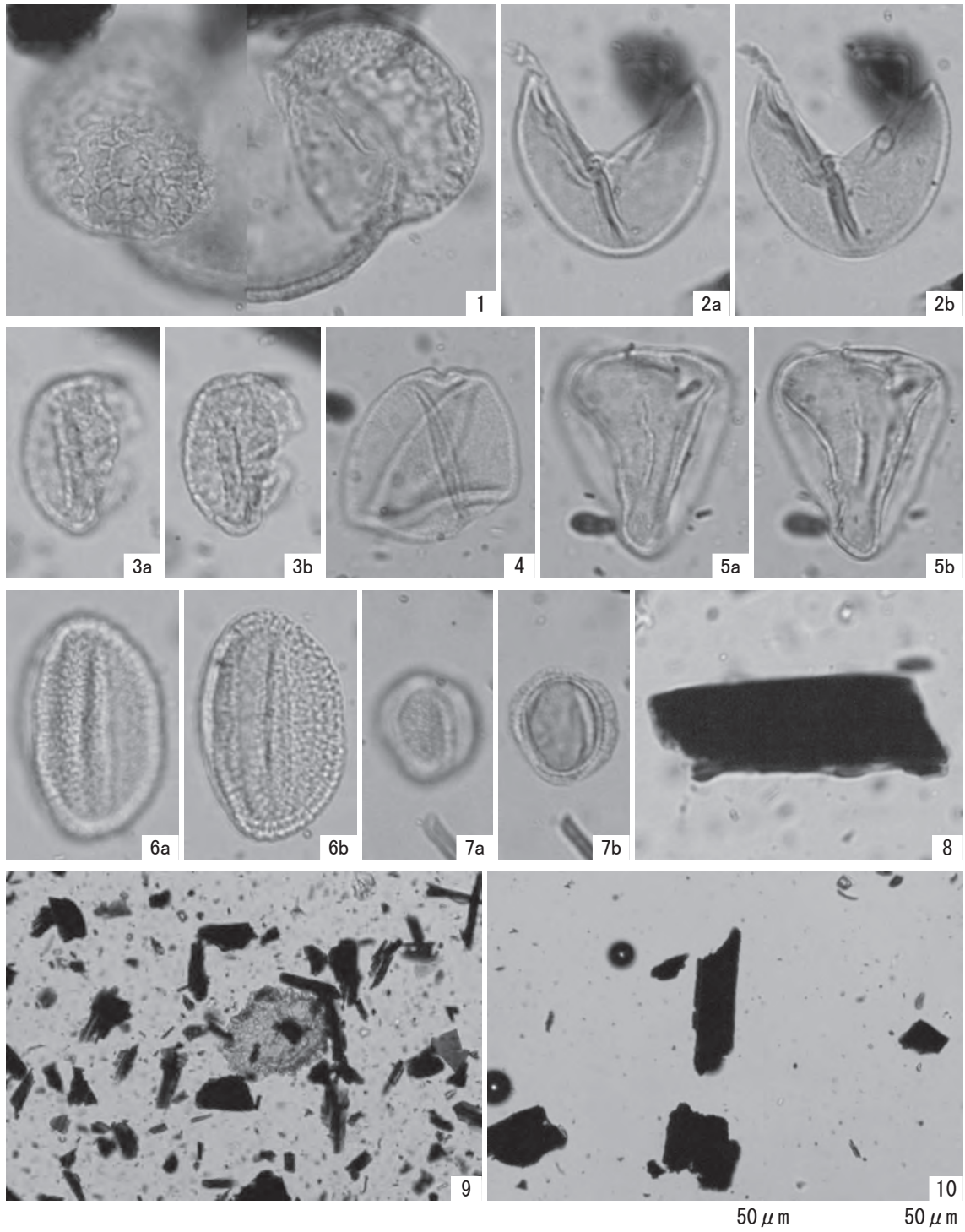
放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1～15細胞高。本来なら複合放射組織があるが、この個体では認められない（炭化材が微細なためだと思われる）。

・シイ属 (*Castanopsis*) ブナ科

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。スダジイだと思われるが、微細で観察できる面積が小さく、複合放射組織の有無が不明なため、シイ属とする。

・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。



- | | |
|--------------------------------|--------------------|
| 1. マツ属(土壤サンプル1;②) | 2. スギ属(3土壤サンプル1;②) |
| 3. コナラ属コナラ亜属(土壤サンプル1;②) | 4. イネ科(土壤サンプル1;①) |
| 5. カヤツリグサ科(土壤サンプル1;①) | 6. ソバ属(土壤サンプル1;③) |
| 7. ヨモギ属(土壤サンプル1;②) | 8. 微粒炭(土壤サンプル1;①) |
| 9. 花粉分析プレパラート内の状況(土壤サンプル1;①) | |
| 10. 微粒炭分析プレパラート内の状況(土壤サンプル1;②) | |

第 70 図 花粉化石・微粒炭写真

第12表 花粉分析・微粒炭分析結果

種 類	土壌サンプル1 3407遺構				
	①	②	③	④	⑤
木本花粉					
モミ属	-	1	-	-	-
ツガ属	1	1	-	-	-
マツ属複維管束亜属	-	1	3	-	-
マツ属(不明)	9	9	6	1	5
スギ属	1	3	1	-	-
カバノキ属	-	-	1	-	-
ハンノキ属	1	-	2	-	1
ブナ属	1	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	3	2	3	1	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	1	-	-
ニレ属—ケヤキ属	5	-	1	-	-
ツツジ科	-	-	1	-	-
草本花粉					
イネ科	18	1	4	1	-
カヤツリグサ科	5	2	-	-	-
ソバ属	-	-	1	-	-
アカザ科	-	1	-	-	-
カラマツソウ属	1	1	-	-	-
アブラナ科	1	-	-	-	-
アリノトウグサ属	-	-	3	-	-
セリ科	-	1	-	-	-
オミナエシ属	1	1	-	-	-
ヨモギ属	22	8	11	1	-
キク亜科	2	1	2	-	-
タンポポ科	1	-	-	-	-
不明花粉					
不明花粉	8	5	8	2	-
シダ類孢子					
イノモトソウ属	-	1	1	1	-
ゼンマイ属	-	-	-	1	-
他のシダ類孢子	107	65	63	35	5
合 計					
木本花粉	21	17	19	2	6
草本花粉	51	16	21	2	0
不明花粉	8	5	8	2	0
シダ類孢子	107	66	64	37	5
合計(不明を除く)	179	99	104	41	11
微粒炭数(個/cc)	20800	8600	5300	900	200
花粉・孢子数(個/cc)	400	200	200	<100	<100

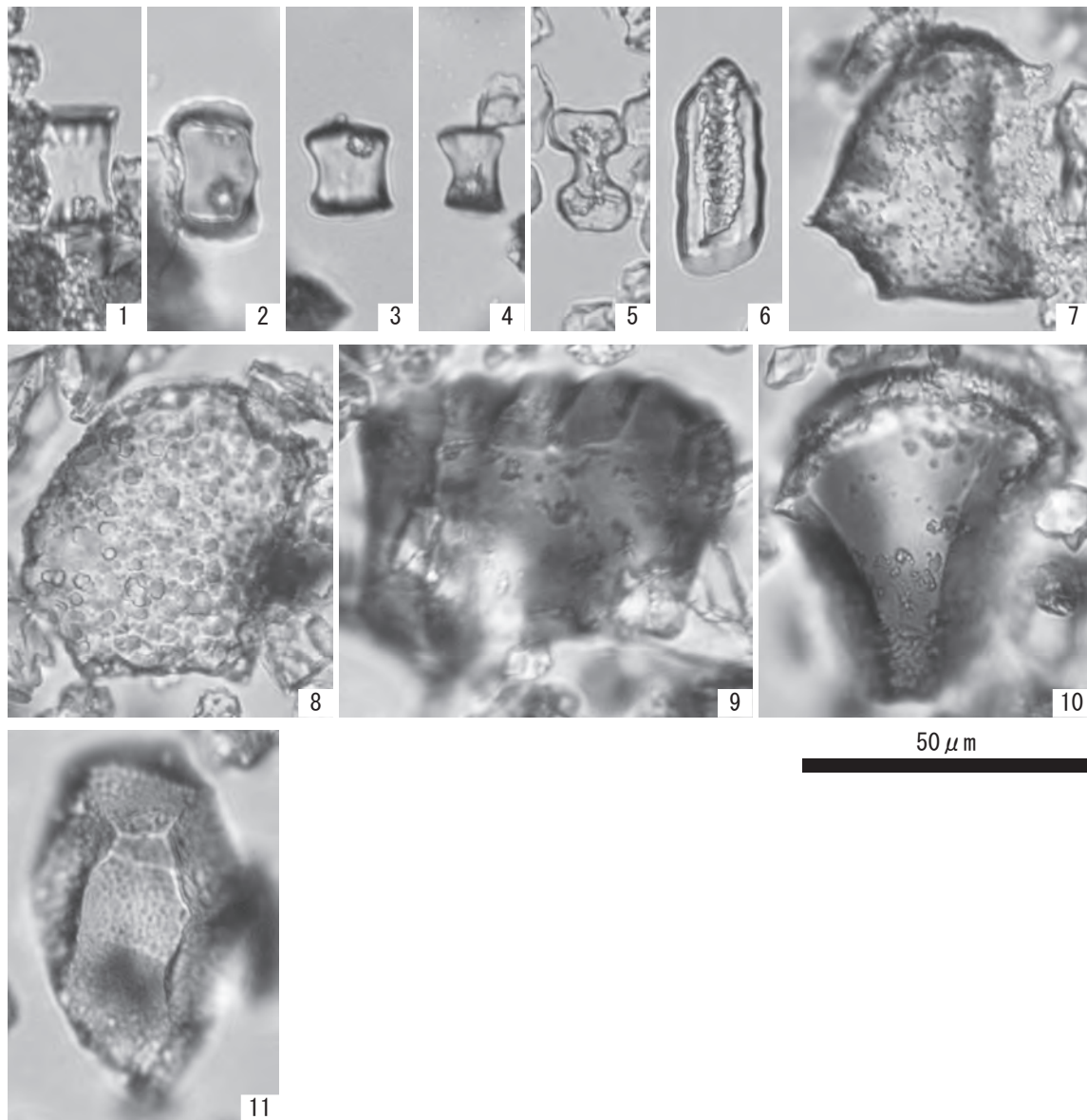
1)微粒炭数、花粉・孢子数については、10の位を四捨五入して100
 単位に丸めている。
 2)<100:100個未満。

(5) 大型植物遺体分析

a) 大型植物遺体出土状況

結果を第15表に示す。10試料1,750cc(乾重3,080g)を通じて、炭化種実14個、炭化材111個0.91g、菌核2,205個0.28g、昆虫類4個、ウニ類1個、不明3個が検出された。分析残渣は、炭化材主体1.76g、植物片0.73g、砂礫主体44.94gを測る。

試料別出土状況は、土壌サンプル1は、試料番号⑥(試料200cc)が炭化種実5個(ブナ科、イネ、不明)、炭化材5個0.05g(最大6.8mm)、試料番号⑤(試料150cc)が炭化種実2個(イネ)、炭化材13個0.16g(最大8.0mm)、試料番号④(試料150cc)が炭化種実2個(カラスザンショウ、イネ)、炭化材30個0.32g(最大9.5mm)、菌核3個、試料番号③(試料300cc)が炭化種実2個(エゴノキ、ヤエムグラ属)、炭化材30個0.22g(最大6.2mm)、ウニ類の棘1個(16.3mm)、試料番号②(試料200cc)が炭化種実1個(カラスザンショウ)、炭化材15個0.12g(最大6.1mm)、試料番号①(試料150cc)が炭化種実2個(カ



- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1. チシマザサ節短細胞珪酸体(土壌サンプル1:④) | 2. ミヤコザサ節短細胞珪酸体(土壌サンプル1:④) |
| 3. ネザサ節短細胞珪酸体(土壌サンプル1:①) | 4. メダケ節短細胞珪酸体(土壌サンプル1:①) |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(土壌サンプル1:①) | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(土壌サンプル1:⑤) |
| 7. ミヤコザサ節機動細胞珪酸体(土壌サンプル1:④) | 8. チシマザサ節機動細胞珪酸体(土壌サンプル1:④) |
| 9. ネザサ節機動細胞珪酸体(土壌サンプル1:①) | 10. メダケ節機動細胞珪酸体(土壌サンプル1:①) |

第 71 図 植物珪酸体写真

ラスザンショウ、イネ科(アワ?)、炭化材 2 個 0.004g(最大 3.8mm)、菌核 1 個、昆虫類 2 個(最大 2.2mm)である。このうち、試料番号⑥、⑤、③、②の炭化材 4 点を年代測定試料に供した。

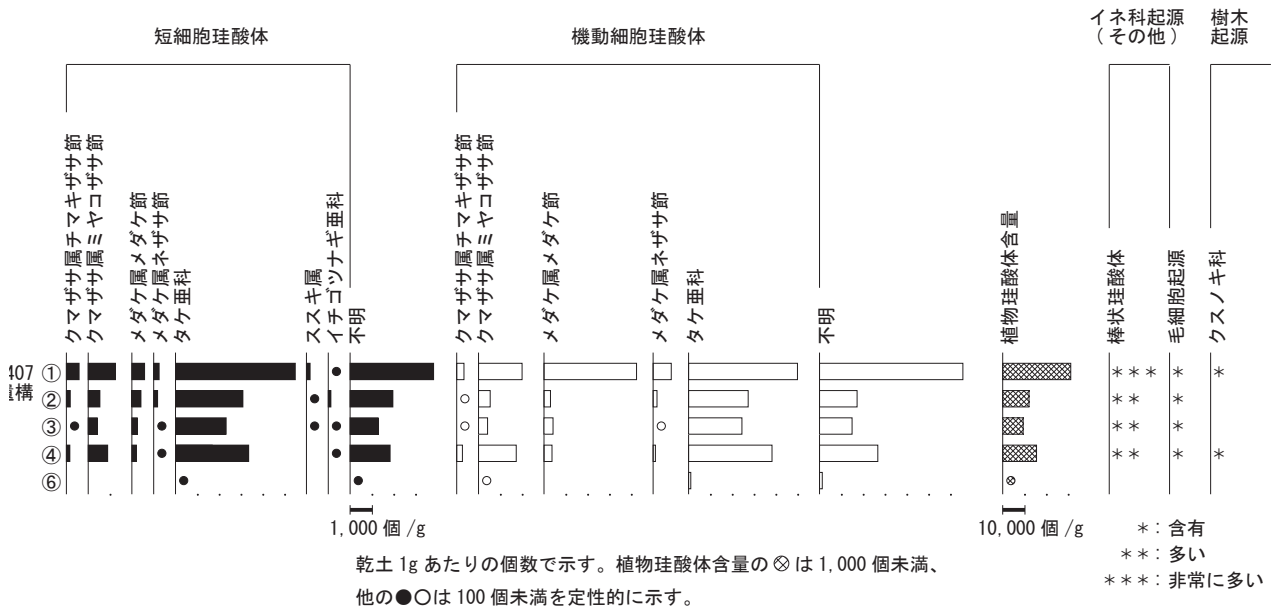
炭化種実は、全て土壌サンプル 1 より確認され、木本 3 分類群(ブナ科、カラスザンショウ、エゴノキ) 5 個、草本 3 分類群(イネ、イネ科(アワ?)、ヤエムグラ属) 6 個が同定された。試料番号⑥の 3 個は微細片で同定ができなかったが、1 個は 2 層以上から成り、うち 1 層は柵状構造を呈す。栽培種は、イネの類が試料番号⑥~④より 4 個と、栽培の可能性のあるイネ科(アワ?)が試料番号①より 1 個確認された。

土壌サンプル 2 は、試料番号④(試料 150cc)が炭化材 2 個 0.003g(最大 2.6mm)、菌核 394 個 0.05g、試料番号③(試料 100cc)が炭化材 3 個 0.003g(最大 3.8mm)、菌核 497 個 0.07 g、昆虫類 1 個(0.9mm)、

第13表 植物珪酸体含量

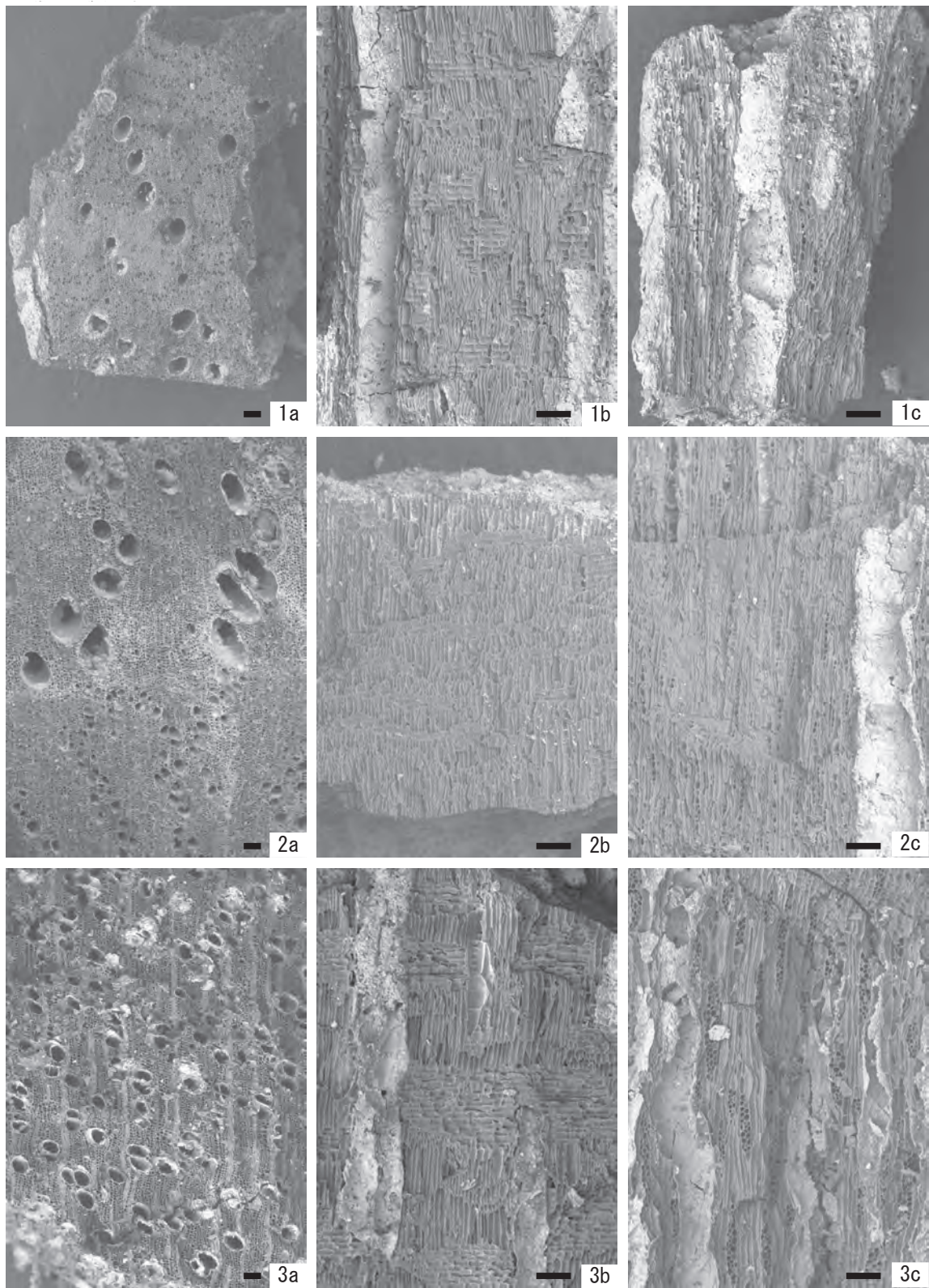
分類群	土壤サンプル1 3407遺構 (個/g)				
	①	②	③	④	⑥
イネ科葉部短細胞珪酸体					
クマザサ属チマキザサ節	600	200	<100	200	-
クマザサ属ミヤコザサ節	1,200	500	400	900	-
メダケ属メダケ節	600	400	200	200	-
メダケ属ネザサ節	200	200	<100	<100	-
タケ亜科	5,500	3,100	2,300	3,400	<100
ススキ属	200	<100	<100	-	-
イチゴツナギ亜科	<100	100	<100	<100	-
不明	3,800	2,000	1,300	1,800	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
クマザサ属チマキザサ節	300	<100	<100	300	-
クマザサ属ミヤコザサ節	2,000	500	400	1,700	<100
メダケ属メダケ節	4,200	300	400	400	-
メダケ属ネザサ節	800	200	<100	100	-
タケ亜科	5,000	2,700	2,400	3,800	100
不明	6,600	1,700	1,500	2,700	100
合計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	12,200	6,500	4,500	6,500	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	19,000	5,500	4,800	9,000	300
植物珪酸体含量	31,200	12,000	9,300	15,500	400
イネ科起源(その他)					
棒状珪酸体	***	**	**	**	-
毛細胞起源	*	*	*	*	-
樹木起源珪酸体					
クスノキ科	*	-	-	*	-

- 1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。
- 2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
- 3)<100: 100個/g未満。
- 4)-:未検出、*:含有、**:多い、***:非常に多い。



第72図 植物珪酸体含量

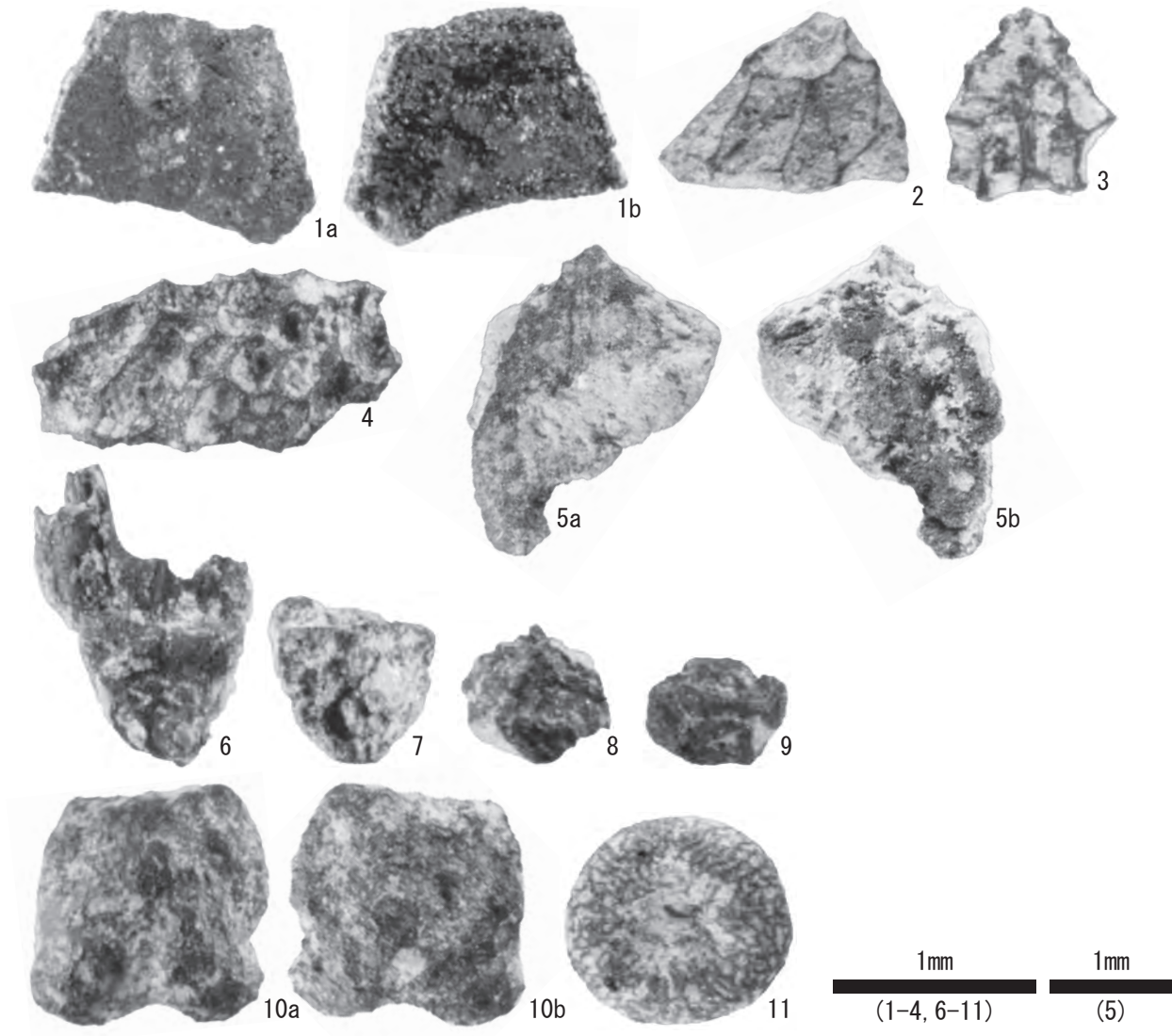
試料番号②(試料 200cc)が炭化材 7 個 0.03g(最大 5.0mm)、菌核 1,175 個 0.15g、昆虫類 1 個(2.4mm)、不明 3 個(最大 5.6mm)、試料番号①(試料 150cc)が炭化材 4 個 0.01g(最大 5.3mm)、菌核 135 個 0.01g である。菌核が多産し、特に試料番号②で圧倒的に多い。一方、炭化種実の確認されず、炭化材も少量である。試料番号④、②、①の炭化材 3 点を年代測定試料に供した。



- 1. アカガシ亜属(土壌サンプル1;③)
- 2. シイ属(土壌サンプル1;⑤)
- 3. クスノキ科(土壌サンプル1;②)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

第73図 炭化材写真



- 1. ブナ科 果実(土壌サンプル1:⑥)
- 2. カラスザンショウ 種子(土壌サンプル1:①)
- 3. カラスザンショウ 種子(土壌サンプル1:④)
- 4. カラスザンショウ 種子(土壌サンプル1:②)
- 5. エゴノキ 種子(土壌サンプル1:③)
- 6. イネ 穎(基部)(土壌サンプル1:⑥)
- 7. イネ 穎(基部)(土壌サンプル1:④)
- 8. イネ 穎(基部)(土壌サンプル1:⑤)
- 9. イネ 穎(基部)(土壌サンプル1:⑤)
- 10. イネ科(アワ?) 胚乳(土壌サンプル1:①)
- 11. ヤエムグラ属 核(土壌サンプル1:③)

第 74 図 大型植物遺存体（炭化種実）写真

第 14 表 炭化材観察・種実同定結果

試料	番号	枝番	個数	重量 (mg)	残存直径 (mm)	残存 年輪数	最終年輪 形成	辺材	推定年輪	樹種	年代測定 番号
土壌 サンプル1	②	a	1	25	4	3	不明	不明	不明	ツバキ属	pal-11892
		b	1	25	3	2	不明	不明	不明	ツバキ属	-
	③	a	1	41	4	2	不明	不明	不明	アカガシ亜属	pal-11893
		b	1	27	3	1	不明	不明	不明	シイ属	-
	⑤	a	1	36	3	1	不明	不明	不明	シイ属	pal-11894
		b	1	30	3	2	不明	不明	不明	シイ属	-
	⑥		1	33	3	2	不明	不明	不明	シイ属	pal-11895
土壌 サンプル2	①		4	12	-	-	-	-	-	ブナ科	pal-11896
	②		7	25	-	-	-	-	-	ブナ科	pal-11897
	④		8	5	-	-	-	-	-	ブナ科	pal-11898

1)ブナ科:小さすぎて樹種不明。シイ属、クリ、コナラ亜属、マテバシイの可能性あり。

第15表 大型植物遺存体分析結果

分類群	部位・状態/粒径	土壌サンプル1 3407遺構					土壌サンプル2 3406土坑				備考	
		遺構埋土 第1層	遺構埋土 第2層	遺構埋土 第3層	遺構埋土 第4層	遺物 包含層	遺構埋土 第1層	遺構埋土 第2層				
		①	②	③	④	⑤	⑥	①	②	③		④
炭化種実												
ブナ科	果実 破片	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	個数<0.01g,残存径1.37mm,果皮断面柵状
カラスザンショウ	種子 破片	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	個数<0.01g,残存径:①1.21mm,②1.78mm,④1.09mm
エゴノキ	種子 破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	個数<0.01g,残存径2.52mm,内面非炭化?
イネ	穎(基部) 破片	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-	個数<0.01g,最大:⑥1.61mm
イネ科(アワ?)	胚乳 完形	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	個数<0.01g,長さ1.14,幅1.11,厚さ0.71,胚長0.5mm,状態不良
ヤエムグラ属	核 完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	個数<0.01g,長さ0.67,幅1.07,厚さ0.98,孔径0.3mm
不明	種実? 破片	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	個数<0.01g,最大2.42mm,1個2層以上,うち1層柵状
炭化材	>2mm	2	15	30	30	13	5	4	7	3	2	個数
	>4mm	3.78	6.06	6.15	9.52	8.04	6.83	5.25	5.02	3.76	2.64	最大(mm)
	4-2mm	-	0.05	0.07	0.19	0.12	0.04	-	-	-	-	乾重(g)
	2-1mm	0.00	0.07	0.15	0.14	0.04	0.01	0.01	0.03	0.00	0.00	乾重(g)
炭化材主体	2-1mm	0.01	0.12	0.17	0.12	0.10	0.01	0.05	0.04	0.01	0.00	乾重(g)
	1-0.5mm	0.02	0.24	0.32	0.23	0.13	0.01	0.05	0.08	0.01	0.01	乾重(g)
菌類	菌核 完形	1	-	-	3	-	-	135	1175	497	394	個数
		0.00	-	-	0.00	-	-	0.01	0.15	0.07	0.05	乾重(g)
昆虫類	破片	2	-	-	-	-	-	-	1	1	-	個数
		2.23	-	-	-	-	-	-	2.38	0.86	-	最大(mm)
動物遺存体												
ウニ類	棘 破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	個数,残存長16.32mm
不明	不明 破片	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	個数,最大5.62mm
植物片		0.17	0.09	0.18	0.12	0.02	0.06	0.03	0.03	0.02	0.02	乾重(g)
砂礫主体	2-1mm	0.80	0.85	1.14	0.88	1.74	4.45	1.07	0.78	0.58	1.01	乾重(g)
	1-0.5mm	2.37	2.74	4.27	2.31	3.28	7.18	1.54	4.12	1.46	2.39	乾重(g),土粒・植物片含む
分析量	乾燥後	150	200	300	150	150	200	150	200	100	150	容積(cc)
		244	331	557	238	257	339	245	418	186	265	乾重(g)
試料量		450	500	700	450	500	700	350	700	500	450	容積(cc)
		407	536	720	425	509	616	375	783	500	448	湿重(g)

b) 炭化種実の記載

炭化種実各分類群の写真を図版6に示す。炭化種実の保存状態は不良である。なお、エゴノキは一部炭化していない可能性がある。以下、各分類群の形態的特徴等を述べる。

・ブナ科 (Fagaceae) 第74図-1

出土果実は残存径1.4mmの果皮片である。果皮は薄く、外面断面は柵状、表面は平滑で微細な縦筋がある。内面には内果皮があり、粗面でやや粗い縦筋がある。曲率が小さいため、クヌギやクリに由来する可能性がある。

・カラスザンショウ (*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属 第74図-2~4

出土種子は残存径1.1~1.8mmの種皮片である。完形ならば径3mm程度の非対称広倒卵形で正面観は楕円形、側面観はD字形を呈し、腹面正中線上に広線形の臍がある。種皮は厚く硬く、表面には粗く深い網目模様がある。

・エゴノキ (*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.) エゴノキ科エゴノキ属 第74図-5

出土種子は、残存径2.5mmの種皮片である。完形ならば長さ1cm程度の卵形で、頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条があり、基部は斜切形で着点がある。種皮断面は柵状、表面には微細な粒状網目模様がある。出土種皮表面の縦溝と粒状網目模様を同定根拠とした。なお、種皮内面は黒灰褐色を呈することから、炭化していない可能性がある。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属 第74図-6~9

出土穎は、果実(籾)基部にある径1mm程度の斜切状円柱形の果実序柄(小穂軸)の破片である。

表面には微細な顆粒状突起が縦列する。

・イネ科 (Gramineae) 第74図-10

出土胚乳は、長さ1.14mm、幅1.11mm、厚さ0.71mmの半偏球体。腹面はやや平らで、背面は丸みがある。基部正中線上背面に長径0.5mm程度の深い馬蹄形、腹面に径0.3mm程度の浅い広倒卵形の胚の窪みがある。栽培種のアワ (*Setaria italica* (L.) P.Beauv.) に似るが、状態不良のため、イネ科にとどめている。

・ヤエムグラ属 (*Galium*) アカネ科 第74図-11

出土核は長さ0.67mm、幅1.07mm、厚さ0.98mmの横長楕円体で、腹面中央に径0.3mmの楕円形の深い孔がある。表面には微細な網目模様がある。

5. 考察

(1) 遺構の年代観

3407 遺構 (土壌サンプル1) の放射性炭素年代測定結果をみると、試料番号②が補正年代で $2,145 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 352 ~ 94、試料番号③が補正年代で $3,705 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 2,196 ~ 2,027、試料番号⑤が補正年代で $2,015 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 89 ~ AD54、試料番号⑥が補正年代で $1,980 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 41 ~ AD 70 の値を示した。試料番号③を除く3試料は、試料番号②が紀元前4世紀~紀元前1世紀、試料番号⑤、⑥はいずれも紀元前1世紀~1世紀後半の値を示し、弥生時代中期~後期頃に比定される。調査所見では3407 遺構は弥生時代後期前葉と想定されていることから、所見と矛盾しない結果と言える。なお、試料番号③については、古い炭化材の再堆積の可能性などが想定される。

一方、3406 土坑 (土壌サンプル2) の結果をみると、試料番号①が補正年代で $2,160 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 356 ~ 112、試料番号②が補正年代で $2,175 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 358 ~ 171、試料番号④が補正年代で $2,750 \pm 25\text{BP}$ 、暦年代で calBC 971 ~ 831 の値を示した。試料番号④は縄文時代晩期頃に、試料番号①、②は弥生時代早期~中期頃に比定される。

(2) 古環境

遺構埋積当時の周辺植生を検討するため花粉分析を実施したが、3407 遺構 (土壌サンプル1) のいずれの試料も花粉化石の産状が悪く、詳細な植生を検討することは困難である。一般的に花粉やシダ類孢子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている (中村,1967; 徳永・山内,1971; 三宅・中越,1998 など)。今回検出されている花粉化石をみると、分解に強い種類やある程度分解の影響を受けても同定可能な種類が多い。遺構は堅穴式住居あるいは段状遺構と想定されており、埋積時は好気的環境にさらされていた可能性が高い。よって今回花粉化石の産状が悪いのは、堆積後に分解、消失したことが考えられる。少なくとも検出された花粉化石から、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属など広葉樹が、遺跡周辺に生育していた可能性がある。また、草本類はイネ科、カヤツリグサ科、アリノトウグサ属、ヨモギ属、キク亜科など、いずれも開けた明るい場所に生育する種を含む分類群であることから、当時の遺跡内あるいはその周囲の林縁林床などに由来すると思われる。

植物珪酸体では、3407 遺構埋土のうち住居の床であった可能性が想定されている第4層では、タケ亜科やススキ属などが僅かに認められたに過ぎなかった。この点は、堆積速度が早いなどの要因に

より、植物珪酸体が蓄積しにくい状態にあったことを反映すると思われる。なお、第4層が形成された頃には、少なくとも検出されたタケ亜科やススキ属が周辺に生育していた可能性が考えられる。

第3層、第2層、第1層では同様な分類群が見られたことから、これらの土層が形成された頃にはタケ亜科をはじめとしてイチゴツナギ亜科やススキ属などのイネ科が生育していたと考えられる。タケ亜科にはクマザサ属やメダケ属が見られ、これらいわゆるササの仲間が含まれていたことが窺える。またクマザサ属では特にミヤコザサ節が多く、チマキザサ節も見られ、メダケ属にはメダケ節やネザサ節が見られ、メダケ節の多い傾向が見られたことから、ササの中でも複数の分類群が含まれていたと思われる。

ところで、妻木晩田遺跡妻木山地区では花粉分析やプラント・オパール分析の結果から、縄文時代以降、中世の頃までの植生が推定されている（高田・渡辺,2006）。このうち、BC1,375～AD120の頃はササ類の生育する開放的な草地が分布した可能性が指摘された。また弥生時代の遺跡周辺ではクマザサ属が多く生育し、ネザサ節やススキ属およびシバ属も見られた可能性が指摘されている（株式会社古環境研究所,2006）。また妻木晩田遺跡洞ノ原地区での花粉、珪藻、植物珪酸体分析の結果から、弥生時代後期前葉以降にシダ類植物やアブラナ科、キク科およびササ類が生育する草地であった可能性がある。今回の3407遺構埋土の結果からも同様な植生が想定され、調査区周辺でも草地が広がっていたことが想定される。なお、イネ科の他に、樹木起源としてクスノキ科も検出されており、周辺での生育も考えられる。

大型植物遺体分析において栽培種と栽培の可能性を除いた分類群は、遺構埋土第4層より常緑高木のブナ科、遺構埋土第3層～第1層より落葉高木のカラスザンショウ、遺構埋土第2層より落葉小高木のエゴノキ、草本のヤエムグラ属が確認された。周辺域の森林や調査区周辺の草地に生育していたと考えられる。

一方、3406土坑（土壌サンプル2）の結果は、菌核の多産に特徴づけられる。炭化種実の確認されず、炭化材、昆虫類が少量確認されるのみであった。最も多く確認された菌核は、遺構埋土第1層（試料番号②）で極めて多産する。ただし、菌核が遺構機能時や埋積時の環境を反映しているかは不明である。

（3）人為活動や資源利用

3407遺構（土壌サンプル1）の微粒炭含量の変化についてみると、遺構埋土4層（試料番号⑥）で200個/ccと最も低いが、遺構埋土第3層（試料番号④）で900個/cc、遺構埋土第2層（試料番号③、②）で5,300～8,600個/cc、遺構埋土第1層（試料番号①）で20,800個/ccと、上位に向かった増加する傾向がある。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる（例えば安田,1987; 山野井,1996; 井上ほか,2002）。このことから、周辺で人為活動が活発化した可能性が想定される。ただし、遺構埋土1層は土壌化層とされることから、土壌化が進む際に他の遺構埋土と比べて微粒炭を多く取り込んでいる可能性も考えられる。

次に3407遺構埋土より検出された炭化材は、微細なため用途等は不明である。何らかの影響で火熱を受けたものが、埋積したと思われる。アカガシ亜属、シイ属、ツバキ属はいずれも常緑広葉樹の主要な構成要素であり、遺跡周辺に生育していたと思われる。過去の妻木晩田遺跡の樹種同定結果をみると、豊富な樹種構成が得られており、今回検出された種類は、いずれも検出例がある（パレオ・ラボ・植田,2003; 植田,2006）。

大型植物遺体分析では、3407 遺構から炭化種実、炭化材、菌核、昆虫類、ウニ類が検出されており、炭化種実では栽培種のイネが遺構埋土第4層～第3層より確認された他、栽培種のアワの可能性のあるイネ科が遺構埋土第1層より確認された。過去の分析調査でも、これらの栽培種が確認されており（佐藤,2000;和佐野,2000;新山,2003,2006,パリオ・サーヴェイ株式会社,2006a,b,2008）、広く利用されていたことが示唆される。

前述した周辺植生でも述べたブナ科は、クヌギやクリに由来する可能性がある。これらは堅果内部の子葉が食用可能な有用植物であることから、当時利用されていたの可能性がある。また、カラスザンショウは、過去の分析調査でも多量出土と利用の可能性が指摘されている。近年、種実の遺跡出土・土器圧痕調査事例集成および成分分析より、貯蔵食物を保護する防駆虫剤としての利用の可能性が指摘されている（真邊・小畑,2017）。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.

林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

井上 淳・吉川周作・千々和一豊,2002,琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について. 日本第四紀学会講演要旨集,32,74-75.

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料,31, 京都大学木質科学研究所,81-181.

伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料,32, 京都大学木質科学研究所,66-176.

伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料,33, 京都大学木質科学研究所,83-201.

伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料,34, 京都大学木質科学研究所,30-166.

伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料,35, 京都大学木質科学研究所,47-216.

株式会社古環境研究所,2006,妻木晩田遺跡妻木山地区竪穴住居跡床面土壌分析. 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－,鳥取県教育委員会,164-180.

近藤錬三,2010,プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会,387p.

真邊 彩・小畑弘己,2017,産状と成分からみたカラスザンショウ果実の利用法. 植生史研究 第26巻第1号,27-40.

三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究,6,15-30.

中村 純,1967,花粉分析. 古今書院,232p.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴ⅠⅡ(図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会,678p.

新山 雅広,2003,妻木晩田遺跡洞ノ原地区西側丘陵から出土した炭化種実. 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅰ集 史跡妻木晩田遺跡第4次調査発掘調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－,鳥取県教育委員会,193-200.

新山 雅広,2006,妻木山5区から出土した炭化種実. 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次発掘調査－,鳥取県教育委員会,117-120,123-124.

パリオ・サーヴェイ株式会社,2006a,妻木山5区から出土した炭化種実. 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次発掘調査－,鳥取県教育委員会,120-122,125-126.

パリオ・サーヴェイ株式会社,2006b,妻木山5区・6区出土炭化材の樹種同定. 史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集 史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次発掘調査－,鳥取県教育委員会,126-136.

- パリノ・サーヴェイ株式会社,2008,炭化種実同定.史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第III集 史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書-第16・19次発掘調査-,鳥取県教育委員会,94-105.
- パレオ・ラボ・植田弥生,2003,妻木晩田遺跡洞ノ原地区西側丘陵出土炭化材の樹種同定.史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書-洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査-,鳥取県教育委員会,201-214.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Hafidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- 佐藤 洋一郎,2000,妻木晩田遺跡出土のイネ種子の分析.大山町埋蔵文化財調査報告書第17集 妻木晩田遺跡発掘調査報告IV<洞ノ原・松尾城地区>-大山スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告IV-,大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会,255,259-261.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.
- 高田健一・渡辺正巳,2006,妻木晩田遺跡妻木山地区の古植生復元.史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第II集 史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書-第8・11・13次調査-,鳥取県教育委員会,154-158.
- 徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- 植田弥生,2006,妻木晩田遺跡妻木山地区出土炭化材樹種同定2 妻木山5区・7区住居跡出土炭化材の樹種同定,史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書-第8・11・13次調査-,鳥取県教育委員会,136-140.
- 和佐野 喜久生・東本 秀雄,2000,妻木晩田遺跡の炭化米粒特性と稲作起源.大山町埋蔵文化財調査報告書第17集 妻木晩田遺跡発掘調査報告IV<洞ノ原・松尾城地区>-大山スイス村リゾート開発事業に伴う発掘調査報告IV-,大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会,241-251.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山野井 徹,1996,黒土の成因に関する地質学的検討.地質学雑誌,102,526-544.
- 安田喜憲,1987,文明は緑を食べる,読売新聞社,227p.

第6節 出土遺物付着赤色顔料分析

株式会社パレオ・ラボ 竹原弘展

1. はじめに

西伯郡大山町に所在する妻木晩田遺跡松尾頭地区より出土した土器に付着する赤色顔料について蛍光 X 線分析を行い、顔料の種類を検討した。

2. 試料と方法

分析対象は、土器 5 点（分析 No.1 ～ 5）に付着する赤色顔料である（第 16 表、第 75 図 1a ～ 5a）。時期は、分析 No.1 ～ 4 が弥生時代終末期前半、分析 No.5 が弥生時代後期前葉とみられている。実体顕微鏡下で、セロハンテープに赤色部分を極微量採取して、分析試料とした。

分析装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡 XGT-5000Type II を使用した。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV・1mA のロジウムターゲット、X 線ビーム径が 100 μ m または 10 μ m、検出器は高純度 Si 検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光 X 線分析装置の性質上、検出感が悪い。

本分析での測定条件は、50kV、1.00mA（自動設定による）、ビーム径 100 μ m、測定時間 500s に設定した。定量分析は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）による半定量分析を装置付属ソフトで行った。

さらに、蛍光 X 線分析用に採取した試料を観察試料として、生物顕微鏡で赤色顔料の粒子形状を確認した。

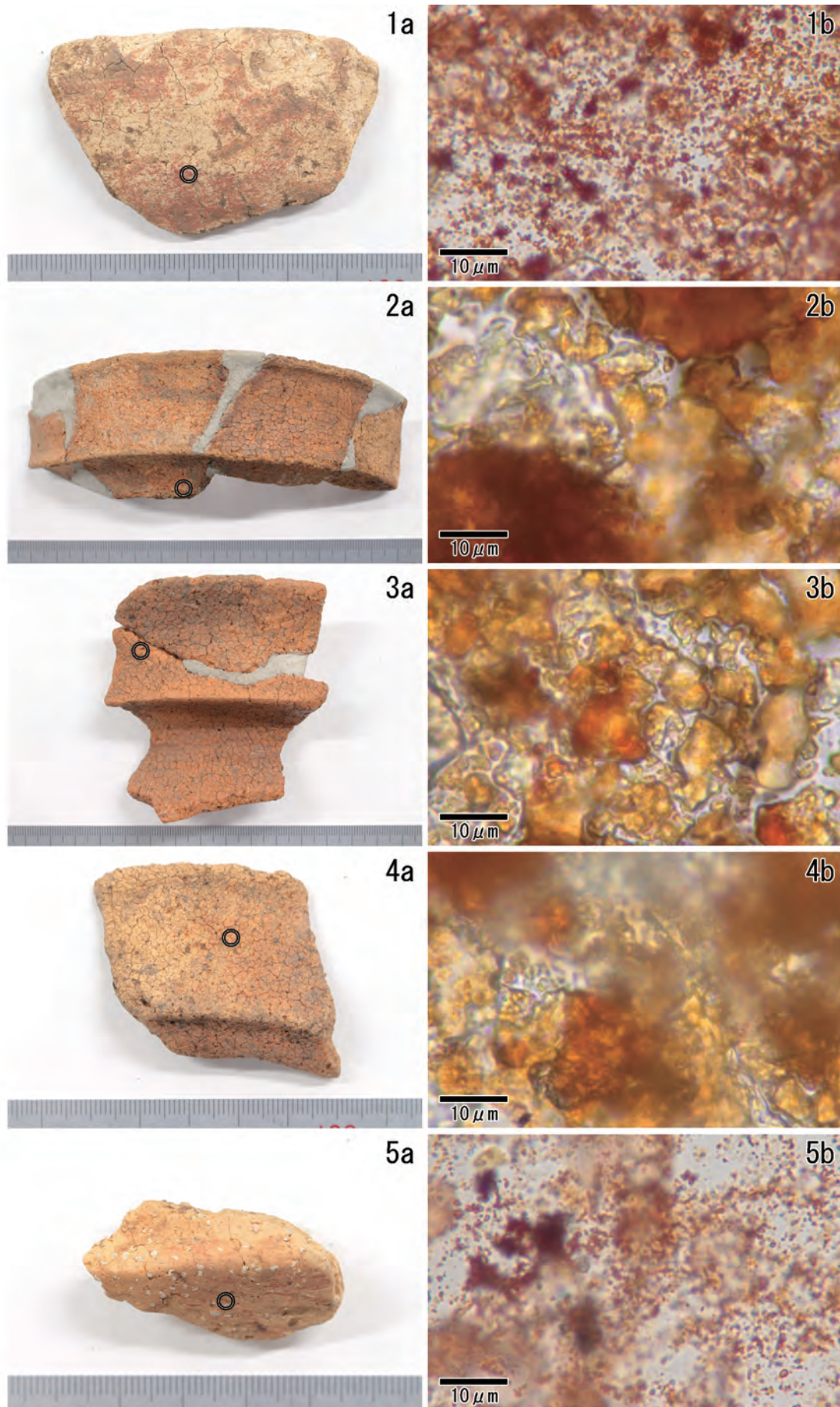
3. 結果

分析により得られたスペクトルおよび FP 法による半定量分析結果を図 1 に示す。

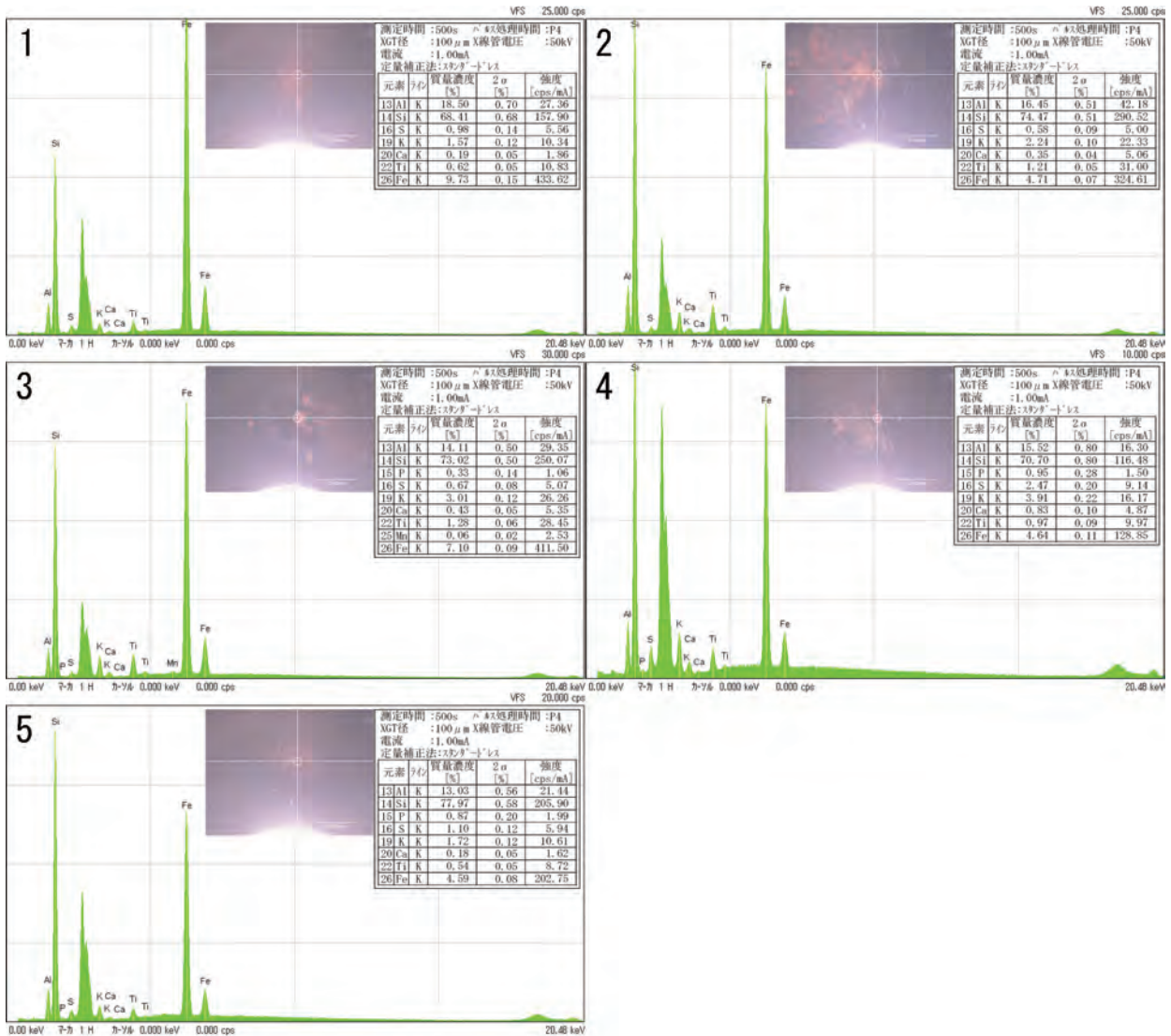
いずれもケイ素（Si）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）等が主に検出され、他にリン（P）、硫黄（S）、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、チタン（Ti）、マンガン（Mn）等が検出された。また、生物顕微鏡観察により得られた画像を図版 1-1b ～ 5b に示す。いずれも、赤色パイプ状の粒子は観察されなかった。

第 16 表 分析対象試料一覧

分析No.	回数	調査区	出土遺構	取上げNo.	器種	時期	顔料付着状況
1	28次	松尾頭10区	松尾頭3号墓西側周溝	268-1	高坏	弥生時代終末期前半	内外面に薄く付着
2	34次	松尾頭10区	松尾頭3号墓西側周溝	49, 133, 116, 180	壺	弥生時代終末期前半	内外面に厚く付着
3	34次	松尾頭10区	松尾頭3号墓西側周溝	35	壺	弥生時代終末期前半	全体的に赤い
4	28次	松尾頭10区	松尾頭3号墓西側頂部	177	壺	弥生時代終末期前半	内外面に厚く付着
5	34次	松尾頭10区	3407遺構(竪穴住居?)	318	高坏?	弥生時代後期前葉	外面に薄く付着



第75図 分析対象遺物の試料採取位置 (a) 及び生物顕微鏡写真 (b) (右上数字は分析 No.)



第76図 赤色顔料の蛍光X線分析結果（左上数字は分析No.）

4. 考察

赤色顔料の代表的なものとしては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀（HgS）で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄（Fe₂O₃、鉱物名は赤鉄鉱）を指すが、広義には鉄（Ⅲ）の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬，2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約1 μmのパイプ状の粒子形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリア起源であると判明しており（岡田，1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬，1998）。鉄バクテリア起源のパイプ状粒子は、湿地などで採集できる。

今回分析した5点は、いずれもケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が検出されており、赤い発色は鉄によるものと推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたる。いずれもパイプ状粒子は観察されず、いわゆるパイプ状ベンガラではなかった（第75図1b～5b）。

5点とも鉄の含有量はそれほど多くなく、鉄化合物以外の不純物を多く含んでいるといえる。また、

分析 No.2～4 の3点は、色調が褐色がかっており赤みはそれほど強くない(第75図 2b～4b)。なお、分析 No.1、5は、表面に赤色顔料が薄く付着しているのに対して、分析 No.2、4は、表面にやや厚く付着しており、鉄分の多い土を表面に塗り付けるような形で彩色されていたと考えられる。一方、分析 No.3は胎土全体が赤く、胎土全体に鉄分が多く含まれていたと考えられる。

5. おわりに

弥生時代の土器5点に付着する赤色顔料について分析した結果、いずれも鉄(Ⅲ)による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。

引用文献

- 成瀬正和(1998) 縄文時代の赤色顔料Ⅰ—赤彩土器—。考古学ジャーナル, 438, 10-14, ニューサイエンス社。
成瀬正和(2004) 正倉院宝物に用いられた無機顔料。正倉院紀要, 26, 13-61, 宮内庁正倉院事務所。
岡田文男(1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39。

第7節 小結

今回の調査に伴う自然科学分析では、遺跡の変遷を考える上で重要な成果が示された。

第33次調査に伴う3つの分析では、墳丘墓築造後の土地利用について推察できる結果が得られた。墳丘墓築造後は明るく開けた場所となっており、そうした場所に適した植物が生育していた。周溝埋土1層の黒色土に含まれる植物珪酸体はその他の層とは異なる特徴があり、いずれの地点の黒色土も微粒炭の含有量が多い傾向がわかった。黒色土が形成されるに至った原因については、2つの可能性が考えられ、一つは、黒色土の形成時には遺跡周辺において火入れなどの植物燃焼を伴う事象が多く発生し、微粒炭が供給されることで黒色土が形成されたというもの、もう一つは、遺跡周辺において火入れが行われると、微粒炭の増加とともに草原植生が広がる環境が強化され、ネザサ節やウシクサ族が分布を広げ、結果腐植の供給が増加し、黒色土が形成されたというものである。いずれにしても、火入れの重要性が指摘されており、妻木晩田遺跡においても黒色土堆積時には火入れの現象があったと推測された。なお、放射性炭素年代測定では、出土遺物から比定される築造時期とは異なる年代値しか得られなかったため、分析から築造時期の特定はできなかった。

第34次調査に伴う分析では、墳丘墓築造以前の環境について明らかとなった。弥生時代後期前葉の3407遺構埋土の花粉・プラントオパール分析の結果から、当時の遺構周辺は開けた明るい場所となっており、草地が広がっていたことが想定された。年代測定の分析結果からは、3407遺構では、出土遺物と矛盾しない数値が確認できた。出土遺物を伴わない3406土坑については時期の確定はできないが、墳丘墓群築造以前の遺構であることは基本層序との層位関係から矛盾しない。

赤色顔料分析では、5点の分析を行ったが、全て水銀朱ではなくベンガラを用いていることがわかった。焼成後に土器表面に塗布されたと考えられるもの、焼成前に胎土に鉄分が多く含まれていたものがあり、「赤い土器」を意識して制作されたものと考えられる。

第Ⅵ章 総括

第1節 妻木晩田遺跡における墳丘墓群の変遷と評価

平成22年度から発掘調査長期計画第Ⅱ期の「墳墓域の実態解明」を目的とし、仙谷墳丘墓群及び松尾頭墳丘墓群の発掘調査を行ってきた。仙谷墳丘墓群の調査では、墓域範囲の確認と新発見の仙谷8号墓・9号墓の時期及び内容を明らかにすることを課題として調査を行い、妻木晩田集落の終焉期にあたる古墳時代前期前葉の墳丘墓であることが明らかとなった。松尾頭墳丘墓群の調査では、墳丘墓の内容及び時期、墳丘墓群築造以前から含めた土地利用状況を明らかにすることを課題として調査を行い、新発見の墳丘墓が従来知られていた松尾頭1・2号墓に先行する終末期前半の方形周溝墓であることが明らかとなり、妻木晩田遺跡における弥生時代後期前葉から古墳時代前期前葉までの墳丘墓の変遷を把握することができた。

仙谷墳丘墓群については平成28年度末に発掘調査報告書を刊行し、当時の時点での妻木晩田遺跡の墳丘墓群の評価と課題について論考がまとめられているが、松尾頭墳丘墓群の調査によって新たな実態が判明した今、改めて妻木晩田遺跡の墳丘墓群について総括的に評価し、発掘調査長期計画第Ⅱ期の成果と今後の妻木晩田遺跡の調査研究課題を提起したい。

1. 各墳丘墓群の概要と基礎資料

(1) 墳丘墓群の立地 (第77図)

妻木晩田遺跡において現在確認している墳丘墓群は、妻木晩田遺跡6地区のうち3地区にある^{註1}。妻木晩田遺跡の丘陵は北側から大きく「妻木」「晩田」「松尾頭」の3丘陵に分けられ、妻木丘陵に立地するのが仙谷墳丘墓群、晩田丘陵に立地するのが洞ノ原墳丘墓群、松尾頭丘陵に立地するのが松尾頭墳丘墓群である。仙谷墳丘墓群は妻木丘陵の西端に位置し、北西方向に伸びる2つの尾根上に展開する。墓域内に居住跡はなく、有力者の墓域として独立している。現在確認されている墳丘墓数は9基である。洞ノ原墳丘墓群は晩田丘陵の中央より西側に位置し、約35mの範囲に無墳丘の墳墓を含めて25基を確認している。松尾頭墳丘墓群は松尾頭丘陵のうち北側の尾根である松尾頭1区・10区が位置する北側尾根上に展開し東西約130mの範囲に5基確認している。

各墳丘墓群からの眺望は、仙谷墳丘墓群が日本海に最も近く、海や平地からも視認できる好立地であるのに対し、洞ノ原墳丘墓群は主に西側の淀江平野を望み、松尾頭墳丘墓群は東側の



第77図 妻木晩田遺跡全体図

阿弥陀川水系によって形成された扇状地を遠く望む。仙谷墳丘墓群は居住域から隔絶された墓域であり、洞ノ原墳丘墓群は丘陵の西端の環濠（弥生時代後期前葉～中葉）に近く、松尾頭墳丘墓群は松尾頭地区の居住域を見下ろす位置にあたる。

（2）墳丘墓群の概要（第78～83、第17・18表）

各墳丘墓の分類、規模、埋葬施設の数等の基礎データについて第17・18表にまとめ、以下、各墳丘墓群の概要について述べる^{註2}。墳丘墓の分類名称及び概念は、第三章第1節を参照されたい。

①洞ノ原墳丘墓群（第78図）

配置と時期 洞ノ原墳丘墓群は、四隅突出型方形貼石台状墓11基、方形貼石台状墓6基、無墳丘墓壙8基によって構成される。大型の墳丘墓である方形貼石台状墓の2号墓、四隅突出型墳丘墓の1号墓が中心となり、この2基を取り巻くように中・小型の墳丘墓が配列される^{註3}。大・中型の墳丘墓は、対をなすように2基が隣接して配置される（1・2号、3・4号、7・8号）。小型の墳丘墓は、15号墓を除き、2号墓から8号墓に向かって弧を描くように並んでおり、墳丘墓群全体として集団墓の様相を見せる。築造順序の詳細は明らかでないが、大型の1・2号墓が後期前葉に最初に築造され（濱田2001）、中型の8号墓を最後に後期中葉には墳丘墓の造営を終えたと考えられる^{註4}。

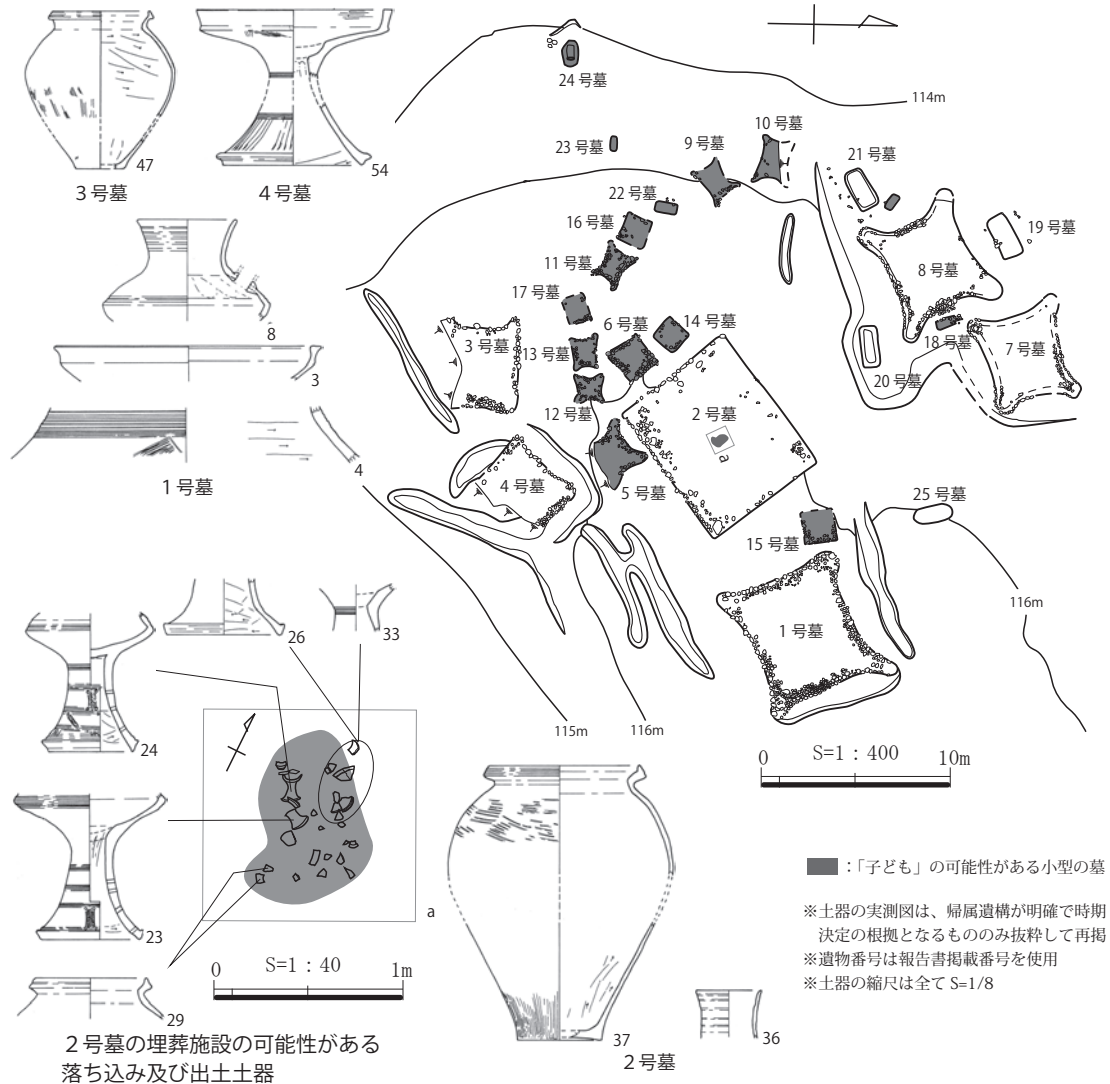
墳丘 墳丘墓の平面形は方形（6基）と四隅突出型（11基）でいずれも貼石を伴う。墳丘内の調査はほとんどされていないが、5・17号墓の調査から埋葬施設は丘陵基盤層に直接掘込まれた墳丘後行型であり、墳丘はほぼ盛土によって成形される。なお、四隅突出型墳丘墓については方形貼石墓から派生した説があり、突出部のうちの一箇所は墓内外をつなぐ墓道として機能し、2号墓の東角に置かれた一際大きな平石や、1号墓の北東角の規則正しく並ぶ列石はその痕跡であるとされる（仁木2007）。洞ノ原墳丘墓群は、四隅突出型墳丘墓発展の過渡期に当たる墳丘墓群であり、墳丘の形態や構造の研究は今後も注目される。

埋葬施設 埋葬施設については未調査のものが多い。検出された小型の墳丘墓（5・17号墓）、墳丘墓の可能性のある墓壙（18・19・21～25号墓）、8号墓の周溝内埋葬（20号墓）のうち18・20・23・24号墓では内部の調査が行われ、組合式木棺であることがわかっている。また、墓壙や墳丘の規模を比較すると「子ども」の墓と「大人」の墓とが存在するとみられる^{註5}。

②仙谷墳丘墓群（第79～81図）

配置と時期 仙谷墳丘墓群は、四隅突出型方形貼石台状墓2基、方形貼石台状墓1基、方形台状墓4基（未確定のもの含む）、円形台状墓1基、方形周溝墓1基によって構成される。仙谷墳丘墓群の立地する丘陵は、仙谷1・8・9号墓が立地する西側丘陵と、2～7号墓が立地する東側丘陵に分かれる。墳丘墓の築造時期は、1・3号墓が弥生時代後期中葉、2・3・5～7号墓が弥生時代後期後葉、4号墓が弥生時代終末期前半、8・9号墓が古墳時代前期前葉である。

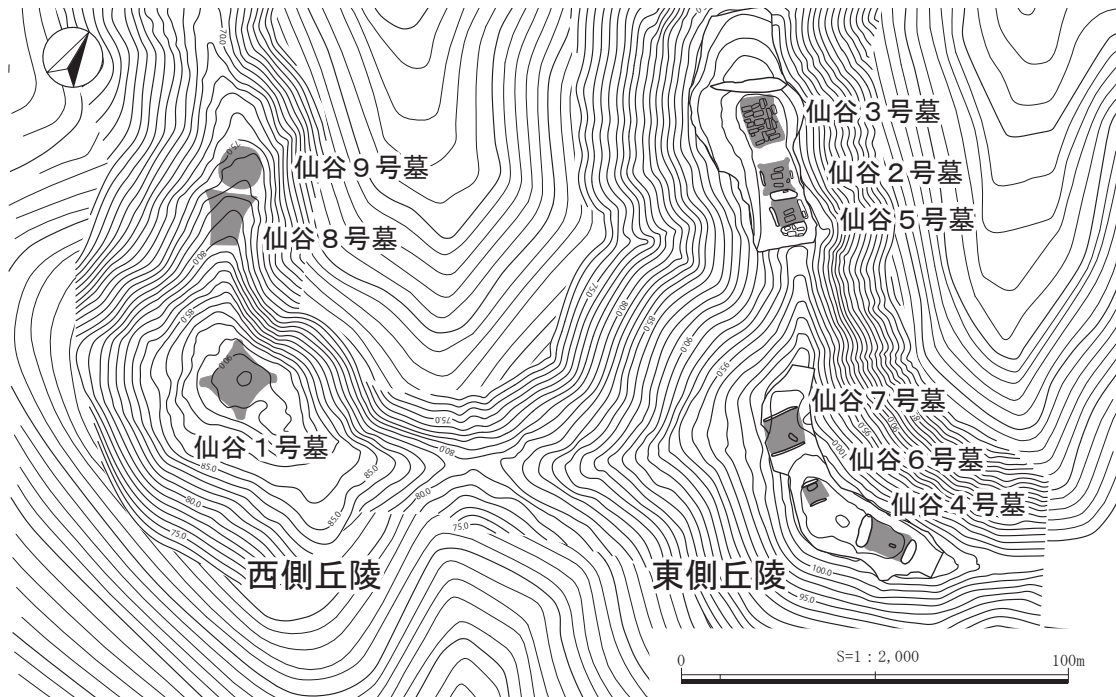
墳丘 仙谷墳丘墓群の中で最初に築造された仙谷1号墓と3号墓は、それぞれ四隅突出型方形貼石台状墓と方形貼石台状墓である。仙谷1号墓は妻木晩田遺跡で現在確認している四隅突出型方形貼石台状墓の中で最大の規模を誇り、墳裾から墳頂までの残存高は1.4m、基盤層削り出しと盛土によるマウンドに貼石・列石を用い、洞ノ原の墳丘墓と比較して幅広い突出部を持つ。居住域の見栄えを意識したのか、南・西側には大型の石材を用い、列石も丁寧な造りである。3号墓も妻木晩田遺跡の方形貼石台状墓の中では最大の規模である。東・南側には貼石が残存するが、西・北側は失われているため、



第78図 洞ノ原墳丘墓群（長尾2017、109頁を一部改変）

墳丘はほぼ基盤層の削り出しによって構築され、流失部分など局所的に盛土されたと考えられている（鳥取県教育委員会 2017）。3号墓と同じく四隅突出型方形貼石台状墓の2号墓もほぼ基盤層の削り出し部分しか残存していないが、突出部は盛土と貼石によって構成され、細長く伸びる。5号墓は四方を溝で囲まれ、四隅が陸橋状に途切れた方形周溝墓であり、墳丘部分は基盤層の削り出し部分しか残存していないが、墳丘内埋葬施設の墓壇の深さが異なることから、盛土があったと推察される。6・7号墓及び4号墓は、いずれもトレンチ調査のみで全容は不明であるが、盛土は確認されておらず、明瞭な区画溝も丘陵軸に直交するものであるため、仮に方形台状墓に分類した。方形台状墓である8号墓は南北に丘陵軸に直交する区画溝を持ち、北側は9号墓と溝を共有する。盛土はほとんど流失していたが、埋葬施設設置前に盛土を行い、第1埋葬施設構築後、墳丘全体を盛土したと考えられる。9号墓は盛土は残存していないが、基盤層削り出しによる円形台状墓である。

埋葬施設 仙谷1号墓の埋葬施設は検出されていないため不明である。3号墓では22基の埋葬施設が確認され、全て組合式木棺と推定される。底面に小口溝が2条のものと1条のものがあ、2条あるものでは両小口のうちどちらか一方が長いものも多く、溝の長さが10cm以上違う例もあることから、幅広い方向が被葬者の頭位を表す。仙谷2・5号墓は、それぞれ5基・9基の埋葬施設があり、組合式木棺と土壙墓の2種類である。なお、木棺の小口溝は1箇所のもののみである。仙谷6・7号



第79図 仙谷墳丘墓群全体図（鳥取県教育委員会2017，22頁を一部改変）

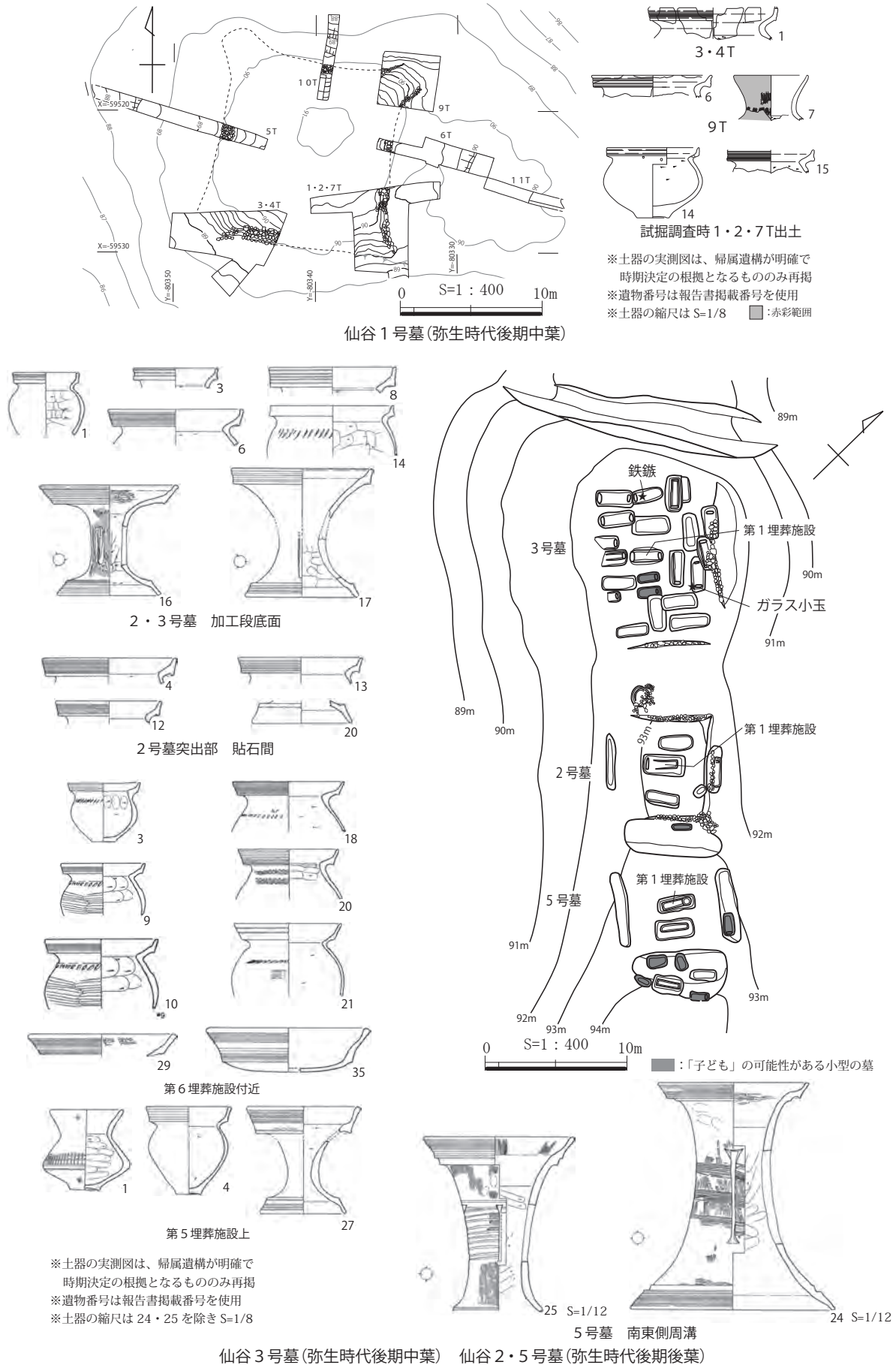
墓及び4号墓は墳丘内で埋葬施設を検出しているが、それぞれ可能性のあるものが1基～2基程度であり、内部未調査のため棺種は不明である。仙谷8号墓では墳丘中央において、全墳丘墓の中で唯一、箱式石棺が検出されている。埋葬施設配置は、3号墓では第1・2埋葬施設の周囲を多くの埋葬施設が囲い、集団墓の要素をもつ。2・5号墓の段階になると、1つの墳丘への被葬者数が絞られるとともに墳丘の内外で埋葬位置の分化が始まっており、「子ども」の墓の可能性のある小型の埋葬施設は墳丘外に限定されるなどの変化が認められる。また、2号墓では、第1埋葬施設で棺底の頭部側に朱の可能性のある赤色顔料が撒かれ、新たな葬送儀礼が導入されたとされる（長尾2017）。

③松尾頭墳丘墓群（第82・83図）

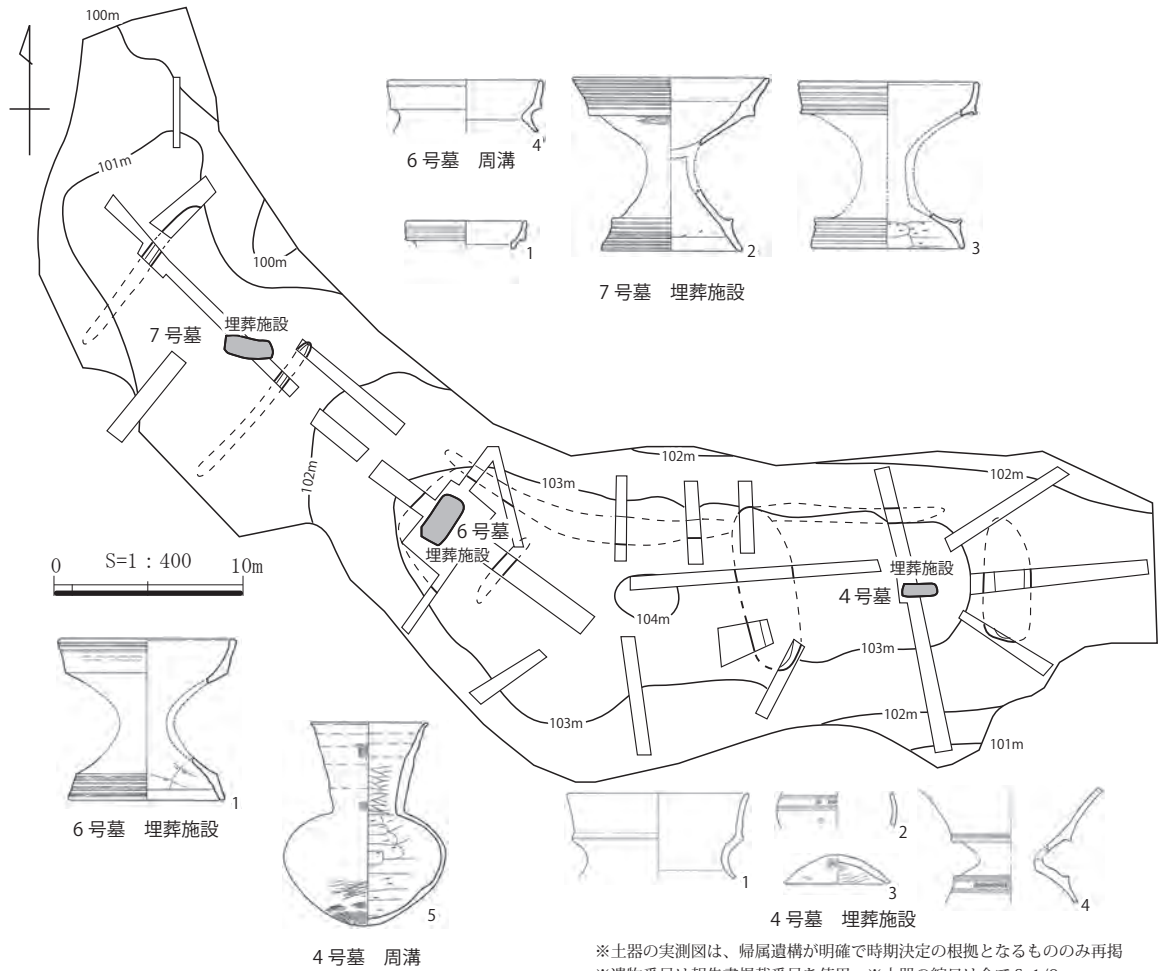
配置と時期 松尾頭墳丘墓群は、方形周溝墓5基によって構成される。松尾頭墳丘墓群の立地する丘陵は、松尾頭丘陵の中で最も北側の松尾頭1区・10区にあたり、丘陵軸に沿ってほぼ東西に墳丘墓が展開する。西側の松尾頭3～5号墓が弥生時代終末期前半、東側の1・2号墓が終末期後半にあたる。弥生時代後期前葉～後葉の段階では居住域として利用されていたが、終末期を通して墓域として利用される。

墳丘 いずれも四方を溝で区切り、四隅が墳丘外部とつながる陸橋部を持つ方形周溝墓である。墳丘に貼石はなく、丘陵基盤層の削り出しと盛土により築造しているため、仙谷墳丘墓群東側丘陵の墳墓と比較して墳丘が高い。松尾頭3号墓の調査では、墳丘墓築造時の地表層にはほとんど手を加えない状態で中心埋葬施設を構築し、周溝を掘削した後にその土を盛り上げていると考えられ、松尾頭1・2号墓も同様の造りをしている。周溝と埋葬施設の先後関係は不明である。

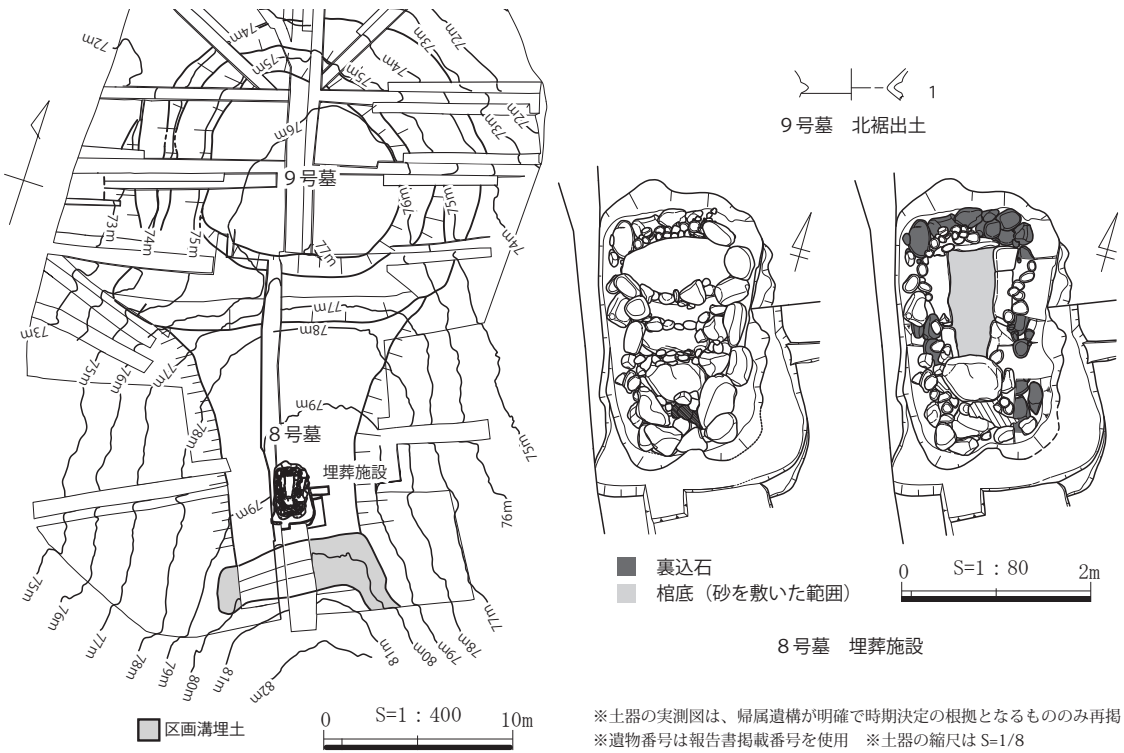
埋葬施設 埋葬施設を検出したのは、松尾頭1～3号墓であり、木棺と土壙と推定される。いずれも中心埋葬は組合式木棺とみられ、副次埋葬は組合式木棺もしくは土壙である。中心埋葬の規模は、弥生時代後期中葉～後葉段階の仙谷墳丘墓群と比較して大型化している。1・2号墓の第1埋葬施設では木棺の小口板と側板を固定する溝が掘られているが、そのほかの埋葬施設では溝を伴わない。ただし、1号墓の第2埋葬施設が二段掘りの墓壙の下段内に木棺痕跡がみられたことから、2号墓の第2・



第80図 仙谷1～3・5号墓 (鳥取県教育員会 2017, 25・26頁、長尾 2017, 110頁を一部改変)

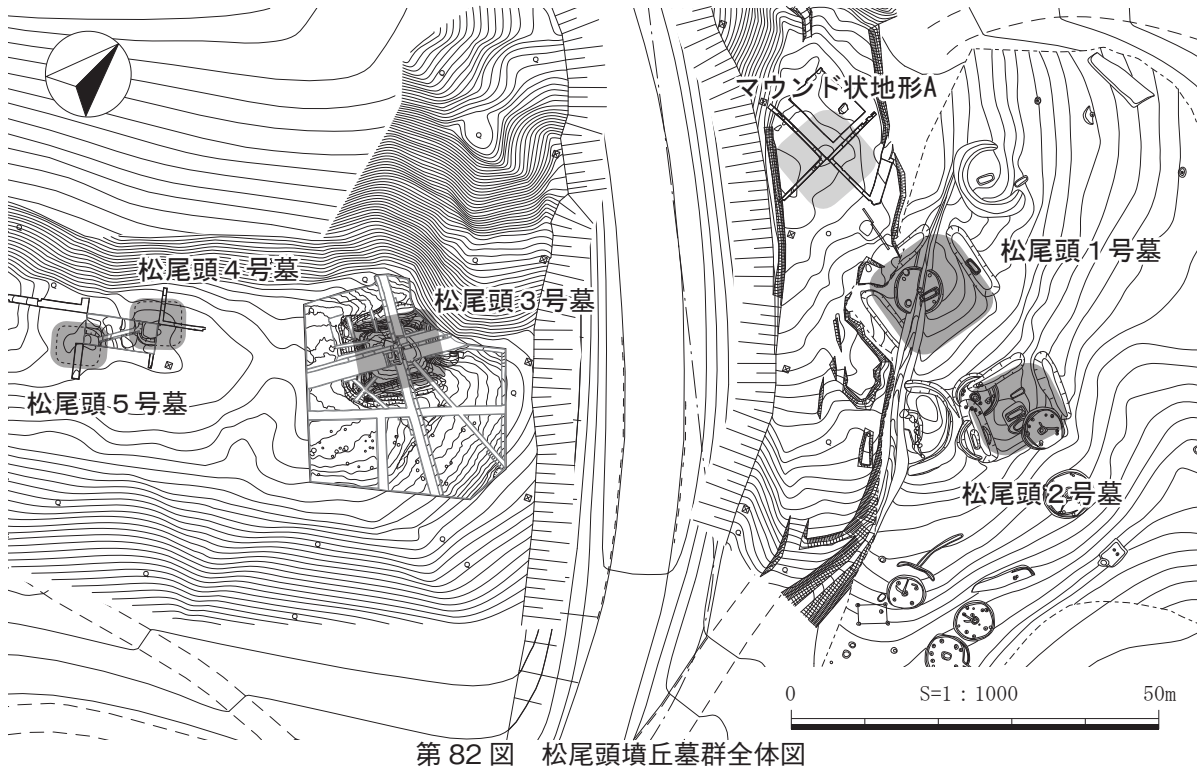


仙谷6・7号墓(弥生時代後期後葉) 仙谷4号墓(弥生時代終末期前半)



仙谷8・9号墓(古墳時代前期前葉)

第81図 仙谷4・6～9号墓(鳥取県教育委員会2017, 38頁、長尾2017, 111・119頁を一部改変)



第82図 松尾頭墳丘墓群全体図

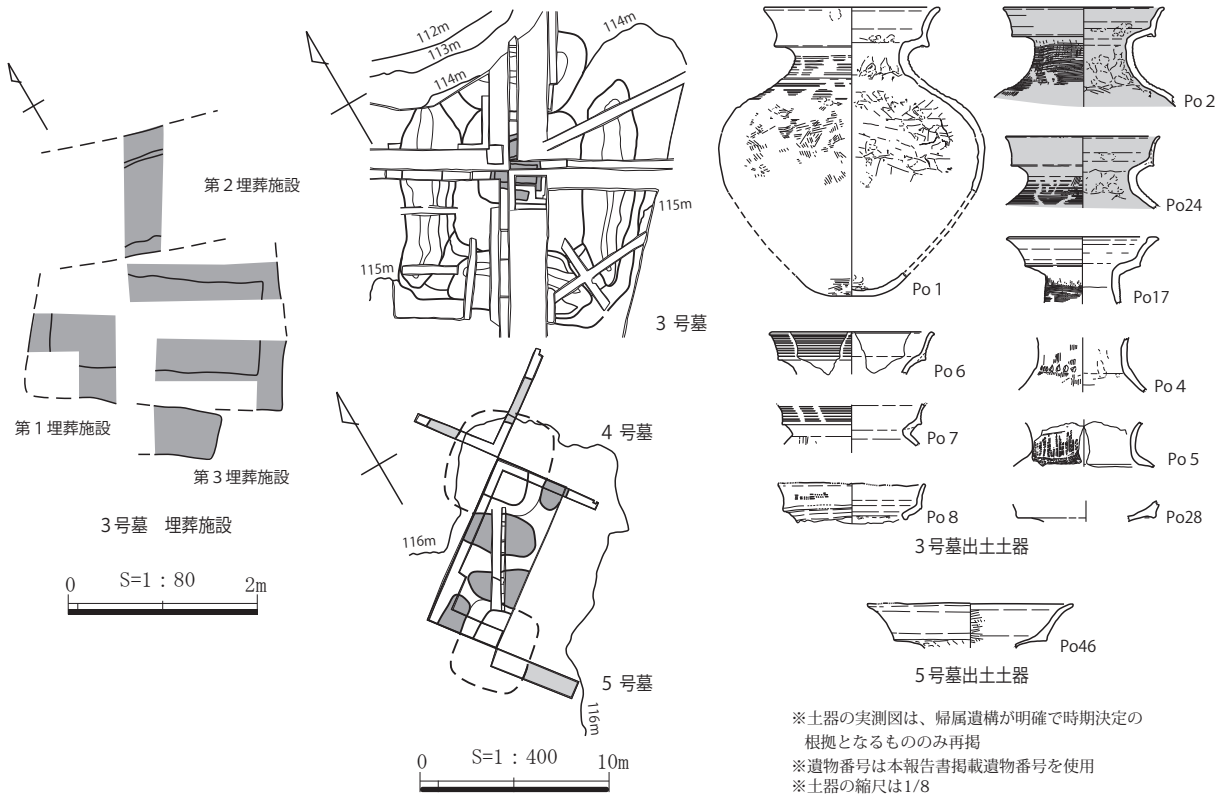
3埋葬施設についても木棺の可能性がある。埋葬施設配置は、終末期前半の松尾頭3号墓が墳丘内に少なくとも3基がほぼ同じ東西軸方向で並列しているのに対して、終末期後半の松尾頭1号墓では中心埋葬のほかにも墳丘内に埋葬施設はなく、周溝内埋葬が1基ある。そして、3号墓では土壇とみられる「子ども」の埋葬を1基伴っている。

2. 妻木晩田遺跡における墳丘墓群の特徴

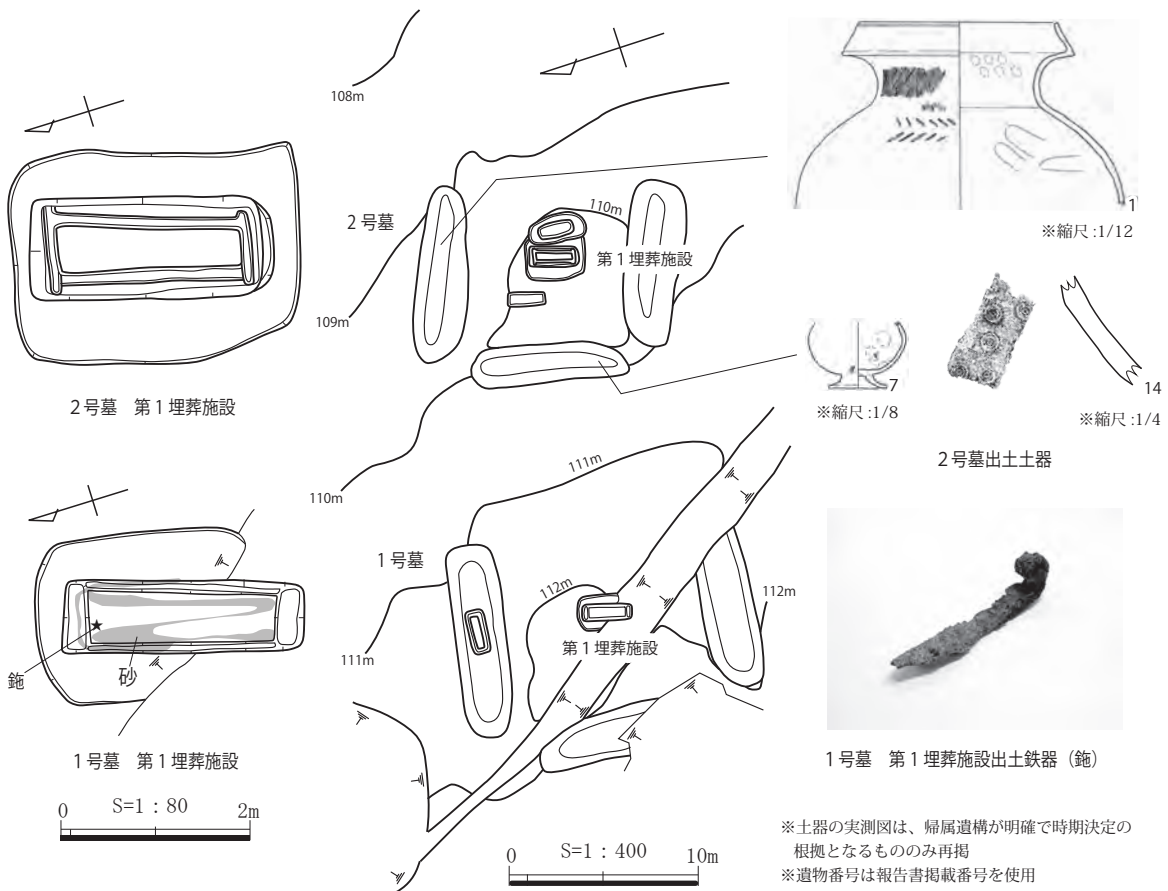
(1) 集落と墓域の変遷 (第84図、第19表)

妻木晩田遺跡の集落存続時期は、弥生時代中期後半から古墳時代前期前葉までである。弥生時代中期後半が出現期、後期前葉～中葉が展開期、後期後葉が最盛期、終末期前半が停滞期、終末期後半が再興期、古墳時代前期前半が衰退期（以降、本論中ではこの区分を用いる）であり、中葉以降は古墳群へと変化する。出現期の集落は、松尾頭地区に限られる。展開期には妻木山、妻木新山地区に広がり、最盛期には仙谷地区を除く全域が居住域となり、妻木山地区及び松尾頭地区が集落の中心的居住域となる。停滞期には住居数が激減するが、再興期には再び増加する。しかし、古墳時代に入ると住居数は減少し丘陵上の集落は消滅する。

一方で、墳墓の変遷を辿ると、出現期の中期後半では墓域が確認されておらず、後期前葉になって洞ノ原地区において墓域が形成される。洞ノ原墳丘墓群では、無墳丘の墓壇を含めて25基が後期前葉から中葉にかけて築造される。周辺には居住地の防御とは別の用途があったと考えられる環壕が存在し、墓域として利用されている期間は居住域とは隔絶された区域であったとみられる。洞ノ原墳丘墓群での築造が終息する後期中葉には、仙谷墳丘墓群の築造が始まる。仙谷墳丘墓群では、後期中葉から終末期前半にかけて7基の墳丘墓を確認している。仙谷地区では竪穴住居などの住居遺構は確認されておらず、妻木晩田遺跡の集落存続期間を通じて墓域として利用されたようである。仙谷4号墓と同時期とみられる終末期前半の段階では、松尾頭の北側丘陵西側（松尾頭10区）において松尾頭



松尾頭3～5号墓(弥生時代終末期前半)



松尾頭1・2号墓(弥生時代終末期後半)

第83図 松尾頭1～5号墓

第17表 妻木晩田遺跡墳墓一覧

No	遺構名	所在地	形態分類	外表施設			規模 (m) ※2			埋葬数	出土遺物	時期	報告書
				盛土	貼石	溝	長さ	幅	高さ				
1	洞ノ原1号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	○	6.5	5.4	0.3	—	土器	後期前葉	1
2	洞ノ原2号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	○	○	×	8.4	6.9	0.4	—	土器	後期前葉	1
3	洞ノ原3号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	4.2	(3.9)	0.2	—	土器	後期前葉	1
4	洞ノ原4号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	○	4.3	(3.6)	0.2	—	土器	後期前葉	1
5	洞ノ原5号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	2.1	2.0	0.15	1	—	—	1
6	洞ノ原6号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	○	○	×	2.1	1.9	0.15	—	土器	後期前葉	4
7	洞ノ原7号墓	西伯郡大山町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	4.40	(4.00)	0.27	—	土器	後期前葉	4
8	洞ノ原8号墓	西伯郡大山町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	4.90	4.40	0.26	—	土器	後期中葉	4
9	洞ノ原9号墓	西伯郡大山町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	(2.00)	(1.11)	0.10	2	土器	後期前葉	4
10	洞ノ原10号墓	西伯郡大山町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	(1.95)	(1.60)	0.13	—	—	—	4
11	洞ノ原11号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	1.15	1.25	0.15	—	土器	—	1
12	洞ノ原12号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	1.15	1.25	0.15	—	土器	—	1
13	洞ノ原13号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	1.4	1.25	0.2	—	—	—	1
14	洞ノ原14号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	○	○	×	1.45	1.4	0.15	—	土器	—	1
15	洞ノ原15号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	○	○	×	1.7	(1.25)	0.15	—	—	—	1
16	洞ノ原16号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	○	○	×	1.5	1.2	0.2	—	土器	—	1
17	洞ノ原17号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	○	○	×	1.5	1.25	0.2	—	—	—	1
18	洞ノ原18号墓	西伯郡大山町	墳丘墓?	×	○?	×	—	—	—	1	土器	後期前葉	4
19	洞ノ原19号墓	西伯郡大山町	墳丘墓?	×	○?	○	—	—	—	1	土器	後期中葉	4
20	洞ノ原20号墓	西伯郡大山町	—	×	×	×	—	—	—	1	土器	後期中葉	4
21	洞ノ原21号墓	西伯郡大山町	墳丘墓?	×	○?	×	—	—	—	1	土器	後期前葉	4
22	洞ノ原22号墓	米子市淀江町	墳丘墓?	×	○?	×	—	—	—	1	—	—	1
23	洞ノ原23号墓	米子市淀江町	—	×	×	×	—	—	—	1	—	—	1
24	洞ノ原24号墓	米子市淀江町	墳丘墓?	×	○?	×	—	—	—	1	—	—	1
25	洞ノ原25号墓	西伯郡大山町	—	×	×	×	—	—	—	1	—	—	4
26	仙谷1号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	○	○	×	13	12.5	—	—	土器	後期中葉	5・6
27	仙谷2号墓	米子市淀江町	四隅突出型方形貼石台状墓	×	○	○	7.40	7.20	0.54	5	土器	後期後葉	3
28	仙谷3号墓	米子市淀江町	方形貼石台状墓	×	○	×	(12.1)	(8.6)	0.58	22	土器、鉄鍬、ガラス小玉	後期中葉	3
29	仙谷4号墓	米子市淀江町	方形台状墓?	×	×	○	12.93	(7.5)	1.04*	1	土器	終末期前半	3
30	仙谷5号墓	米子市淀江町	方形周溝墓	×	×	○	9.44	7.64	0.96*	9	土器	後期後葉	3
31	仙谷6号墓	米子市淀江町	方形台状墓?	×	×	○	(6.26)	(5.83)	—	2	土器	後期後葉	3
32	仙谷7号墓	米子市淀江町	方形台状墓?	×	×	○	9.61	(9.36)	0.48*	1	土器	後期後葉	3
33	仙谷8号墓	米子市淀江町	方形台状墓	○	×	○	17.2	15.2	3.8*	1	土器	古墳前期前葉	6
34	仙谷9号墓	米子市淀江町	円形台状墓	—	×	○	17.0	15.2	3.50*	—	土器	古墳前期前葉	6
35	松尾頭1号墓	西伯郡大山町	方形周溝墓	○	×	○	13.3	(13.2)	1.05*	2	土器	終末期後半	2
36	松尾頭2号墓	西伯郡大山町	方形周溝墓	○	×	○	(11.4)	11.2	1.30*	3	土器	終末期後半	2
37	松尾頭3号墓	米子市淀江町	方形周溝墓	○	×	○	10.41	9.78	1.49*	3	土器、鉄鍬	終末期前半	7
38	松尾頭4号墓	米子市淀江町	方形周溝墓	○	×	○	(7.3)	(7.0)	0.43*	—	土器	終末期前半	7
39	松尾頭5号墓	米子市淀江町	方形周溝墓	○	×	○	(6.6)	(5.7)	0.48*	—	土器	終末期前半	7

<凡例>

形態分類：第Ⅲ章1節及び第5図を参照。 規模：第Ⅲ章第6図参照。形態分類毎の計測基準は以下を参照。

【墳丘規模計測基準詳細】

方形周溝墓…周溝の芯々間の範囲。

方形貼石周溝墓…墳丘端部の貼石の外側。※1

方形台状墓…削り出した地山の立ち上がり。

四隅突出型方形台状墓…突出部を除き、削り出した地山の立ち上がり。

方形貼石台状墓…墳丘端部の貼石の外側。※1

四隅突出型方形貼石台状墓…突出部を除き、墳丘端部の貼石の外側。※1

円形台状墓…削り出した地山の立ち上がり。※3

※1 周溝の芯や地山の立ち上がりが貼石よりも内側にある場合は、貼石を優先。

周溝の芯や地山の立ち上がりが貼石よりも外側にある場合は、個別に計測位置を判断。

貼石が残存していない場合、後世の攪乱により貼石が原位置を保っていない場合は、削り出した地山の立ち上がりとする。

※2 () …残存範囲からの推定値。 *…区画溝や周溝の底からの高さ。貼石がある場合は貼石最下段の設置底面からの高さ。

※3 そのほか、円形の墳丘を持つものについては方形の墳丘墓の各基準に準じる。

【報告書】

1 淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 50

2 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17

3 2同報告書Ⅱ 4 2同報告書Ⅲ 5 2同報告書Ⅳ

6 鳥取県教育委員会 2017『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅴ集 7 本書

墳丘墓群の築造が開始される^{註6}。松尾頭墳丘墓群は終末期を通して少なくとも5基の墳丘墓が築造されており、終末期前半から後半にかけて、西の10区から東の1区へ墓域が移っていた。松尾頭地区北側丘陵では、中期後葉～後期後葉の竪穴住居などの集落遺構が確認されているが、終末期には存在しない。古墳時代前期前葉に居住地として利用されるが、墓域を避けた丘陵頂部端に住居が数棟存在するのみである。このことから、終末期以降は北側丘陵が墓域として認識されていたと考えられる。古墳時代前期前葉には再び仙谷地区西側丘陵において墳丘墓が2基築造されるが、丘陵上の集落が消滅した古墳時代前期後半以降の墓域（古墳群）の中心域は晩田山と妻木山に移る。

このように、妻木晩田遺跡での集落存続期間における墳丘墓を主体とした墓域の変遷は、集落展開期である弥生時代後期前葉から集落衰退期である古墳時代前期前葉まで辿ることができる。各墓域で墳丘墓が造営されている期間は周辺を含めて竪穴住居等は存在せず、居住域と隔絶された区域であり、墓域として重視されていたと考えられる。

立地的には、洞ノ原墳丘墓群と仙谷墳丘墓群が居住域から隔絶されて直接視認できない位置に立地するのに対し、松尾頭墳丘墓群は近接する同地区の居住域からよく視認できる位置に築造されており、墓域の選地にあってはその点を重要視していると考えられる。長尾はこれを集落構造の変化による墓域の立地の変化として捉えている（長尾2017）。

なお、集落出現期の墓域は未だに発見されておらず、墳丘墓の「質（規模）」の観点からも未発見の墳丘墓が存在する可能性は考慮する必要があるため、現状では遺跡内の墳丘墓群と集落の変遷の関係性を全て把握できているわけではない。

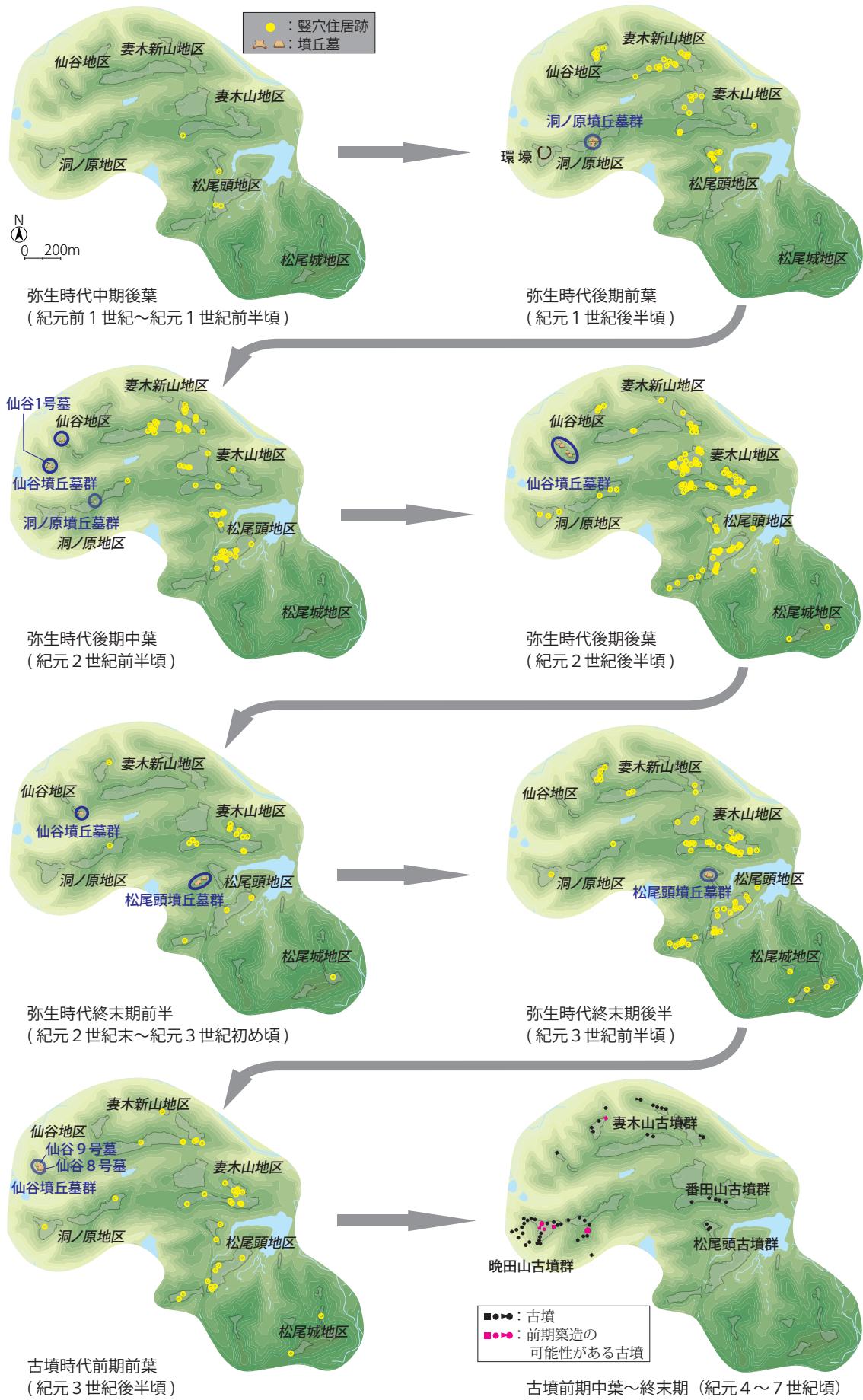
（2）墳丘墓の分類と築造過程、規模の変遷（第85・86図、第19表）

妻木晩田遺跡で確認している墳丘墓は、方形台状墓、方形貼石台状墓、四隅突出型方形貼石台状墓、方形周溝墓、円形台状墓の5種別である。後期前葉から中葉にかけては、洞ノ原地区において方形貼石台状墓（2号墓）と四隅突出型方形貼石台状墓（1号墓、8号墓など）が用いられる。後期中葉から造営される仙谷墳丘墓群では、引き続き四隅突出型方形貼石台状墓（1号墓）と方形貼石台状墓（3号墓）、後期後葉には四隅突出型方形貼石台状墓（2号墓）と方形周溝墓（5号墓）、方形台状墓（6、7号墓）が造営され、終末期前半には引き続き方形台状墓（4号墓）が造られる。終末期の松尾頭墳丘墓群では、終末期を通して方形周溝墓が造られ、再び墓域が仙谷地区に移る古墳時代前期前葉には、方形台状墓（8号墓）と円形台状墓（9号墓）が造られる。

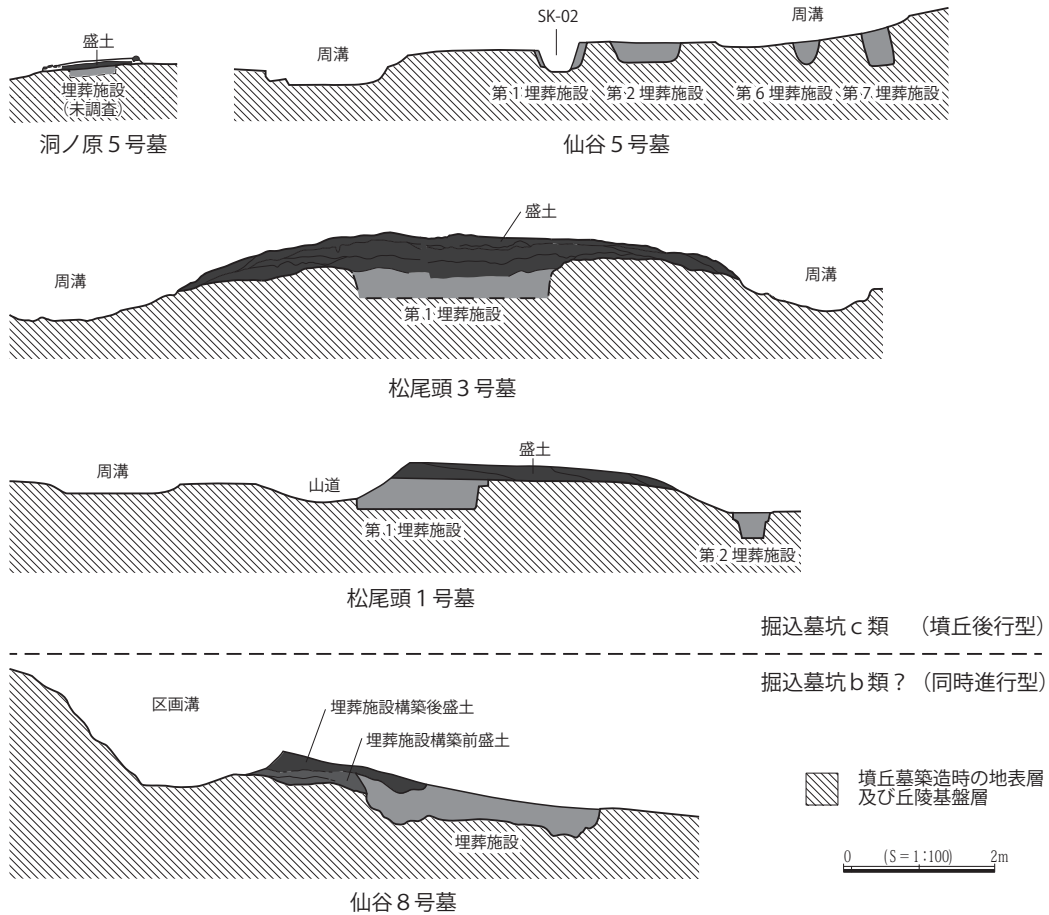
墳丘墓の変遷をみると、存続時期が2時期である洞ノ原墳丘墓群と松尾頭墳丘墓群は特定の墳丘墓を採用している一方で、存続時期が長い仙谷墳丘墓群は時期ごとに採用される墳丘墓が異なり、一見すると全く違う葬送儀礼に基づいた結果、墳墓の形が変化しているように見える。

しかし、墳丘墓の築造過程に限ると、松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓は、平地で通常営まれる方形周溝墓とは異なり、墳丘を形成したのち中心埋葬の墓壙が掘り込まれるのではなく、墳丘墓築造時の地表層から墓壙が掘り込まれ、埋葬が終わった後に墳丘を盛土によって形成している（第85図）。すなわち、墳丘の築造方法は、前時期の洞ノ原墳丘墓群や仙谷墳丘墓群と同じく、当時の地形を活かして墳丘を成形する台状墓的な造り方を行っている。古墳時代前期前葉の仙谷8号墓では、一度盛土を行って地表面を整地した後に墓壙が掘り込まれ、埋葬終了後に再び墳丘全体を覆っている。

墳丘墓の形には全時期を通して細かい変化がみられるものの、弥生時代の墳丘墓の築造方法は墳丘墓群に共通して台状墓的な造り方を採用しており、古墳時代に入った段階で新しい棺とともに墳丘墓



第84図 妻木晩田遺跡における集落の変遷



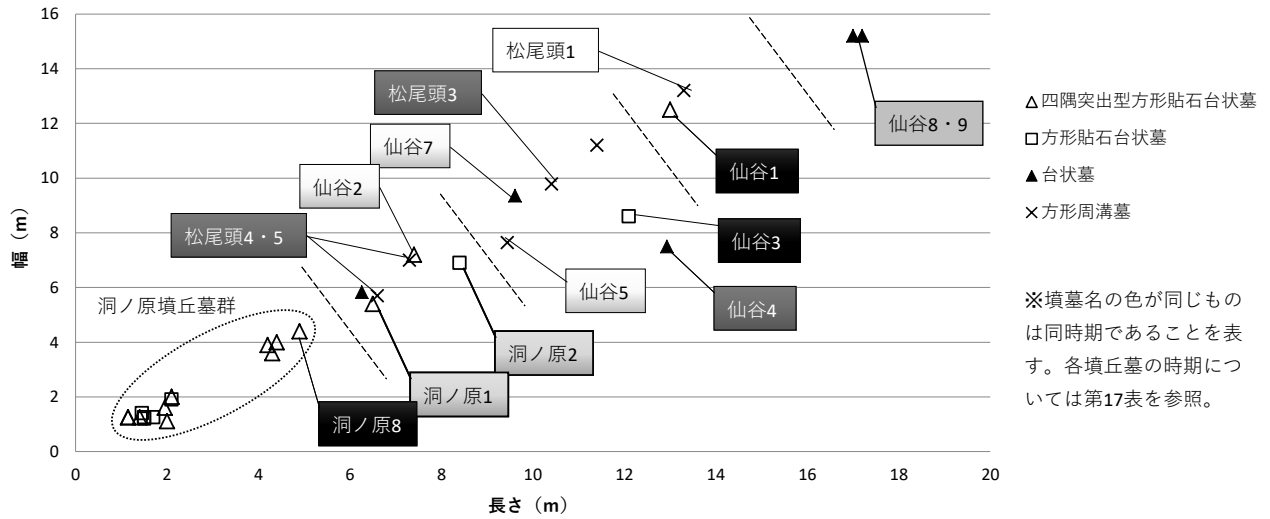
第85図 埋葬施設築造過程

の築造方法もより丁寧なものになっている(仙谷8号墓の埋葬施設構築前の整地のための盛土)。また、墳形がそれまで一貫して方形原理に基づくものであったのに対して、仙谷9号墓では円形を採用している点は、大きな変化といえることができる。

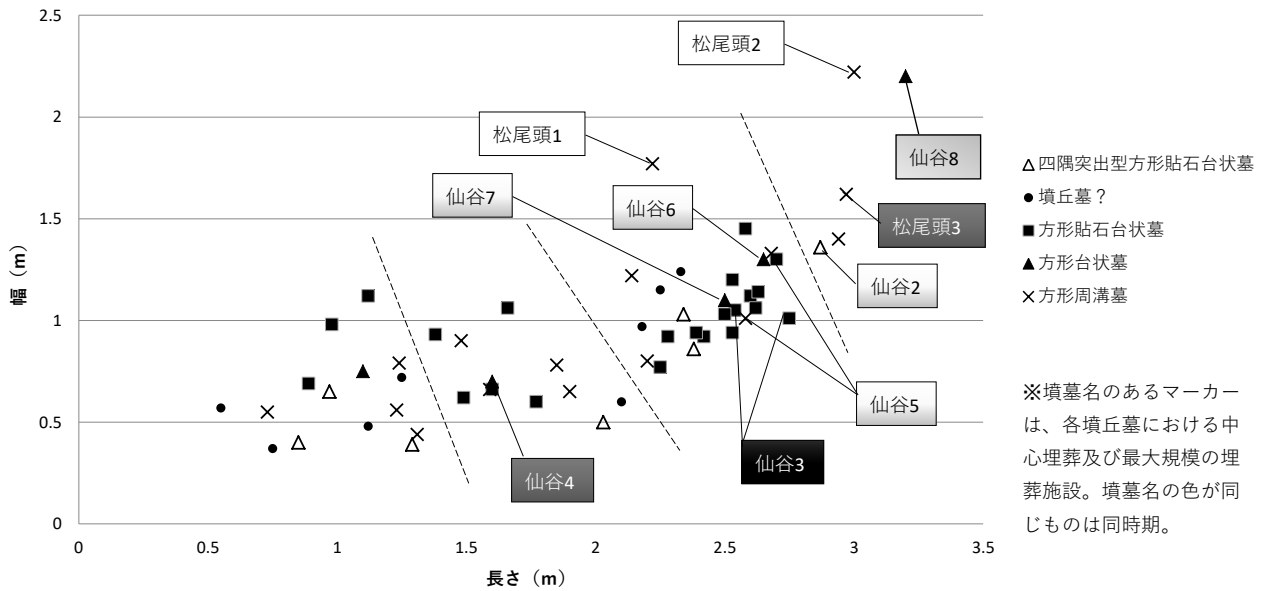
墳丘墓の規模からみると、各墳丘墓の規模は採用時は小型のものが多く、次の時期には大型化する(四隅突出型方形貼石台状墓: 洞ノ原墳丘墓群→仙谷1号墓、方形貼石台状墓: 洞ノ原2号墓→仙谷3号墓、方形台状墓: 仙谷4号墓→仙谷8号墓、方形周溝墓: 松尾頭3号墓→松尾頭1号墓)。全時期的にみても後期段階よりも終末期から古墳時代前期前葉の方が大型化している。ただし、大型化した墳丘墓であっても、山陰地域全体でみた墳丘墓の規模からみれば、弥生時代後期から終末期の「王墓」と呼ばれる墳丘墓には全く及ばず、概ね小型に分類される(渡邊2007)。現状では、妻木晩田遺跡では中・大型の墳丘墓は確認できない。妻木晩田遺跡の墳丘墓の中で最大のものが集落衰退期の仙谷8号墓であり、集落最盛期の後期後葉段階では小型の墳丘墓しか見られないことから、遺跡内に未発見の中・大型の墳丘墓が存在する可能性は否定できない。よって、墳丘墓の規模を同時期の他遺跡の墳丘墓と比較したとき、集団の対外的な権力差に結び付くかどうかはまだ結論が出せない。

(3) 埋葬施設の種類と被葬者の構成・空間配置 (第86～90図、第18・19表)

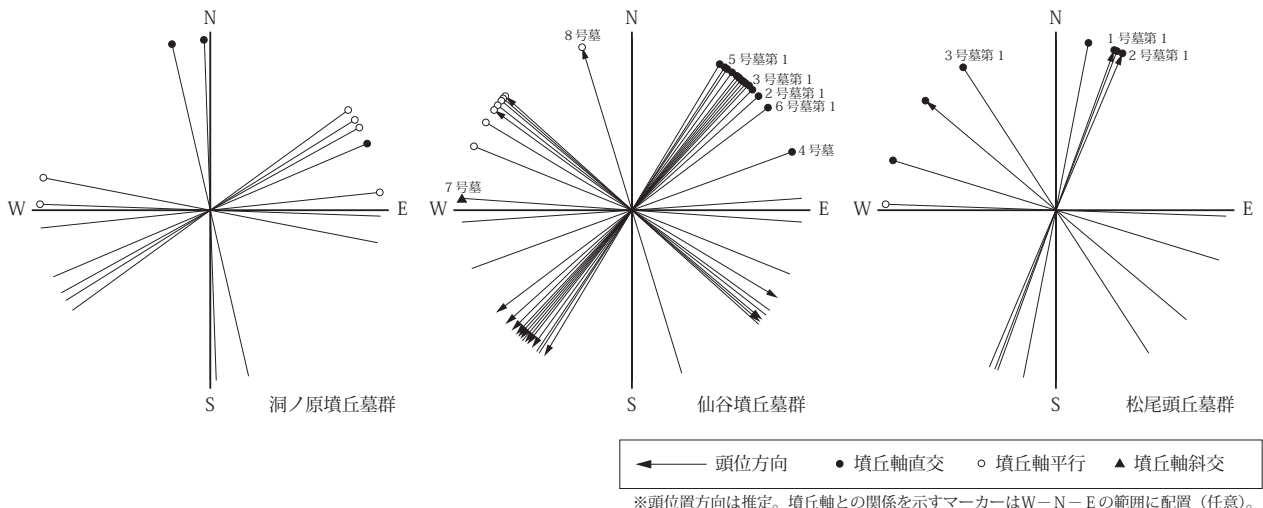
埋葬施設の種類は、弥生時代を通して組合式木棺もしくは棺の痕跡が確認できない土壌を用いており、古墳時代前期前葉に初めて石棺が採用される。墓壙の規模を比較すると、中心埋葬は規模の大きいものが多く、中心埋葬は終末期後半から古墳時代前期前葉にかけて最も大型となる(第87図)。木棺を比較すると、後期段階の仙谷地区の埋葬施設よりも、終末期後半の松尾頭1・2号墓は、墓壙の



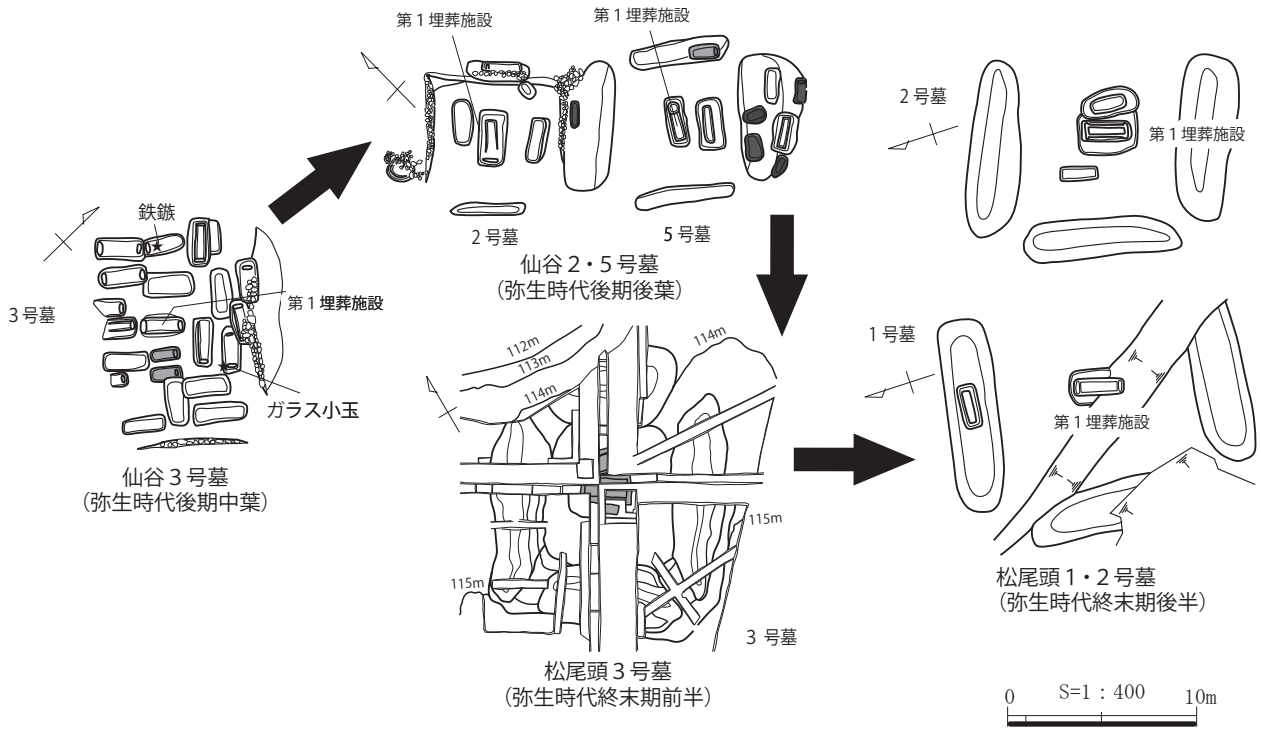
第86図 墳丘規模比較図（妻木晩田遺跡）



第87図 埋葬施設（墓壙上端）規模比較図（妻木晩田遺跡）



第88図 埋葬施設軸と丘陵軸の関係

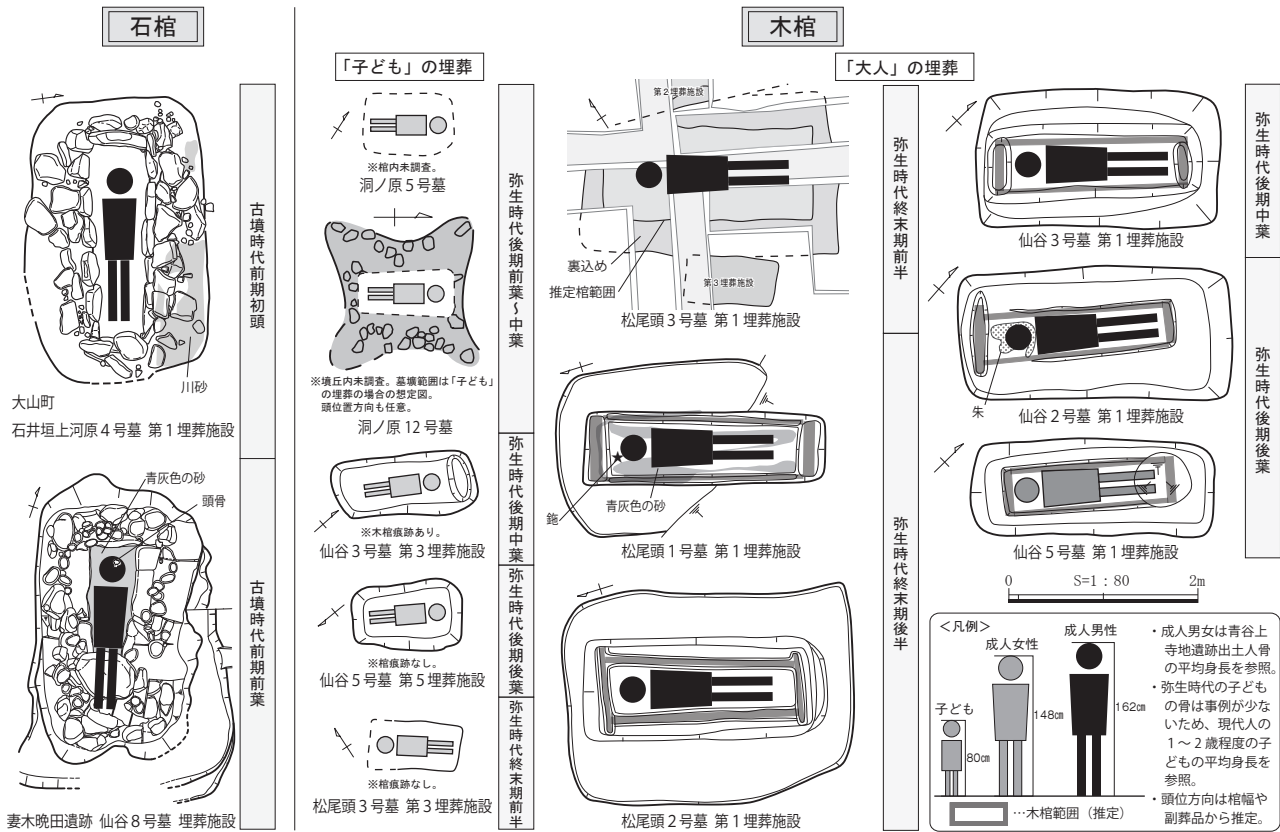


第 89 図 埋葬施設配置の変遷

第 19 表 妻木晩田遺跡 墳丘墓諸要素変遷表

松本他 2000	時期		諸要素								
			墳丘墓分類			墳丘 構築	棺種・ 棺構造・ 埋葬位置	棺付属 要素	墓壙内遺物	土器祭祀	外来系 土器
洞ノ原墳丘墓群	仙谷墳丘墓群	松尾頭墳丘墓群									
1期	弥生時代中期後葉	IV	1								
2期			2								
3期			3								
4期	弥生時代後期前葉	V	1	方形貼石台状墓 (2) 四隅突出型方形貼石 台状墓 (1)		墳丘 後行	木棺 (無墳丘墓)		(棺内調査済 みのものは 遺物なし)	墓壙上	吉備 北部
5期			2	四隅突出型方形貼石 台状墓 (8)	四隅突出型方形貼石 台状墓 (1)						
6期	弥生時代後期中葉	V	2	方形貼石台状墓 (3)		木棺 (H・□)	標石	ガラス小玉 鉄鏃	墓壙上	吉備 南部	
7・(8)期			3	四隅突出型方形貼石 台状墓 (2)	四隅突出型方形貼石 台状墓 (2)	木棺 (H) 墳丘外埋葬	赤色顔料	なし	墓壙上		
(8)・9期	弥生時代後期後葉	VI	3	方形周溝墓 (5) 方形台状墓 (6・7) 方形台状墓 (4)	方形周溝墓 (5)	木棺 (H) 周溝内埋葬	標石	なし	墓壙上		
10期			1		方形周溝墓 (3~5)	不明		不明	不明	墓壙上か	周防?
11期			弥生時代終末期後半	VI	2		方形周溝墓 (1・2)	木棺 (II) 土壙 周溝内埋葬	棺底砂	鈍	墳丘上
12期							同時 進行	石棺 (IIか)	棺底砂	なし	墳丘上
13期	古墳時代前期前葉			方形台状墓 (8) 円形台状墓 (9)							

※1 墳丘墓分類及び各墳丘墓の詳細については、第三章第1節及び本章第17・18表を参照。
 ※2 洞ノ原墳丘墓群について、時期が決定できない墳丘墓は省略している。
 ※3 墳丘墓分類の()は、各墳丘墓群中の遺構番号を表記している。
 ※4 各墳丘墓の時期については、長尾による考察結果を踏襲している(長尾2017)。加えて、型式学的観点から四隅突出型墳丘墓の成立が方形貼石台状墓から派生した説に基づき、各時期内の墳丘墓の前後関係を表している。
 ※5 棺種の()については、本章第90図を参照。



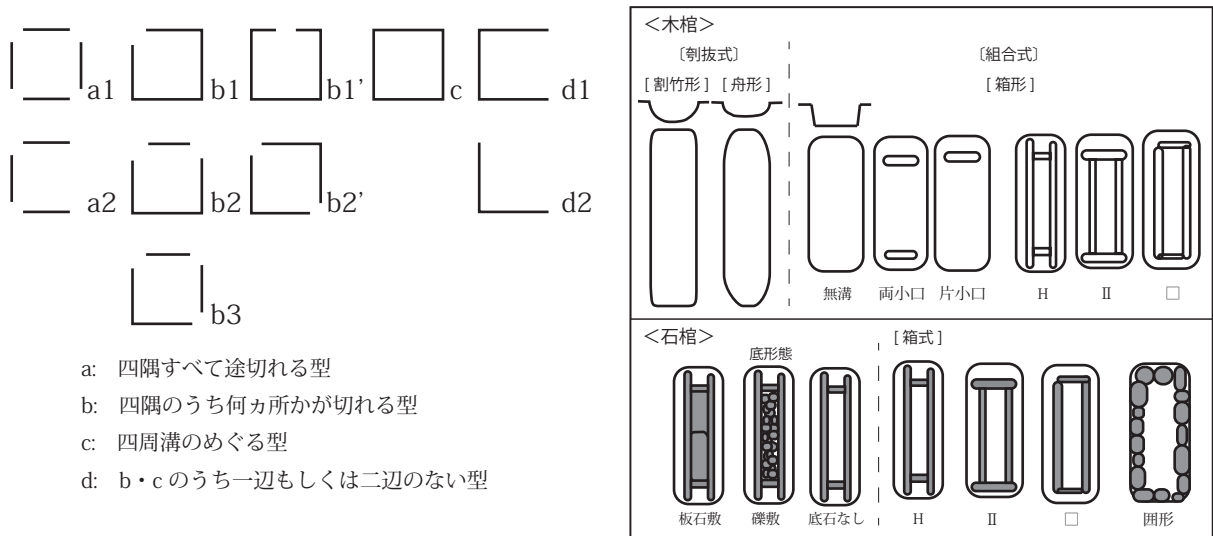
第90図 方形周溝墓にかかわる棺種と規模の比較

長さと併せて幅も広くなり、大型化している様子がわかる（第90図）。

墳丘に対する埋葬施設の軸方向については、洞ノ原墳丘墓群を除いてほとんどが墳丘墓の立地する墳丘軸に直交する形で設定されており、直交タイプの頭位は南西と北東に向く（第88図）。埋葬施設の空間配置からは、集団墓から特定の有力者層や個人墓への変化がわかる。洞ノ原墳丘墓群は最も大きな1・2号墓を中心に、中型の3・4号墓、7・8号墓、5号墓をはじめとした小型の四隅突出型方形貼石台状墓や方形貼石台状墓が取り巻き、全体として集団墓の様相を見せる。仙谷墳丘墓群の段階では、後期中葉の仙谷1号墓は埋葬施設については調査されておらず不明であるが、より小型の仙谷3号墓は、1墳丘内に22基の埋葬施設が密集する集団墓と言える。後期後葉の墳丘墓は半数が埋葬施設未調査であるが、仙谷2号墓や5号墓では墳丘内の埋葬数が3号墓と比較して激減し、終末期には墳丘外埋葬もほとんど見られなくなる。古墳時代前期前葉の仙谷8号墓では盛土内に埋葬施設があったとしても流失してしまったとみられるが、木棺より築造が困難な石棺を採用していることから、被葬者の権力はより集約されたものになっていたと推察できる。このことから、集団墓的な構成から特定の有力者層や特定の個人へと墳丘墓の被葬者が限定されていった様子が伺える。一方で、棺自体や棺内の大きさにはそれほど大きな変化は見られない。当時の平均的な弥生人の大きさと比較してみても、ほぼ人体の大きさに合わせた設計となっており、「大人」と「子ども」いずれの埋葬にしても棺の長大化などの現象は確認できない（第90図）。

（4）土器を用いた葬送儀礼

後期前葉の洞ノ原2号墓では、墳丘の中央において完形に近い土器が集中する。後期中葉～後葉の仙谷3号墓や2号墓でも、各墓墳上で土器が検出されている。部分的な調査ではあるが、仙谷4・6・

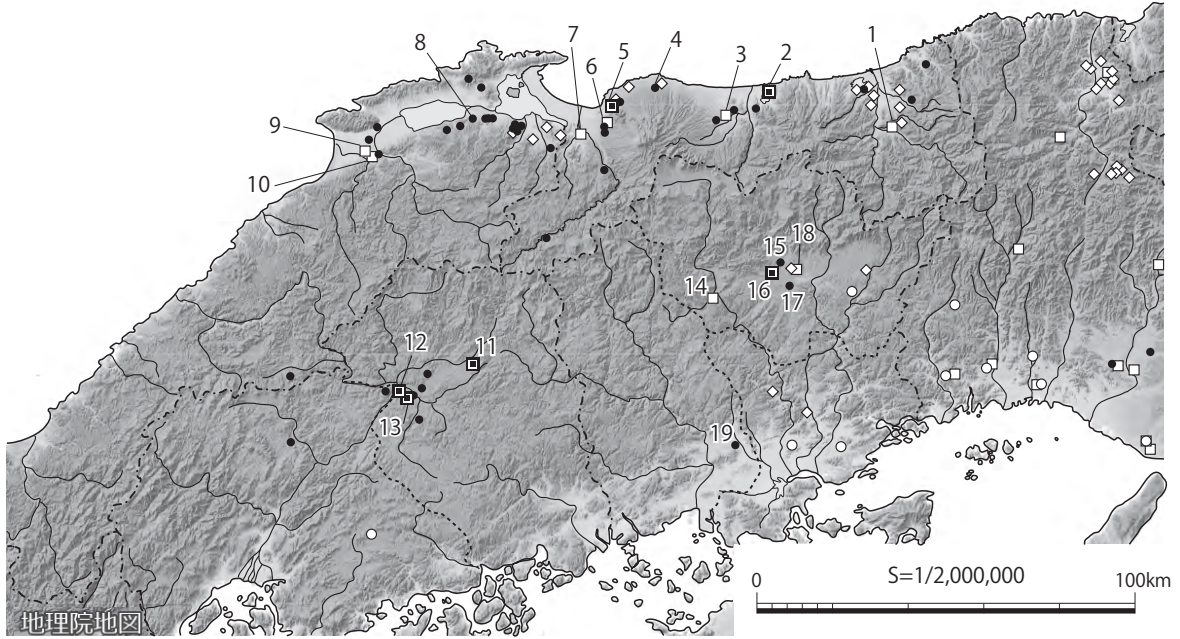


第91図 方形周溝墓及び埋葬施設の形態分類

7号墓も同様である。また、松尾頭墳丘墓群では、終末期を通して埋葬施設直上の供献土器は認められず、仙谷8号墓でも同様の状況であったことから、埋葬施設へ土器を供献する葬送儀礼は、弥生時代終末期以降に引き継がれていないとされる（長尾 2017）。ただし、仙谷5号墓では墳丘内の埋葬施設上面から土器は検出されず、周溝内埋葬が多い南側周溝の周溝内埋土に集中する。周溝内の土器の中には、埋葬施設に供献されたとみられる土器もあるが、基本的には破片の状態で散在しているため、各埋葬施設への供献土器と墳丘墓上などでの祭祀後に周溝内に廃棄された土器が混在している可能性がある。方形周溝墓である仙谷5号墓と松尾頭墳丘墓群では周溝内に完形に近い土器が集中していることから、方形周溝墓を採用した後期後葉の段階は過渡期にあたり、終末期には土器の扱いが変化したとも捉えることができる。

土器の構成をみると、突出する器種はなくやや壺・甕が多い傾向にあるが、もっと注目すべき点は、在地の土器に混じって外来系の土器がみられることである。ここでいう外来系土器やその定義については、第Ⅵ章第2節を参照されたいが、全時期の妻木晩田遺跡全体の外来系土器の出土量からみた墳丘墓での出土量の割合は、集落よりも墳丘墓の方が混入率が高い。洞ノ原墳丘墓群では、備後北部系の高坏が目立ち、仙谷墳丘墓群では、仙谷3号墓の吉備南部系細頸壺の搬入品？や松尾頭3号墓の吉備北部系の模倣土器、マウンド状地形Aの長頸壺といった吉備南部地域からの搬入品など、吉備地域との接点が見いだせる。これらの土器には、大型品は含まれていない。特に、搬入品の可能性が高い仙谷3号墓のものやマウンド状地形Aのものは小型品である。重松の論考によれば、交通の要衝に立地するものや西谷3号墓のような王墓級の墳墓では大型の特殊器台や特殊壺が搬入されていることからみて、妻木晩田遺跡の弥生時代後期～終末期段階の墳丘墓の被葬者は、大型品を持ち得なかったことが想像でき、吉備地域と関係性を持ちながら葬送儀礼のシステムの一部を取り入れていたとみられる（重松 2007）。

また、副葬品についてはほとんど持っていない^{註7}。明確なものは終末期後半の松尾頭1号墓第1埋葬施設に伴う鉈があり、柄側が意図的に曲げられている^{註8}。



＜妻木晩田遺跡の墳丘墓を説明する上で重要な墳墓群＞

- | | | |
|------------|-----------|----------|
| 1 万代寺遺跡 | 8 友田遺跡 | 15 竹田墳墓群 |
| 2 宮内第1遺跡 | 9 天神遺跡 | 16 黒谷遺跡 |
| 3 大谷後口谷墳墓群 | 10 三田谷Ⅰ遺跡 | 17 門の山遺跡 |
| 4 石井垣上河原遺跡 | 11 佐田峠墳墓群 | 18 下道山遺跡 |
| 5 妻木晩田遺跡 | 12 花園遺跡 | 19 郷境墳墓群 |
| 6 岡成第9遺跡 | 13 矢谷墳墓群 | |
| 7 青木遺跡 | 14 中山遺跡 | |

※番号は第93・94図の番号と対応。掲載を省略したものもある。
 ※番号のないマーカーを含め、弥生時代後期～終末期以外の時期の遺跡も表示している。

- …方形周溝墓とそのほかの墳丘墓が複合
- …方形周溝墓
- …円形周溝墓
- ◇ …台状墓（円形・方形・貼石含む）
- …四隅突出型方形貼石台状墓

※方形周溝墓には、報告書内で台状墓として扱われるが、溝による区画が顕著なものを含む。
 また、明確な区画やマウンドを持たないが、方形周溝墓の影響を受けていると指摘されるものや、埋葬施設を持たないが方形周溝墓の可能性が指摘されているものを含む。
 ※四隅突出型方形貼石台状墓には、明確な突出部を持たないが、方形貼石台状墓の隅が突出状に伸びるものを含む。

第92図 弥生時代後期～終末期を中心とした墳丘墓の分布

第20表 山陰地域を中心とした弥生時代中期～終末期の方形周溝墓一覧表

No	遺跡名	遺構名	所在地	立地	平面形態	盛土	規模 (m)			埋葬数	出土遺物	時期	報告書	備考	
							長さ	幅	高さ						
1	宮内第1遺跡	1号墳丘墓	東伯郡湯梨浜町	丘陵	a	×	(19.6)	(11.1)	1.0	6	土器、鉄剣・刀、玉類	弥生後期後葉	1	北東に石列。四隅突出型墳丘墓とされる。	
2		2号墳丘墓			丘陵	a	×	(17.3)	(7.2)	0.55	2	土器、鉄斧	弥生後期後葉		1
3		3号墳丘墓			丘陵	a1	×	24.5	18.9	1.0	13	土器、鉄刀、玉類	弥生終末期		1
4		4号墳丘墓			丘陵	a2	×	8.0	6.5	0.9	1	土器	弥生終末期		1
5		5号墳丘墓			丘陵	d2	×	(8.2)	(6.4)	0.2	2	土器	弥生終末期～古墳前期		1
6	大谷・後口谷墳丘墓	1号墓	倉吉市大谷	丘陵	a1	後行	16.5	13.3	1.5	15	土器	弥生後期後葉	2		
7		2号墓			丘陵	a2	後行	10.2	7.6	0.5	9	土器	弥生後期後葉	2	
8	妻木晩田遺跡	仙谷5号墓	西伯郡大山町	丘陵	a1	×	9.44	7.64	0.96*	9	土器	弥生後期後葉	3		
9		松尾頭1号墓			丘陵	a2	後行	13.3	(13.2)	1.05*	2	土器、鉈	弥生終末期後半	3	
10		松尾頭2号墓			丘陵	a2	後行	(11.4)	11.2	1.30*	3	土器	弥生終末期後半	4	
11		松尾頭3号墓			米子市淀江町	丘陵	a1	後行	10.41	9.78	1.49*	3	土器、鉄鏝	弥生終末期前半	5
12		松尾頭4号墓				丘陵	a?	後行	(7.3)	(7.0)	0.43*	—	土器	弥生終末期前半	5
13	松尾頭5号墓	丘陵	a?	後行		(6.6)	(5.7)	0.48*	—	土器	弥生終末期前半	5			
14	岡成第9遺跡	SD-01	米子市岡成	丘陵	d1?	×	6	(1.8)	0.3	—	土器	弥生終末期?	6		
15		SD-02			不明	×	(3.7)	(3.5)	0.7	—	土器	弥生後期～終末期?	6		
16	三田谷Ⅰ遺跡	1号方形周溝墓	出雲市上塩冶町	平地	b1	×	9.5	8.0	0.55	1	土器	弥生後期中葉	7	周溝内土器	
17		2号方形周溝墓 (SD50)			平地	d2?	×	(8.4)	(5.7)	0.4	—	土器	弥生終末～古墳前期	7	周溝内土器
18		3号方形周溝墓 (SD51)			平地	b1	×	(11.5)	10.0	0.4	—	土器	不明	7	
19	天神遺跡	SD2、SD3	出雲市塩冶有原町	平地	d2?	×	(10.5)	(8.0)	—	—	土器	弥生中期中葉	8	周溝内土器	
20		SD12			平地	d1?	×	(7.9)	(2.7)	—	—	土器	古墳前期初頭	9	周溝内土器
21	佐田峠墳墓群	佐田峠5号墓	広島県庄原市	丘陵	b~d	×	(8.2)	(4.5)	—	—	土器	弥生中期末	10	遺物は捜乱出土	
22	花園遺跡	D	広島県三次市	丘陵	a1	×	15.8	14.8	—	—	土器	不明	11		
23		F		丘陵	a1	×	16.4	13.9	—	—	土器	不明	11		
24	矢谷墳丘墓	MS1	広島県三次市	丘陵	d1?	×	7.8	(5.6)	0.4*	1	—	不明	12	MS2と同時期か	
25		MS2			平地	d1?	×	11.0	(7.3)	0.5*	7	土器	終末期後半	12	
26	下道山遺跡	方形台状墓1号	岡山県津山市	丘陵	a・b?	×	11.6	(10.1)	0.5*	2	—	弥生後期前半?	13	時期判断の遺物は2号に伴う	
27	中山遺跡	第1区画	岡山県真庭市落合町	丘陵	b3?	後行	13.0	10.7	0.9	21	土器	弥生終末期前半?	14	整地後埋葬	
28		第2区画			平地	b	×	8.1	7.0	0.9	5	土器	弥生終末期前半?	14	

※1 平面形態は第91図を参照。 ※2 盛土は墳丘構築方法を表す。「墳丘先行型」「同時進行型」「墳丘後行型」の三種別。構築方法が不明のものは×。
 ※3 ()は残存値。高さは溝底からの墳丘最大高。数値の小数点第2位以下四捨五入。 ※4 報告書文獻は142頁に記載。

3. 墳墓からみた地域間交流

(1) 山陰地方から中国山地における後期～終末期の方形周溝墓（第92～94図、第20表）

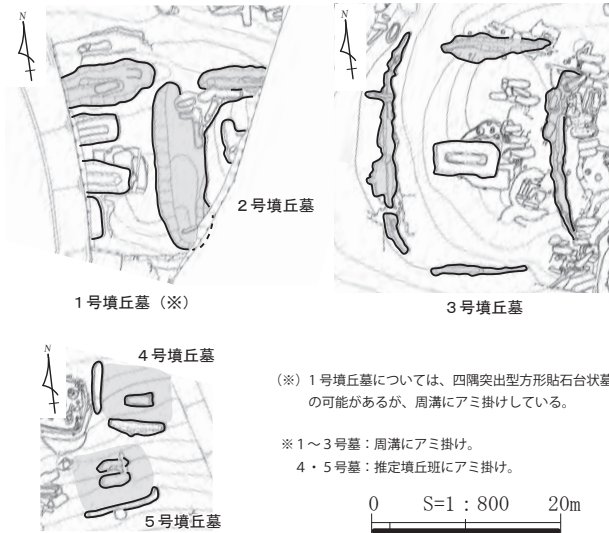
今回調査した松尾頭墳丘墓群では、方形周溝墓が用いられている。丘陵上に立地し、貼石を持たず、四隅が途切れて陸橋状に墳丘外部とつながる特徴を持つ方形周溝墓は、埋葬施設の設置も墳丘築造時の地表層から掘り込んで構築するという台状墓的な造りを採用している。平地に立地する一般的な方形周溝墓とは異なり、一見すれば、突出部と貼石が省略された四隅突出型方形貼石台状墓の簡素形のようにも見える。本項以降では、松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓採用の経緯について考察したい。

山陰地域（石見・出雲・伯耆・因幡）の方形周溝墓の事例は、弥生時代を通して限られ、四隅突出型墳丘墓や台状墓と比較して事例は少ない。方形周溝墓自体は全国的に見れば弥生時代前期から存在するが、山陰地域では中期中葉で初めて確認でき（第92図－9天神遺跡）、埋葬施設も検出されておらず、ほとんど様相がわからない。また、同時期に因幡では溝で区画された木棺墓群があり、マウンドを持たないものの方形周溝墓かその影響を受けた墳墓群であると指摘されている（第92図－1万代寺遺跡、谷口2004）。時期をおいて後期中葉には、再び出雲で方形周溝墓がみられるが1例のみである（第92図－10三田谷1遺跡）。出雲地域では、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけても前出の2遺跡で方形周溝墓が確認されている。出雲地域の方形周溝墓はいずれも平地に立地し、bもしくはd型の周溝形を採用していることから、松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓とは立地、時期、形ともに隔たりがある。一方で、伯耆地域では、中期から後期中葉にかけては明確な方形周溝墓はなく、後期後葉になって初めて確認できる（第92図－2宮内第1遺跡、同3大谷・後口谷墳丘墓、同5妻木晩田遺跡）。後期後葉から終末期に限定して築造されるこれらの方形周溝墓は、いずれも数基が丘陵上に立地し、ほぼa型であり、方形墳丘の隅が途切れた周溝を持つ。古墳時代に入ると、方形周溝墓が群を成す古墳群がみられるようになる（一例：第92図－7青木遺跡）。なお因幡・石見地域では、万代寺遺跡の事例を除き周溝墓と呼べるものは確認できない。

山陰地域以外に目を向けると、中国山地の山間部（吉備北部地域＝備後北部、備中北部、美作）でも方形周溝墓がみられる^{註9}。明確に時期が特定できているものはないが、おそらく最も古いものは備後北部の佐田峠5号墓（第92図－11）であり、中期末頃とみられる。後期から終末期の段階では、このほかに、同じく備後北部の花園遺跡（第92図－12）、矢谷墳墓群（第92図－13）や、報告書上では台状墓とされているが周溝状に区画されているものとして備中北部の中山遺跡（第92図－14）や美作地域の下道山遺跡（第92図－18）が挙げられる。伯耆地域の弥生時代方形周溝墓と比較すると、形態的に最も近いものは下道山遺跡の墳丘墓であり、方形の四隅が途切れる形状をしているが、時期は後期前葉頃とみられる。そのほかの方形周溝墓も後期前半までのものや、終末期後半のものなど、伯耆地域で方形周溝墓が造られた時期と同時期であり、四隅すべてが陸橋状となるものは現状では確認できない^{註10}。

(2) 伯耆地域における後期後葉から終末期にかけての方形周溝墓の系譜

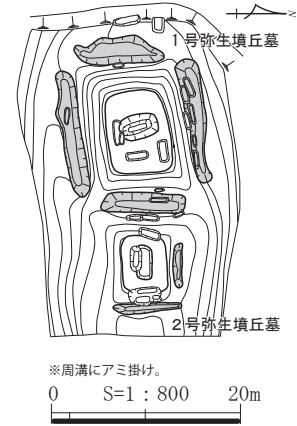
前項で見てきたように、山陰地域の事例は少なく、出雲地域の方形周溝墓と妻木晩田遺跡を含む後期後葉から終末期の方形周溝墓と古墳時代以降のそれとでは、立地や墳丘墓の構造、時期など隔たりがある一方で、中国山地山間部の方形周溝墓については、丘陵上に立地すること、四隅突出型墳丘墓やその祖形となる方形貼石台状墓と同じ墓域内に存在するなど、いくつかの共通点が見いだせる。妻木晩田遺跡でみられる方形周溝墓については、明確に系譜関係が追えるものは現状では確認できない



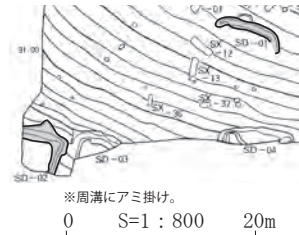
2 宮内第1遺跡

(※) 1号墳丘墓については、四隅突出型方形貼石台状墓の可能性があるが、周溝にアミ掛けしている。

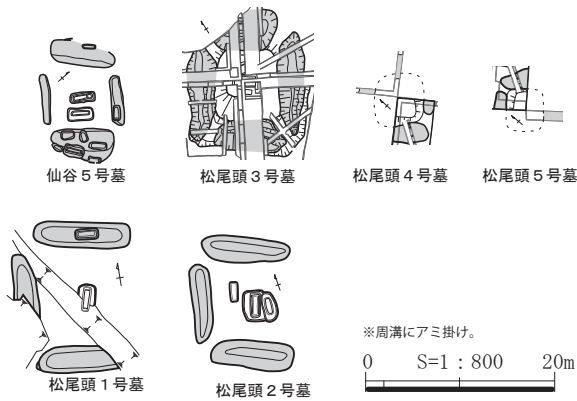
※ 1~3号墓：周溝にアミ掛け。
4・5号墓：推定墳丘班にアミ掛け。



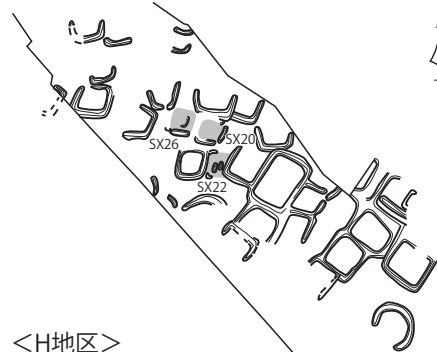
3 大谷・後口谷墳丘墓群



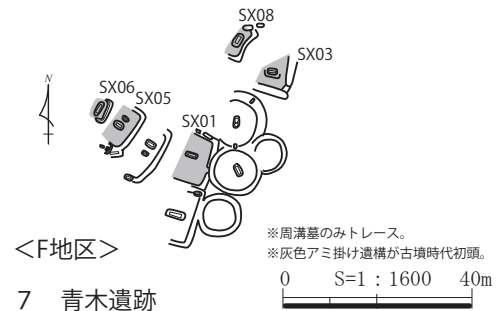
6 岡成第9遺跡



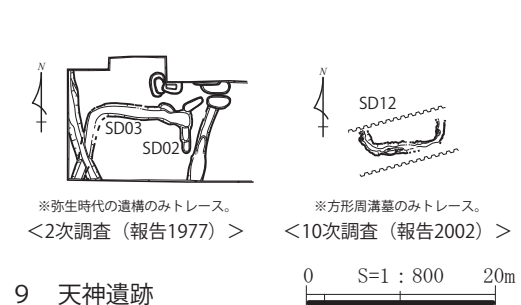
5 妻木晩田遺跡



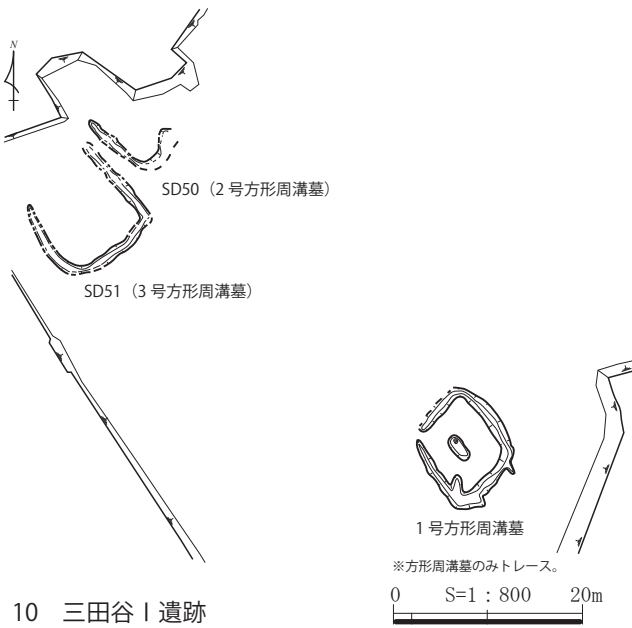
<H地区>



<F地区>



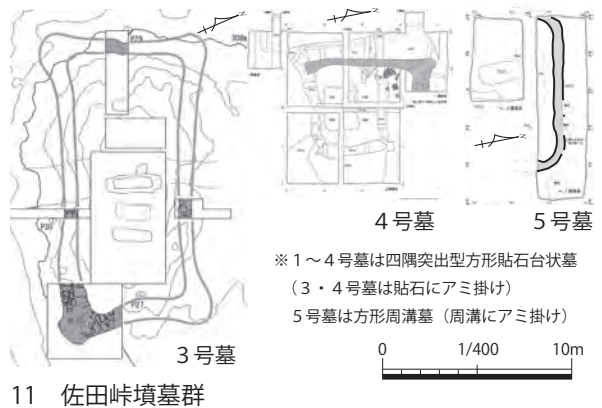
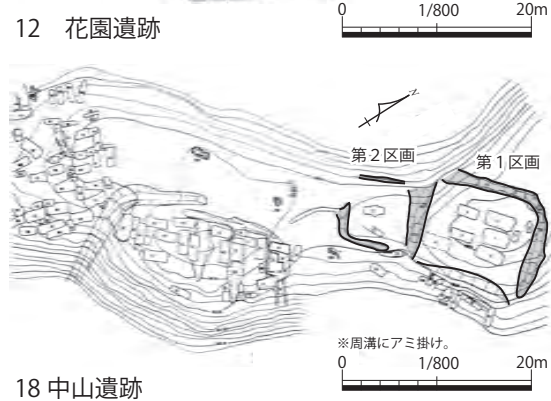
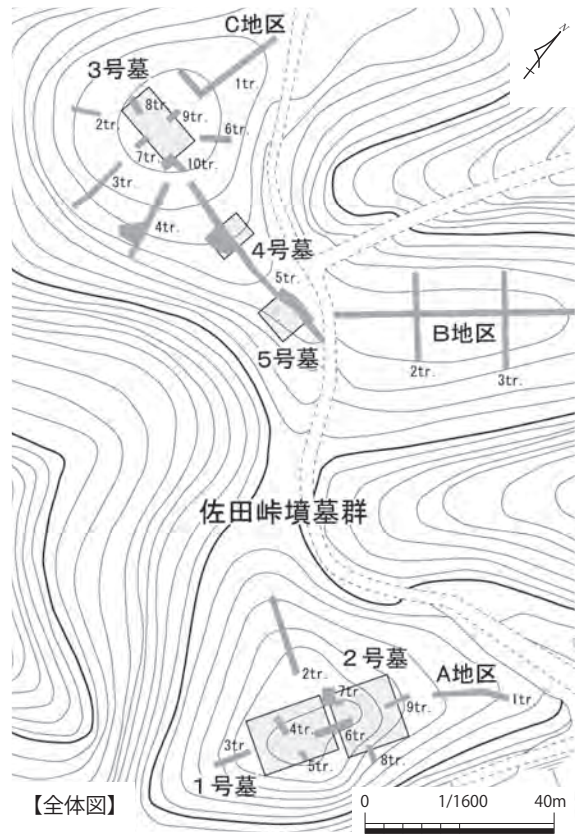
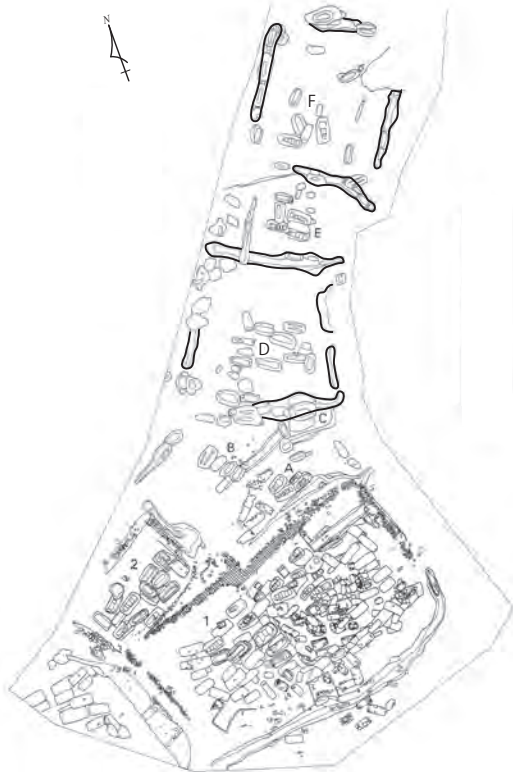
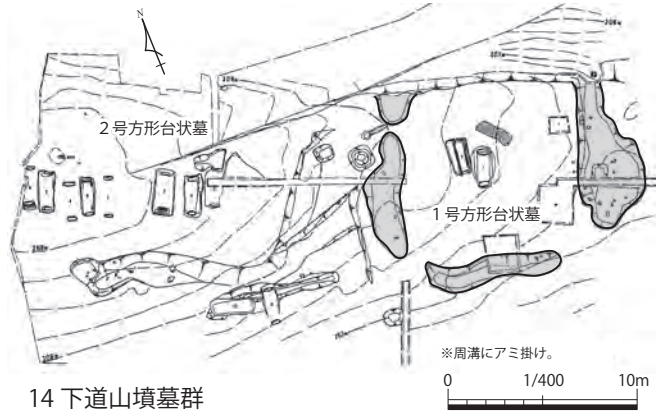
9 天神遺跡



10 三田谷I遺跡

※各遺跡の番号は、第92図に対応。

第93図 山陰地域における方形周溝墓



※各遺跡の番号は、第92図に対応。

第94図 中国山地山間部の弥生時代墳丘墓

ものの、諸要素については山陰地域内よりも吉備北部地域との関連性がうかがえる。

出土遺物についてみると、妻木晩田遺跡の松尾頭3号墓で吉備北部の土器を模倣したものや、マウンド状地形Aから吉備南部からの搬入品が出土したことから、吉備北部・南部地域との交流がうかがえる。同様に、大谷・後口谷1号墓においても、吉備（備後）南部からの搬入品とみられる長頸壺が出土している（第VI章第2節参照）。

時期を遡れば、洞ノ原墳丘墓群から出土する外来系の土器は吉備（備後）北部のものであり、四隅突出型墳丘墓の出現地の一つに中国山地山間部（備後北部）の方形貼石墓がある（渡邊 2007）。今回の出土品整理によって、後期中葉の仙谷3号墓でも吉備南部の細頸壺が出土していたことが判明したが（第VI章第2節参照）、後期前半段階で仙谷3号墓と同様の形態を持つ方形貼石台状墓が美作でも確認できる（第92図-16黒谷遺跡）。このほかにも、後期前半段階と終末期に形が崩れた四隅突出型墳丘墓が中国山地山間部を中心として分布する（第92図-15竹田墳墓群、同17門の山1号墓、同13矢谷墳丘墓、同19郷境3号墓）^{註11}。土器の移動や墳丘墓の分布からみて、吉備北部を中心とした地域と伯耆地域間との交流により、墓制に影響を与えた可能性が考えられる^{註12}。ただし、それは大きな変革をもたらすものではなく、埋葬施設の種類や墳丘構築方法など基本的な構造にかかわる部分にまで影響を与えることはなかったと考えられる^{註13}。

4. 小結

妻木晩田遺跡では、集落存続期間を通して、吉備北部を中心とした他地域との交流を持つ中で、共通の土器や模倣した土器を用いた葬送儀礼や、周溝による区画を強調した墳丘墓の採用など、ムラの墓制の中に他地域の墓制の一部を取り入れながら変化させていった可能性がある（第104回）。集落最盛期にあたる弥生時代後期後葉の段階で方形周溝墓を採用し、以降、貼石を持たない墳丘を造り続ける点は、出雲や因幡とは異なり、伯耆地域の独自性を表している。

今回の調査によって集落出現期（弥生時代中期後葉）を除き、古墳時代前期前葉まで墳丘墓の変遷を追えることができたのは、妻木晩田遺跡の全体像を明らかにする上では重要な情報を得られたと考える。一方で、集落最盛期の中型・大型の墳丘墓といった突出した首長墓が確認できない点や、全時期を通じた有力者以外の集団墓が未発見であること、終末期前半の集落変動と仙谷墳丘墓群と松尾頭墳丘墓群という2つの墓域の存在の関係、集落衰退期以後に集落が丘陵上から消滅した後の集団の動向ともあわせて、解決しなければならない課題は多い。

註

註1 妻木晩田遺跡内の調査成果報告書等刊行物については、本書14頁に掲載している。

註2 妻木晩田遺跡内の墳丘墓群については、前報告書において長尾がまとめている（長尾 2017）。各墳丘墓の時期や共伴する遺物については踏襲する。第78・80・81・83図については、一部、長尾 2017 掲載の図面を引用するが、紙面の関係で出土遺物など限定したため、併せて参照されたい。

註3 洞ノ原墳丘墓群では意識的に大（1・2号墓）・中（3・4・7・8号墓）・小（その他11基）に墳丘墓を造り分けられていると考えられるが、ここで言う大・中・小型とは、同墳丘墓群内での規模比較によって分類したものである。先行研究（渡邊 2002・2007 など）において墳丘墓の集成・規模比較が行われている。渡邊によれば、超小型、小型、中型、大型、超大型の5つに分類され（渡邊 2007）、これによれば洞ノ原墳丘墓群の大型・中型は小型、小型は超小型にあたる。

註4 洞ノ原墳丘墓群の造営時期と同じ弥生時代後期前葉から中葉にかけて洞ノ原墳丘墓群の西側には環濠が存在し、環濠内

に同時期の建物が存在しないことから祭祀的な意味で用いられたと考えられ、当該期の晩田丘陵西半分は洞ノ原墳丘墓群と併せて居住域とは隔絶された特別な空間であったと考えられる。ただし、後期後葉以降は洞ノ原地区は居住域となり、環濠周辺では住居も確認されるが、墳丘墓群の周辺では建物跡は認められず墳丘墓が壊されることはない。造営を終えた後も集落のなかで墓域として認識され続けていたと考えている。

註5 人骨が出土しない埋葬施設については、被葬者の成長段階における形質人類学的な分類はできない。また、縄文時代以降古墳時代に至っても被葬者の白骨化後の再葬事例が存在し、単純に棺の規模だけで区別することは困難である。それを踏まえたうえで、被葬者の構成を考えるために「大人」と「子ども」に分類するが、これは同じく鳥取県東部の青谷上寺地遺跡の出土人骨研究から導き出された弥生人の平均身長を参考に棺規模に当てはめて検討した結果の分類である。

註6 本書第3章で触れたが、松尾頭1区拡張部の内容確認調査により、墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形Aの存在が明らかとなった。墳丘墓であれば、貼石がなく周溝を伴い、松尾頭墳丘墓群の墳丘墓と同じ形態をとる方形周溝墓の可能性が高い。また、溝内からは吉備南部からの搬入品とみられる土器片が見つかっており、吉備地域との交流も伺える。複数の遺構が切りあっている可能性もあり、時期は後期後葉から終末期にかけてで絞り込めていない。

註7 集落の住居からは鉄製品などが出土するが、未調査の埋葬施設が多いとは言え、ほとんど副葬品を持たない点は注視する必要がある。なお、弥生時代後期中葉の仙谷3号墓では、副次的な埋葬である第5埋葬施設から鉄鏃が、第17埋葬施設からガラス小玉が出土しているが、出土位置から副葬品かどうかは検討を要する。ガラス小玉については、棺の裏込めの位置から出土しており、僻邪の用途で用いられた可能性もある（会下和宏氏に御教示いただいた）。

註8 柄部分が曲げられた鉈については、実用目的ではなく曲げられることを前提に軟質な素材で製作された可能性があり、古墳の副葬品には鉄製品の折り曲げ事例が存在するため（清家2002）、古墳時代へ続く新しい儀礼として注目すべきである。

註9 方形周溝墓としたものの中には、調査報告書内では「台状墓」と呼ばれるものを含むが、溝が3、4辺に存在するものは今回の分類（第Ⅲ章参照）に当てはめて方形周溝墓とした。また、吉備南部地域には弥生時代の方形周溝墓は確認されておらず、東の播磨地域の影響を受けて円形周溝墓が分布し、丘陵上の墓地では台状墓が確認されている（第92図）。また、後期後葉の楯築墳丘墓などは除外しているが、その中でも方形周溝墓的なものは確認できない。安芸や備後南部では、墳丘墓の調査事例は少なく、四隅突出型墳丘墓と円形周溝墓、さらに墳丘を持たない集団墓が主である。

註10 中国山地山間部の調査事例は遺構や遺物の情報が不十分であるため時期を確定できないものが多い。佐田峠5号墓の事例は、周溝内を調査しておらず攪乱出土土器から推定しているものであり、下道山遺跡についても周溝が一部しかない方形台状墓2号（第20表からは除外）から出土したものを参考にしている。それでも後期後葉段階のものは現状では確認できず、後期前半までと終末期後半のものに限られる。

註11 時期が不確定だが、友田遺跡（第92図-8）においても周溝が目立つ四隅突出形墳が存在する。

註12 宮内墳墓群（宮内第1遺跡）、大谷・後口谷墳墓群、仙谷5号墓は、出土遺物を見た限りでは時期差があるように思われる。ただし、註10で触れた中国山地山間部の方形周溝墓の事例同様、遺物の出土位置や層序など不明な点が多く、比較が困難であり、現状では、最も早くこのような方形周溝墓を採用した遺跡や、地域の絞り込みができない。今後の事例の増加を期待するとともに、既存の調査についても再整理が必要と考えている。また、時期の検討が不十分であるため今回は触れられなかったが、後期後葉から終末期にかけて北陸地方でも松尾墳丘墓群と同様の方形周溝墓が存在する点は、貼石のない四隅突出型墳丘墓の伝播と併せて注視する必要がある。

註13 吉備地域の棺には、弥生時代から石棺や土器棺が存在するが、妻木晩田遺跡での石棺の採用は古墳時代前期前葉の仙谷8号墓であり、周辺遺跡においても弥生時代末から古墳時代初頭にかけて小地域ごとに石棺が採用されていったようであり、弥生時代後期や終末期の段階では山陰地域ではほとんど確認できない（古墳時代初頭の事例：第90図、第92図-4、石井垣上河原遺跡）。墳形は変化させつつも、埋葬施設までは変容しなかった。吉備北部地域においても墳丘形態は四隅突出型墳丘墓の影響を受けながら棺は当該地域において伝統的な石棺を採用する（竹田墳墓群など）。逆に言えば、仙谷8号墓で石棺が採用されたことは、妻木晩田遺跡の墳丘墓群の変遷を考えるうえで大きな画期であったと捉えることができる。

主要参考文献

- 会下和宏 1998「山陰の「方形周溝墓」について」『山陰地域研究』No.4、鳥根大学汽水域研究センター
 岡野雅則 2005「妻木晩田遺跡の弥生時代墳墓についての一考察」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2004』鳥取県教育委員会
 重松辰治 2007「山陰地域における墳丘墓出土時の検討」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター

第VI章 総括

- 鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター 2007『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』
- 陶澤真梨子 2012「米子平野周辺における弥生時代後期から古墳時代中期の墳墓について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2011』鳥取県教育委員会
- 岡山県教育委員会編 1994『山陽自動車道路建設に伴う発掘調査 8』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 89
- 鏡野町教育委員会 1984『竹田墳墓群』
- 近藤義郎・中島嘉雄 1952「門の山 1号墳発掘調査報告」津山市『佐良山古墳群の研究』
- 陶澤真梨子 2013「妻木晩田遺跡弥生墳丘墓諸要素の整理」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2012』鳥取県教育委員会
- 清家 章 2002「折り曲げ鉄器の副葬とその意義」『侍兼山論叢』第 36 号史学編、大阪大学大学院文学研究科
- 高田健一 2006『妻木晩田遺跡』日本の遺跡 16、同成社
- 高田健一 2013「山陰地方の弥生社会像」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』シンポジウム記録 9、考古学研究会岡山例会委員会
- 谷口恭子 2004「因幡の弥生墳墓」『台状墓の世界』但馬考古学研究会・両丹考古学研究会
- 鳥取県教育委員会 1976『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ』F・J 地区
- 鳥取県教育委員会 1978『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』A・B・E・H 地区
- 鳥取県教育委員会 2017『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第 V 集
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2013『石井垣上河原遺跡 赤坂頭無し遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 50
- 豊島雪絵 2015「まとめ」津山市教育委員会編『畔田遺跡・追坊師 A 遺跡・黒岩遺跡・追坊師 B 遺跡・城山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 84 集
- 長尾かおり編 2017「妻木晩田遺跡国史跡指定 15 周年記念シンポジウム 激動の 3 世紀を生きる 弥生時代の終焉と妻木晩田遺跡 パネルディスカッション記録集」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2016』
- 長尾かおり 2017「第 VII 章 総括」『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第 V 集
- 仁木 聡 2007「第 2 章 四隅突出型墳丘墓の「配石構造」の系譜と展開」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
- 野島 永・村田 晋 2018『佐田谷・佐田墳墓群発掘調査報告書 研究編』広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告書第 4 冊、庄原市教育委員会発掘調査報告書 30
- 濱田竜彦 2002「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原 1 号墓・2 号墓出土土器の再検討を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集
- 濱田竜彦 2016「事例報告 西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会
- 松井 潔 2006「弥生時代後期の地域社会」『調査研究紀要』1、鳥取県埋蔵文化財センター
- 山岸良二 1981『方形周溝墓』考古学ライブラリー 8、ニューサイエンス社
- 渡邊貞幸 2007「第 6 章 まとめにかえて－四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター

第 20 表引用報告書

- 1 財団法人 鳥取県教育文化財団・鳥取県埋蔵文化財センター 1996『宮内第 1 遺跡・宮内第 4 遺跡・宮内第 5 遺跡・宮内 2、63、64、65 号墳』鳥取県教育文化財団調査報告書 48
- 2 倉吉市教育委員会 1986『大谷・後口谷墳丘墓発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書 第 40 集
- 3 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17
- 4 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17
- 5 鳥取県教育委員会 2019『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2018』
鳥取県立むきばんだ史跡公園 2020『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書—第 33・34 次調査、墳丘墓群総括報告—』妻木晩田遺跡発掘調査報告書第 VI 集（本書）
- 6 米子市教育文化事業団 1993『岡成第 9 遺跡』米子市教育文化事業団文化財調査報告書 1
- 7 建設省出雲工事事務所・鳥根県教育委員会 1999『三田谷 I 遺跡（Vol.1）』斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 V
- 8 出雲市教育委員会 1977『天神遺跡』国立鳥根医科大学教職委員宿舎建設にかかる緊急発掘調査概報
- 9 鳥根県出雲土木建築事務・出雲市教育委員会 2002『天神遺跡（第 10 次発掘調査）』市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 10 庄原市教育委員会 2016『佐田谷・佐田墳墓群発掘調査報告書 調査編（1）』庄原市教育委員会発掘調査報告書 28
- 11 三次市教育委員会 1979『史跡花園遺跡—調査と整備—』
三次市教育委員会・三次市文化財協会 1980『史跡花園遺跡—第 2 次調査と整備—』
- 12 広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財センター 1981『ケケ迫遺跡群発掘調査報告—三次工業団地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査—』
- 13 岡山県教育委員会 1977『下道山遺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（17）
- 14 落合町教育委員会 1978『中山遺跡—』

第2節 妻木晩田遺跡における外来系土器の受容と地域間交流

妻木晩田遺跡第33次・34次調査の対象となった松尾頭3号墓では、周溝内から供献されたと考えられる土器が少量出土した。日常用の土器ではなく墳墓祭祀に供された土器である点を考慮する必要があるが、それらの中には器形や文様、胎土など当地域の一般的な土器とは様相を異にするものが含まれていた。さらに、過去の第28次調査出土土器の中にも搬入品と判断されるものがあり、松尾頭地区に築造された墳丘墓群の葬送にあたって他地域から土器が供献された可能性が考えられた。

そこで本節では、妻木晩田遺跡で出土した外来系土器及びその可能性があるものを抽出し、それが内包する諸属性を検討して故地あるいは影響を与えた地域の検討を行う。外来系土器の受容のあり方を探ることで地域間交流の一端を明らかにし、それが妻木晩田遺跡における集落の展開や首長墓の造営にどのような影響を与えたのか考えてみたい。

1. 妻木晩田遺跡における在出土器の編年

外来系土器の検討を行うにあたり、判断の基準となる在出土器の編年を確認しておきたい。妻木晩田遺跡では、集落が継続的に営まれた弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居、土坑などから多量の土器が出土しており、良好な一括資料も認められることから、複数の編年案が提示されている（松本ほか2000、濱田2003・2009・2016）。各編年における細分時期の比定及び併行関係は、本書凡例に示したとおりである。このうち、主要器種である壺、甕の変化を基軸とした濱田竜彦の編年（濱田2009・2016）を基準とし、壺甕以外の器種については一義的に住居や土坑などの共伴する一括資料から抽出するが、それが適わない場合は参考資料として溝（環壕）または墳丘墓出土資料から補完することで、あくまで当遺跡における各小様式の全体像を把握することに努める。以上の手法で整理した在出土器の編年は第95～98図のとおりであり、基準となる資料は本稿末に示した。本来であれば各器種の型式分類と組列を提示しながら詳述すべきところだが、本節は外来系土器の検討を主旨としており、その組上に載る器種の特徴を中心に各小様式の概要を述べることとする。

(1) 弥生時代後期前葉（V-1期）

弥生時代中期後葉と後期前葉は、壺・甕の内面のヘラケズリが頸部まで達することを指標として区別され、共通理解を得ている。口縁部の拡張度、内面ケズリ調整の頸部までの到達度をもとに2細分される。口縁帯に施される文様は、複数条の凹線文または平行線沈文^{註1}を主体とする。V-1（古）段階は、頸部屈曲部下までケズリ調整が達しないものも散見される。

高坏は絶対数が少なく、中期後葉からの系譜及び全体形が窺える適切な資料がない。山陰東部地域は特に後期以降、様式内に高坏が占める割合がきわめて低いことが知られ（高橋1992、松井1997）、この状況は終末期後半段階まで続く。

器台は、中期後葉からの系譜を辿る大型品（松井2007、第96図8）と小型品（同7）が見られる。大型品は口縁帯に施す凹線文や円形浮文、脚柱部に施す凹線文など中期的様相を残す。

法量的に鉢と考えられる資料はこの段階から見られる（第96図9）。

(2) 弥生時代後期中葉（V-2期）

壺・甕ともに口縁がほぼ直立して複合口縁を呈すようになり、中期的様相が希薄になる（濱田2003）。甕の方が壺よりもその傾向が早く、甕口縁部の外傾度と拡張度をもとに2細分され、V-2（新）

段階は口縁の下垂が相対的に明瞭となる。共伴する壺はV-2(古)段階は古相の形態を残す。口縁部の文様は、口縁帯の拡張に伴い平行沈線文から多条平行沈線文へ主体が移行するようになり、V-2(新)段階にはハケ状工具を用いた多条の細線が施される資料も認められる。

高坏は、坏上半部で屈曲・有段化し、口縁部が複合口縁状を呈すものが見られる(第96図33)。以後、坏部は口縁部の拡張と外傾を強めていくという変化を辿ると考えられる。

器台は大型品(第96図27)があり、口縁帯及び脚裾部の拡張、外傾の度合いで新古に区分される。

蓋も出土しているが、組成に占める割合はきわめて低く客体的である。

(3) 弥生時代後期後葉(V-3期)

壺・甕とも口縁の拡張と平行沈線の多条化が進み、後期中葉段階に比して口縁を外傾するものの割合が高くなる。さらに、新段階には口縁部が外反するもの、口縁帯の施文を一部ナデ消すものが認められるようになる。こうした傾向は新段階ほど顕著となるが、口縁帯の多条平行沈線施文をハケ状工具、二枚貝によって行うことと連動している現象と捉えられ、特に二枚貝の使用と口縁部の外反が密接な関係を有すことは既に指摘されているところである(池淵1998)。また、口縁下端部が下垂しない、突出が形骸化するといった傾向も看取される(濱田2003)。胴部形態に大きな変化はないが、新段階には底部境界が不明瞭で、底部の丸底化・狭小化の流れを指向し始める個体が認められる。

高坏は、A:杯部が有段・屈曲するタイプ(第96図42~44)のほか、B:器台に近い形態で深い坏部をもつタイプ(同45→62)、C:坏部上半が屈曲して外方へ開くタイプ(同61)、D:椀形坏部を有すタイプ(同64)などバリエーションが見られる。Aタイプは口縁帯の無文化が先行して進み、屈曲があまくなるという変化が想定できる。Bタイプは器台に近似した形態から、坏部を拡大して深くすることで高坏としての機能を高める変化を辿る。しかし、複数タイプが認められる高坏は、後続時期に出現する皿形あるいは椀形の坏部を有すタイプへ収斂されていく。

器台は大型品(第96図48→67・68)と中小型品(同46・47→65・66)があり、他器種と同様に受部口縁帯及び脚帯部の拡張度により新古に区分される^{註2}。さらに、新段階の特徴として、受部口縁帯の外反を伴う拡張や無施文など、終末期に続く変化が発現している。

蓋はつまみが柱状を呈し、口縁帯を拡張して多条平行沈線文を施すもの、素口縁のものがある。

(4) 弥生時代終末期前半(VI-1期)

壺・甕の口縁部は外傾もしくは外反して口縁帯にハケ状工具や二枚貝などによる多条平行沈線文を施すものを主体とするが、施文後ナデ消すもの、ナデのみで無施文のものが増加する。施文後ナデ消すという行為は、二枚貝等施文で生じる器面の(外反)形状とそれに対する指向、口縁帯の装飾の形骸化の両面が影響している。外反する口縁の成形を意図して、口縁上端及び下端をつまみながらナデる、口縁帯中央部をナデる、というパターンに集約でき、結果的にナデ消しはこの3箇所ですべて顕著に認められる。肩部には、それまで主体であったヘラや櫛状工具などによる連続刺突文以外に、波状文が施されるものが見られる。胴部と底部の境界は不明瞭で、底部の丸底化・狭小化が進む。

高坏は、この時期に明確に比定できる資料が椀形坏部をもつもの(第98図5)、深い皿状の坏部をもつ低脚のもの(同6)しかなく、前段階からの系譜が追いつらい。

器台は、受部・脚部とも外面に多条平行沈線文などは施文されず、数条の沈線と刺突文程度で無文化が進むとともに、脚柱部が短縮化する(同7・8)。

蓋は口縁部が素口縁を呈すものに収斂される。

(5) 弥生時代終末期後半 (VI -2 期)

壺・甕とも口縁部は無文化し、ヨコナデのみで仕上げられる。古段階の甕は薄く引き伸ばされたような口縁形態で、上端部が先細りとなるもの、下端部の稜が鈍いものが目立つ。多条平行沈線文をナデ消したままのものもごくわずかに残る。新段階の甕は丁寧に整形された薄手のものが一般的で、口縁端部は丸くおさめるもの、面をもつもの、外方につまみだすようにアクセントをつけるものなどが見られる。口縁下端の稜はシャープに仕上げられる。新段階には、複合口縁がくの字に内傾するタイプの壺が出現する。壺・甕ともに胴部上位 2/3 程度の位置に最大径をもち、胴部と底部の境界は古段階に狭小な平底がわずかに残るが新段階にはほぼ丸底化する。装飾は、ハケ状工具を用いた肩部の平行沈線文または波状文程度となり、主に壺頸部だが同種工具による刺突文(羽状文)を施すものもある。

高坏は、口縁部の外反度に個体差は認められるが、皿状の坏部に脚裾で緩やかに開く筒状の脚部がつくタイプに収斂される。低脚坏は、浅い皿状の坏に短くハの字に開く脚がつくタイプが出現する。

器台は、脚柱部がさらに短縮化し、いわゆる「鼓形器台」を呈す。

(6) 古墳時代前期前葉

壺・甕の口縁端部は面をもつように整形され、下端部の稜は外方へシャープにつまみ出される。大型品を除き、胴部最大径は前段階に比してやや中位に下がり、球形を呈すものが増加する。頸部下端に突帯をめぐらせる壺が出現することも、当段階の特徴の一つである。

高坏や器台に大きな変化はない。器台は脚柱部の短縮化と形骸化が進み、くの字に屈曲するものが主体となる。小型器台や椀形坏部の小型高杯が組成に加わる。

2. 外来系土器の抽出と検討

前項で在地土器の基準となる編年を提示して主要器種の変遷を確認したが、次に外来系土器の抽出を行い、特徴的な諸属性を在地土器と比較しながら検討を加える。外来系土器の抽出と検討は、共伴する在地土器から帰属時期の確認も併せて行うため、便宜上、出土地区・遺構単位で進める。

(1) 外来系土器の分類と判断基準

はじめに、外来系土器として取り扱う資料の分類と判断基準を以下のとおり定義する。

① 「搬入土器」

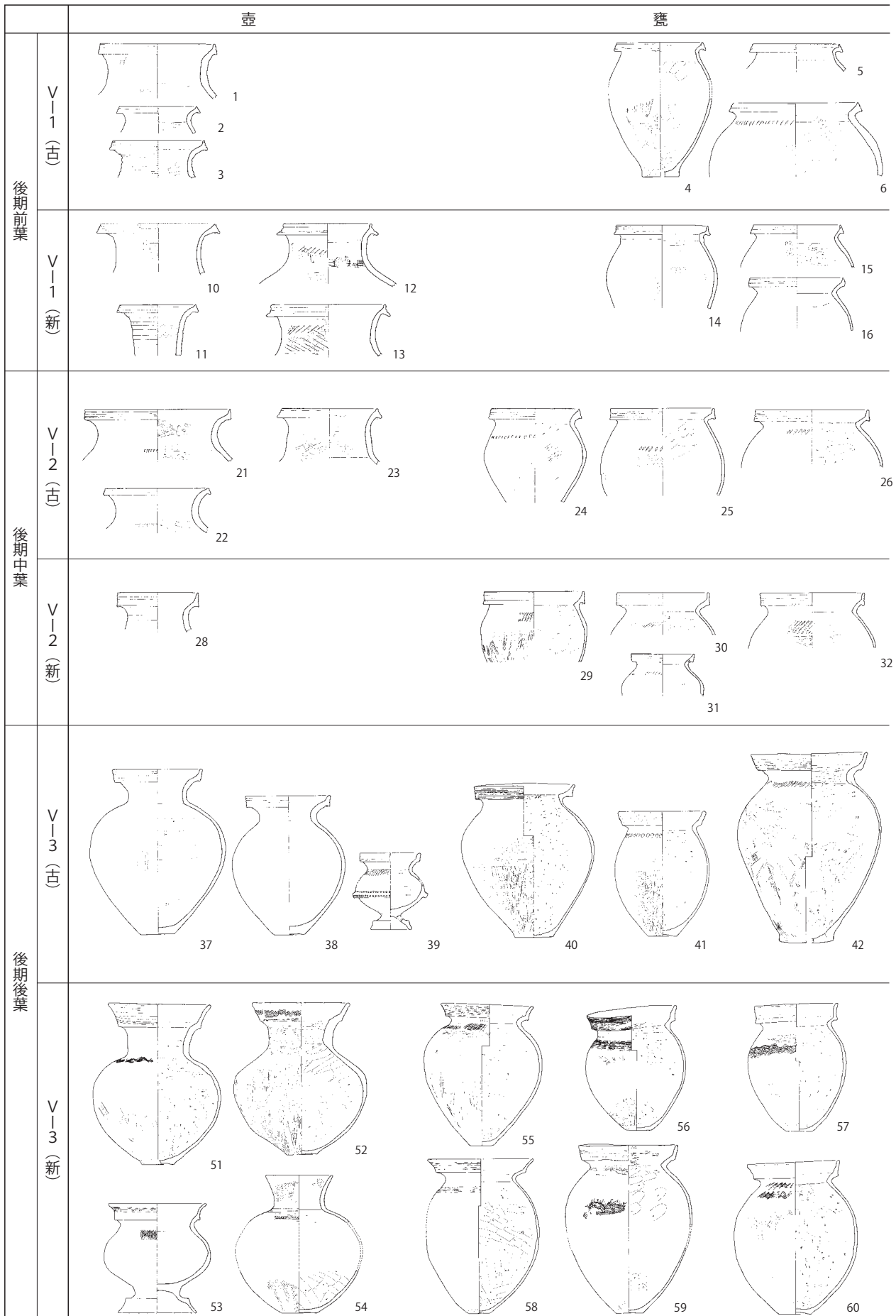
土器の形態及び施文も含む製作技法、そして胎土の諸要素から、他地域で製作されて当遺跡に持ち込まれたと考えられるもの。

- a) 故地から直接あるいは間接経由して持ち込まれたもの。
- b) 他地域の土器の特徴を模倣して当地以外で製作し、持ち込まれたもの。故地の土器の諸特徴をどの程度反映しているかは個体差があると考えられるが、変容が認められ、胎土も在地土器及び故地の土器と異なる。

② 「模倣土器」

故地の土器形態、製作技法を全体的または部分的に模倣して製作されたもの。

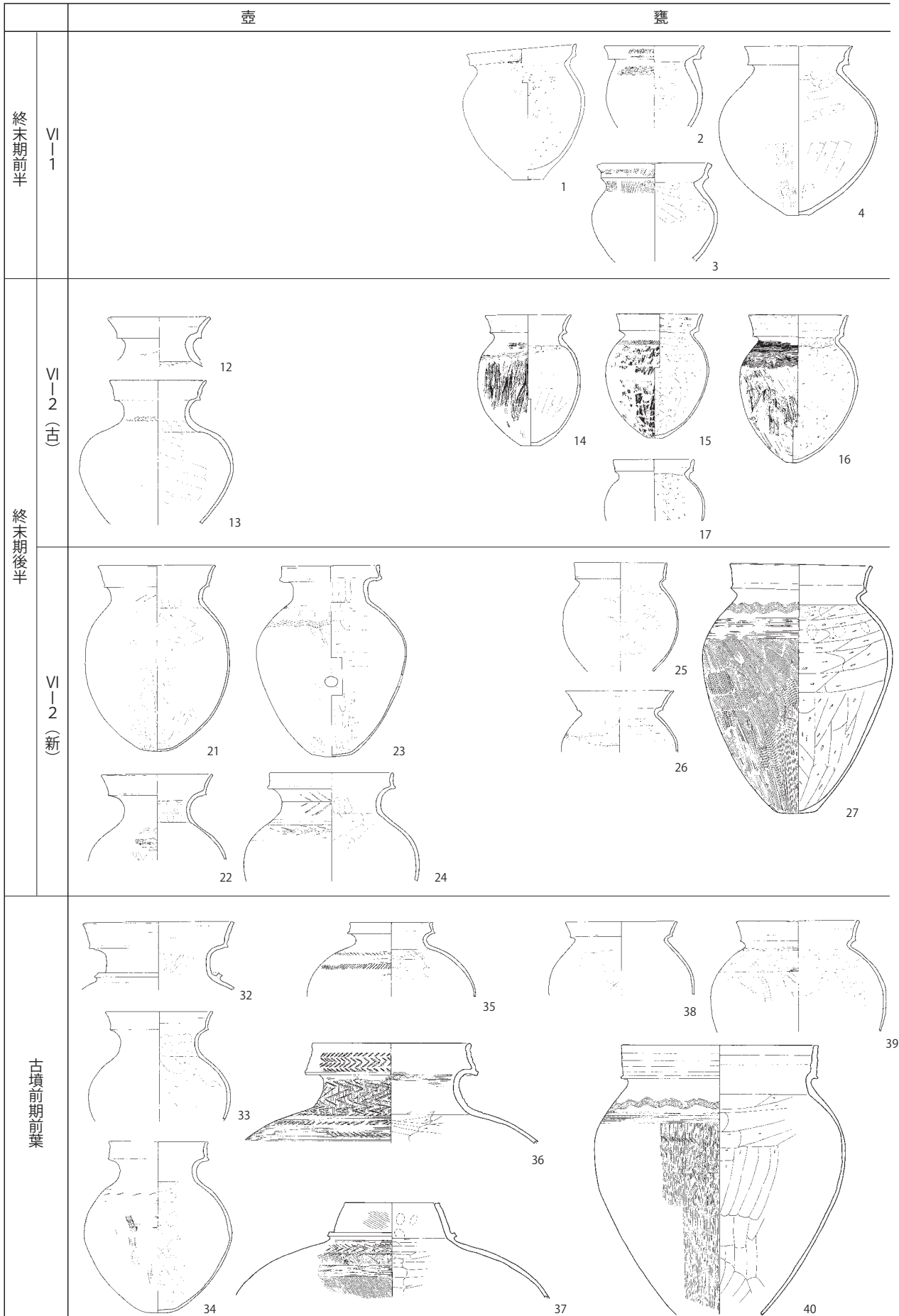
- a) 他地域の間人が当地で製作した土器。この場合、胎土は在地土器と変わらないが、製作された土器は故地のものと酷似した仕上がりになる可能性が高い。
- b) 当地の間人が他地域の土器の特徴を模倣して当地で製作した土器。他地域の土器の諸特徴をどの程度反映しているかは個体差があると考えられるが、胎土は在地土器と同じとなる。



第95図 妻木晩田遺跡土器編年(1)



第96図 妻木晩田遺跡土器編年(2)



第97図 妻木晩田遺跡土器編年(3)



すべて S=1/10

第 98 図 妻木晩田遺跡土器編年 (4)

模倣土器の場合、製作者が土器のもつ諸属性をどのように選択、抽出し、それらを忠実に表現するか=拘るかによって印象が大きく異なる。それらの個性的な土器が、(土器が製作された地域という意味での)在地土器と融合して変容が起こるだけでなく土器様式の一部として定着している可能性、また山陰地域東部あるいは西伯耆地域といった小地域における地域性と捉えられる可能性など、様々な点を考慮する必要があるため、個々の認定、峻別は難しい。上記のような問題点があることを前提の上で、当地の基準資料との比較検討を通して外来系土器の可能性のあるものを抽出していく。

(2) 外来系土器の概要

松尾頭3号墓 本論の契機となった松尾頭3号墓出土土器の検討から始めたい。第99図1～4は壺で、周溝及び墳頂部から出土した。全体形が推測できる資料が1しかないが、口縁部の諸特徴及び共伴土器から終末期前半に比定される。注目されるのは、頸部に巡らされた多条の沈線文である。沈線施文前の調整としてタテハケが確認でき、壺頸部の施文及び調整の特徴は備中南部あるいは備前南部を含む吉備南部地域^{註3}の長頸壺を想起させる。しかし、頸部は短く、多条沈線はヘラ状工具による螺旋状ではなく、二枚貝によって数条単位で一括して引かれている。また、外反して立ち上がる頸部から複合口縁に至る形状が「フ(あるいはコ)」状を呈すほど外方へ強く屈曲しており、複合口縁内面にはヨコナデ仕上げによって明瞭な平坦面をもつ。頸部から肩部にかけて大きくハの字に開く形状も、当地の一般的な壺と比較すると違和感を覚える。頸部の調整や施文など外見上の特徴は吉備南部地域の様式を情報として知りながら、全体形や施文具まで踏襲されておらず、在地土器との折衷形とも呼べる形態である。これらに近似した特徴を有す土器は、吉備南部地域にはなく、吉備北部地域に求められる。真庭市谷尻遺跡(岡山県教育委員会1976)、同ヒロダン・小坂向遺跡(岡山県教育委員会2003)などで見られる同時期の壺が類例として挙げられるが、最大の違いは頸部の施文手法であり、吉備北部地域の諸例は吉備南部地域の手法を踏襲してヘラ状工具で螺旋状に施文している。施文手法以外にも、胎土が異なること、終末期前半の併行期には壺や小型品を中心に丹塗り仕上げが顕著となる(高橋1980c)など、相違点も少なからずある^{註4}ことから、搬入土器とは考え難い。よって、第99図1～4は吉備北部地域土器の模倣土器と評価する。

松尾頭1区拡張区マウンド状地形A 弥生時代墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形Aに設定したトレンチ3で特徴的な壺が2点出土した。第99図6は先述の備中北部系模倣土器と同様に頸部に多条沈線文を施している。一方、5は内傾する幅広の口縁帯に多条の平行沈線文が施文され、外面が赤彩されている。胎土は褐色を呈し、角閃石を多く含む。以上の特徴から判断して、5は吉備南部地域から搬入された小型の特殊壺である。マウンド状地形Aの性格は明らかでないが、どちらも墳丘墓周溝と推測される3溝から出土しており、搬入土器の特殊壺片が出土したことは示唆的である。

松尾頭SI48 第99図7は縦3列の小円孔を5方向に穿つ器台脚柱部である。黄橙茶褐色を呈す胎土は在地土器と違和感がない。在地土器の系譜には多孔列を施す器台はなく、同様の特徴を有すものは吉備南部地域に見られる。ただ、円孔間の多条沈線文は施されておらず、器形及び法量、胎土からみても吉備南部地域からの搬入土器とは考えられない。近似する例として、吉備北部地域に位置する新見市西江遺跡安信丘陵部調査区南側テラス出土器台(岡山県教育委員会1977)があり、山陰系器台に円孔施文の属性だけ取り入れた模倣土器の可能性も想定できる。当遺跡出土器台の方が胴部の短縮化が進行しており、上記資料よりは時期が下ると考えられる。

松尾頭SI20 第99図8は坏部が複合口縁状に段を有す有段口縁高杯である。ややエンタシス状を呈

す脚柱部から屈曲してハの字にひらく脚裾部に4ヶ所の円孔を穿つ。形態的特徴から吉備南部地域からの搬入土器と考えられるが、精製されていない灰褐色の胎土は同地で高坏ではなく壺甕に用いられるものと酷似しており、粘土の選択が異なる^{註5}。9は小型器台で、受部口縁部は短くつまみ出すように立ち上げ、緩やかにハの字に開く脚部に3方向の円孔を穿つ。類例として真庭市谷尻遺跡No.176土壙出土例がある。8・9は吉備地域の諸例から、終末期後半に比定される。

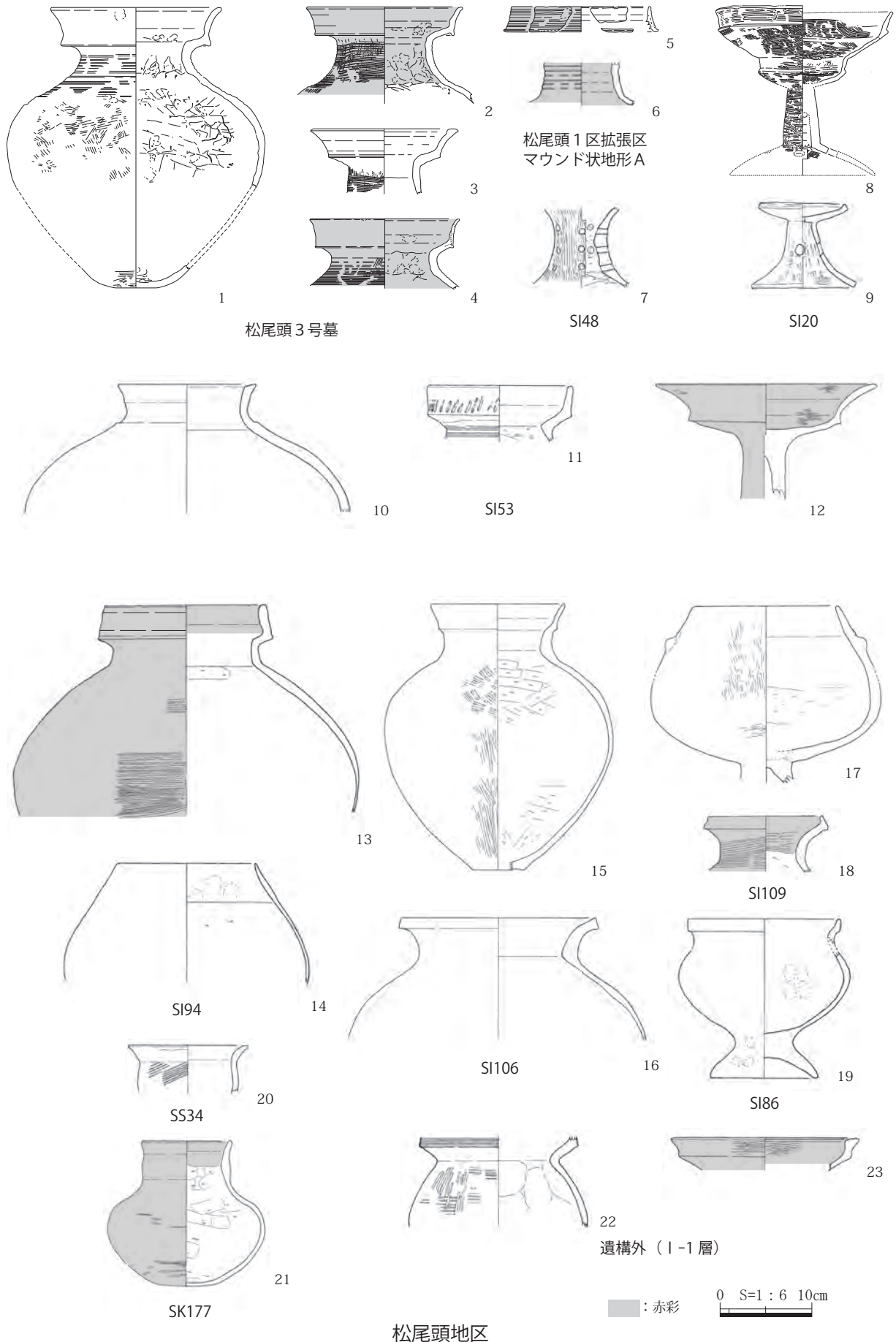
松尾頭 SI53 第99図10はやや外傾して短く立ち上がる口縁～頸部をもつ壺である。頸部の根元は成形時に強くナデられてわずかに段を有す。在地の壺にも直口壺はあるが、器形及び胎土が異なり、外来系土器と判断した。11は口縁部に櫛状工具で押し引き文、頸部に同工具で多条平行沈線文を施す。通有の在地土器は、頸部に多条平行沈線文を施さない。12は坏部上半が外反して大きく開く高坏で、内外面とも赤彩されている。吉備北部地域は弥生時代後期後葉に大型の壺、大半の小型土器など丹塗土器の比率が高くなることが指摘されており（高橋1980）、共伴する在地土器も当該時期に比定される。坏部の形態的特徴も含めて考えれば、吉備北部地域からの搬入土器の可能性もある。

松尾頭 SI94 第99図13はやや内傾する複合口縁をもつ壺で、頸部は強く屈曲し、断面がコ字状を呈す。口縁内面は赤彩され、表面の風化は顕著だが外面にも口縁～頸部付近まで赤彩痕跡が明確に確認できる。胴部全体に点々とだが赤彩痕跡が認められるので、本来は外面全体に塗彩されていたと推測する。同様の形態的特徴をもつ壺は、福山市大宮遺跡（神辺町教育委員会1988）など備後北部地域で後期中葉から見られる。14はワイングラス形を呈す大型の無頸壺で、胎土は淡黄橙色を呈し角閃石を少量含む。器形は近畿北部～北陸地域の無頸壺に似るが、口縁部の立ち上がりや調整に差異があり、同地域に由来するものとしても模倣土器の可能性が高いと考える。

松尾頭 SI106 第99図15は壺で、複合口縁の整形と体部調整に特徴がある。複合口縁は外面の稜を上下に強くナデることで作出し、直線的に引き延ばすように上方へ拡張している。胴部は基本的にミガキで仕上げるが、肩部から胴部上半にタタキ目を残し、さらに底部外面にはハケメが残る。あまり砂粒を含まない浅黄橙色の胎土をもつ。吉備北部地域でも特に吉井川上流に位置する美作中央部以東は、概ね弥生時代終末期以降、近接地域・遺跡間で差もみられながらタタキ目を残す壺や甕を主体として播磨以東の影響を受けた土器が顕著に認められることで知られる（藤田1978、中山1981、團2001）。土器が搬入された候補地として、上記地域を挙げておきたい。16も同系色の胎土をもつ壺で、径2mm程度の軽石と見られる碎屑物を多量に含むことが特徴である。口縁は頸部から外反して開きながら立ち上がり、頸部内面は屈曲して稜をもつ。風化が顕著で調整や施文の有無は不明である。系譜が辿れず胎土も大きく異なるため、外来系土器と判断した。

松尾頭 SI109 第99図17は近畿北部～北陸地域の脚付無頸壺に酷似するが、口縁部は外反せず擬凹線文もない。縦方向に付けられた把手は欠損している。脚部は欠損部の形状からみてハの字に開き始めており、やや短脚となる可能性も否定できない。以上のように相違点も多いが、在地土器とは明確に異なる白色の砂粒を多量に含む橙色の胎土であり、搬入土器と考える。18は頸部にハケ状工具による多条平行沈線文を施す壺で、外面を赤彩している。同様の特徴を有す土器はヒロダン・小坂向遺跡遺跡など吉備北部地域に多く、胎土の違和感はないが搬入土器の可能性もある。

松尾頭 SI86 第99図19は短く直立する無文の複合口縁をもつ台付壺である。短くハの字に開く脚台をもつ。本資料は台付装飾壺から模倣、変容したものである可能性もあるが、当地の一般的な台付装飾壺は脚台端部が複合口縁状を呈す点で異なる。同様の器形をもつ台付壺は近畿北部地域に多いが、



第99図 妻木晩田遺跡出土外来系土器(1)

本資料は複合口縁があまり拡張しない。器形的によく似た資料は真庭市旦山遺跡にもみられ（岡山県教育委員会 1999）、吉備北部地域との繋がりも考慮する必要がある。

松尾頭 SS34 第99図20は胴部外面にタタキ目を残す小型の甕で、頸部は屈曲せず、口縁は頸部からなだらかに開いて立ち上がる。タタキ目が残る以外は基本的にナデ調整で仕上げられており、ハケ・ケズリ痕跡は認められない。畿内系の甕ではあるが調整など変容しており、当地で製作された模倣品か、畿内系タタキ甕が一定量組成に入り込むことで知られる吉備北部地域からの搬入土器であろう。

松尾頭 SK177 第99図21は直口壺で、比較的精製された胎土をもち、外面及び口縁部内面は赤彩される。当地では一般的な器種ではなく外来系土器と判断したが、故地は特定できない。

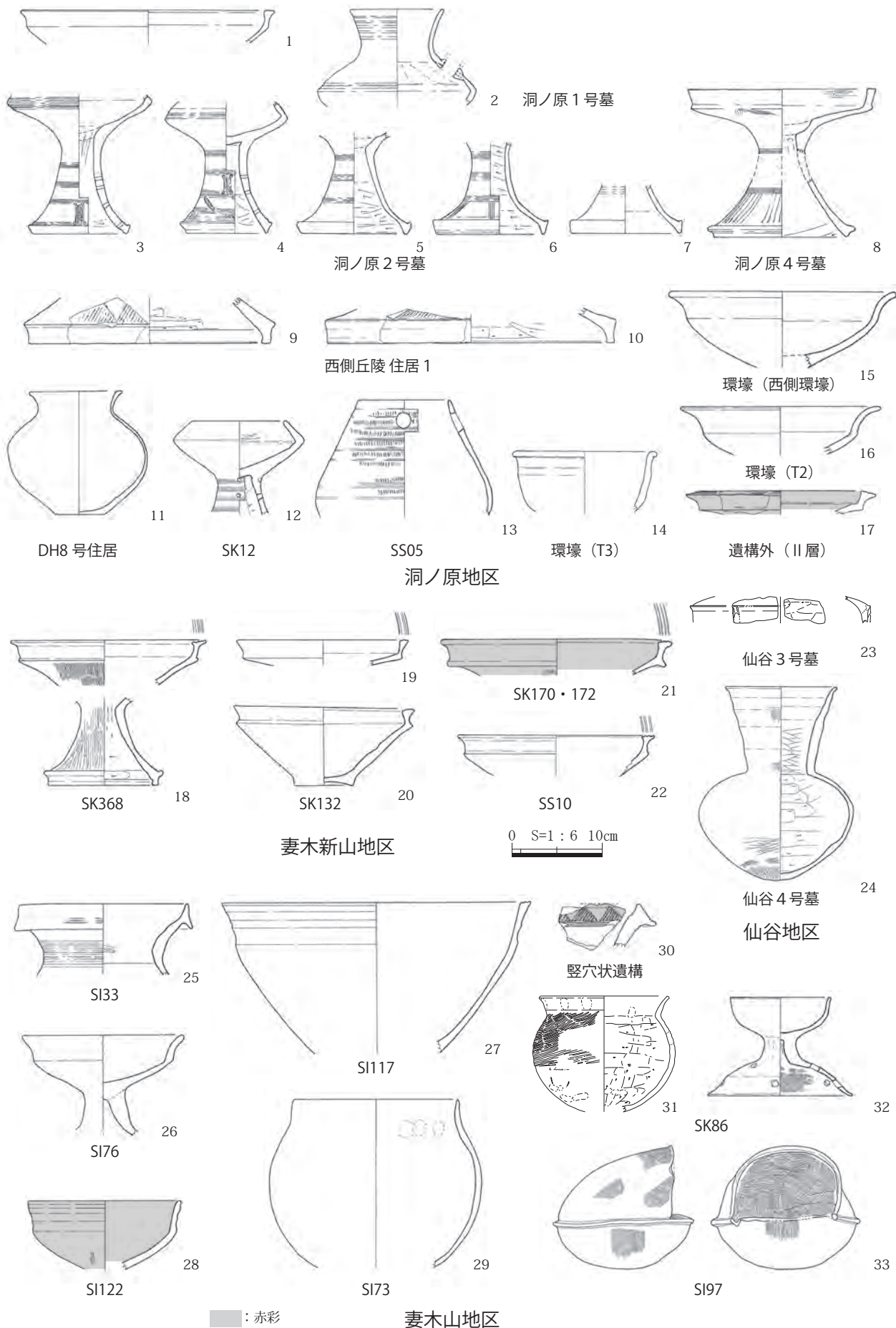
松尾頭地区遺構外（I -1 層） 第99図22は、肩部にタタキ目が残る甕である。タタキによる成形後にナデあるいはハケではなく、ミガキ調整を雑に入れる。くの字に屈曲する厚みの変化がない頸部も特徴的で、吉備北部地域からの搬入土器であろうか。23は高杯で、杯部上半は稜をもち屈曲して立ち上がり、口縁端部をT字に肥厚させて3条の凹線文を施している。内外面赤彩され、にぶい褐色の胎土には角閃石が目立つ。吉備南部地域からの搬入土器で後期前葉に比定される。

洞ノ原 1・2・4号墓 第100図1は杯部上半が屈曲して立ち上がる高杯で、口縁端部を肥厚させる。胎土は在地土器と差異がない。模倣土器もしくは吉備北部地域からの搬入土器か。2は1号墓で出土した脚付鉢で、算盤玉形の胴部から外傾して立ち上がる頸部～口縁部に4条の凹線文を施す。形態的には庄原市佐田谷1～3号墓、新見市西江遺跡など備後北部から備中北部にかけて集中して分布する類型（真木 2017）だが、頸部から口縁部の立ち上がり形状、口縁端部の拡幅・無施文など変容が認められる。胎土も在地土器と差はみられず、模倣土器と考えられる。3・4は2号墓で出土した高杯であるが、上部（端部）を欠失しており脚付鉢の可能性もある。これらについては脚台の形態、多条平行沈線文で区画された文様帯と内側に配された縦方向の多条沈線文といった文様構成から、備後地域の関係が考慮されつつも、在地産製品であることが指摘されている（濱田 2002）。5・6も同一器種の脚部と考えられるが、脚裾部の内側を入念にケズリ器壁が薄くなるという備中西北部の整形上の特徴が認められる^{註6}。7も含めて文様構成は備後地域に限らず吉備北部地域にも見られるので、在地産としても複合的な要素が混在している可能性は考慮しなければならない^{註7}。8は4号墓で出土した高杯で、脚部には2号墓出土土器と同様の文様をもつ。2号墓出土土器も含め、施文工具は薄刃の金属器である。杯部の立ち上がりで稜をもち、口縁端部をやや肥厚させるなど、吉備地域の後期前葉段階の高杯の特徴を具備する。1～8は搬入、模倣を問わずすべて後期前葉に比定できる。

洞ノ原西側丘陵住居 1 第100図9・10は器台脚部で、外面に連続する鋸歯文を施す。吉備南部地域の装飾普通器台（近藤編 1992）の特徴を具備しており、製作者は当該地域の間人である可能性が高いが、胎土は異なるため模倣土器（の搬入品）と考えられる。形態的な特徴から後期後葉段階（大橋雅也氏編年第5段階（後・Ⅲ期）、大橋 1992）に比定される。

洞ノ原 DH8号住居（SI08） 第100図11は短頸の壺で、報告書（淀江町教育委員会 2000）で周防～安芸西部地域の特徴を有す土器と評価されているが、該当する器種等は定かでない。胎土は在地土器と比べると異質な印象は受ける。模倣土器の可能性はあるだろう。

洞ノ原 SK12 第100図12は脚付鉢である。算盤玉状の胴部～口縁部には文様がないが、脚部外面に洞ノ原2号墓出土脚付鉢と同様の多条平行沈線文が数段施文され、円孔が1段確認できる。これも洞ノ原2号墓出土資料と同様に吉備北部地域との繋がりの中で製作された模倣土器と考える。



第100図 妻木晚田遺跡出土外来系土器(2)

洞ノ原 SS05 第100図13はワイングラス形を呈す胴部外面に平行沈線文と連続する爪形の刺突文を施す。胎土的に在地土器と相違はない。吉備地域の台付直口壺の模倣土器と考えられ、朝金小チヤ1号墳丘墓出土例^{註8}に法量的に近似する。

洞ノ原地区環壕 第100図14は赤色塗彩された鉢と思われる土器で、口縁部が断面楕円形に肥厚する特徴を有す。近年、朝鮮半島の粘土帯土器もしくは粘土帯土器の模倣土器の可能性をもつ「粘土帯系土器」として吉備北部地域で同種の土器が集成されている（石田2019）。本資料がその粘土帯系土器に位置づけられるかどうかは検討の余地が大きいだが、在地土器の系譜から辿れず赤彩という特徴も勘案すれば吉備北部地域との関係も考慮される。15・16は坏部上半で大きく外反する高杯で、器形及び共伴土器の時期からすれば後期後葉段階の吉備系高杯の可能性が高い^{註9}。

洞ノ原地区西側丘陵遺構外（Ⅱ層） 第100図17は坏部有段となる高杯で、肥厚させた口縁端部には3条の凹線文を施す。赤彩され、にぶい黄橙色の胎土には角閃石が目立つ。吉備南部地域からの搬入土器で、後期前葉に比定される。

妻木新山 SK132・170・172・368、SS10 第100図18・19・21・22は坏部有段となる高杯で、肥厚させた口縁端部に2～3条の凹線文を施す。形態的特徴からすれば後期前葉の吉備地域の高杯と見られるが、出自は異なる可能性が高い。褐色の胎土に角閃石を多く含む19は吉備南部地域からの搬入土器である。21は坏屈曲部の稜をつまみ出すように突出させており、白色の細砂粒を多く含む特徴的な胎土で、内外面を赤彩する。吉備北部地域からの搬入土器の可能性が高い。18・22の胎土は在地土器と同じに見える。20は備後地域の鉢で、後期前葉に比定される（尾崎2017）。

仙谷3号墓 第100図23は直口（細頸）壺胴部で、胴部中央の突帯下に縦位の棒状浮文を貼り付けている。類例としては上東遺跡亀川調査区中層出土資料（岡山県教育委員会1976）など、後期中葉段階から見られる。胎土は吉備南部地域のものとは異なるため、供献土器として別地で製作し搬入されたか、工人が当地で製作したかのどちらかと考える。

仙谷4号墓 第100図24は単純口縁の長頸壺で、報告書（大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000）において周防地方など西部瀬戸内地域からの搬入土器と評価されている。胎土は在地土器と差がなく、形態的には周防東部の終末期Ⅰ（田畑2012）の資料に近いとはいえ変容しているように見えるため、模倣土器と考える。

妻木山 SI33 第100図25は上下に拡張された口縁端部が内傾する壺で、頸部に貝殻腹縁を2～3周させて多条平行沈線文を施す。風化が顕著で沈線の条数等は不明確だが、口縁端部がわずかに外反する形状を呈しており、頸部と同じ原体で平行沈線を施文している可能性がある。胎土は在地土器と同じで、吉備北部地域の影響を受けた模倣土器と考えられる。

妻木山 SI76 第100図26は外反する坏をもつ高杯である。白色砂粒を多量に含む胎土で、在地土器と比較すると違和感がある。脚端部を欠くが、欠損箇所から屈曲してハの字に開く形状であることがうかがえる。形態的特徴も踏まえると、吉備北部地域からの搬入土器の可能性はある。脚部は短脚化傾向がみられ、坏部と別に作り接合している。後期後葉段階のものか。

妻木山 SI117 第100図27は大型の鉢である。福山市大宮遺跡井戸出土資料など備後地域に類例がみられ、後期中葉段階に比定される（尾崎2017）。胎土は淡黄褐色を呈し、混和する砂粒に差異があるが第100図16に近似する。

妻木山 SI122 第100図28も鉢で、直立する口縁部外面は強いヨコナデによって整形される。胎土

は在地土器と差がないが、内外面赤彩される。形態的な特徴からすれば備後地域の後期中葉段階の鉢と見られるが、吉備北部地域で經由、製作された模倣土器（の搬入）の可能性もある。

妻木山 SI173 第100図29は第99図13のようなワイングラス形に近いが、口縁部で緩やかに括れる点が異なる。在地土器の系譜にみられない器種だが、故地は不明で、模倣土器と考える。白色の砂粒を多く含む以外は在地土器の胎土と大差ない。

妻木山 6区 竪穴状遺構 第100図30は吉備系装飾普通器台の口縁部片である。口縁端部に連続する鋸歯文を施す。口縁端部と受部内面に赤彩痕跡が認められる。後期中葉段階のものであろう。胎土が吉備南部地域とは異なるため、周縁部（吉備北部地域か）からの搬入土器の可能性はある。

妻木山 SK86 第100図31は胴部上半にタタキ目を残すくの字口縁甕で、胴部下半はハケ後ナデで仕上げる。一見、庄内甕に似るが、胎土が異なる。胎土的には、吉備北部地域、なかでも東側に位置する美作地域の諸例に近い^{註10}。同地域は、播磨等を経由して畿内系土器が一定量流入し、模倣するかたちで土器様式の一画を占めることで知られ（高橋1980c、團2001）、故地の有力な候補として挙げられる。また、小型器台32は脚部に特徴があり、真庭市谷尻遺跡などに有段で円孔を穿つ脚部が出土している。胎土も31と酷似し、吉備北部地域の中でも美作地域からの搬入土器の可能性はある。

妻木山 SI97 第100図33は手焙形土器で、覆部と底部の間に突帯を有すが、一体化した形状を呈しており、ハケ目調整を基調として整形している。手焙形土器のA2類・Ⅲ期に位置づけられる足守川矢部南向遺跡出土資料に近似する（島崎2016）が、変容が著しく、模倣土器の可能性はある。共伴する在地土器が古墳時代前期前葉であることから、時期的には矛盾がない。

3. 外来系土器からみた地域間交流

前項で当遺跡で出土した外来系土器の可能性のある資料を抽出し、個別に検討を加えた。土器の出土遺構及び時期、搬入／模倣の別、故地と想定される地域などを第22表に、時期比定の際に参照した各地域の編年との対応関係を第23表にまとめており、あらためて外来系土器の概要を整理する。

第101図は外来系土器の出土位置（遺構）について時期ごとの推移を示したものである。外来系土器は後期前葉から認められ、それらは墳丘墓への供献土器として製作、持ち込まれたものが主体となるため、洞ノ原墳丘墓群に集中する。器種は吉備北部地域の模倣土器の脚付鉢あるいは高坏で、特に小型の脚付鉢は備後北部地域においては墳丘墓へ供献される祭式土器としての性格をもつ。洞ノ原1・2号墓出土土器は模倣土器だが、吉備北部地域の器形、文様構成、土器製作技術を混在しながらも踏襲しており、当該地域との交流の深さを示すと考える。当地域では弥生時代中期まで明確な区画や墳丘をもたない墓制が続いており、後期になって妻木晩田遺跡あるいは近傍の尾高浅山遺跡で世帯共同体の代表者に対して墳丘墓が築造される（高田2006）。妻木晩田遺跡では、集落出現期の初期墓域に墳丘墓が築造され、そこに他地域との交流をうかがわせる模倣土器が供献されている点が重要である。墓群中央に位置して始祖的な扱いを受ける洞ノ原2号墓は方形貼石墓だが、隣接する洞ノ原1号墓には四隅突出型墳丘墓が採用され、後続する中小型の墳丘墓にも踏襲されていく契機となっている。中期後半の備後北部地域に起源があり、その後山陰地域に波及、展開していく四隅突出型墳丘墓であるが、その導入は他地域との交流を背景に葬送儀礼のパフォーマンスを重視した（高田2013）という指摘は、模倣土器の器種構成や製作技法から看取される様相と合致し、首肯しうる。さらに、環壕が築かれた洞ノ原西側丘陵においても吉備南部地域から搬入された高坏が出土しており、環壕という施

第22表 妻木晩田遺跡出土外来系土器一覧表

掲載No.	器種	地区	遺構	層位	時期	搬入/模倣	系譜等	備考	文献	
99 1	壺	松尾頭	10区	3号墓西側周溝	①・②層	終末期前半	模倣	吉備北部	橙色胎土	本書
99 2	壺	松尾頭	10区	3号墓西側周溝	②層	終末期前半	模倣	吉備北部	表面赤彩(ベンガラ)	本書
99 3	壺	松尾頭	10区	3号墓北側周溝	①層下面	終末期前半	模倣	吉備北部		本書
99 4	壺	松尾頭	10区	3号墓	墳頂部	終末期前半	模倣	吉備北部	表面赤彩(ベンガラ)	本書
99 5	壺	松尾頭	1区	マウンド状地形A	Tr3②層	終末期前半	搬入	備中南部	内外面赤彩、胎土角閃石混	本書
99 6	壺	松尾頭	1区	マウンド状地形A	Tr3②層	終末期前半	模倣	吉備北部	内外面赤彩	本書
99 7	器台	松尾頭	3区	SI48	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	円孔3段・5方向	1
99 8	高坏	松尾頭	1区	SI20	埋土中	終末期後半	搬入	吉備南部	土の選択が吉備南部と逆で壺甕用	1
99 9	小型器台	松尾頭	1区	SI20	埋土中	終末期後半	模倣	吉備北部		1
99 10	壺	松尾頭	3区	SI53	埋土中	後期後葉	模倣	不明		1
99 11	壺	松尾頭	4区	SI53	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	頸部貝殻腹縁多条沈線	5
99 12	高坏	松尾頭	4区	SI53	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	外面・坏部内面赤彩	5
99 13	壺	松尾頭	3区	SI94	埋土中	終末期後半	搬入	備後	外面・口縁～頸部内面赤彩	1
99 14	脚付鉢	松尾頭	3区	SI94	埋土中	終末期後半	模倣	近畿北部～北陸		1
99 15	壺	松尾頭	7区	SI106	3～5層	後期後葉	模倣	近畿北部～北陸?		6
99 16	壺	松尾頭	7区	SI106	3～5層	後期後葉	模倣	吉備北部(備後)	3mm以下砂粒多量含む	6
99 17	脚付鉢	松尾頭	7区	SI109	1層	終末期後半	搬入	近畿北部～北陸	胎土橙色、白色細砂粒多量	6
99 18	壺	松尾頭	7区	SI109	3～5層	後期前葉	模倣	吉備北部	外面及び口縁内面赤彩	6
99 19	台付壺	松尾頭	3区	SI86	床面直上	終末期後半	模倣	吉備北部?	胎土白色細砂粒多	1
99 20	甕	松尾頭	7区	SS34	14層	終末期	搬入	吉備北部	胴部タタキ、胎土非畿内	6
99 21	壺	松尾頭	5区	SK177	埋土中	終末期後半	模倣	吉備北部	外面・口縁内面赤彩	5
99 22	甕	松尾頭	9区		I-1層	後期後葉	搬入	吉備北部	胴部タタキ、胎土非畿内	6
99 23	高坏	松尾頭	7区		I-1層	後期前葉	搬入	備中南部	内外面赤彩・胎土に角閃石	6
100 1	高坏	洞ノ原	D区	1号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 2	脚付鉢	洞ノ原	D区	1号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 3	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 4	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 5	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 6	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 7	高坏	洞ノ原	D区	2号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 8	高坏	洞ノ原	D区	4号墓		後期前葉	模倣	吉備北部		2
100 9	器台	洞ノ原		住居1	③層	後期後葉	搬入	吉備南部	工人吉備南部、胎土別	3
100 10	器台	洞ノ原		住居1	③層	後期後葉	搬入	吉備南部	工人吉備南部、胎土別	3
100 11	壺	洞ノ原		DH 8号住居	P1底面	後期後葉	模倣	周防～安芸西部?		2
100 12	脚付鉢	洞ノ原		SK12	①層	後期前葉	模倣	吉備北部		1
100 13	台付壺	洞ノ原		SS05	埋土中	終末期前半	模倣	吉備北部		1
100 14	鉢	洞ノ原		環壕	T3J層	後期前葉	模倣	吉備北部	粘土帯系土器か	3
100 15	高坏	洞ノ原		環壕(西側環壕)	埋土中	後期前葉	搬入	吉備北部	胎土精製・砂粒少	2
100 16	高坏	洞ノ原		環壕	T2J層	後期後葉	搬入	吉備北部	胎土等美作地域か	3
100 17	高坏	洞ノ原		(西側丘陵)	第II層	後期前葉	搬入	備中南部	内外面赤彩、胎土角閃石混	3
100 18	高坏	妻木新山	3区	SK368	埋土中	後期前葉	模倣	吉備北部		1
100 19	高坏	妻木新山	2区	SK132	埋土中	後期前葉	搬入	備中南部	内外面赤彩	1
100 20	鉢	妻木新山	2区	SK132	埋土中	後期前葉	搬入	備後		1
100 21	高坏	妻木新山	2区	SK170・SK172	埋土中	後期前葉	搬入	吉備北部	内外面赤彩	1
100 22	高坏	妻木新山	3区	SS10	側溝底面	後期中葉	模倣	吉備北部		1
100 23	直口壺	仙谷		3号墓第6埋葬施設		後期中葉	模倣	備中南部	胎土が異なる	1
100 24	壺	仙谷		4号墓西側周溝		終末期前半	模倣	周防?		1
100 25	壺	妻木山	1区	SI33	埋土中	後期後葉	模倣	吉備北部	頸部貝殻腹縁多条沈線	1
100 26	高坏	妻木山	2区	SI76	床面直上	後期後葉	搬入	吉備北部	胎土白色細砂粒多	1
100 27	鉢	妻木山	2区	SI117	埋土中	後期後葉	搬入	備後		1
100 28	鉢	妻木山	3区	SI122	床面直上	後期中葉	搬入	備後(吉備北部)	内外面赤彩	1
100 29	鉢	妻木山	2区	SI73	埋土中	終末期後半	模倣	近畿北部～北陸?	胎土白色砂粒多	1
100 30	器台	妻木山	6区	竪穴状遺構	埋土中	後期中葉	搬入	吉備北部		4
100 31	甕	妻木山	2区	SK86	埋土中	終末期後半	搬入	吉備北部	美作地域か	1
100 32	小型高杯	妻木山	2区	SK86	埋土中	終末期後半	搬入	吉備北部		1
100 33	手焙形土器	妻木山	2区	SI97	床面直上	古墳前期前葉	搬入	吉備南部		1

*文献は1: 大山スイス村発掘調査団ほか2000、2: 淀江町教育委員会2000、3: 鳥取教育委員会2003、4: 同2006a、5: 同2008、6: 同2011a

第23表 編年対照表

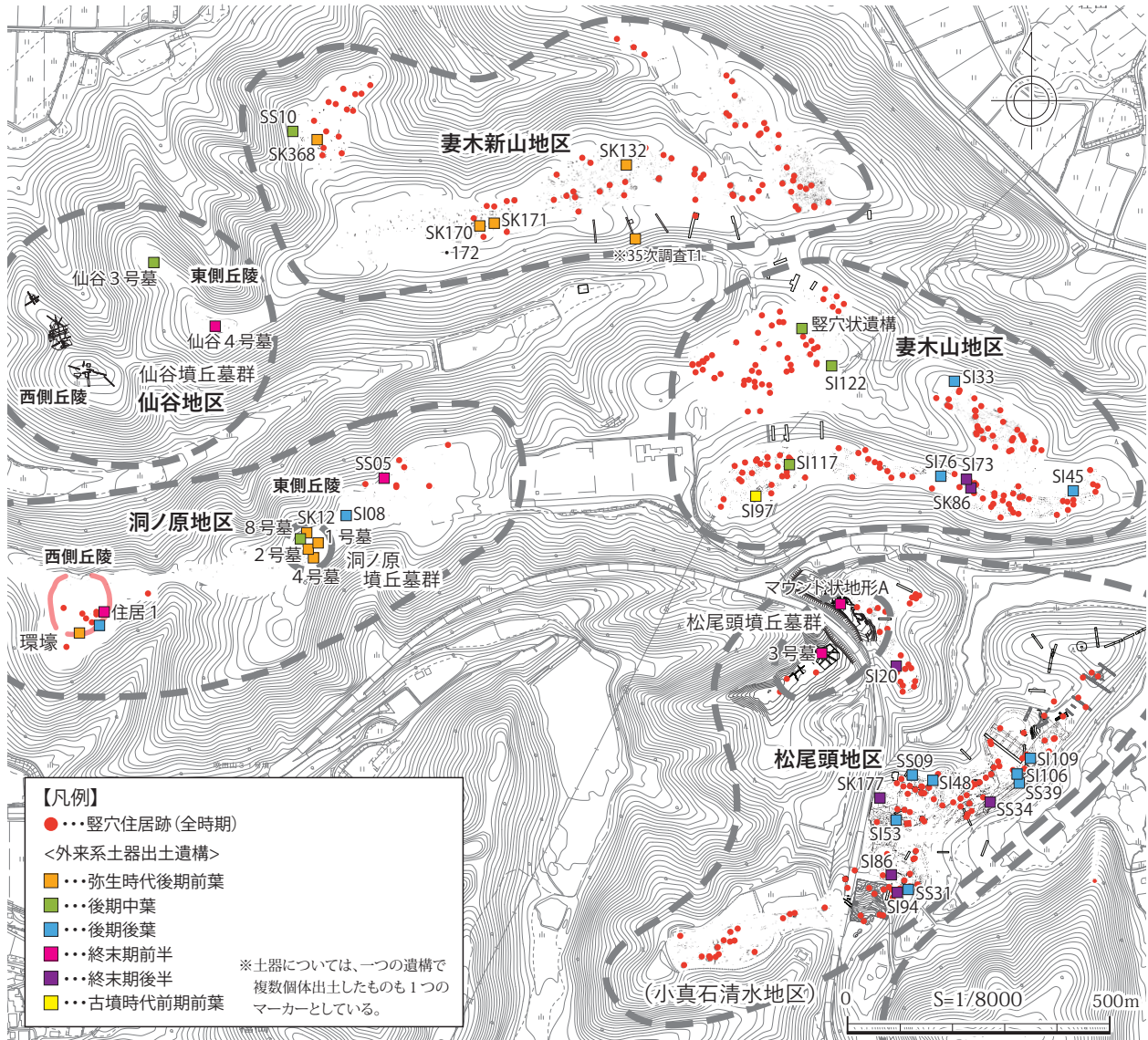
本書	松本他 2000	濱田 2003	濱田 2009	松井 1997	渡邊 2009	高橋 1980	團 2000	河合 2015	河合 2018	石田 2019	尾崎 2017	伊藤 1992
弥生後期前葉 (V-1 (古))	4期	V-1(古)	1期	西伯耆V期	I期	Ⅶ a		後期Ⅰ-1		後Ⅰ古	後期前葉古段階	V-1
弥生後期前葉 (V-1 (新))	5期	V-1(新)	2期			Ⅶ b		後期Ⅰ-2		後Ⅰ新	後期前葉新段階	
弥生後期中葉 (V-2 (古))	6期	V-2(古)	3期			Ⅶ c		後期Ⅰ-3		後Ⅱ古		
弥生後期中葉 (V-2 (新))	7(・8)期	V-2(新)	4期	西伯耆Ⅵ期	II期	Ⅶ d		後期Ⅱ-1		後Ⅱ新	後期中葉古段階	V-2
弥生後期後葉 (V-3 (古))	(8・9)期	V-3(古)	5期			西伯耆Ⅶ期		Ⅶ a		後期Ⅱ-2	後Ⅲ古	
弥生後期後葉 (V-3 (新))		V-3(新)	6期	西伯耆Ⅷ期	Ⅶ b	後3期	後期Ⅲ-1	後Ⅲ新				
				Ⅶ c	後期Ⅲ-2							
弥生終末期前半 (Ⅵ-1)	10期		7期	西伯耆Ⅸ期	III a期	Ⅷ d	後4期	後期Ⅲ-3		後Ⅳ古		V-3
				西伯耆Ⅹ期		Ⅸ a		終末期1		後Ⅳ新		
						Ⅸ b		終末期2				
弥生終末期後半 (Ⅵ-2 (古))	11期		8期	西伯耆ⅩⅠ期	III b期	Ⅸ c	庄内1期	古前Ⅰ-1	1期			
弥生終末期後半 (Ⅵ-2 (新))	12期		9期	西伯耆ⅩⅡ期	IV a期	X a		古前Ⅰ-2	2期			
						X b	庄内2期	古前Ⅰ-3	3期			
古墳前期前葉	13期		10期	西伯耆ⅩⅢ期	IV b期	X c		庄内3期		4期		
					V期	X d			5期			
					Ⅵ期	X e						

設が存続期間を同じくする墳丘墓群と並び集団内部の紐帯を強めるだけでなく他地域との交流の場としても大規模集落の形成初期にあって重要な空間であったことを示唆する。一方、居住域からの出土状況を見ると、妻木新山地区へ集中している。妻木新山地区で外来系土器と把握できたものは、備後系の鉢1点を除き吉備系高坏であった。高坏のうち1点は確実に備中南部からの搬入土器で、他は胎土から判別はできないが吉備北部からの搬入土器の可能性が高い。洞ノ原地区の搬入・模倣土器のあり方も含め、集落形成期から中国山地を介した人の動きが活発であったことがうかがえる。

後期中葉になると妻木山地区に外来系土器が集中する傾向が認められる。多くが吉備北部地域と総括でき、備後地域の鉢が引き続き出土することが特徴である。墳墓供献土器としては、仙谷3号墓で吉備地域の直口壺が出土している。同器種は後期中葉以降出現し、間もなく墳墓供献土器として持ち込まれており、山陰地域でも出雲市青木遺跡1号墓・山持遺跡で類例が出土している。

後期後葉は、集落構造の変化に合わせて外来系土器の出土分布にも変化が見られる。最大の違いは、松尾頭地区に外来系土器が集中する点である。この時期の中心的な居住域は松尾頭地区と妻木山地区だが、両地区の相違点は外来系物資の保有状況にある。特に松尾頭3～6区は板状・棒状の非製品や鉄片といった鉄器製作に関連する遺物が多数出土し、鍛冶工房と目される竪穴住居跡(3区SI39・53・98)も検出され、当該期の集落内鉄器生産の中核的なエリアと想定される(高尾2015)。さらに、同地区の鍛冶工房が含まれる居住単位を中心にガラス玉が集中する状況も併せて認められる。こうした希少物資の集約と連動して外来系土器が分布する状況は、人の動きを示す現象と捉えられるだろう。同じ松尾頭地区でも後に墓域となる1区や、後期後葉以降に居住域として拡充される旧小真石清水地区では外来形土器が出土しない。外来形土器が生産や交流の中核を担う居住単位に集合する傾向が明らかだ。同地区で出土した外来系土器の内実をみると、吉備北部地域のうち東側の美作北部からの搬入土器や近畿北部～北陸地域の模倣土器が多く、外来形土器の構成にも変化が生じている。

終末期前半は、墳丘墓に外来系土器が供献されている。仙谷4号墓出土壺は周防西部等瀬戸内系壺



第 101 図 妻木晩田遺跡における外来系土器の分布

の模倣土器で、同じ地域の特徴をもつとされた壺が洞ノ原地区 SI08 で出土しているものの、妻木晩田遺跡における外来系土器としてはやや異質な存在である。それに対して松尾頭3号墓には吉備地域の壺の文様や一部形態を在地土器に取り込むことで関係性を表出させた模倣土器が供献され、マウンド状地形 A の周溝では備中南部の小型特殊壺も出土しており、同時期に形成された異なる墓域に出自の異なる土器がもたらされている。山陰地域の墓域から出土した備中南部地域の特殊器台・特殊壺には、彼地で使用されていた土器群のサイズ・文様さらには胎土などの意図的な転換が図られていた可能性があり、同じ供献であっても近畿北部～北陸系土器がサイズ、文様構成、胎土からみて山陰地域で製作された模倣土器を主体とする点で製作地や流入の様相が異なると指摘されている（重松 2007）。同様の状況が妻木晩田遺跡の墳丘墓供献土器としても確認でき、墳丘墓ごと、あるいは墓域ごとで差別化が図られていると考えられる。松尾頭3号墓出土壺は特殊壺ではなく、吉備南部地域の壺からやや変容した吉備北部地域の長頸壺がモデルと推察するが、後期以降の当地における吉備系土器の多くが長頸壺であり、彼地の有力首長との密接な関係の証を示す政治的な役割を担った可能性（松井 1997）を想定すれば、模倣の対象として扱われたとしても矛盾はない。妻木晩田遺跡を含む伯耆地域では、これまで墳丘墓供献土器を中心として吉備系土器が一定量出土している（第 102 図）。遺

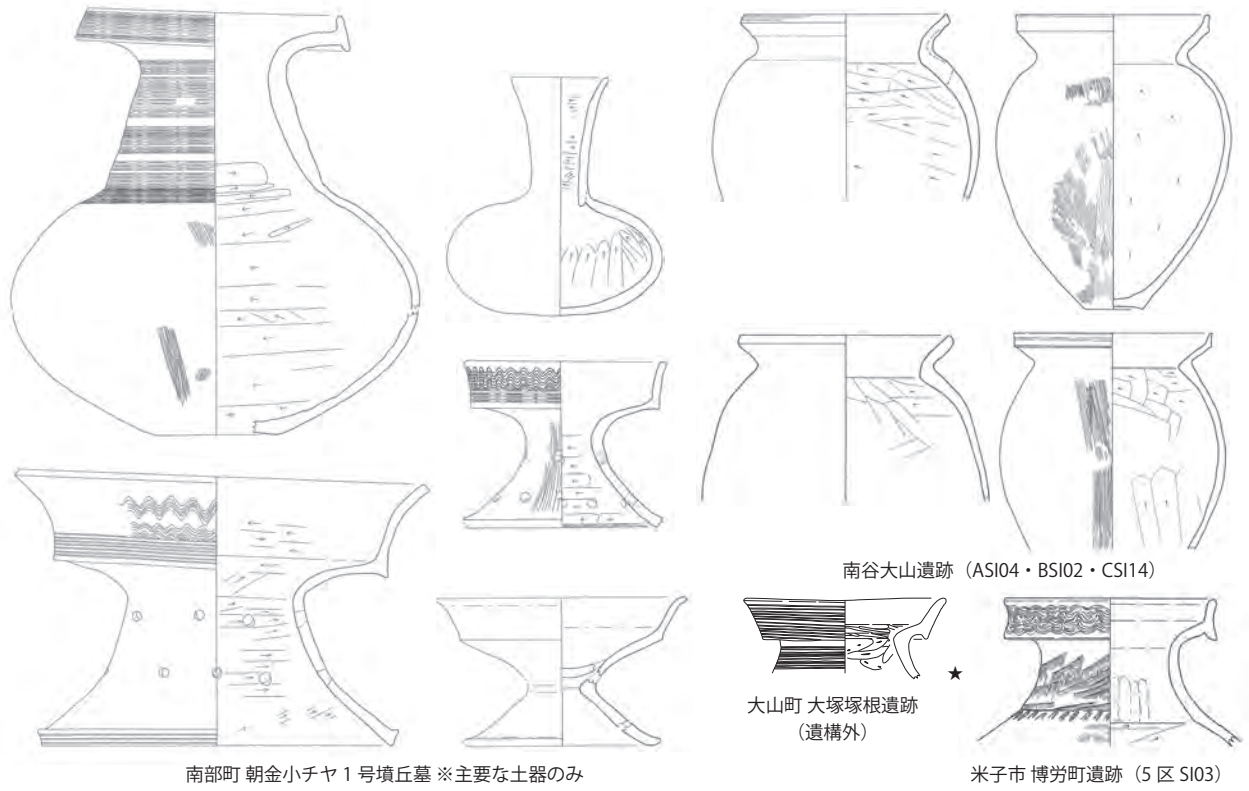
構外出土資料など必ずしも墳丘墓との関係を明確にできないものもあるが、朝金小チャ1号墳丘墓例のように特徴的な文様や器形の一部のみ在地土器に取り入れた変容が著しいものもあれば、彼地の墳丘墓供献土器と同サイズの搬入土器（矢戸鍵取免遺跡例、御内谷槇塔遺跡例）、小型サイズの搬入土器（田住桶川遺跡例）、サイズの小型化+胎土の変更を伴う搬入土器^{註11}（博労町遺跡例）などバリエーションが見られる。朝金小チャ1号墳丘墓例は「壺+器台」のセット関係を保持し、さらに大・中・小のサイズ分化も踏襲しておきながら、最終的には自らの葬送祭祀の様式へ取り込むことを重視している。首長の擁立基盤は彼地との交流にあるが、その受容のあり方は一様ではなかったことがうかがえる。また、これまで吉備南部地域で製作、搬入された大型壺と目されていた資料の一部には備後南部地域からの搬入土器と判断すべきものが存在し、大谷・後口谷1号墓出土例がそれに該当する^{註12}。

終末期後半は、外来系土器が松尾頭1・3～6区、妻木山2区の居住地で出土しており、墓域ではみられない。主体は吉備北部地域からの搬入土器であり、備後北部あるいは美作東～中部の可能性のある土器も見られる。古墳時代前期前葉のものとして手焙形土器が1点出土しているが、これは吉備地域との関係性の中で理解できる。小型器台あるいは小型高坏といった器種がわずかに見られるものの、当遺跡において布留系甕など畿内系土器の影響はまだ明確に認められない。

吉備北部地域は大部分が上東式土器分布圏にあったが、後期中葉以降、中国地方の広範囲に広がりを見せる山陰系土器の分布圏に入り、土器小様式の違いから安芸北部～石見地方の西方群、備後北部・備中北部の中央群、美作地方を中心とする東方群に大きく分かれる（高橋1992）。さらに備前・美作地方の山間部にあたる東方群においては、スタンプ文土器が盛行したり、遺跡ごとで差異はありながら美作中央～東部で近畿北部～畿内系土器が高い割合で流入したり、因幡を含めた東側諸地域との交流が継続的に認められ、特に終末期以降その傾向が顕著となる（高橋前掲、團2001）。妻木晩田遺跡における外来系土器の受容の変遷をみると、水系等地勢的に区分される小地域単位（備後北部地域、備中北部地域、美作地域）で濃淡はあるものの、包括的には吉備北部地域との繋がりを強くもつといえる（第103図）。集落出現期の後期前葉段階は備後北部から備中北部にかけての中央群と関わりが深く、備中南部地域からの人の動きも初期から認められる。その関係性は継続されるが、後期後葉を境により東側の地域である東方群との交流が強まり、近畿北部～北陸地域との関係も表出する。西部瀬戸内地域の模倣土器がみられるのも交流範囲の拡大を示唆するものといえようが、終末期後半以降は近畿北部～北陸地域とともに外来系土器から関係性はうかがえなくなる。

おわりに

以上、妻木晩田遺跡の外来系土器を抽出し、そこから妻木晩田集落をめぐる交流関係を読み解いてみた。在地土器の基本的な器種構成と変遷を基準に、形態や文様、胎土の諸特徴から外来系土器の可能性のある資料を抽出し、比較検討を行ったもので、そのすべてを網羅できてはいない。人の動きや情報の伝達をもっと複雑であり、今回の検討によって当時の集落間交流等を復元するまでには至らなかったが、およその傾向は把握することができた。弥生時代後期から古墳時代前期前葉にかけて継続的に営まれた集落は、鉄器等外来系物資を相対的に多数保有し、小地域の中核的な存在となる。その成立と展開の過程で、吉備地域－特に北部地域－との交流が継続的に行われていたことが明らかとなり、集団の紐帯を維持・形成するために重要な舞台となる墳丘墓の採用、造営に深く関わった可能性が想定された。吉備北部地域と包括的に呼称してはいるが、細かく見れば備後北部から美作東部を故

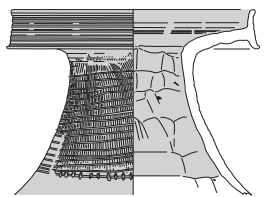


南部町 朝金小チャ1号墳丘墓 ※主要な土器のみ

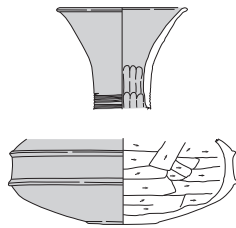
南谷大山遺跡 (ASI04・BSI02・CSI14)

大山町 大塚塚根遺跡 (遺構外)

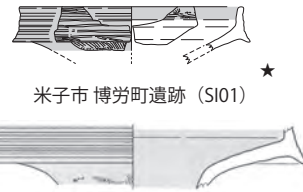
米子市 博労町遺跡 (5区 SI03)



大山町 加茂遺跡 (表採、出土地点不明) ★



南部町 田住桶川遺跡 (遺構外) ★

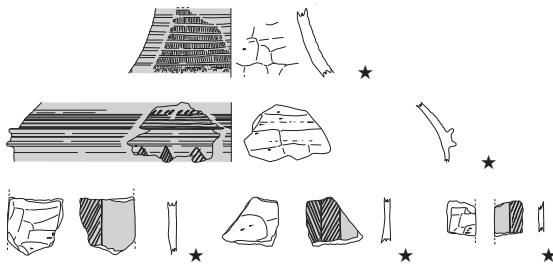
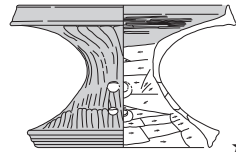


米子市 博労町遺跡 (SI01) ★

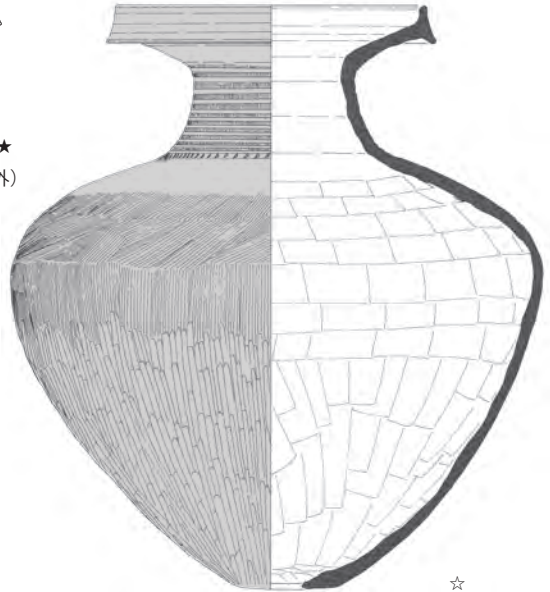
南部町 御内谷横塔遺跡 (遺構外)



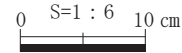
江府町 岩屋ヶ成遺跡 (遺構外) ☆



日南町 矢戸鍵取免遺跡 (墳丘墓) ★



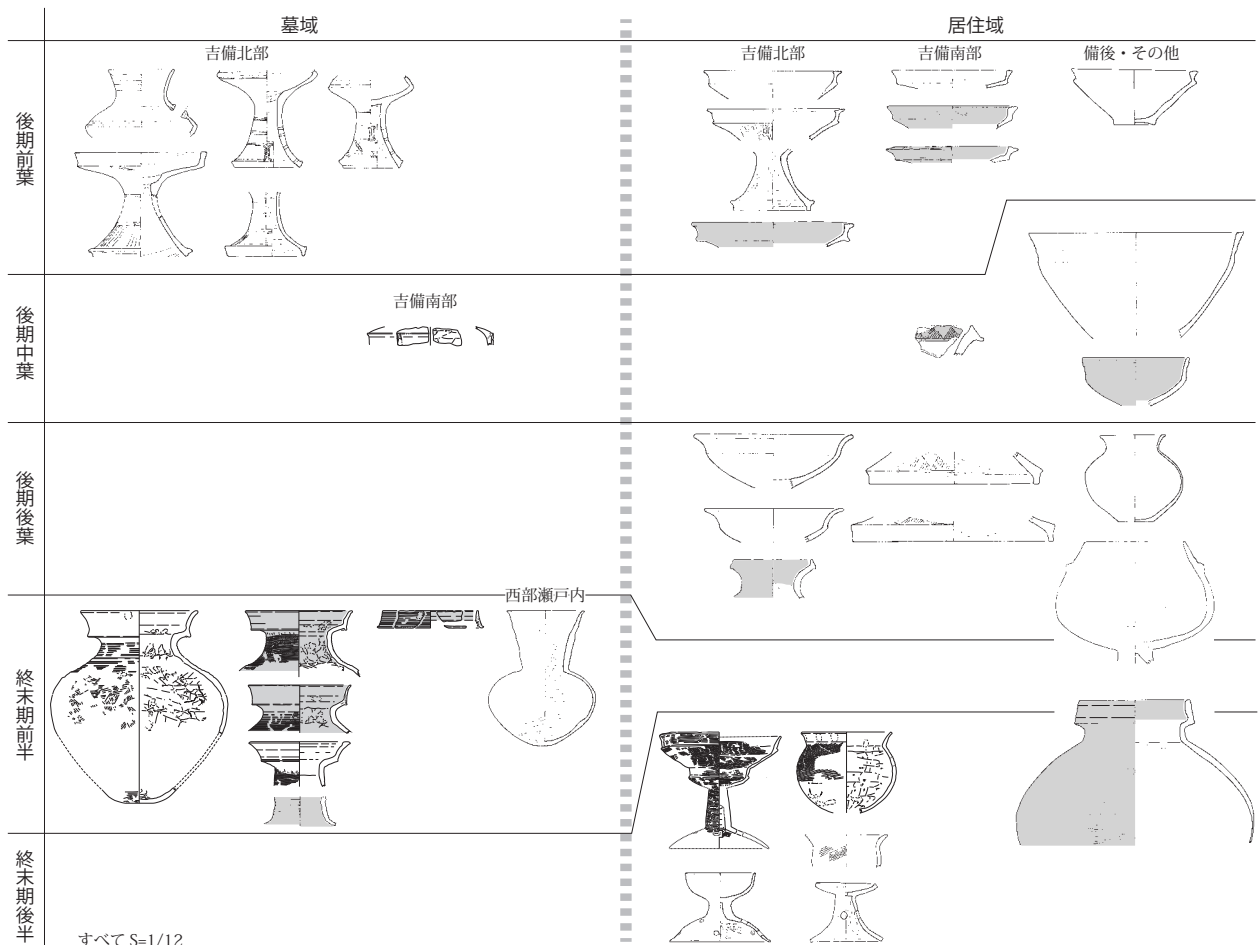
倉吉市 大谷・後口谷1号墓 ☆



★: 再実測して掲載 ☆: 一部改変 (赤彩範囲アミ掛け)
(田住桶川遺跡資料は再トレース)

財団法人鳥取県教育文化財団 1993 『南谷大山遺跡、南谷ヒジリ谷遺跡、南谷 22・24-28 号墳』
財団法人鳥取県教育文化財団 1994 『南谷大山遺跡Ⅱ、南谷 29 号墳』
財団法人鳥取県教育文化財団 1998 『御内谷遺跡群』
会見町教育委員会 1995 『朝金小チャ遺跡』
財団法人鳥取県教育文化財団 1986 『(佐川第1遺跡・第2遺跡、岩屋ヶ成遺跡、佐川古墳群の調査)』
財団法人鳥取県教育文化財団 1997 『朝金第2遺跡・田住桶川遺跡・田住第8遺跡』
大山町教育委員会 『大塚塚根遺跡』
日南町教育委員会 2010 『矢戸鍵取免遺跡』
倉吉市教育委員会 1986 『大谷・後口谷墳丘墓』
財団法人米子市教育文化事業団 2011 『博労町遺跡』

第102図 伯耆地域出土吉備系土器



第 103 図 主な外来系土器の受容と変遷

地とする土器が認められる。全体として見れば外来系土器の占める割合は決して高くはないものの、墳丘墓には主体が模倣土器とはいえ断続的に供献されており、消長はありながら関係が途切れることはなかったようだ。他方、外来系土器の出土地点を時期を追って概観すると、その動向は集落の動態と密接に関係している。器種別では壺が多く、高坏、鉢、器台が続くが、甕は終末期にごくわずか見られる程度という特徴が指摘できよう。墓制の面では、集落最盛期を迎える後期後葉を境に首長墓が四隅突出型墳丘墓から方形周溝墓に移行する。その背景については本章第1節に詳しいが、妻木晩田集落が日本海沿岸地域における外的資源を巡る交易の結節点、特に中国地方の南北間を結ぶルートにある「窓口」として重要な位置を占めていたものと考えられる。その交流は吉備南部地域まで及ぶもので、特殊壺を含む搬入土器や帰属時期が不明ながら弧帯文を線刻した砥石（妻木新山地区 SI70 出土）が出土していることもそれを示唆する^{註13}。妻木晩田集落が形成される弥生時代後期前葉は鉄など外的資源とその獲得に対する社会的欲求が高まり始めた時期であり、それが中国地方山間部の諸集落との結び付きを早くに確立し、集団の紐帯を強めるアイテムとしての墳丘墓導入、築造へ繋がることともに、関係性を継続させた要因ではなかろうか。

本稿をまとめるにあたり、岡山県教育庁の河合忍氏には当遺跡出土土器を観察しながら吉備地域の弥生土器の様相を詳細に御教示いただき、関連資料の収集や実見などにも御尽力いただいた。あらためて深く感謝を申し上げます。

なお、本稿の記載内容について解釈や事実の誤認があった場合、その責はすべて筆者にある。

註

- 註1 口縁部文様の分類及び名称は、(濱田 2003) の分類に基づいて表記する。
- 註2 西伯耆における大型器台について検討した松井潔氏の変遷案では、本節編年案のV-3(古)段階49及びV-3(新)段階67をVI-1段階に比定している。口縁部の拡張度や文様によって判断されていると推察するが、49は出土した妻木新山地区SI30で共伴する土器がV-3(古)であること、67は仙谷5号墓出土土器においてVI期まで下の資料はなく時期幅もV-3(新)の範疇でおさまること、口縁端部の拡張度を考慮しても続くVI期に発現するような外反を伴う拡張や無施文への流れが認められないことから、VI-1期には下らないと考えている。
- 註3 本稿では外来系土器の故地を検討するために旧令制下の備前、備中、美作、備後地域にあたる岡山県から広島県東部にかけての範囲を便宜上「吉備地域」と呼称する。また土器の出現・分布範囲によって故地が具体的に絞り込める可能性がある場合は、「備中南部地域」「備中北部地域」「美作地域」など具体名を付して表記する。
- 註4 ただ、松尾頭3号墓出土壺は1がベンガラを練り込んだ胎土、2・4が同様の粘土を表層部に練り込んだ可能性が指摘されており(第V章第6節参照)、土器の色調は橙色を呈するため、器面への朱(ベンガラ)の塗布とは別の手法により「赤彩」されたことになる。事実、2・4の破断面は器面付近を除き淡黄褐色を呈す。焼成後の土器の色調を橙色に発色させるために粘土に赤色風化土を添加する手法は吉備南部地域でも指摘されており(高橋 1992)、土器製作技法の一手法として情報が伝達された可能性を考慮しておきたい。
- 註5 河合忍氏に御教示いただいた。
- 註6 河合忍氏に御教示いただいた。
- 註7 第100図5は実見したところ外面の最下段多条沈線より下に縦位の沈線文が5条、同7は3条確認できたため、図に表現されていないが文様構成は同図6と同じと考えてよい。
- 註8 朝金小チャ1号墳丘墓出土台付壺が吉備地域脚付直口埴の影響を受けている可能性については松井潔氏が指摘している(松井 1997)。
- 註9 第100図14はあまり砂粒を含まず精製された粘土を用いており、坏部に別作りの脚部を差し込み接合した成形痕が認められるなど、吉備南部地域で想定された土器生産様式(河合 2013)を踏襲している可能性がある。
- 註10 河合忍氏に御教示いただいた。
- 註11 吉備南部地域の製作技法、形態を踏襲しているが、胎土が同地域のものではない。以上については、河合忍氏の御指摘による。模倣土器の範疇に含めるべきかもしれないが、胎土は在地土器とも明らかに異なるため、搬入土器として扱う。
- 註12 河合忍氏に御教示いただいた。この点については、尾崎氏の論考(尾崎 2017)でも触れられている。大谷・後口谷1号墓出土壺の類例としては、福山市神辺町御領遺跡第74次調査区出土壺が挙げられる。
神辺町教育委員会 2005『神辺町内遺跡発掘調査概要』神辺町埋蔵文化財調査報告第28集
- 註13 当遺跡から約3km西の天下畑遺跡で稚拙な弧帯文を施した短頸壺が出土しており注意される(松井 1997)。

参考文献

- 池淵俊一 1998「第3章第1節 弥生時代後期集落をめぐる諸問題」丹羽野裕・池淵俊一編『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡(門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』鳥根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所
- 石田為成 2019「第6章第3節 弥生時代後半期の土器について」渡邊恵理子・團奈歩編『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県埋蔵文化財調査研究報告249、岡山県教育委員会
- 伊藤実 1992「備後地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年-山陽・山陰編-』木耳社
- 伊藤実 2001「安芸の弥生土器Ⅰ」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第3集、広島県立歴史民俗資料館
- 大橋雅也 1992「器台形土器」近藤義郎編『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社
- 尾崎光伸 2017「備後南部の弥生土器編年について(1)-後期前葉から中葉古段階-」広島県立博物館編『広島県立博物館研究紀要』第19号
- 河合忍 2013「吉備南部弥生時代後期から終末期における土器生産について」『みずほ別冊 弥生研究の群像-七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念-』大和弥生文化の会
- 河合忍 2016「第9章第2節 美作東部の弥生時代から古墳時代初頭の集落について」氏平昭則編『大河内遺跡・及遺跡・小池谷遺跡・小池谷8号墳・小池谷B遺跡・上相遺跡・小中遺跡・小中古墳群・鍛冶屋盗遺跡・鍛冶屋盗古墳群』岡山県埋蔵文化財調査研究報告242、岡山県教育委員会
- 河合忍 2018「〈地域報告〉山陽東部」中国四国前方後円墳研究会編『前期古墳編年を再考する』六一書房
- 河合忍 2019「第6章第4節 備中南部における古墳時代前期から中期の土器編年」渡邊恵理子・團奈歩編『神明遺跡 刑部遺跡』岡山県埋蔵文化財調査研究報告249、岡山県教育委員会
- 近藤義郎編 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
- 重松辰治 2007「山陰地方における墳丘墓出土土器の検討」岩橋孝典編『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の検討』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター

- 鳥崎東 2016「吉備の手焙形土器」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 高尾浩司 2015「鉄器の流通・保有状況からみた山陰弥生集落」『古代文化』第67巻第1号、公益財団法人古代学協会
- 高田健一 2006『妻木晩田遺跡 甦る山陰弥生集落の大景観』株式会社同成社
- 高田健一 2013「山陰地方の弥生社会像」『吉備弥生社会の新実像・吉備弥生時代のマツリ・弥生墓が語る吉備』シンポジウム記録9、考古学研究会岡山例会委員会
- 高橋護 1980a「弥生土器－山陽2－」『考古学ジャーナル』No.175、ニューサイエンス社
- 高橋護 1980b「弥生土器－山陽3－」『考古学ジャーナル』No.179、ニューサイエンス社
- 高橋護 1980c「弥生土器－山陽4－」『考古学ジャーナル』No.181、ニューサイエンス社
- 高橋護 1992「弥生後期の地域性」近藤義郎編『吉備の考古学的研究(上)』山陽新聞社
- 田畑直彦 2012「付篇 周防西部・東部における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器編年」『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』山口大学埋蔵文化財資料館年報6
- 團正雄 2001「岡山県北部における庄内式並行期の土器様相」花園大学考古学研究室20周年記念論集編集委員会『花園大学考古学研究論叢』花園大学考古学研究室20周年記念論集編集発行会
- 中山俊紀 1981「第4章1 土器編年について」『大田十二社遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集、津山市教育委員会
- 濱田竜彦 2002「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原1号墓・2号墓出土土器の再検討を中心に－」濱田竜彦編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2001』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2003「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」濱田竜彦編『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
- 濱田竜彦 2009「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 濱田竜彦 2016「西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会
- 平井泰男 2016「外来系土器と地域間交流」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター編『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 藤田憲司 1979「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』第64巻第4号、日本考古学会
- 真木大空 2017「弥生時代中四国地方における注口付きの脚台付鉢形土器」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第9号
- 松井潔 1997「東の土器、南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態－」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会
- 松井潔 2007「西伯耆における大型器台の変遷と画期」君嶋俊行編『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2006』鳥取県教育委員会
- 松本哲ほか 2000「第4章第1節 土器の分類と編年」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 渡邊誠 2009「古墳時代開始期前後における土器編年研究～山陰地域を素材として～」『鳥根考古学会誌』第26集、鳥根考古学会
- 報告書**
- 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ』
- 淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』
- 岡山県教育委員会 1976『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11
- 岡山県教育委員会 1976『川入・上東 都市計画道路(富本町・三田線)に伴う埋蔵文化財発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
- 岡山県教育委員会 1977『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査10』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20
- 岡山県教育委員会 1999『且山遺跡・惣台遺跡・野辺張遺跡・先且山遺跡・且山古墳群・奥田古墳・水神ヶ嶺遺跡 岡山県北流通センター建設に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告136
- 岡山県教育委員会 2003『小坂向城山城跡 ヒログン・小坂向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告176
- 神辺町教育委員会 1988『神辺町埋蔵文化財調査報告Ⅷ 大宮遺跡発掘調査概報 御領遺跡発掘調査概報』

〈第95～98図 編年掲載土器出土遺構等〉

- 第95・96図** 1・3・4・5・9：妻木新山SI51、2・6：妻木新山SI44、7：妻木山SI174④層、8：松尾頭SK106、10・12・13・15：妻木新山SK132、11・16：松尾頭SI11、14・19：妻木新山SI78、17：妻木山SI152、18：松尾頭SI06b、20：松尾頭SD36、21・24・25：松尾頭SI14、22・23・26：妻木新山SI58、27：松尾頭SS33、28・30・32：松尾頭SK71、29・31：松尾頭SI52、33：妻木新山SI57、34：仙谷2号墓北西側加工段、35：仙谷3号墓第2埋葬施設、36：妻木新山SS01、37・38：妻木山SI81、39：洞ノ原西側環濠、40～42：妻木山SI176、43・49：妻木新山SI30、44：妻木山SI174①層、45：妻木山SI125、46・48：仙谷5号墓南東側周溝、47：仙谷2号墓北西側加工段、50：妻木山SI90、51・55～58・60：妻木山SI166、52～54・59・66・69：妻木山SI117、61・67：仙谷5号墓南東側周溝、62：妻木山SI106、63・70：妻木山SS16、64：松尾頭SI39、65：松尾頭SK91、68：洞ノ原環壕T1・J層土器溜まり〔実測図出典〕7・39～41・43・51・55～58・60：鳥取県教育委員会2006a、27：鳥取県教育委員会2008、38：淀江町教育委員会2000、68：鳥取県教育委員会2003、それ以外：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000
- 第97・98図** 1・9：松尾頭SI53埋土中層、2・7：妻木山SI93、3・4・11：妻木山SI04、5・6：洞ノ原SI07、8：仙谷4号墓埋葬施設周辺、10：妻木山SI45、12・18：妻木山SI73、13：妻木新山SI72、14～17：妻木山SI172、19：松尾頭SI92、20：松尾頭SI33、21・23・25・30・31：妻木山SK17、22・24：妻木新山SI69、26：松尾頭SI86、27：松尾頭SK121、28：妻木山SI13、29：妻木山SK114、32・34～38・40・42・44～46：松尾頭SI36、33・39・41・49：妻木山SI53、43・48・50：妻木山SI97、47：松尾頭SI91〔実測図出典〕1・9：鳥取県教育委員会2008、14～17：鳥取県教育委員会2006a、それ以外：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000

〈第99・100図 実測図出典〉

- 第99図1～6：本書、第99図7～9・13・14・19、第100図12・13・18～29・31～33：大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000、第99図10～12・21：鳥取県教育委員会2008、第99図15～18・20・22・23：鳥取県教育委員会2011、第100図1～8・11・15：淀江町教育委員会2000、第100図9・10・16・17：鳥取県教育委員会2003、第100図30：鳥取県教育委員会2006a 以上のうち、第99図8・第100図23・31は再実測・トレースして掲載、第99図12・13・18・21・23及び第100図17・21・28は赤彩範囲を付記して掲載。

※文献の詳細は、本書14ページの妻木晩田遺跡発掘調査関係文献を参照。

第3節 まとめ

平成22年度から平成30年度まで実施した8か年にわたる発掘調査では、発掘調査長期計画第Ⅱ期「墳墓域の実態解明」を目的として仙谷墳丘墓群及び松尾頭墳丘墓群の重点確認調査を中心とした発掘調査を行った結果、設定した課題・目標について、成果を上げることができた。

仙谷墳丘墓群の調査では、墓域範囲の確認と新発見の仙谷8・9号墓の時期及び内容を明らかにすることを課題として調査を行い、妻木晩田集落の終焉期にあたる古墳時代前期前葉の墳丘墓であることが明らかとなった。集落が終焉を迎える古墳時代前期前葉にあって、台状墓という伝統的な要素を持ちながら、最大規模の墳丘墓や円形という新しい墳形、石棺を採用することは、集落の変動と併せて大きな変化であったと考えられる。

松尾頭墳丘墓群の調査では、墳丘墓の内容及び時期、墳丘墓群築造以前から含めた土地利用状況を明らかにすることを課題として調査を行い、弥生時代後期に居住域として使用された土地が終末期前半に墓域に変化すること、新発見の墳丘墓群が従来知られていた松尾頭1・2号墓に先行する終末期前半の方形周溝墓であることが明らかとなった。松尾頭墳丘墓群の方形周溝墓は周溝の隅が陸橋状に途切れる形態をとり、墳丘の形態的特徴が鮮明になった。松尾頭3号墓には少なくとも3基の埋葬施設が存在し、墳丘築造方法と合わせて墳丘墓の構造を解明することができた。吉備北部地域の土器を模倣した土器も出土し、他地域との交流を考えるうえで重要である。松尾頭10区の調査は、史跡未指定地を含めた範囲で発掘調査を行ったため、指定地外への遺跡の広がりを確認することができた。

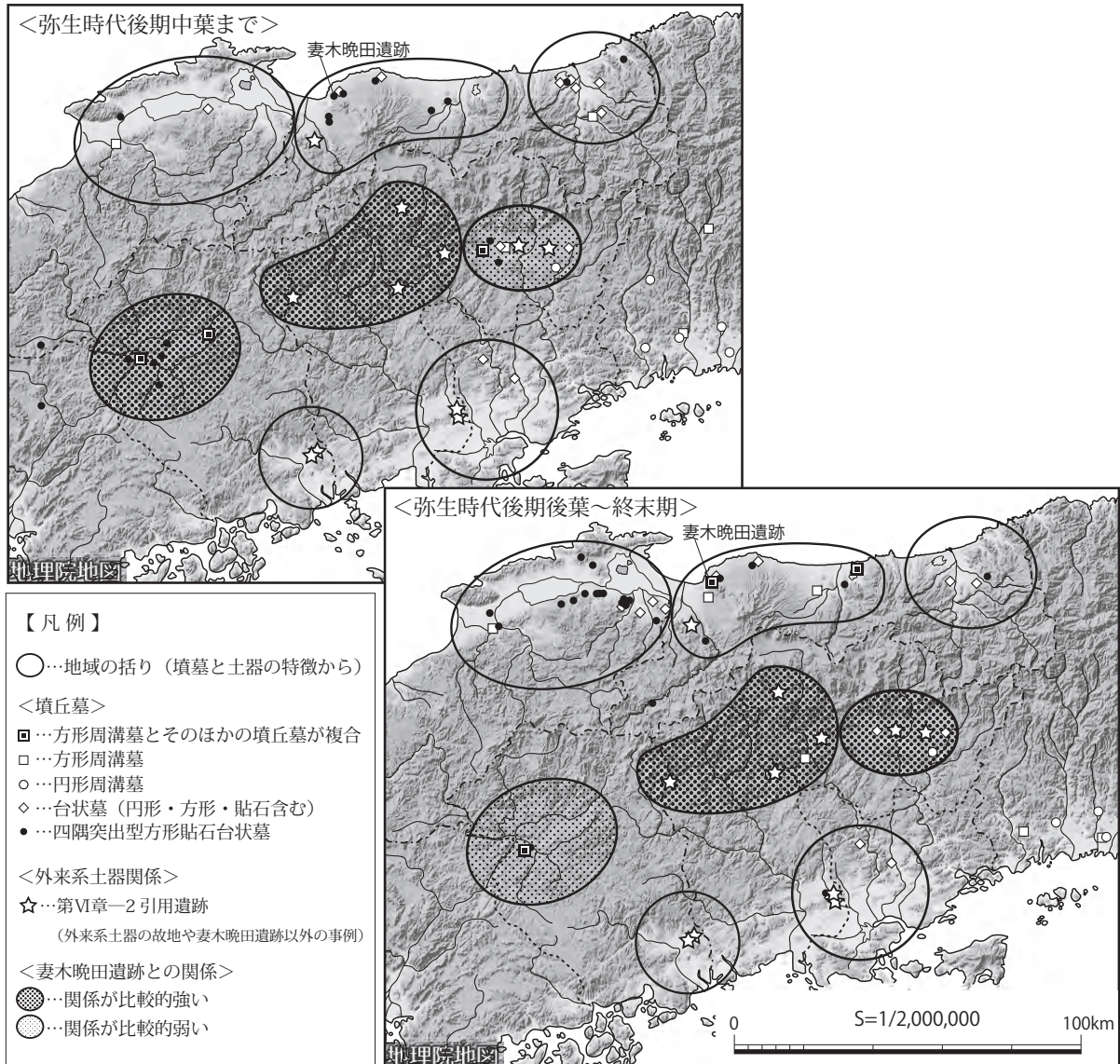
これらの成果によって、妻木晩田遺跡に居住した人々が集落を拡大させる弥生時代後期前葉から集落が衰退する古墳時代前期前葉までの墳丘墓の変遷を把握することができた。また、松尾頭3号墓で外来系の要素を持つ土器が出土したことを契機に妻木晩田遺跡や伯耆地域を中心とした外来系土器の整理を行ったことにより、集落存続期間を通じた吉備地域との交流が見えてきた。

改めて妻木晩田遺跡における墳丘墓及び集落の変遷や外来系土器の動向を概観すると、弥生時代後期後葉に一つの画期が見えてくる(第104図)。妻木晩田の丘陵への居住が始まり、居住域が拡大する後期前葉～中葉までの段階では、出現初期に近い四隅突出型墳丘墓の採用や外来系土器の出土状況から吉備北部地域の中でも西側の備後北部や備中北部との関係がうかがえる。集落が最盛期を迎える後期後葉から終末期にかけてはより東へと交流の重心が移り、備中北部や美作地域との交流が強まったように見受けられる。墳丘墓の形態は出雲地域の四隅突出型墳丘墓や因幡地域の台状墓系の墳丘墓とは異なる方形周溝墓が採用され、それまで重要施設であった洞ノ原地区の環壕が廃絶して居住域へと変化し、松尾頭地区には首長の建物とみられる大型建物が出現して鉄器や玉関連遺物が集まる。外部との交流が変化し、ムラの墳墓や集落構造も変容していく様子が明らかとなってきた。

明らかにできたことがある一方で、新たに生まれた課題も多い。墳丘墓に関しては、第一に妻木晩田に居住が始まった中期後葉の時期の墓域が不明であること、第二に全時期を通して墳丘を持たない集団墓の所在が不明であること、第三に集落最盛期である後期後葉の墳丘墓が同時期の山陰地域の中で比較すると小規模なものしかなく、集落の規模や外来物質の集約状況からすれば未発見の中型・大型の墳丘墓が存在する可能性があることが挙げられる。また、集落との動向と関連して、終末期には仙谷墳丘墓群と松尾頭墳丘墓群が造営されていたが、それぞれの墳丘墓群が同一系統か別系統なのか、あるいは終末期の段階で分裂したのか、さらには、長尾が前報告書で指摘したように集落が丘陵上から消滅する段階

で集団が分裂したのか、墳丘墓群と集落の動向の関連性や周辺遺跡の動態と併せて明らかにする必要がある。また、外来系土器から他地域との交流が明らかになってきたが、今回全ての土器について検討できたわけではなく、土器以外の遺物を含めて今後も様々な視点で再整理・再検討が必要である。

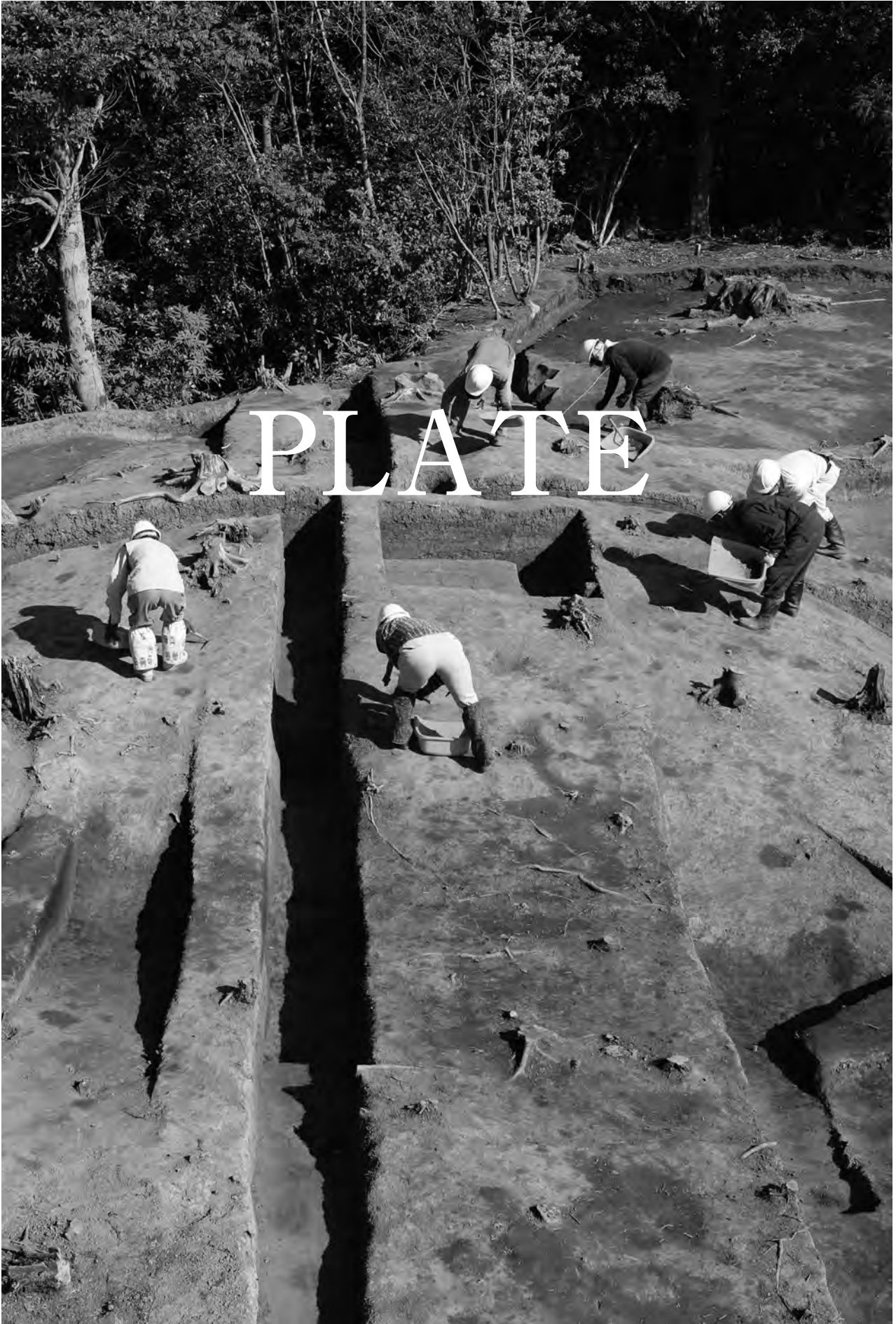
今期の調査課題は達成できたが、新たな課題については今後も調査の継続によって解明する。既に発掘調査計画は第Ⅲ期に移行しているが、例えばその次の段階として、未調査の妻木新山地区北側丘陵など、再踏査や新たな内容確認調査なども検討しなければならない。今後も発掘調査の計画的な実施と見直しを進めながら、弥生時代の代表的な集落遺跡である妻木晩田遺跡の全体像を解明していくことにより、弥生時代の集落像・社会構造を明らかにしていきたい。



第 104 図 妻木晩田遺跡からみた地域間交流概念図

第 24 表 松尾頭 10 区遺構一覧表（墳丘墓及びピットを除く）

遺構名	検出面	検出面標高	平面形	規模 (m) (長軸×短軸×深さ)	出土遺物	時期
3301 落ち込み	第2層下面	115.5 m	不整形	1.2 × 1.0 × -	弥生 土器	弥生時代後期後葉頃
3401 遺構	第2層下面	115.5 m	不整形楕円	2.38 × 0.9 × -	未調査	不明
3402 遺構	第2層下面	115.5 m	溝状	7.7 以上 × 1.25 × -	未調査	不明
3403 遺構	第3層下面	114.3m	隅丸長方形	1.08 × 0.78 × 0.85	弥生土器	弥生時代後期前葉以降
3404 遺構	第3層下面	113.2m	不整形	1.89 × 0.58 × 0.2	なし	不明
3405 遺構	第3層下面	114.6m	溝状	8.85 × 0.56 × 0.17	弥生土器	弥生時代後期
3406 遺構	第3層下面	114.9m	土坑状	4.4 × 2.0 × 0.26	なし	弥生時代中期後葉～後期前葉頃
3407 遺構	第3層下面	114.3 m	不明	約 4 × - × 0.50	弥生土器	弥生時代後期前葉頃





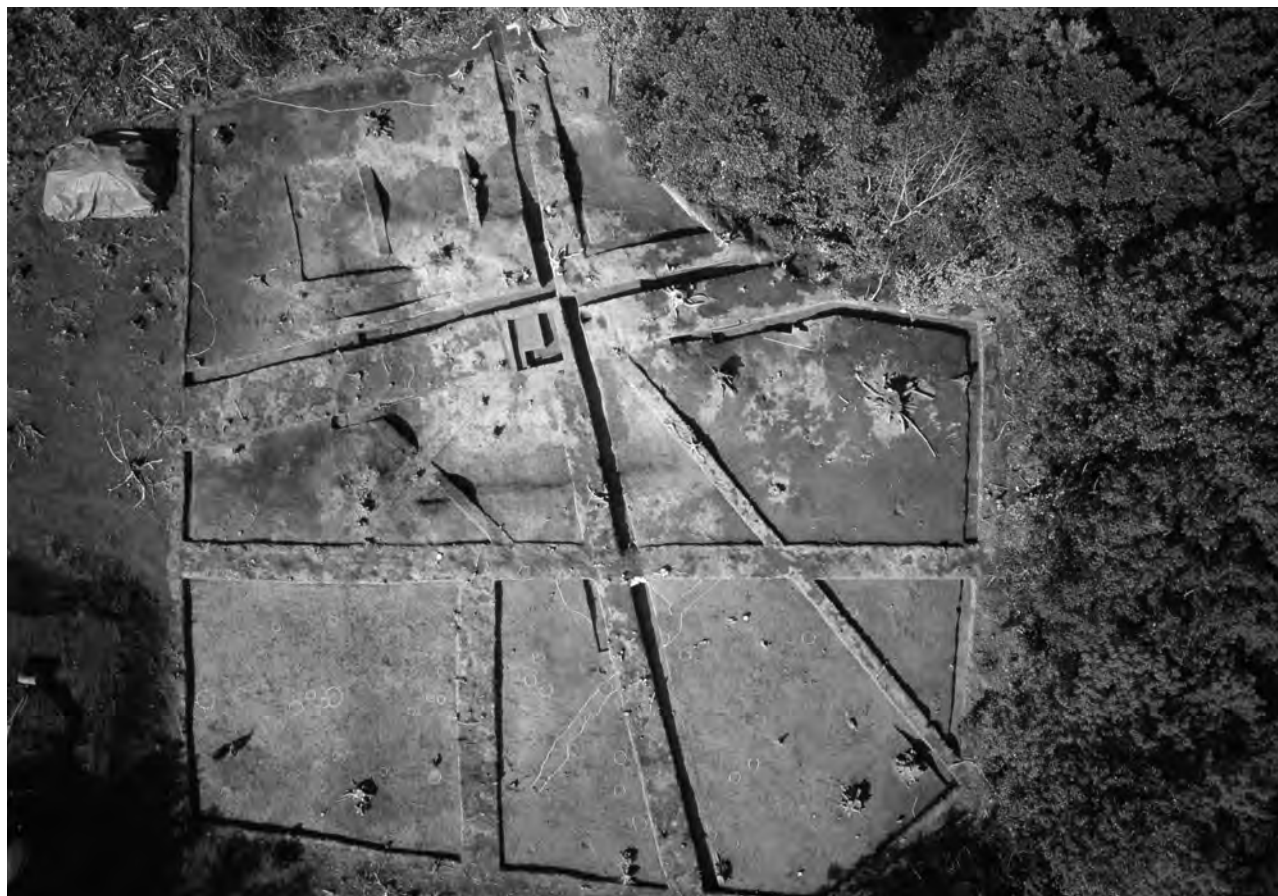
1 松尾頭地区全景 北西から



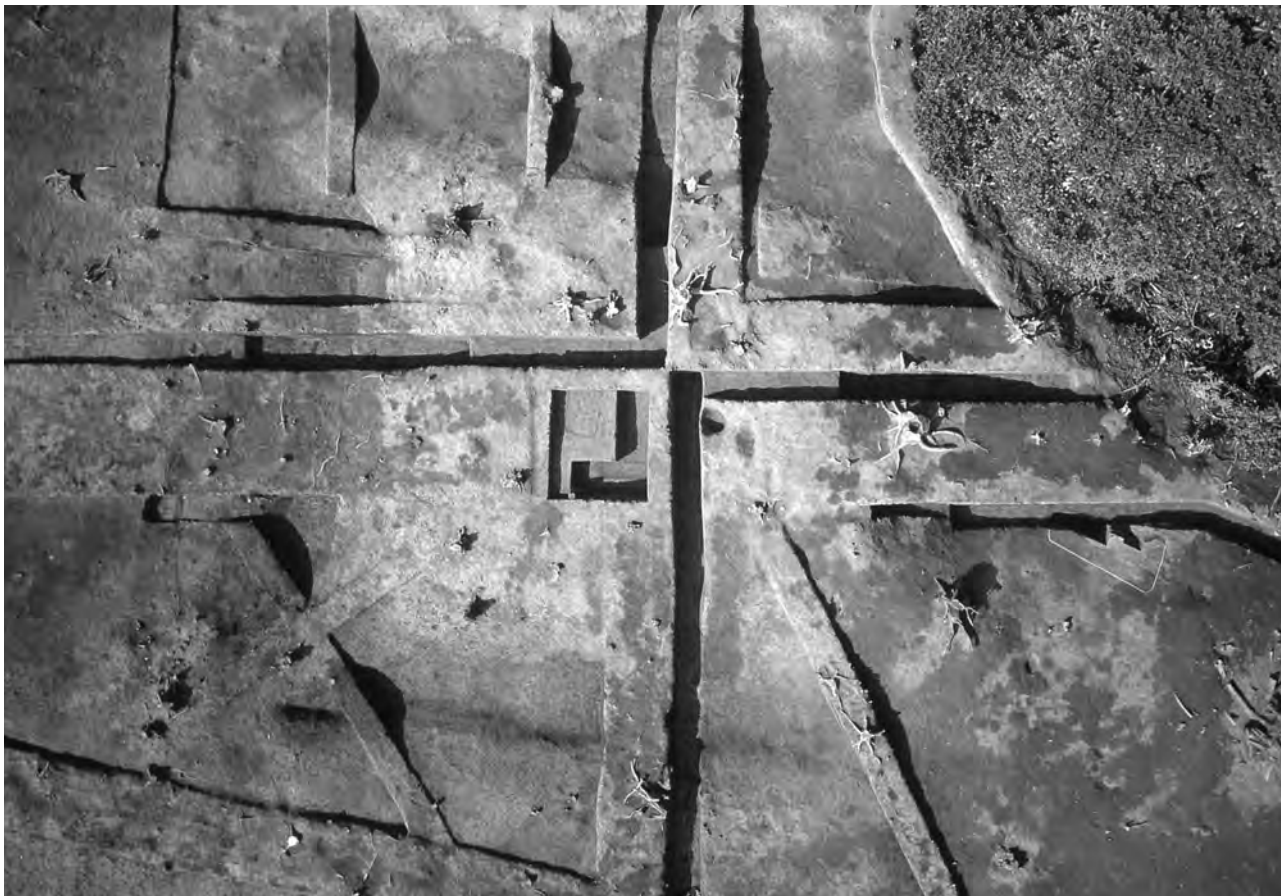
2 松尾頭墳丘墓群遠景 北東から



1 松尾頭3号墓・4号墓・5号墓 俯瞰（上が北西）



2 松尾頭10区北東部 調査区全景 俯瞰（上が北西）



1 松尾頭3号墓 調査終了後全景 俯瞰（上が北西）



2 松尾頭4号墓・5号墓 調査終了後全景 俯瞰（上が北西）

PL.4 松尾頭3号墓



1 調査前状況 南から



2 周溝検出状況 東南から



3 周溝完掘削状況
東南から

- 1 周溝埋土から墳丘の層序
(東側周溝から墳丘)
東から



- 2 南側周溝 土層断面
西から



- 3 北側周溝 土層断面
東から



PL.6 松尾頭3号墓



1 西側周溝 土層断面
南西から



2 東側周溝 土層断面
北東から



3 南東側陸橋部検出状況
北から



1 北東側陸橋部検出状況
南西から



2 北西側陸橋部検出状況
南から



3 南西側陸橋部検出状況
北東から



1 西側周溝遺物出土状況①
(周溝埋土1層下面)
北から



2 西側周溝遺物出土状況②
(周溝埋土2層中)
俯瞰(上が北東)



3 西側周溝遺物出土状況③
(周溝埋土2層下面)
俯瞰(上が北東)

- 1 西側周溝遺物出土状況④
(周溝埋土3層下面、
周溝底面直上)
西から



- 2 北側周溝遺物出土状況
北東から



- 3 東側周溝鉄鏃出土状況
南から





1 墳頂部遺物出土状況①
(第33次調査時点)
北から



2 墳頂部遺物出土状況②
(第34次調査時点)
北東から



3 墳頂部トレンチ調査前
(17土坑完掘) 状況
北東から



1 調査終了後全景① 南西から



2 埋葬施設検出状況 南東から



1 調査終了後 全景②
南から



2 第1埋葬施設検出状況
北東から



3 第3埋葬施設検出状況
北西から

1 墳頂部南東トレンチ
西側断面 (G-G')
南東から



2 墳頂部南東トレンチ
北側断面 (H-H')
南西から



3 周溝から墳丘中央の層序
東側断面 東から





1 墳頂部東側トレンチ
南側土層断面 (D-D')
北東から



2 墳頂部西側トレンチ
北側土層断面 (D-D')
南西から



3 墳頂部トレンチ断面
断面交点西 西から

1 墳頂部北側トレンチ
西側土層断面 (E-E')
南東から



2 墳頂部南側トレンチ
東側断面 (E-E')
南西から



3 墳頂部トレンチ断面
断面交点東 東から





1 松尾頭 10 区南西部 調査前状況 東から



2 松尾頭 10 区南西部 調査終了状況 東から

1 トレンチ2調査前状況
南から



2 トレンチ2表土除去状況
東から



3 周溝及び墳丘検出状況
東から





1 周溝及び墳丘検出状況
南から



2 松尾頭4号墓
周溝内遺物出土状況
北東から



3 松尾頭5号墓
周溝内遺物出土状況
北東から

- 1 確認用サブトレンチ
土層断面全体
南東から

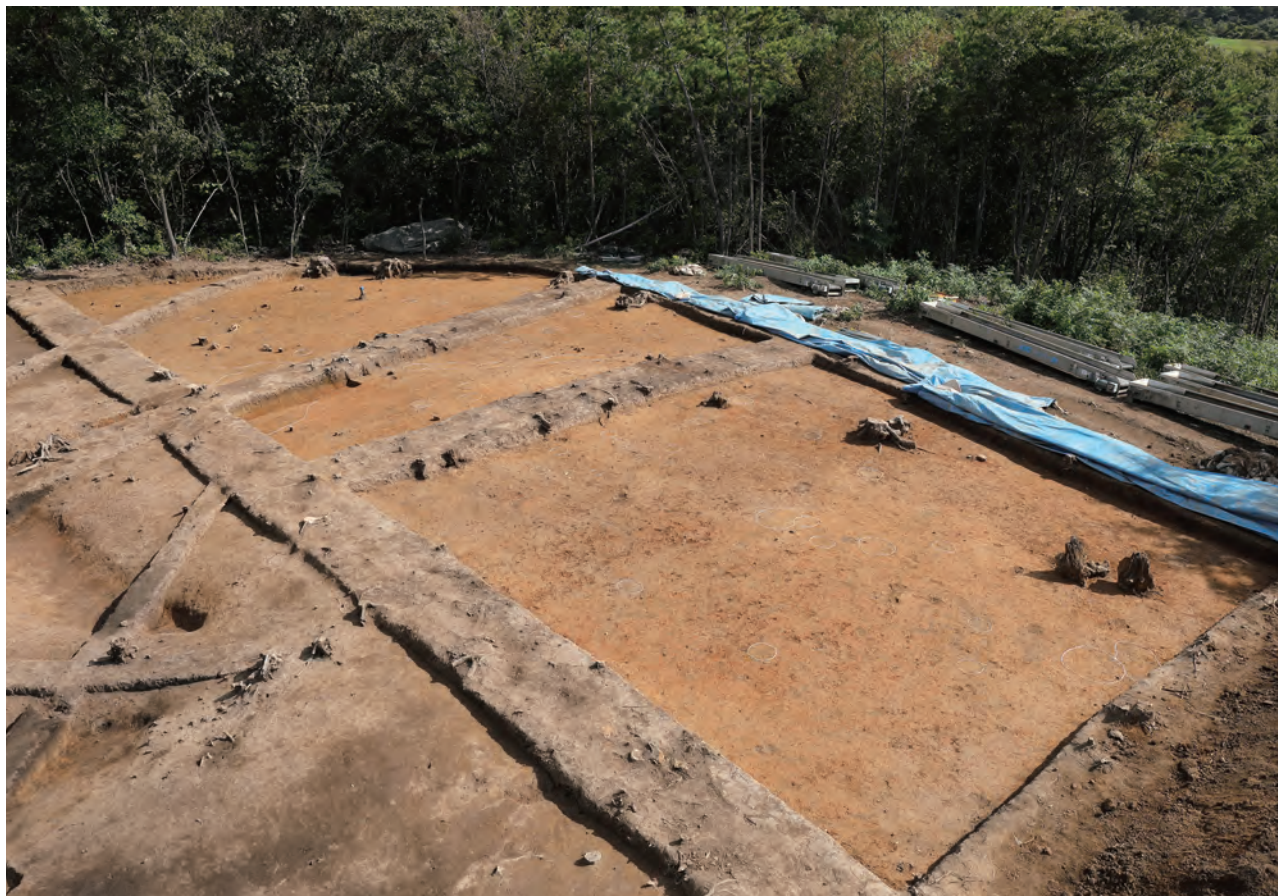


- 2 確認用サブトレンチ
土層断面（4号墓側）
南東から



- 3 確認用サブトレンチ
土層断面（5号墓側）
東から





1 松尾頭 10 区北東部 調査区東側調査終了（遺構検出）状況 西から



2 松尾頭 10 区北東部 調査区東側調査終了（遺構検出）状況 南東から



1 基本層序断面 A - A'
南西から



2 基本層序断面 A'' - A'''
南東から



3 基本層序断面 C' - C''
東から



1 基本層序断面 B - B'
南から



2 3404 遺構検出状況
南西から



3 3407 遺構土層断面
南西から

1 3403 遺構検出状況
俯瞰（上が南東）

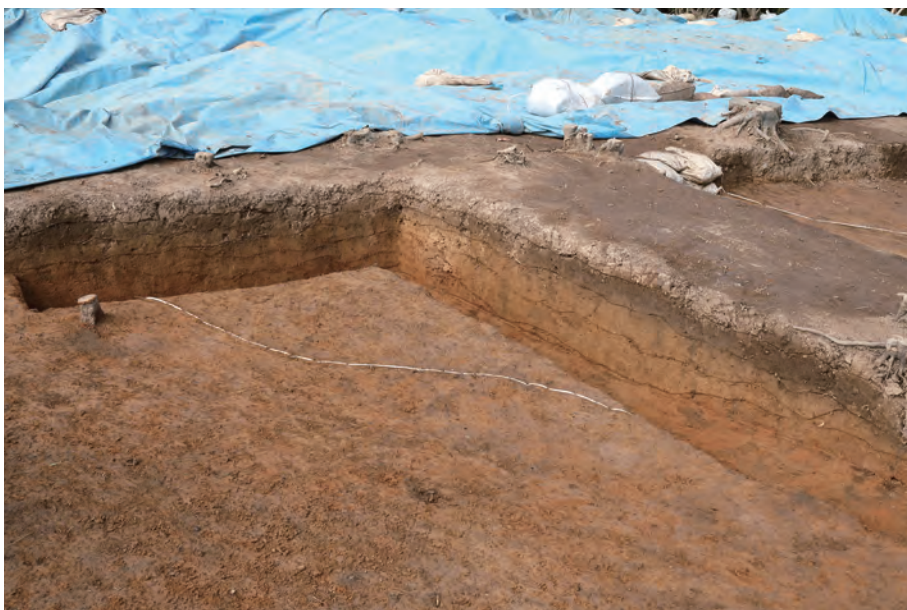


2 3403 遺構調査終了状況
南西から



3 3403 遺構 土層断面
西から





1 3406 遺構調査終了状況
南から



2 3406 遺構
確認用サブトレンチ
西側土層断面 (A - A')
南東から



3 3406 遺構
確認用サブトレンチ
北側土層断面 (B - B')
南西から



1 松尾頭 10 区北東部 調査区東側遺構検出状況 俯瞰（上が北西）



2 P 1 土層断面 南東から



3 P 2 土層断面 南東から



4 P 3 土層断面 南東から



5 P 4 土層断面 南東から

PL.26 マウンド状地形 E



1 マウンド状地形 E
調査前状況 北東から



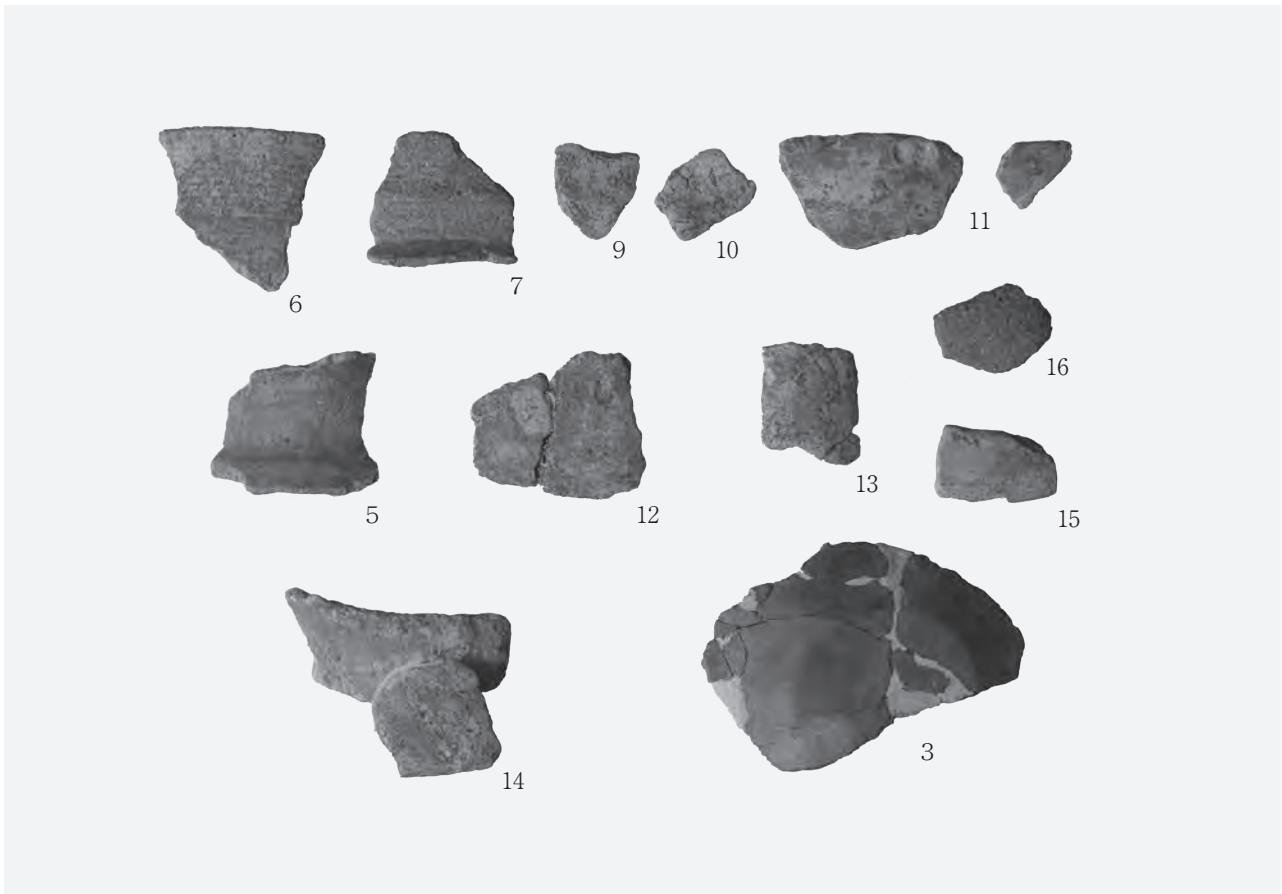
2 マウンド状地形 E
塹壕部清掃状況
北東から



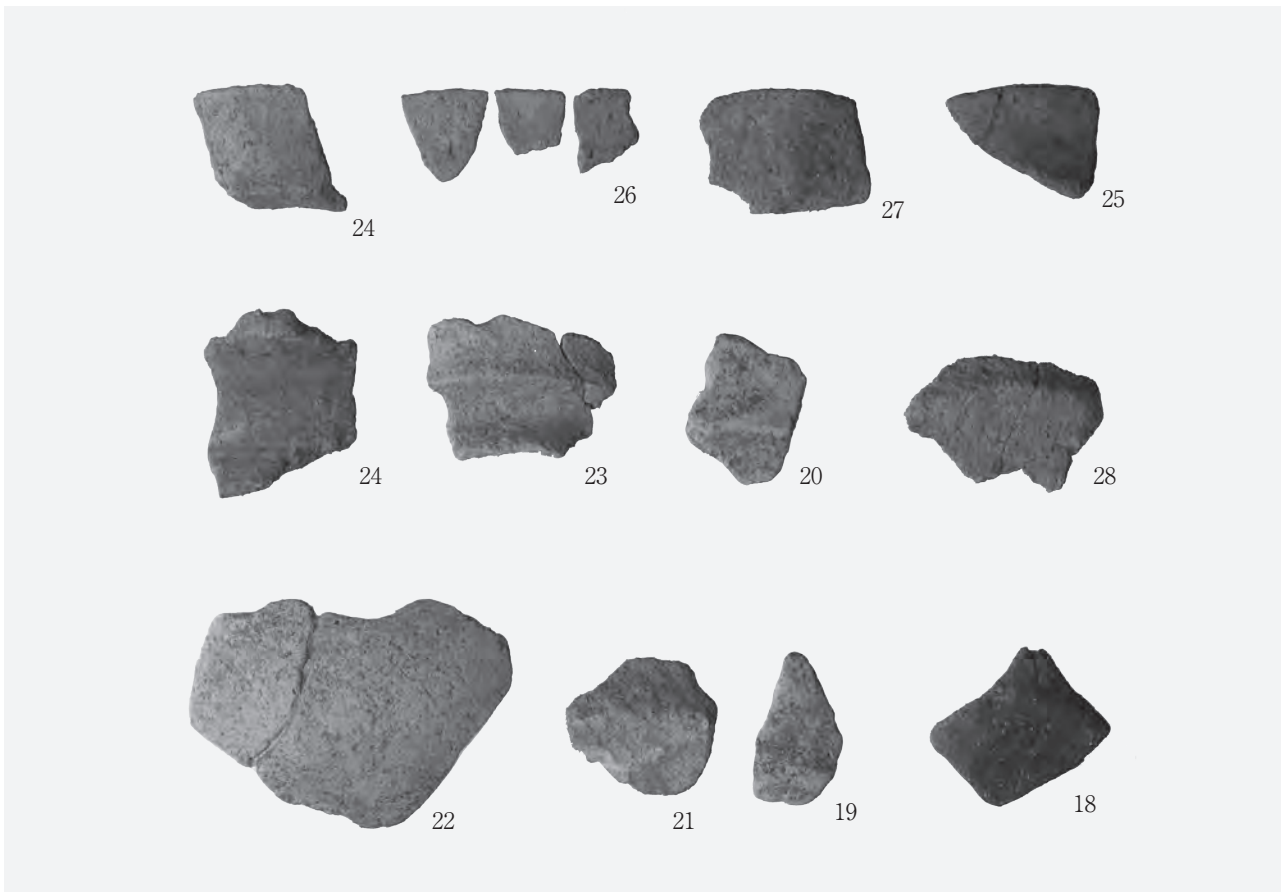
3 トレンチ 1
南側土層断面 北から



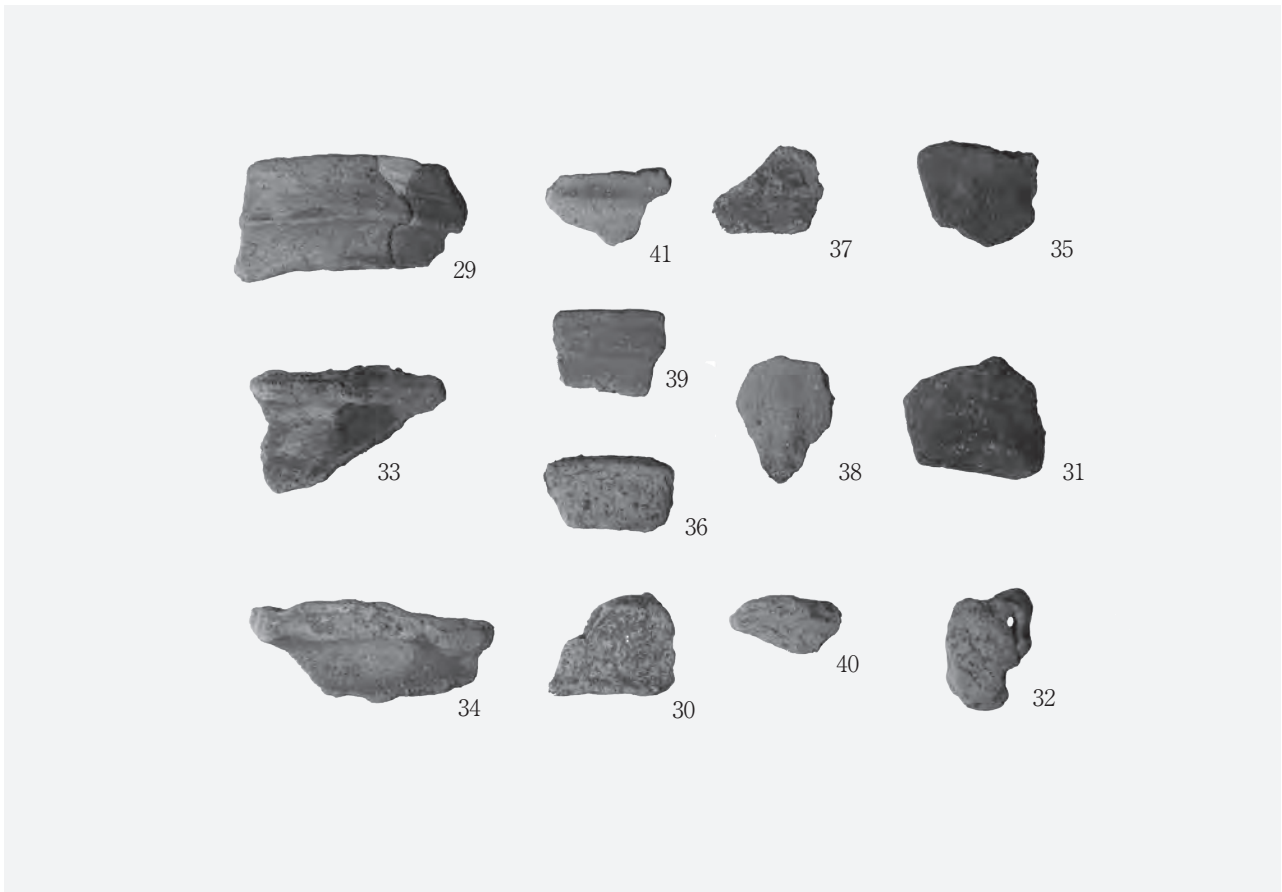
1 松尾頭3号墓 西側周溝・北側周溝出土遺物



1 松尾頭3号墓 西側周溝出土遺物



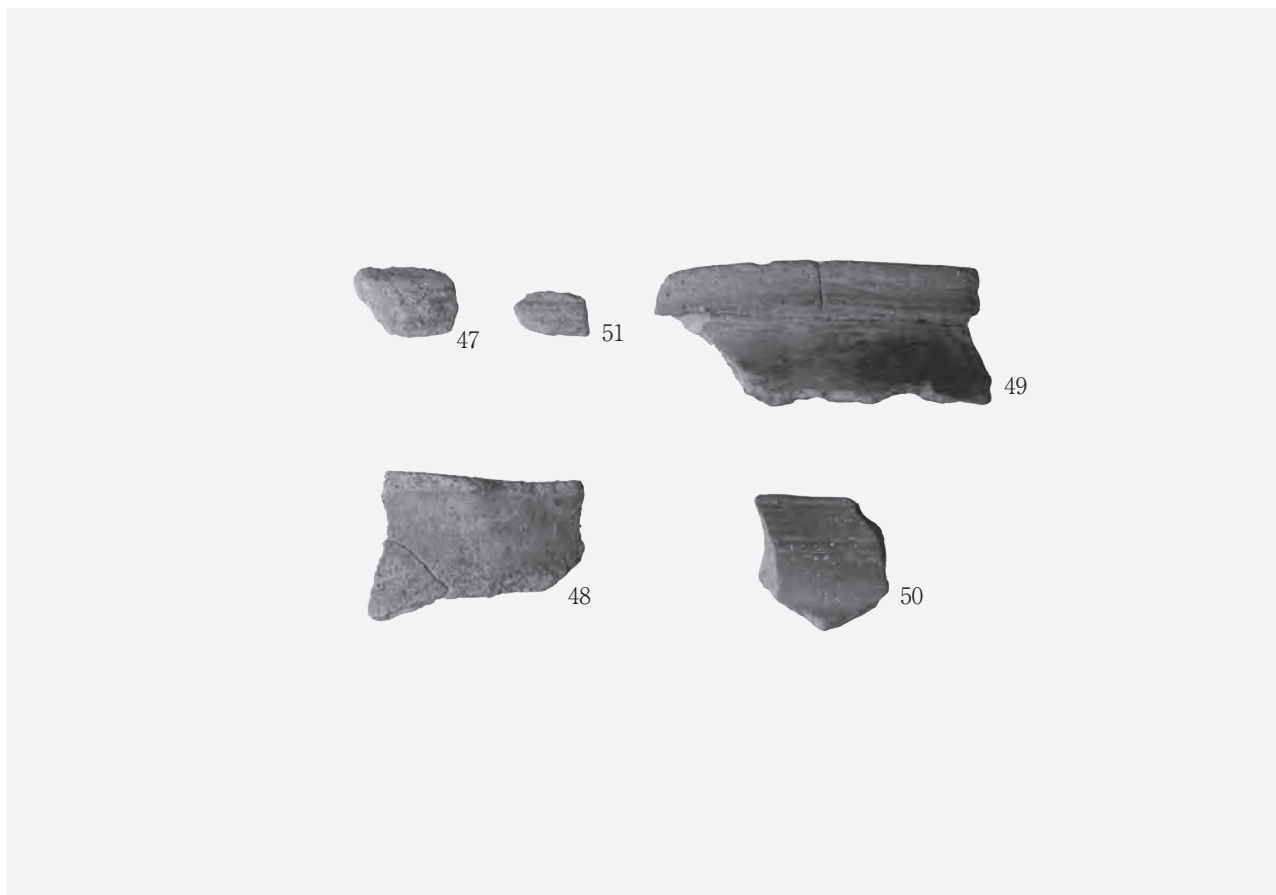
2 松尾頭3号墓 墳頂部・北側周溝・南側周溝出土遺物



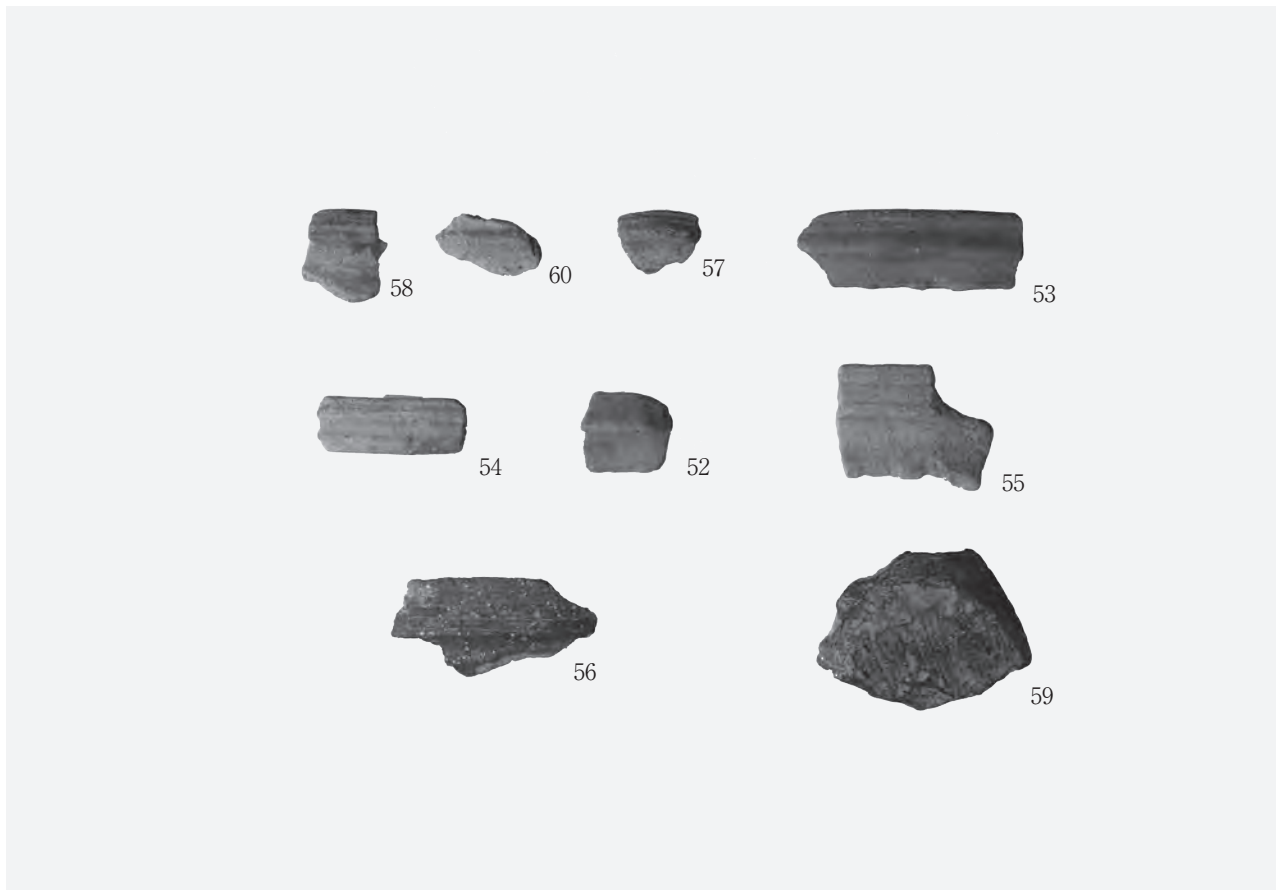
1 松尾頭3号墓 出土遺物



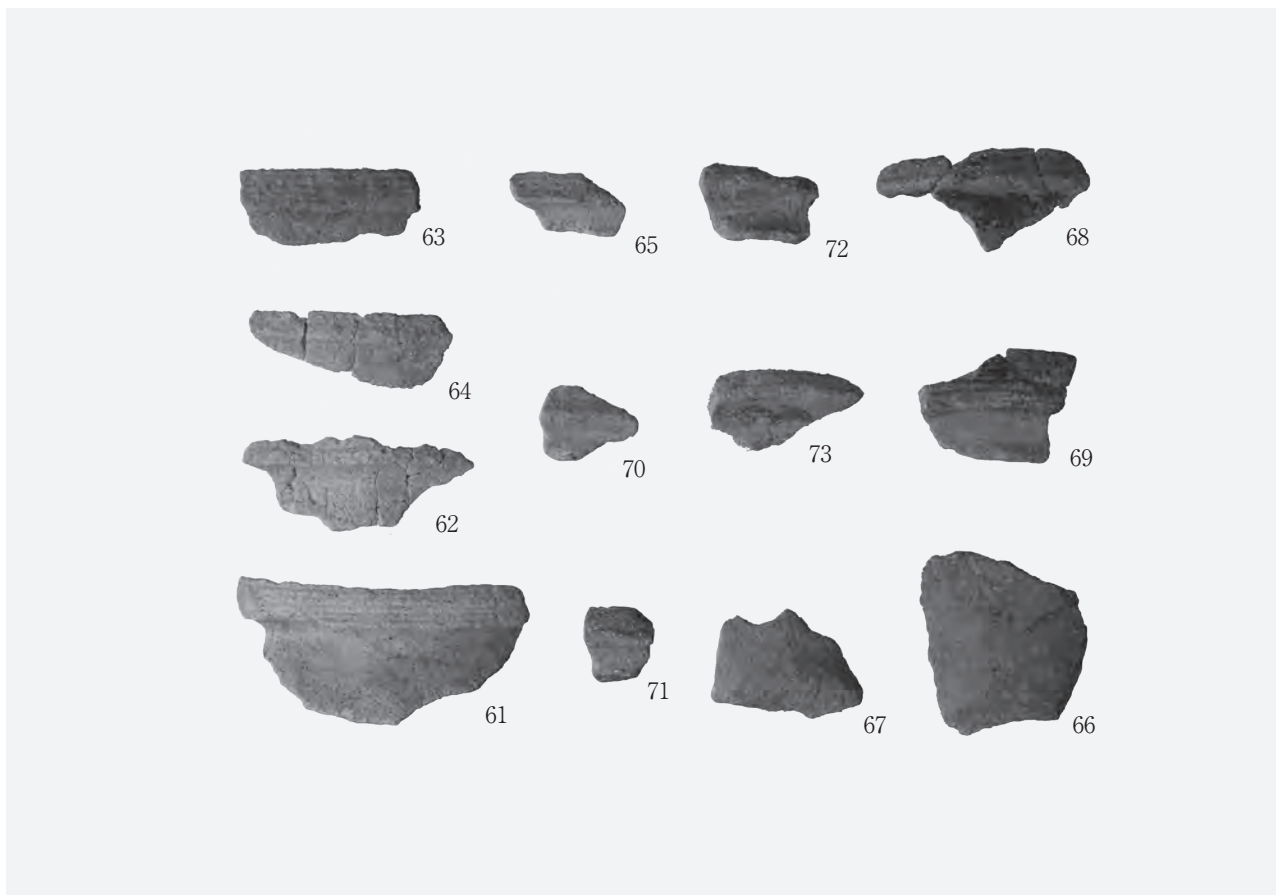
2 松尾頭4号墓・5号墓 出土遺物



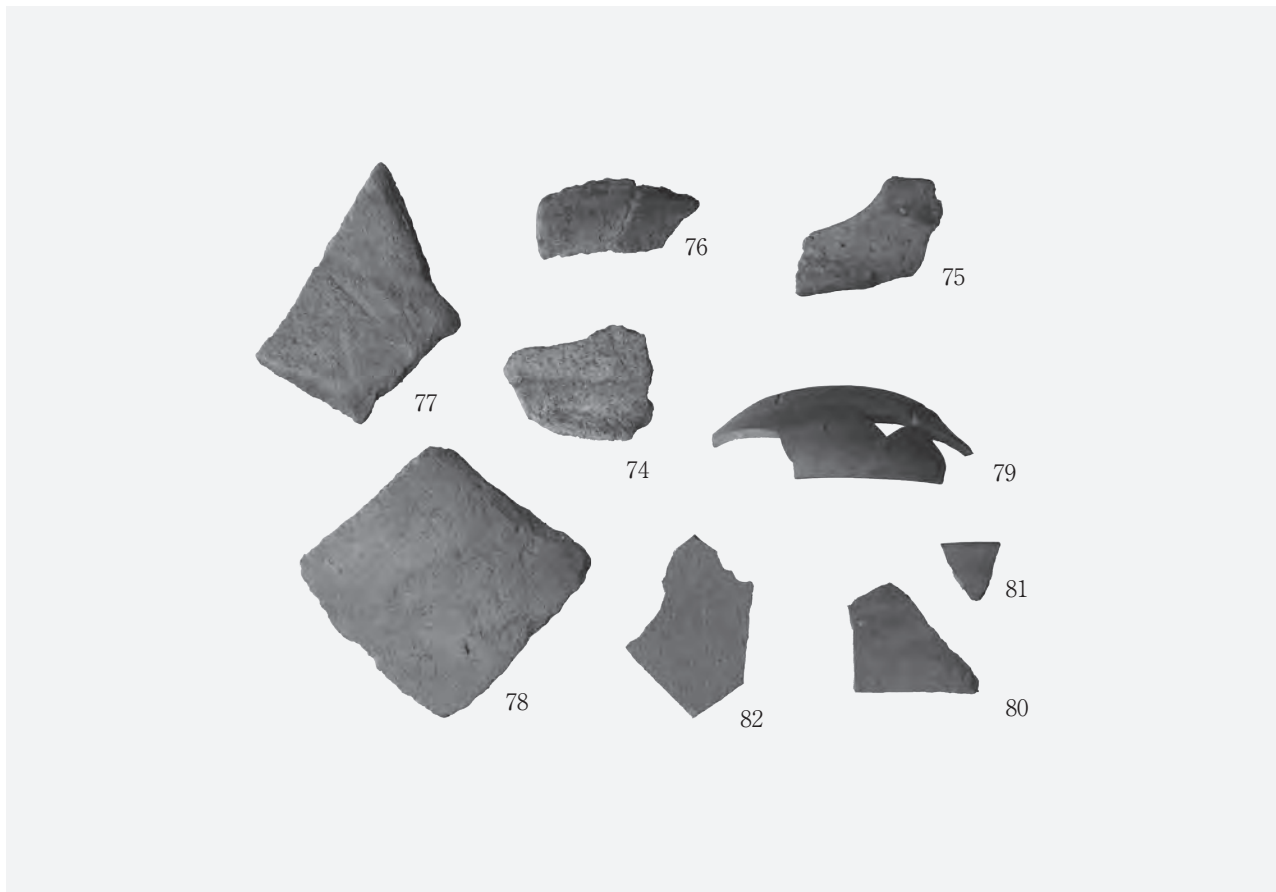
1 3403 遺構・3405 遺構出土遺物 (弥生時代後期前葉)



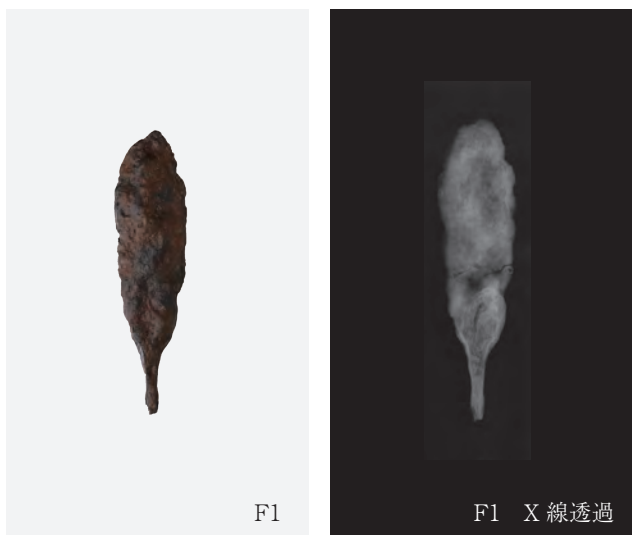
2 3407 遺構出土遺物 (弥生時代後期前葉)



1 遺構外出土遺物



2 遺構外出土遺物



1 松尾頭3号墓 東側周溝出土鉄鎌



2 松尾頭10区出土石器



3 松尾頭1区 マウンド状地形A 出土遺物



4 大山町加茂遺跡出土外来系土器 (参考資料)



5 妻木山2区 SK-86 出土外来系土器



6 松尾頭1区 SI-20 出土外来系土器

報告書抄録

ふりがな	しせきむきばんだいせきまつおがしらふんきゅうぼぐんはつかつちようさほうこくしよ							
書名	史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書							
副書名	- 第33・34次調査、墳丘墓群総括報告 -							
シリーズ名	史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第VI集							
編著者名	森藤徳子、高尾浩司							
編集機関	鳥取県立むきばんだ史跡公園							
所在地	〒689-3324 鳥取県西伯郡大山町妻木1115-4 電話 (0859) 37-4000							
発行機関	鳥取県立むきばんだ史跡公園							
発行年月日	2020 (令和2) 年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
むきばんだいせき 妻木晩田遺跡 まつおがしらちく (松尾頭地区 まつおがしらふんきゅう 松尾頭墳丘 ぼぐん 墓群)	とっとりけんよなごし 鳥取県米子市 よどえちようふくおか 淀江町福岡 あぎこまいししみず 字小真石清水	31202	1-333 (大山町)	35°45'73"	133°45'73"	2017.8 ~ 2018.11	1,238㎡	内容確認
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物、特記事項			
妻木晩田遺跡 (松尾頭墳丘墓 群)	墳丘墓	弥生時代終末期		墳丘墓(3基)	弥生土器、鉄製品			
	その他	弥生時代後期以前		不明(5基) 土坑(1基) 溝(1条)	弥生土器、石器			
		古墳時代~近代		塹壕	須恵器			
要約	<p>史跡妻木晩田遺跡は、標高約100mの丘陵上に広がる、弥生時代後期を中心とした大規模な集落遺跡である。松尾頭墳丘墓群は、第1次調査の成果から弥生時代終末期後半の墓域と考えられてきた。今回、「墳墓域の実態解明」を課題として発掘調査を行った結果、新たに終末期前半築造と考えられる松尾頭3号墓・同4号墓・同5号墓を検出した。集落変動期の有力者層の墓域である松尾頭墳丘墓群は、終末期を通して造営された方形周溝墓の形態をとる墳丘墓群であることが判明した。妻木晩田遺跡では、これまで終末期前半段階の墳丘墓は第1次調査のトレンチ調査で確認された仙谷4号墓のみで、墳丘墓形態や構造、さらには墳墓域の様相が不明であった。松尾頭10区を調査したことにより、妻木晩田遺跡の集落が拡大し始める後期前葉から終焉を迎える古墳時代前期前葉までの墳丘墓群の動向が明らかとなった。首長墓の動態及び墳墓域の変遷を把握できたことは、妻木晩田遺跡の集落像を解明するうえで非常に重要な成果である。</p>							

史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅵ集

史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書

－ 第 33・34 次発掘調査、墳丘墓群総括報告 －

発行日 2020 年（令和 2 年）3 月 24 日

編 集 鳥取県立むきばんだ史跡公園

〒 689-3324 鳥取県西伯郡大山町妻木 1115-4

電 話 （0859）37-4000

発 行 鳥取県立むきばんだ史跡公園

印 刷 米子プリント社

この冊子は 420 部作成し、1 部あたり 2,800 円です。
